

石巻市文化財調査報告書第8集

# 新山崎遺跡

—蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書—

2000年

石巻市教育委員会  
宮城県石巻農林振興事務所

石巻市文化財調査報告書第8集

# 新山崎遺跡

—蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書—

2000年

石巻市教育委員会  
宮城県石巻農林振興事務所

## 発刊のことば

このたび、新山崎遺跡の発掘調査報告書を発刊いたしました。

新山崎遺跡の発掘調査は、ほ場整備の前に行われた確認調査で、古墳時代の遺構や遺物が発見されたことを受け、平成8年度から9年度にかけて実施しました。

この調査の結果、古墳時代に造られた方形周溝墓群が石巻市内で初めて発見されましたが、これは、今から1700年前頃、日本が一つの国として形成しつつあった時期に、石巻地方の中央との文化交流を示す貴重なものと考えております。

詳細な内容については、報告書に記載したとおりであります。私たちがこの貴重な文化遺産を守り、学び、そして後世へ伝えて行く務めがあるとともに、この成果を活用していく必要があると思います。

最後に、調査に対して御指導をいただいた方々、並びに発掘調査に携わっていただいた方々をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げ、発刊のことばとさせていただきます。

平成12年3月

石巻市教育委員会教育長

阿部和夫

# 目 次

第1部 はじめに .....	1
I. 発掘調査に至る経緯 .....	2
II. 新山崎遺跡周辺の地形変遷と遺跡立地の地形環境 .....	3
III. 遺跡周辺の歴史的環境 .....	12
IV. 確認調査ならびに事前調査の経過 .....	16
第2部 A地点 .....	25
I. 調査の経過 .....	27
II. 基本層序 .....	27
III. 発見された遺構と遺物 .....	28
IV. A-2地点 .....	52
第3部 B地点・C地点 .....	57
I. 調査の経過 .....	59
II. 基本層序 .....	59
III. 発見された遺構と遺物 .....	60
第4部 D地点 .....	87
I. 調査の経過 .....	89
II. 基本層序 .....	89
III. 発見された遺構と遺物 .....	90
第5部 E地点・F地点 .....	125
I. 調査の経過 .....	127
II. 基本層序 .....	127
III. 発見された遺構と遺物 .....	128
第6部 G地点・H地点・I地点 .....	173
I. 調査の経過 .....	175
II. 基本層序 .....	175
III. 発見された遺構と遺物 .....	184
第7部 自然科学分析および土器胎土分析 .....	207
第8部 遺物と遺構の検討・まとめ .....	243
第9部 写真図版 .....	285

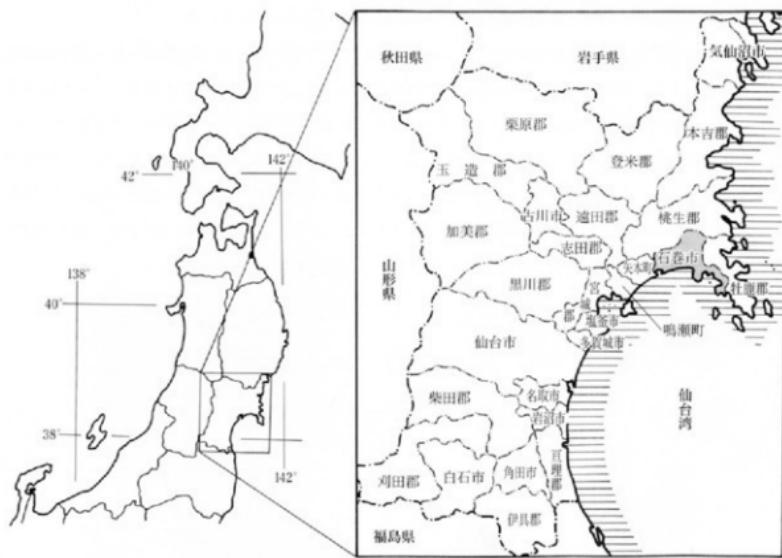
## 例　　言

1. 本書は、宮城県石巻農林振興事務所による、蛇田地区農業農村整備事業に伴う平成8・9年度新山崎遺跡発掘調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査成果については、現地説明会資料、石巻市文化財だより第27～29号・平成8年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨によって報告されているが、内容は当報告書が優先する。
3. 調査は、石巻市教育委員会が主体となり、石巻市教育委員会社会教育課文化係が実施した。
4. 土層等の色調標記については、『新版標準土色帳』9版（小山・竹原：1989.5、日本色研株式会社）を利用した。
5. 本書の第1図は建設省国土地理院発行1/25,000「石巻」を、第2図については同院発行の1/50,000の地形図を複製して使用した。
6. 本書の編集および第1部Ⅰ章、Ⅲ～Ⅳ章、第2部～第6部、第8部・第9部の執筆については石巻市教育委員会社会教育課 木暮 亮が担当し、遺物実測およびトレスは木暮 亮、針生久美子が行った。
7. 第1部第II章は東北大学理学研究科 松本秀明が、第7部第1章は株式会社古環境研究所 早田 勉が、第II章は株式会社古環境研究所が、Ⅲ章は株式会社第四紀地質研究所 井上 巍がそれぞれ分析・執筆を行った。
8. 出土した遺物および調査記録類は、石巻市教育委員会で保管している。

## 調査要項

1. 調査名 新山崎遺跡（しんやまざきいせき）
2. 所在地 石巻市蛇田字三ツ口、三ツ口南、新山崎
3. 調査期間 〈確認調査〉平成7年12月4日～平成8年3月14日  
（事前調査）平成8年7月8日～平成9年10月31日
4. 調査員 石巻市教育委員会社会教育課 木暮 亮  
石巻市文化財保護委員 木村 敏郎
5. 調査補助員（発掘調査）  
斎藤 初弓 白戸 勝雄 白戸 実 茂木 秀夫 道見 清二  
斎藤 よし子 太田 和嘉子 松野 志矢子 阿部 三郎 小畠 由記子  
平塚 潤子 橋本 千代子 石川 弥生 大場 喜代 淨沼 みゆき  
針生 久美子 及川 健 阿部 利美 阿部 真由美  
石巻市シルバー人材センター  
（整理作業）  
小畠 由記子 橋本 千代子 土井 悅子 石川 弥生 大場 喜代  
淨沼 みゆき 針生 久美子
6. 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課
7. 調査協力 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、次の機関並びに方々から指導・協力をいただいた。  
ここに感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
- 石野 博信（徳島文理大学） 藤沼 邦彦（弘前大学）  
丹羽 茂（東北歴史博物館） 辻 秀人（東北学院大学）  
手塚 均（東北歴史博物館） 田村 晃一（宮城県教育庁文化財保護課）  
岩見 和泰（宮城県教育庁文化財保護課） 中野 裕平（河南町教育委員会）  
佐藤 敏幸（穴水町教育委員会） 吾妻 俊典（宮城県多賀城跡調査研究所）  
高橋 義行（利府町教育委員会） 青山 博樹（財団法人福島県文化センター）  
樺村 友延（財団法人いわき市教育文化事業団） 廣岡 純（財団法人いわき市教育文化事業団）  
中山 雅弘（財団法人いわき市教育文化事業団） 今平 利幸（宇都宮市教育委員会）  
鶴志田篤二（財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社） 田口 一郎（群馬県箕郷町教育委員会）  
白石 真理（財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社） 村田 健二（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）  
糸川 崇（財団法人鹿嶼市文化・スポーツ振興公社） 村田 六郎太（千葉市立加曽利貝塚博物館）  
小宮 優久（群馬県新田町教育委員会） 酒巻 忠史（千葉県木更津市教育委員会）  
塙野 和信（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団） 宮内 友行（千葉県野田市教育委員会）  
青沼 道通（財団法人千葉市文化財調査協会） 比田井克仁（東京都中野区立歴史民俗資料館）  
小沢 洋（財団法人君津都市文化財センター） 鶴間 正昭（東京都埋蔵文化財センター）  
佐藤 順一（千葉市立加曽利貝塚博物館） 伊丹 敏（神奈川県立埋蔵文化財センター）  
保坂 太一（東京都北区教育委員会） 橋本 照嵩（カメラマン）  
及川 良彦（東京都埋蔵文化財センター） 菅原 祐輔（宮城県立石巻高等学校）  
西川 修一（神奈川県立埋蔵文化財センター）
- 東北学院大学考古学研究部 東北歴史博物館 財団法人いわき市考古博物館  
小山市立博物館 宇都宮市教育委員会 財団法人栃木県埋蔵文化財調査事業団  
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 財団法人鹿嶼市文化・スポーツ振興公社 土浦市考古博物館  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
財団法人千葉市文化財調査協会 千葉市立加曽利貝塚博物館 財団法人市原市文化財センター  
財団法人君津都市文化財センター 東京都北区教育委員会 東京都埋蔵文化財センター  
神奈川県立埋蔵文化財センター 庄内式土器研究会

## 第1部 はじめに

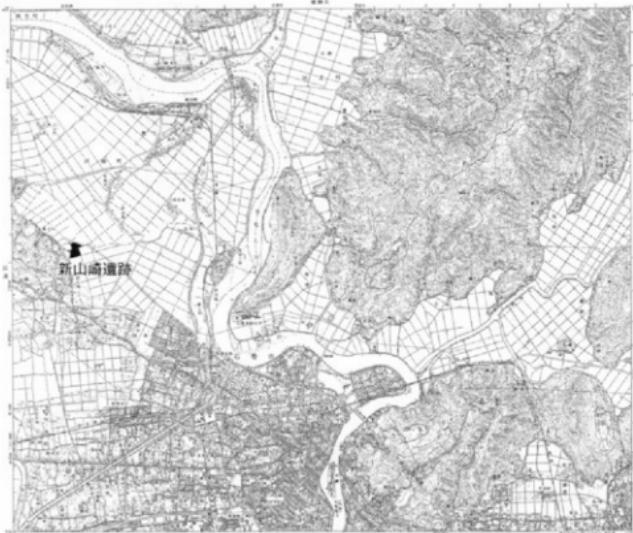


## I. 発掘調査に至る経緯

新山崎遺跡は、須江丘陵南東裾部の低地（水田）に位置しており、石巻市蛇田字三ツ口南および新山崎に所在する。

現在の旧北上川は、河南町の和瀬あたりで江合川と合流し、東西に蛇行しながら石巻湾に注いでいる。近年では、旧北上川の流路は自然堤防の位置などから、鹿又付近から大きく西に蛇行してから現在の流路と合流する時期があったことがわかっている。一方、須江丘陵は、南北4.5km、東西1.3km、標高20~60mの南北に細長い丘陵であり、遺跡はこの旧北上川と須江丘陵に挟まれた細長い沖積平野の南西縁辺に立地している。石巻平野は旧北上川が運んだ土砂が、海からの波の作用によって形成された浜堤と呼ばれる陸地が広がっている。この浜堤は、石巻市の海岸と並行して内陸に向かって幾重にも列状に連なっている。新山崎遺跡はこの浜堤列の最奥部に立地している。

遺跡は、古墳時代前期から中世にかけての遺物が採集された場所として、昭和46年に宮城県遺跡地図に登録されたが、性格等については明らかになってはいなかった。平成6年1月に、この地域一帯において、宮城県石巻農林振興事務所による大規模な整備の計画が持ち上がり、これを受けた石巻市教育委員会は、遺跡の内容や範囲を把握するために、平成7年12月から平成8年1月にかけて確認調査を実施した。この確認調査により古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構や遺物が発見され、遺跡が南北100m、東西60mの範囲に広がっていることが判明した。そして、この調査を受けて事前調査を実施することとなり、平成8年7月8日からA地点の調査を実施した。



第1図 新山崎遺跡位置図

## II. 新山崎遺跡周辺の地形変遷と 遺跡立地の地形環境

松本秀明(東北大学理学研究科)

## 1. 石巻平野の地形発達史

### (1) 石巻平野の地形

第2図 石巻平野の地形概観  
(格子部分は山地および丘陵地)

## (2) 石巻平野の微地形分布

石巻平野内陸部の中田、佐沼、登米周辺は北上川および追川の流路や旧河道に沿った自然堤防が特徴的に発達している（第3図）。とくに中田、佐沼付近には北上川から平野中央部に向かってのびる数筋の旧河道と自然堤防が顕著に発達しており、地表の状態から北上川の沖積作用の大きさを測り知ることができる。これらの自然堤防は砂質～砂礫質の堆積物により構成され、後背湿地との比高は1～2mと大きい。これに対し石巻平野中央部にあたる米岡、蘆沼、中津川および小船越周辺（第3図および第4図）は、旧北上川に沿う中津川付近をはじめとする長大な自然堤防の形成により、支流の追川や小山田川の排水が妨げられ、広大な低湿地帯が広がる。同様に、和瀬付近から鹿又にかけての



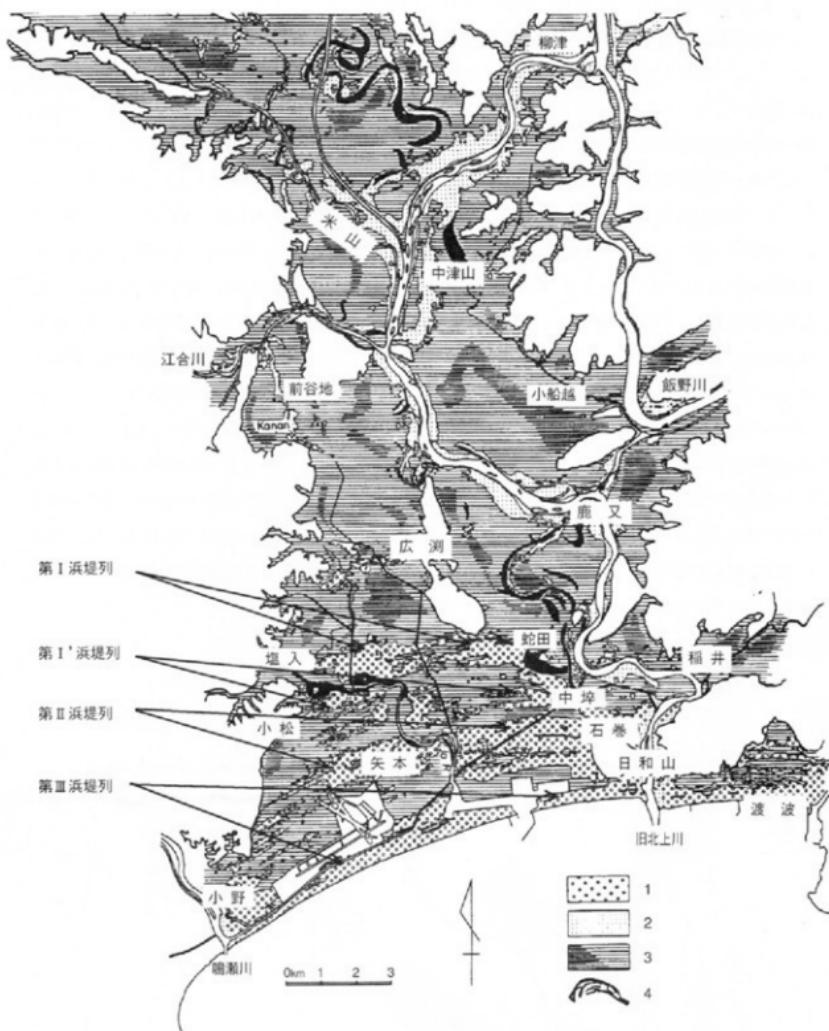
第2図 石巻平野の地形概観  
(格子部分は山地および丘陵地)

河道沿いに発達する顕著な自然堤防は、両岸に広がる低地の排水を困難にし、広い後背湿地を形成している。鹿又付近から蛇田付近には北上川の明瞭な旧河道が認められ、度重なる河道変遷あるいは洪水の履歴が記録されている。一方、石巻平野臨海部には、海浜の砂堆として形成された浜堤列が顕著に発達している。浜堤列は連続性や断面形態および浜堤列間にみられる堤間湿地堆積物の層厚から4列に大別されている（松本、1984）。

石巻平野は地表の形態から、自然堤防や旧河道が顕著に発達する内陸部、北上川の長大な自然堤防とこれによって閉塞された広大な低湿地帯が広がる中央部、そして4列の浜堤列が発達する臨海部とに明瞭に区別される。いずれの場合も、周囲より相対的に地盤高が高い自然堤防や浜堤列からなる微高地は平野の中にあって排水が良好な比較的乾燥した地盤を提供し、後背湿地は排水不良の低湿地帯となっている。



凡例 1：自然堤防 2：後背湿地 3：旧河道 （白抜き部分は平野を縁取る山地・丘陵）



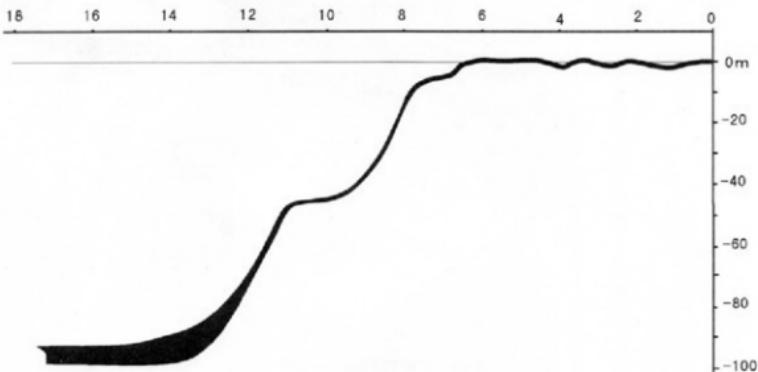
第4図 石巻平野南部の微地形

凡例 1：浜堤列 2：自然堤防 3：後背湿地 4：旧河道 （白抜き部分は平野を縁取る山地・丘陵）

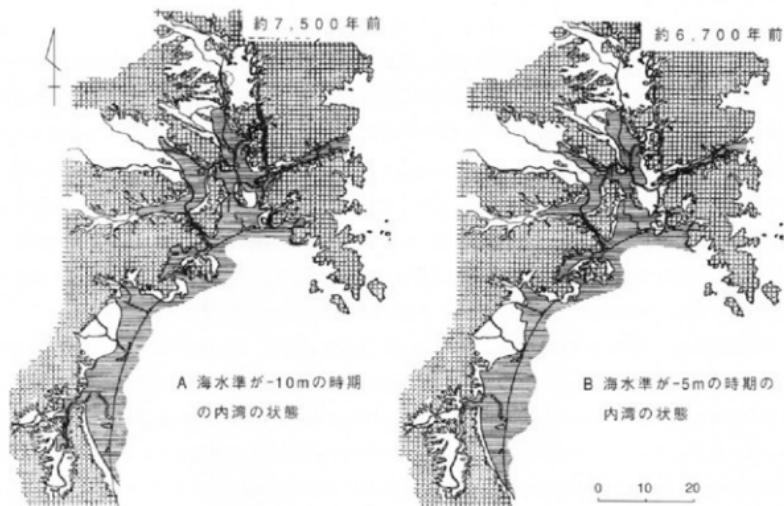
### (3) 約10,000年前から5,000年前にかけての内湾の時代

約18,000年前とされる最終氷期最寒冷期には凡世界的に海面が100m前後低下していたことが知られている。石巻平野においても、当時の石巻湾側の海岸線は現在の位置より南東方向に約40kmの地点に位置していたと考えられる。その後は、地球大気の温暖化により海水準は急速に上昇し、これに伴い海岸線は急激な速さで内陸へ移動し始めた。最終氷期最寒冷期以降の海面上昇については仙台湾岸に分布する沖積層や海底の堆積物から求められた放射性炭素年代測定結果をもとに、第5図に示されるような海面変動曲線が復元されている。約16,000年前の海面は現在の海水準に対して-95m付近に位置し、その後の10,000年間で海面は、ほぼ現在の高度付近に達している。この間の平均海面上昇速度は10m/1,000年および、海岸線の移動速度は8 km/1,000年である。海水準の上昇により、石巻平野臨海部に最初に海が侵入したのは海水準が-40mに達した約10,000年前である。その後も海水準の上昇は継続し、海は内湾としてさらに内陸部へ侵入した。約7,500年前の縄文時代前期には海面が現在よりも未だ10m低い水準にあったにもかかわらず、現在の佐沼付近をさらに越えて奥深い内湾の状態となった（第6図-A）。この状態は県南の阿武隈川沿いの地域においても同様である。その後も海水準は上昇したが、次第に海面上昇の速度は遅くなり、これによって河川が排出する土砂による内湾の埋積作用が相対的に優勢になり、海水準が-5mに達する約6,700年前には当時の河川の河口付近においては陸域が拡大している（第6図-B）。このようにして約5,000年前には、陸域は現在の第I浜堤列の位置まで拡大していたと考えられており、また、約5,000年前の海水準は現在を僅かに上回る+1m前後にあったと考えられている（松本、1981）。

放射性炭素年代による現在からの逆算年（単位：千年）



第5図 仙台湾の最終氷期最寒冷期以降の海水準変動 （松本・伊藤、1998による）



第6図 仙台湾岸の内湾の形成時期（松本, 1991による）

#### (4) 内湾の消滅と浜堤列の形成

約5,000年前頃にかけて内湾の埋積は随所で進み、海岸線は波浪の影響の強い外洋に面した位置まで前進し、長大な砂浜海岸が形成される状況へと変化した。海浜砂堆の出現により海岸線の背後には河水の排水が妨げられ、潟湖や干潟が広がるとともにそれらを取り囲んで低湿地帯が広がった。河口を海浜砂堆によって封じられた河川は、低湿地帯上で流路を移動させながら氾濫し、河道沿いには自然堤防を形成し、その両岸一帯には後背湿地を形成したと考えられる。このように、海浜砂堆としての浜堤列が形成されることにより、海岸線の背後では洪水が頻発したと考えられる。

石巻平野臨海部には、約5,000年前以降について確認されている海水準の微変動に伴い、4列の浜堤列が形成されている（第4図参照）。最も内陸側の第Ⅰ浜堤列は蛇田付近から西方の塩入方向へ連続し、定川が横切る位置付近から細列に分岐している。第Ⅰ'浜堤列は中坪付近で第Ⅰ浜堤列から分岐し、不連続ながら西南西に延びて小松付近へ至る。第Ⅱ浜堤列は日和山西麓から西方に発達し、矢本を通過したのち細列に分岐し、徐々に地表面下に没している。第Ⅲ浜堤列は現在の海岸線を構成し、渡波から平野西端の小野にかけて発達しており、この浜堤列の頂部は4列の中で最も海拔高度が高い。松本（1984）は、東北地方において浜堤列が顕著に発達する4つの平野において、その形成年代を求めたが、それを石巻平野臨海部に適用すると第Ⅰ浜堤列は約5,000～4,500年前、第Ⅱ浜堤列は1,700～2,000年前、そして第Ⅲ浜堤列は約700年前以降であり、それぞれ海水準微変動における高海水準期に形成されたと考えられる。

## 2. 新山崎遺跡周辺の地形

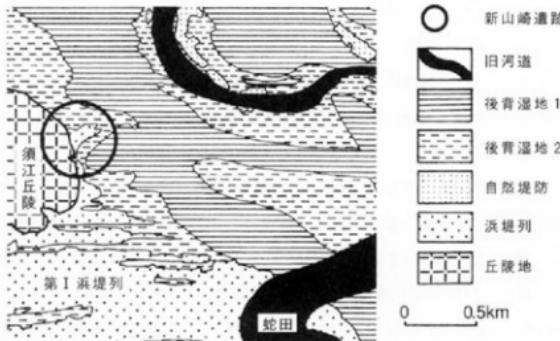
### (1) 遺跡周辺の地形分類

2万分の1および4万分の1空中写真判読および地形図に基づいて遺跡周辺の地形分類を行い第7図に示した。分類した地形単位は丘陵地、浜堤列、自然堤防、後背湿地1、後背湿地2および旧河道である。浜堤列は、海岸線方向にはほぼ平行に延びる砂質の微高地であり、第I浜堤列中央部付近での海拔は3m前後である。自然堤防は、旧流路に沿って断片的に認められ、水田地帯の中にあっても畠地や集落が点在している。浜堤列や自然堤防を除く部分には後背湿地が広がり、なかでも後背湿地1は低湿な部分である。後背湿地1に含まれる部分には、古い時代に形成された旧河道が不明瞭ながら認められる。後背湿地2は自然堤防、浜堤列に隣接した部分に位置し、後背湿地1と比較すると地盤高が僅かに高い。旧河道は北上川の氾濫の跡が明瞭に追跡される連続した凹地である。

新山崎遺跡は、須江丘陵東側の基部の沖積低地上に位置しており、第I浜堤列の内陸約1km地点にあたる。須江丘陵は頂部の海拔高度は約60mであり、丘陵から沖積低地に至る斜面は30度を超える急斜面をなし、低地との境界は明瞭である。遺跡の南に位置する第I浜堤列の内陸側には丘陵基部から東へ延びる2～3筋の浜堤地形が確認される。三ツ口南地域にも丘陵基部から東北東方向に約200m突き出した浜堤状の微高地が存在し、さらに東北東方向に後背湿地2としての比較的高さの高い後背湿地が連続している。遺跡の東側を北西から南東に連続する後背湿地1は、浜堤列や後背湿地2を一部侵食しており、古い時代の河川流路跡を含むと考えられる。新山崎遺跡は浜堤状の地形およびその周辺に隣接する後背湿地2に含まれる地形上に展開している。

### (2) 砂質堆積物の粒度分析と地形環境

調査地域の中でI地点とH地点において、遺跡の基盤を構成する砂質堆積物を採取し、堆積時の地形環境を推定するために粒度分析を行った。沖積低地に堆積する砂質堆積物は河川起源のものと海浜起源のものとに分けられる。河川起源の堆積物は相対的に淘汰が悪い（粒径が不揃い）のに対し、海浜起源の堆積物は淘汰が良い（粒径が均一）傾向が認められる。このような粒度の特徴をもとに、砂

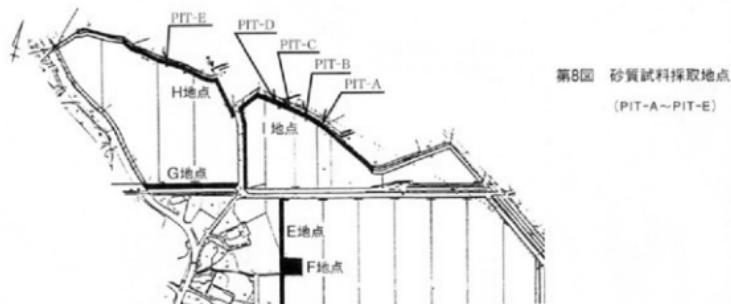


第7図 新山崎遺跡周辺の微地形

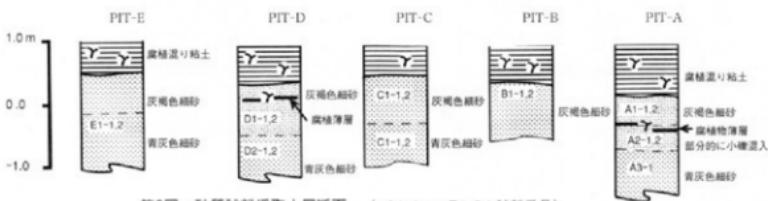
質堆積物の堆積時の地形環境を判別することが可能である。

第8図に示したPIT-A、B、C、DおよびEにおいて地表から2m前後までの深度において土層断面を観察し、17点の砂質試料を採取した（第9図）。地表部付近は40cm～80cmの腐植混り粘土が堆積し同層中には数cmの層厚で灰白色火山灰の堆積が認められる。その下位には一部に腐植の薄層を挟み込んだ細粒砂層と腐植の混入がみられない細粒砂層が堆積している。また、PIT-Aの砂質試料A1-1、A1-2、およびA2-1、A2-2、そしてPIT-DのD1-1、D1-2には微小なウンモ片の混入が確認された。現在の旧北上川の洪水堆積物中にも微小なウンモ片が確認されている。採取した砂質試料は、標準筋いを0.25μ間隔に揃え、筋振盪機による粒度分析を行い、積率法により平均粒径（mean diameter）および淘汰度（standard deviation）を求めた。平均粒径は試料の粒径の平均値を示し、淘汰度は粒径のばらつきを示す。

第10図は、採取した試料の分析に先立ち、河川起源の堆積物として旧北上川の河床や河岸にて採取した砂質試料、海浜起源の堆積物として矢本町の海浜にて採取した砂質試料の粒度の特徴を示したものである。平均粒径、淘汰度ともにμ尺度にて表現している。河川起源の堆積物と海浜起源の堆積物は、淘汰度の値の違いにより明瞭に区分されている。すなわち、海浜起源の堆積物は淘汰度の値が小さく（粒径がよく揃っている）、河川起源の堆積物は淘汰度の値が大きい（粒径が不揃いである）。第10図-Bは、今回採取した試料の分析結果である。A2-1およびA2-2の試料は、第10図-Aを参照すると海浜起源の試料の分布域を逸脱しているが、それ以外の試料は海浜堆積物の粒度組成とは



第8図 砂質試料採取地点  
(PIT-A～PIT-E)

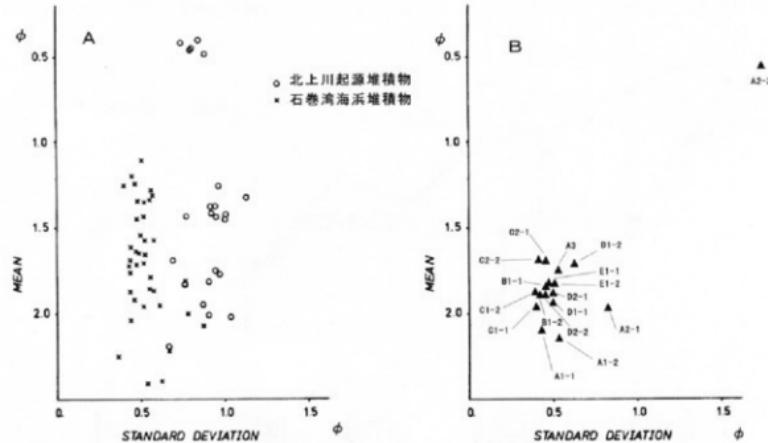


第9図 砂質試料採取土層断面 ( A1-1 ~ E1-2 : 試料番号 )

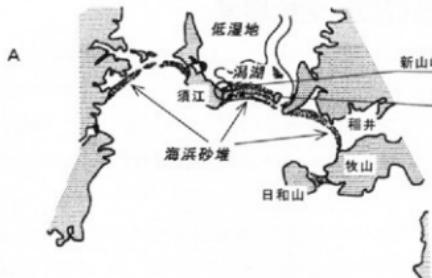
ば一致している。さらに平均粒径が小さい（指標値としては大きな値で表現される）ことから、海浜において比較的粒径の小さな風成堆積物としての粒度の特徴を示していると判断される。これらのことから、新山崎遺跡の基盤をなす砂質堆積物の起源は海浜の風成堆積物と判断するのが妥当と考える。しかしながら、一部に河川起源の堆積物としての淘汰度において大きな値を示す堆積物（A2-1およびA2-2）が存在すること、同時に微小なウンモ片を伴っていること、堆積の間隙を示す腐植の薄層が挟在していることなどから、一部は堆積後に河流などにより侵食・堆積を受けたいわゆる二次堆積物であると判断される。したがって、当地域の砂質堆積物は、浜堤列背後の風成堆積物として一旦堆積した後に、表層の一部が洪水時等に河川により侵食を受けて移動し、それが再堆積したものと考えられる。砂質堆積物堆積後には、腐植混じり粘土層が堆積しており、後背湿地としての湿地性堆積物の堆積環境下にあったと考えられる。

### （3）新山崎遺跡周辺の地形変化

前項の堆積物の分析結果および周辺の地形環境をもとに、遺跡周辺を含む石巻平野臨海部の地形変化を模式的に示したのが第11図である。なお、各時期における北上川の河道の位置や詳細な海浜砂堆の位置等については未確認であり、今後さらに調査が必要である。



第10図 標準試料粒度分析結果（A）および採取試料粒度分析結果（B）

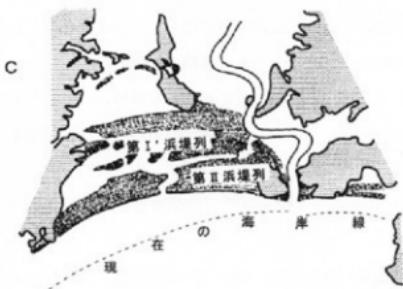


第Ⅰ浜堤列形成（約5,000年前）に先だって、新山崎遺跡付近と東方の愛宕山間に海浜砂堆としての浜堤列が形成されていたと考えられる。

当時の石巻湾には、広瀬付近、新山崎遺跡付近および稻井谷地西部に、それぞれ海浜砂堆が形成されていたと考えられる。新山崎遺跡は、後の時代にこの海浜砂堆を基盤として成立した遺跡である可能性が高い。



その後、約5,000年前にかけて海水準が僅かに上昇し、このときの海浜砂堆が、現在の第Ⅰ浜堤列に相当すると考えられる。浜堤列背後は、河川の度重なる河道変遷により、それ以前に形成された浜堤列（海浜砂堆）は、部分的に破壊され、現在の地表では確認できない状態へと変化したと考えられる。



その後、第Ⅰ浜堤列、そして1,700年前から2,000年前にかけて第Ⅱ浜堤列が形成され、海岸線は次第に海側へ前進し、約700年前頃には現在の海岸線付近に第Ⅲ浜堤列が形成された。同時に遺跡周辺は、後背湿地性の腐植混じり粘土層が堆積した。

第11図 新山崎遺跡周辺の地形発達概念図

## 文献

松本秀明 (1981) : 仙台平野の沖積層と後水期における海岸線の変化。地理学評論、54巻、72-85。

松本秀明 (1984) : 海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動。地理学評論、57巻、

### III. 遺跡周辺の歴史的環境

石巻市内およびその周辺地域における旧石器時代の遺跡については、近年までその存在があまり知られていなかった。しかし平成8年に東北歴史資料館を中心として、牡鹿半島から須江丘陵にかけての踏査が実施され、須江丘陵南端において、加工痕の認められる石器を発見するに至った。(阿部・須田:1997) この発見によって、当地域においても、旧石器時代から人類の活動があったことが明確となった。

貝塚をはじめとする縄文時代の遺跡は、沼津貝塚や梨木畠貝塚、南境貝塚に代表されるように、万石浦の周辺や、旧北上川東岸のいわゆる古稻井湾と呼ばれる地域に存在している。万石浦の沿岸部を除いたこれらの縄文遺跡は、現在の海岸線より2~3km程度の奥部に位置づけられる。このような貝塚の分布は、縄文前期中頃からはじまつた縄文海進(約7500年前)の影響を如実にあらわすものであり、かつての石巻地域が、内陸部に深く入り込んだ、広大な入江を有していたことを想定させる。縄文海進によって上昇した海面は、その後下降をはじめ、縄文後期から晩期(約2500~3000年前)には現在よりやや低くなり、弥生時代のはじまり頃には現在の高さに戻ったと言われている。新山崎遺跡が立地する浜堤は縄文時代に形成されたものであり、広大な石巻平野を形成する沖積平野の発達はこの時期から開始されたと見るべきであろう。

弥生時代の遺跡は、海浜部の貝塚を中心とした遺跡と、平野部の遺跡に大別することができる。海浜部の遺跡で弥生時代のものとしては、万石浦沿岸の浜堤上に立地する重水畠貝塚がある。また、南岸に位置する一本杉遺跡からは崎山団式が出土している。さらに、女川町の遺跡として黒島貝塚があり、崎山団式土器と天王山式土器が出土している。また、旧北上川東岸に位置する伊原津洞窟からは、弥生中期の舟形団式が出土している。また近隣に位置する五松山洞窟からは、天王山式期を中心とする土器が発見されており、海浜部における弥生時代の遺跡は、中期から後期のものと考えられる。沼津貝塚からは、弥生時代の土器や磨製石包丁が出土していると言われており、水稻耕作の可能性を示唆できる(三宅・藤沼・茂木:1995)。一方、石巻平野に立地する弥生時代の遺跡はそれほど多くないが、矢本町の小松遺跡と赤井遺跡があげられる。これらは、浜堤上に位置する弥生後期の遺跡であり、小松遺跡では崎山団式が、赤井遺跡では天王山式土器と始刃磨製石斧が出土している(古川:1991、三宅・進藤・茂木:1987)。

古墳時代に入ると、遺跡分布の主体は平野部に移る。特に近年、市内では古墳時代前期の塙釜式土器をまとめて出土する遺跡の調査例が急激に増加する傾向にある。新山崎遺跡もその中の一つである。旧北上川左岸に立地する田道町遺跡では、昭和45年に小型壺が発見されたのを端緒として、平成3年からの一連の発掘調査において、当該期の竪穴住居跡6軒と土坑、井戸跡等が検出され、塙釜式土器がまとめて出土している他、アメリカ式石鎌が出土しており、弥生時代との関連性も示唆できる(庄司・芳賀・岡:1995)。新金沼遺跡は、石巻平野第1浜堤上に位置しており(松本:2000)、新山崎遺跡が位置する浜堤よりも一つ海岸寄りに立地し、その間の距離は約1km程である。この遺

跡からは、塙釜式期の竪穴住居跡が焼失家屋も含めて40軒近く検出されており、大量の古墳時代前期の土器が出土し、在地の物とは考えにくい土器が多数含まれていた他、弥生時代終末期のものと考えられる遺物も発見されている（芳賀：1996、1997、1998）。この土器は、弥生時代の天王山式期の可能性があり、当域における弥生時代から古墳時代前期の様相を知る手がかりとして今後注目されるところである。また、統縄文土器が出土しており、北方との交流の一端をうかがわせるものである。統縄文土器は、高木地区の小沢貝塚周辺からも出土している。さらに、旧北上川東岸には、渡波地域の沖積平野を形成する浜堤帯に立地する鹿松貝塚があり、平成10年度の調査において、塙釜式期の竪穴住居をはじめ、古墳時代前期の土器がまとまって出土している。また、平成8年度と10年度の発掘調査において焼失家屋等の竪穴住居跡が2軒検出されており、高杯、捷、有孔鉢、粗製器台などが出土した。特に高杯には形態的に古い様相が認められる。この遺跡の調査によって、北上川東岸の内陸部にも古墳時代前期の生活の場が実在していたことが明らかとなった（石巻市教育委員会：1997、1998）。河南町須江難塚遺跡をはじめとする須江丘陵一帯にかけては、当該期の土器が竪穴住居に伴って発見されている。また、矢本町の赤井遺跡や小松遺跡などからは、塙釜式をはじめとする古墳時代の土器が、紡錘車や土鍤と共に出土している。平成4年度に調査が実施された迫町の佐沼城跡からは、溝跡の中から多量の塙釜式土器が一括して出土している（佐久間・小村田：1995）。当遺跡は、北上川支流の迫川の自然堤防上に立地している。

古墳時代中期から後期にかけての遺跡については発見例は少ない。万石浦北岸に位置する垂水圓貝塚からは、南小泉式や栗圓式の土器片が散発的に採集されている他、黒島貝塚、沼津貝塚の近隣に位置する越田台遺跡（栗圓式）（木村：1983）や、五松山洞窟（須恵器）（三宅：1988）などからも該期の土器が発見されている。これらを見ても、塙釜式期に関連するまとまった遺構・遺物の発見数は際立っており、当域に早い時期から古墳文化が流入し、しかも広い地域にわたって生活が営まれていたことは明確であると言える。

方形周溝墓については、市内および周辺地域においては、今のところ新山崎遺跡以外には見いだすことができない。しかし、北上川と接する迫川流域の東館（加藤：1980）、宇南（遊佐：1980）、鶴ノ丸（手塚：1980）といった遺跡から、方形周溝墓の検出とともに塙釜式土器の出土例があり、佐沼城跡における塙釜式期の遺構・遺物の検出などとも合わせて考えた場合、石巻地域から県北部にかけての古墳文化の波及は、河川によるものが大きな要因の一つとして考えられる。

墳墓としては、矢本町に五十鈴神社古墳があり、埴輪を伴う本格的な古墳であると考えられている。しかし、石巻地域には概して高塚の墳墓が少ない。これとは対象的に、洞窟を利用したものや、横穴墓が見られる。市内の五松山洞窟遺跡や矢本町鹿妻横穴墓群などは、その好例であろう。五松山洞窟では、須恵器、鉄刀、金環、鉄鏡などの他、弓づかをはじめとする多種の骨角製品が出土したほか、アイヌ的形質の人骨と東國的人骨が混在した状態で埋葬されており、南北交流の接点的な様相を呈する（三宅：1988）。また、鹿妻横穴墓群では、多数の埋葬人骨に伴って、金銅製耳環、直刀、刀子、鉄鏡、水晶製切子玉等の副葬品が出土した他、栗圓式や国分寺下層式の土師器の出土はもとより、関

東系の土師器も出土していることから、当地域への活発な交流があったことをうかがわせるものである（石巻古代文化研究会：1968、1969、小井川：1992）。

奈良時代から平安時代には牡鹿柵が置かれ（奈良時代初頭）、その所在地として矢本町にある赤井遺跡が有力視されている。赤井遺跡は浜堤上に位置し、当時、東北地方の有力豪族であった道鷲氏との関連が注目される遺跡であり、昭和60年代からの調査によって官衙遺跡としてのさまざまな性格が徐々に明らかにされつつある。特に近年の発掘調査では、運河遺構や、土倉、門跡の検出とともに、在地はもとより、関東系や会津地方で生産された多数の土器などが出土している（佐藤：1993、1996、1997、1998、1999）。また、田道町遺跡からは、奈良時代の大型竪穴住居跡から、古代の役人が身に付ける鈎帶金具（巡方）が出土し、掘立柱建物跡からは、当時の出拳に基づいた「真野公」記載の木簡が出土している（庄司・芳賀・岡：1995）。このように、石巻地域は、奈良時代初頭から本格的な国家体制に組み込まれて行ったと考えられ、後半には、河北町に桃生城が築かれた。市内の奈良時代から平安時代の遺跡は十数カ所あり、ほぼ全域に見られるが、特に北上川河口西岸に多く、遺跡の規模も大きい。一方、福井地域（古福井湾沿岸）や万石浦沿岸にも小規模ながら遺跡が点在し、貝層を伴っているものも少なくない。いわゆる古福井湾沿岸地域に位置する箕輪山貝塚からは「生万」の墨書を持つ須恵器が鍛冶工房と考えられる竪穴住居跡から出土している（木暮：1995）。新山崎遺跡の西方には、須江丘陵が広がり、多数の遺跡が存在している。このうち、発掘調査が実施されているのは5ヶ所である。須江開ノ入遺跡からは、奈良・平安時代の竪穴住居をはじめとして窯跡や粘土採掘坑などが検出され、多数の土師器や須恵器が出土した（佐藤：1993）。新山崎遺跡が立地する冲積地上の畑からも当該期の土師器・須恵器を発見しており、密接な関係が想定される。

中世に入ると、石巻地域では葛西氏が勢力を延ばし、主に北上川流域の登米郡等に勢力を拡大したと言われている。石巻城跡は北上川河口の丘陵上（日和山）に位置し、昭和58年と平成10年から11年にかけて部分的に発掘調査が実施され、掘立柱建物跡群や土壘、空掘跡などが検出されている（中村：1985、石巻市教育委員会：1998）。この地が本来の葛西氏の居城であったかどうかは未だ明らかとなっていないが、石巻地域に多数存在する中世館跡の中で、発掘調査によってその構造が実際に明らかになったものとして注目される。また、葛西氏がこの地域を支配したのは、河川による物資の移送と海上交通に利点を見出したからだとも言われる。

以上のように、石巻地域の歴史は、海浜部における採集活動から平野部への生産活動への移行とともに、北上川および海からの物質的・文化的交流に深くかかわっていると考えられる。

この後、石巻地域は、近世の伊達家支配と北上川を利用した水運、および江戸への廻米によって発展を遂げ、明治以降へと引き継がれて行くのである。



No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	新山崎遺跡	浜堤	水田	古墳・奈良・平安・中世
2	清水汎遺跡	浜堤	宅地	古墳・奈良・平安
3	五松山洞窟遺跡	丘陵斜面	山林	弥生・古墳(後)
4	西三軒屋遺跡	浜堤	宅地	古墳・近世
5	小沢貝塚	丘陵斜面	水田	縄文・古墳(統縄文)
6	沼津貝塚	丘陵鞍部	水田	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
7	越田台遺跡	丘陵鞍部	水田	縄文・弥生・古墳(後)・奈良・平安
8	垂水洞貝塚	微高地	宅地	縄文・弥生・古墳・中世
9	一本杉貝塚	海滨	宅地	弥生・奈良・平安
10	日道町遺跡	浜堤	宅地	古墳・奈良・平安
11	伊原津洞窟遺跡	丘陵斜面	宅地	弥生
12	新金冠遺跡	浜堤	水田	古墳
13	鶴松貝塚	浜堤	水田	古墳・近世
14	沼向遺跡	自然堤防	水田	古墳・奈良・平安

▲……弥生時代関連遺跡 ●……古墳時代関連遺跡

第12図 市内の弥生・古墳時代関連遺跡

## IV. 確認調査ならびに事前調査の経過

### 1. 確認調査の経過と結果

確認調査は、平成7年12月から平成8年1月にかけて実施し、ほ場整備に伴う水路の工事部分に、3m×3mの試掘トレンチを42ヶ所設定し、重機による掘削の後、遺構・遺物の有無を確認した。なお、遺物については、地点一括として取り上げ、遺構については、調査後の石巻農林振興事務所との遺跡保存協議に向けて一部分を検出・掘削した後、埋め戻した。

この結果、IIヶ所のトレンチから遺構や遺物が発見され、宮城県に登録されている遺跡包蔵地範囲内およびその周辺地域における新山崎遺跡の実際の広がりが、おおよそ明らかになった。

遺構や遺物は、蛇田字三ツ口南に所在する標高1.0m～2.0mの微高地上に集中して発見された。調査区は、確認調査の後の保存協議によって、ほ場整備に伴い新設される水路部分に限定されたが、恐らく、この微高地全体が遺跡であると考えて差し支えないと思われる。また、このエリアから北、東、南側にかけては、地形の傾斜が見られ、標高は1.0m以下となり、湧水が認められたり、ほとんどのトレンチからグライ化した土壌が検出されるなど、低湿地であることが明確となった。

この三ツ口南を中心とした地域は、宮城県地震地盤図等によって、従来から北上川の旧河道の西岸

ショット ナンバー No.	遺構確認面の 深さ (cm)	遺構の 有無	遺物の 有無	湧水の 有無	備考
1	60	×	×	○	
2	60	×	×	×	
3	60	×	×	×	木片出土
4	50	×	×	×	
5	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
6	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
7	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
8	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
9	60	○	○	×	古墳時代の土器が出土
10	60	○	○	×	古墳時代の土器が出土
11	80	×	×	×	
12	60	×	×	×	
13	80	×	×	×	
14	200	×	×	○	
15	80	×	×	×	
16	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
17	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
18	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
19	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
20	80	×	×	×	
21	80	×	×	×	
22	60	×	×	×	
23	50	×	×	×	
24	80	×	×	○	
25	50	×	×	×	

ショット ナンバー No.	遺構確認面の 深さ (cm)	遺構の 有無	遺物の 有無	湧水の 有無	備考
26	60	×	×	×	
27	60	×	×	×	
28	50	○	○	×	古墳時代の土器が出土
29	80	×	×	○	
30	60	×	×	×	
31	80	×	×	×	
32	60	×	×	×	
33	180	×	×	×	
34	180	×	×	○	
35	160	×	×	○	
36	100	×	×	○	
37	70	×	×	○	
38	10	×	×	○	
39	180	×	×	○	
40	120	×	×	○	
41	70	×	×	○	
42	250	×	×	○	

第1表 確認調査の結果





⑤地点



⑨地点



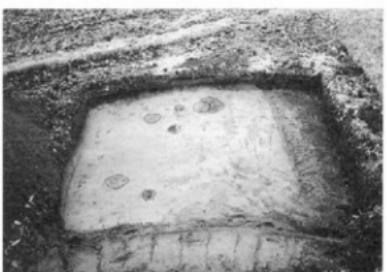
⑯地点



⑰地点



⑲地点



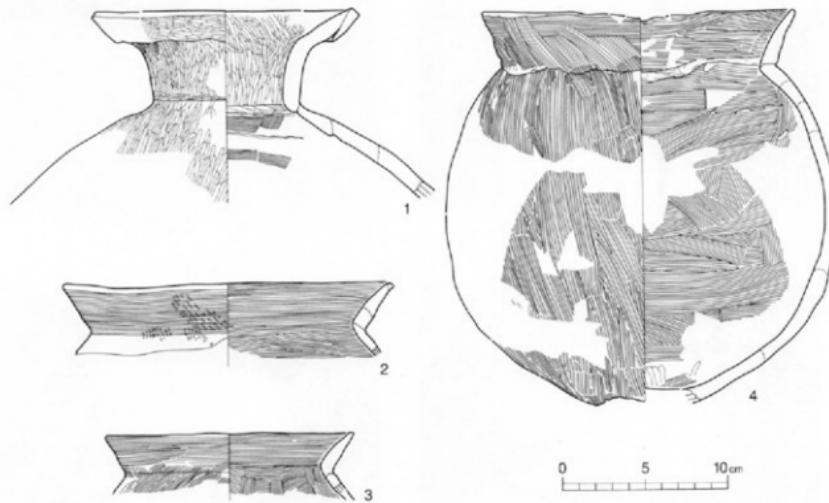
⑳地点

に形成された自然堤防であると考えられてきた場所であり、現在は一帯が水田となっている。地山は黄褐色の砂質シルトで形成されており、河川堆積物であると考えられてきた。しかし、今回の発掘調査で、この地域が浜堤であり、地山の砂は海性の堆積物であることが判明したことは、第II章で東北大学の松本秀明氏が述べたとおりである。

## 2. 確認調査で発見された遺物

確認調査の際に発見された遺物のうち、部分的にでも復元できたものについて、以下に図示した。1は複合口縁の壺であり、外面および内面の口縁部に丁寧なミガキが施される。2、3は壺の口縁部であり、ともにナデによって調整されている。2の口縁部にはハケメの痕跡が見られる。3より2の方の口縁部が若干開く。4は外面にハケメが施された壺であり、底部を欠損する。胴部は球形で、最大径がやや上方にある。内面は口縁部はハケメ、頸部以下がヘラナデで調整されている。1～4は全て古墳時代前期塩釜式土器であると考えられる。

以上の土器は、確認調査で出土した遺物のうちの一部である。遺構・遺物は三ツ口南周辺と、遺跡北側の河南町と接する部分に集中して発見されている。



NO	器種	器形	出土場所	調査等の特徴		法量(cm)	残存	写真図版
				外面	内面			
1	土師器	複合口縁壺	第6トレンチ	【口】ミガキ【腹】ミガキ【体】ミガキ	【口】ミガキ【腹】ミガキ【体】ヘラナデ	01.6	16.2	— 1/5 26
2	土師器	壺	第6トレンチ	【口】ハケメ→ヨコナデ	【口】ヨコナデ【腹】ナデ	(4.9)	20.3	— 1/5 26
3	土師器	壺	第6トレンチ	【口】ヨコナデ【腹】ナデ	【口】ヨコナデ【腹】ヘラナデ	4.0	15.1	— 1/5 26
4	土師器	壺	第28トレンチ	【口】ヘラナデ【腹】ハケメ	【口】ハケメ【腹】ヘラナデ	(23.3)	19.1	— 1/3 26

第13図 確認調査で出土した遺物

### 3. 発掘（事前）調査の経過

確認調査の結果を受けて、石巻市教育委員会では、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県石巻農林振興事務所を交えて3者で遺跡の保存協議を実施した。

この結果、ほ場整備の大部分の面工事の部分においては、掘削工事による掘削深度を浅くするなどの工事の変更を実施することになった。しかし、地盤が低い一部の地域と、新設する水路部分については、遺跡が破壊されてしまう可能性が強いため、発掘調査による記録保存の措置を取ることとなつた。

以上の保存協議と、確認調査の結果を踏まえ、平成8年度と9年度の2ヶ年にわたり、ほ場整備に伴う新山崎遺跡の発掘（事前）調査を実施した。

調査区は、大部分が水路の掘削に伴う、幅5mのトレーニングであったが、調査対象区域が南北450m、東西450mの広い範囲に及んでおり、年度を越えての調査になることが予想されたため、A～Iまでの地点を任意に設定し、地点順に調査を進めて行った。なお、各地点それぞれの調査経過については、各地点の記述（第2部～第6部）の中で説明することとし、ここでは、全体の調査経過の概要について説明することとした。

調査対象地域全域には、国土地軸に準拠する形で、3m×3mのグリッドを設定した。グリッドナンバーは、各地点ごと、もしくは複数地点まとめて、統一したナンバーを設定した。

トレーニングの位置や検出した遺構・遺物については、造り方測量によって、1/10ないし、1/20の平面図、断面図を作成し、写真撮影等による記録にとどめた。

#### （1）平成8年度の調査の概要

平成8年度は、A～I地点～F地点までの調査区を対象として平成8年7月8日から調査を実施した。

特筆すべき成果としては、A～I地点から方形周溝墓が3基検出された他、B地点から曲物を幾段にも積み重ねた井戸枠が出土した。D地点からは、東北地方でもわずかしか発見されていない古墳時代前期の井戸枠が発見された他、木製品も出土している。

E地点は、三ツ口南地区を南北に縦断している地点であり、新山崎遺跡の中でも最も遺構・遺物が集中していることが予想されたが、地点の大半が後世の耕作等により削平されており、目立った遺構は検出されなかった。

平成8年度における調査区域から出土した土器は、古墳時代前期の塙釜式が大半を占めている。F地点においては、この土器群が大量に廃棄されたと考えられる土坑群が複数にわたって検出された。また、このような塙釜式土器の出土に混じって、奈良・平安時代のものと考えられる須恵器の出土もあり、遺跡の西側の須江丘陵上に位置する、須江窯跡群（関ノ入遺跡）との関連性が示唆できる。

当年度の調査は、このような一連の調査の他に、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を2回にわたって実施するなどし、最終的には、平成9年3月28日で調査を終了した。

## （2）平成9年度の調査の概要

平成9年度は、G地点～I地点までの調査区を対象として平成9年4月21日から調査を実施した。

平成9年度の調査地点では、建物跡の一部と考えられるピットや溝跡が検出された他、G地点では、F地点と同じく、土器を一括して廃棄したと考えられる土坑が検出された。また、I地点からは、縄文晩期と考えられる土坑と土器片が発見された。I地点は、石巻市と河南町が接する地点であり、多量の湧水を伴った低湿地であったが、縄文時代の遺構・遺物が発見されたのは、当遺跡の調査の中では初めてであった。

平成9年度調査においても、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、最終的には、平成9年10月31日に全ての調査を終了した。

## （3）整理作業等の概要

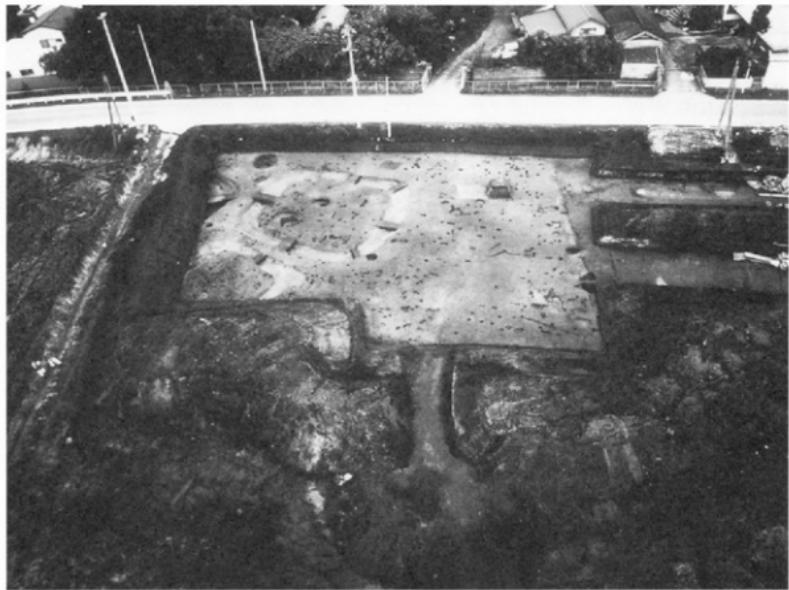
平成9年度の発掘（事前）調査終了後、継続して遺物の水洗・注記、図面分類等の基本的な作業を実施した他、出土した木製品の保存処理、火山灰等の土壤分析等を実施した。

平成10年度における整理作業では、図面修正、土器実測、トレース等の一連の作業を実施した他、樹種同定や土器の胎土分析なども実施した。



第15図 グリッド設定図

## 第2部 A地点



## 目 次

I.	調査の経過	27
II.	基本土層	27
III.	発見された遺構と遺物	28
■	第1号方形周溝墓	28
■	第2号方形周溝墓	35
■	第3号方形周溝墓	36
□	第1号井戸跡	41
□	第2号井戸跡	41
■	第3号井戸跡	43
□	第4号井戸跡	48
■	柱跡群	51
■■	溝跡	51
IV.	A-II地点の調査	52

- |    |                     |    |                      |
|----|---------------------|----|----------------------|
| ■  | …縄文時代のものと考えられる遺構    | ■  | …古墳時代（前期）のものと考えられる遺構 |
| ■■ | …奈良・平安時代のものと考えられる遺構 | ■■ | …中世以降のものと考えられる遺構     |
| □  | …時期不明の遺構            |    |                      |

## I. 調査の経過

新山崎遺跡包蔵地範囲におけるは場整備による田面工事の大部分は、工事による掘削深度を浅くしたり、盛土によって遺跡を保存するなど、地下の遺構や遺物に極力影響を及ぼさない措置が取られたため、発掘調査による記録保存を実施するには至らなかった。しかし、A-I地点については、地表面の標高が全体的に低く、工事による地下への影響が大きいと判断されたため、やむをえず面的な発掘調査を実施するに至った。総掘削面積は、850m<sup>2</sup>である。

調査は、平成8年7月16日から実施し、重機による表土掘削の後、個々の遺構の検出、掘削、平面図の作成、写真撮影等の記録保存を実施した。

調査の結果、方形周溝墓3基、井戸跡4基、溝跡1条とともに、建物の柱跡と考えられる小ピットを100個以上検出し、古墳時代から近世にかけてのものと考えられる土器、石器、木製品等が出土した。

調査の終盤には、調査した遺構の位置関係や分布状況を把握する必要などから、空中写真撮影を実施した他、11月には文化財の啓蒙普及活動の一環として現地説明会を実施し、多数の市民の参加をみた。

また、方形周溝墓については、調査の後、保存措置を取ることとし、周溝内に川砂を充填した後、埋め戻し、11月20日に調査を終了した。

## II. 基本土層

南側壁面で観察した土層中、調査区全域に及んでいると考えられるものを基本土層とし、I～V層に分けた。(第1図)

第I層：黒褐色のシルトで、表土層である。ほぼ調査区全域に見られ、水田耕作土であると考えられる。

第II層：暗褐色ないしは、黒褐色のシルトであり、しまりは良い。酸化鉄を多量に混入し、水田耕作面の最下層であると考えられる。

第III層：黒褐色または、黒色のシルトである。多量の灰白色火山灰を斑状に混入している。A地点を含めて、新山崎遺跡の大部分の調査区から灰白色火山灰が検出されているが、遺跡全域が低湿地に近い状況であり、過去に幾度も氾濫を受けた可能性が認められる。今回の調査で検出された灰色火山灰は、分析により、10世紀に降下した十和田a火山灰であることが判明しており、第III層は、平安時代以降の堆積層であると考えられる。

第IV層：黒褐色あるいは褐色の砂質シルトである。第2号方形周溝墓はこの層から掘り込まれており、

古墳時代の土層であると考えられる。

第V層：第IV層とともに古墳時代の土層を形成すると考えられる黒褐色または黒色のシルトである。

### III. 発見された遺構と遺物

#### 第1号方形周溝墓（第3図、第1・2図版）

【位置・検出状況】調査区中央南西寄りから周溝を全周した形で検出し、C-6～G-6グリッドラインから南にC-11～F-11グリッドラインにおよぶ。また、東側周溝は、第2号方形周溝墓の西側周溝と、南側周溝は第3号方形周溝墓の北側周溝と約50cm～2mの距離を置いて平行に並び、隣接している。

【重複関係等】周溝外縁部においては、わずかに小ピットに切られるのみで、重複関係は認められなかった。また、方台部内からは、第3号および第4号井戸跡とともに、当周溝墓よりも時期的に新しいと考えられる多くのピットが検出された。

【平面形・規模】周溝は全周し、全体の規模は東西軸12.2m、南北軸14.5mの南北に長い隅丸長方形を呈する。方台部の規模は東西軸8.6m、南北軸10.0mであり、やはり南北に長い隅丸長方形を呈する。主軸は、N-11°-Eである。

【堆積土】方台部の上に土層を確認している。この層は、第3号方形周溝墓においても確認し、1cm以下の黄色粒子を主体的に混入する暗褐色



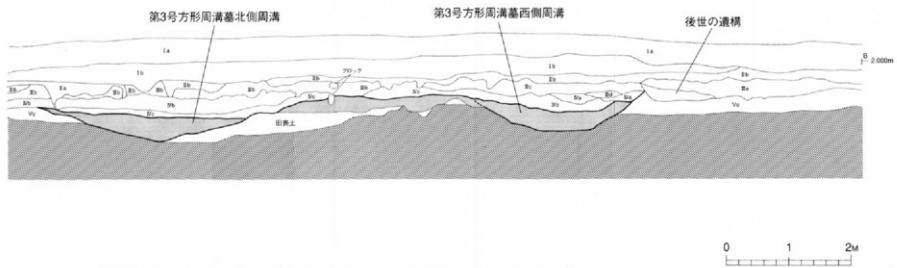
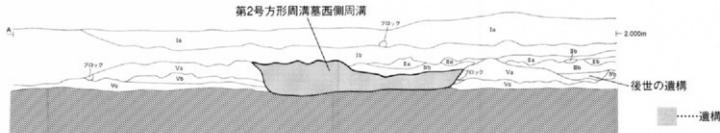
土であり、第1号方形周溝墓の周溝を検出する直前段階において、確認された土である。

【周溝内部の状況】全体として、北東側が浅く、南西側が深い。内部および、各コーナー部分におけるブリッジ状の高まりは見られなかった。堆積土は黒色または黒褐色の砂質シルトを基調とし、酸化鉄を比較的多く混入するものあり、自然堆積と考えられる。以下に各周溝の特徴を記す。

①東側周溝 上幅1.4m～2m、底面幅60cm～1.5mで、壁は底面から緩やかに外側に開く形で立ち上がる。深さは20cm～40cmであり、底面はほぼ平坦で土坑等の施設は発見しなかった。ただ、中央北寄りにやや浅くなった部分を確認し、深さは20cm～30cmを測る。

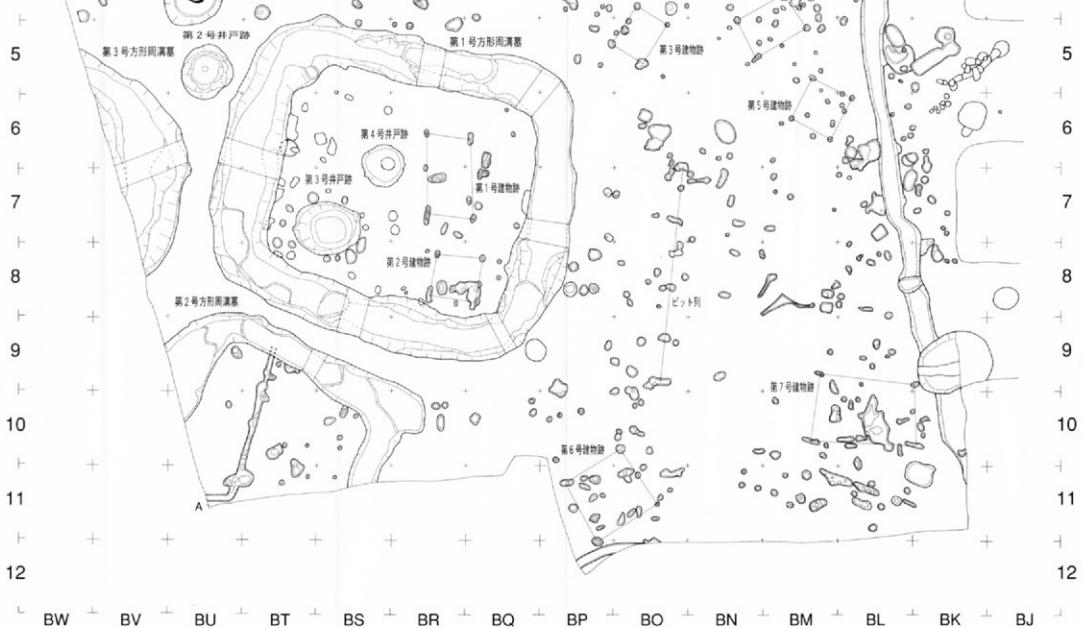
②西側周溝 上幅2.0m～2.8m、底面幅1.0m～1.5mで、壁は底面から方台部に向かって緩やかに外側に開く形で立ち上がり、周溝外縁部からの壁面傾斜が急になる部分と、底面から外側に向かって角度を持ちながら大きく開く形で立ち上がる部分などが見られる。深さは30cm～40cmであり、土坑等の施設は発見していない。

③北側周溝 上幅2.0m～2.8m、底面幅1.0m～1.7mで、壁は底面から方台部に向かって緩やかに開く形で立ち上がるが、周溝外縁部からの傾斜はやや急である。深さは40cm～50cmで、北東コーナ



樹種	土 色	土 性	特 徴
I-a		過土	
I-b	HOYR2 / 3 黒褐色	シルト	黃色鉄を若干混入する。
I-a	HOYR3 / 3 褐褐色	シルト	黃色鉄を比較的多く混入する。
I-b	HOYR2 / 2 黒褐色	シルト	同化物を若干、黃色鉄を若干混入する。
I-a	HOYR5 / 1 黑褐色	砂質シルト	灰白色火山灰を若干、無化鉄を比較的多く混入する。
I-b	HOYR7 / 4 に ぶく 黃褐色	シルト	灰白色火山灰の混入、無化鉄を比較的多く混入する。
I-a	HOYR7 / 1 黑褐色	シルト	灰白色火山灰を若干混入する。
I-d	HOYR2 / 2 黑褐色	砂質シルト	灰白色火山灰を若干、無化鉄を比較的多く混入する。
I-a	HOYR2 / 3 黑褐色	シルト	酸化鉄を比較的多く混入し、黄色鉄を若干混入する。
I-b	HOYR2 / 2 黑褐色	シルト	黃色鉄、同化物を若干多く、無化鉄を比較的多く混入する。
IV-c	HOYR2 / 1 黑褐色	シルト	無化鉄を若干混入し、無化鉄を比較的多く混入する。
I-a	HOYR7 / 1 黑褐色	シルト	無化鉄を若干混入し、無化鉄を比較的多く混入する。
Vb	HOYR4 / 6 黑褐色	砂質シルト	無化鉄を多量に混入する(赤山脈作成)。
Vc	HOYR3 / 1 黑褐色	砂質シルト	

### 第1図 基本土層



第2図 遺構全体図(A-1地点)





一部分が全体では最も浅い。底面はほぼ平坦で土坑等の施設は発見しなかった。

④南側周溝 上幅2.0m~2.6m、底面幅80cm~2.0mで、壁は底面から方台部に向かって緩やかに開く形で立ち上がる。深さは20cm~50cmであり、土坑等の施設は見られなかった。

〔方台部の状況〕平坦であり、全体的に周溝に向かって傾斜している。主体部等の施設は全く確認することができなかつた。

〔遺物の出土状況〕南西隅の周溝底面および西側周溝南側底面から土師器の破片が出土したが、磨滅が激しく、図示するには至らなかつた。

#### 第2号方形周溝墓（第4図、第1図版）

〔位置・検出状況〕調査区南西隅から西側および、北側、南側周溝の一部を検出し、G-8~H-8グリッドラインから南のG-12グリッドラインにおよぶ。西側周溝は、第1号方形周溝墓の東側周溝と、約50cm~1mの距離を置いて平行に並び、隣接した状況を呈する。

〔重複関係等〕確認されなかつた。

〔平面形・規模〕東西軸の検出部分（西側周溝外縁から調査区南東隅まで）(7.6m)、南北軸10.0mを測る。全体を検出していないため、形状は判然としないが、北西コーナーに若干突出した部分を確認した他、南側周溝の外縁部が内側に膨らみ、基本的には隅丸の方形を呈すると考えられる。これによって、方台部の形状はやや歪んだ隅丸方形となつてゐる。

〔堆積土〕積土等は確認できなかつた。

〔周溝内部の状況〕内部および、各コーナー部分



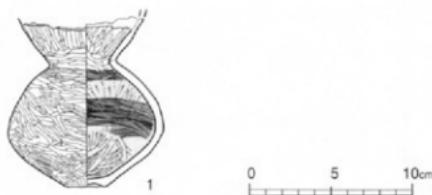
におけるブリッジ状の高まりは見られなかつた。規模は、上幅が1.0m~1.6m、底面幅が60cm~1.2mで、底面は平坦であり、断面形は、北側および西側が逆台形を、南側周溝は幅の広い逆台形を呈する。底面は平坦で土坑等の施設は発見しなかつた。全体として浅く、検出面からの深さは、40cm程度しかない。周溝内の堆積土は、黒色または、黒褐色を基調とする砂質シルトであり、レンズ状の自然堆積の様相を呈する。

〔方台部の状況〕平坦であり、主体部等の施設は確認することができなかつた。

〔遺物の出土状況〕南側周溝、周溝墓南西コーナー付近から、土師器片とともに、小型壺が出土している。

〔出土遺物〕第2号方形周溝墓の周溝底面から小型壺が出土している。口唇部を欠損しており、外面に丁寧なミガキが施され、硬質でしっかりしたつくりである。体部下半は、「く」の字型に屈曲し、底部へと至る。底部は上げ底であり、やはりミガキが施されている。内面のみに頸部から底部にかけて赤色塗彩が観察されるが、意図的に彩色したものか、あるいはそういった物を入れておく器として使用された結果であるかは判然としない。古墳時代前期の所産であると考えられ、方形周溝墓の時期

決定の要因となりうる。



NO	器種・器形	出土場所	調査等の特徴		法量(cm)			残存	写真版
			外面	内面	前高	口径	底径		
I	土師器 壺 東側周溝 底面	[11] ミガキ〔体・底〕ミガキ	[11] ミガキ〔体〕ヘラナデヨコナデ 〔底〕ヘラナデヨコナデ	15.4	—	2.4	4/5	27	

第5図 第2号方形周溝墓出土遺物

### 第3号方形周溝墓（第6図、第1・2図版）

【位置・検出状況】調査区南壁のやや西寄りに、北側周溝の一部、北西コーナー、西側周溝の一部が検出されたのみであり、北側周溝が第1号方形周溝墓の南側周溝と約1mの距離を置いて平行に並ぶと考えられる。

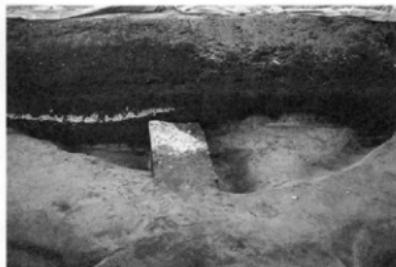
【重複関係等】認められなかった。

【平面形・規模】部分的に検出したのみであるため、形状は判然としない。

【堆積土】方台部の上に土層を確認している（第8層、第14層、第15層）。この層のさらに下に、黒色ないしは黒褐色を基調とするシルト質の土層が存在するが、それとは黄色粒子を混入するなど異なった点が認められる。また、西側周溝の東壁に明瞭な段が観察されているため、方形周溝墓の積み土の一端であると考えられる。

【周溝内部の状況】コーナー部分の上幅が2.9m、底面幅が1.0m～1.6mで断面形が上方に開く逆三角形を呈する。確認面からの深さは1.2m～1.5mであり、他の周溝よりも良い保存状態である。周溝内の堆積土は、黒色または黒褐色を基調としたシルトであり、15層に分層でき、自然堆積である。周溝内にブリッジ等の高まりや、土坑等は確認されなかった。

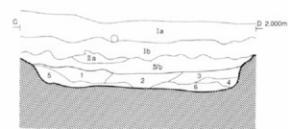
【遺物の出土状況】北西隅の周溝底面付近から、赤色塗彩された大型の壺や甕の破片がまとまって出土している。これらの遺物については、破片で出土しているが、完形の個体となる訳ではないため、方台部から転げ落ちたものか、あるいは周溝外縁部から投棄されたものと考えられる。しかし、出土





第4図 第2号方形周溝墓

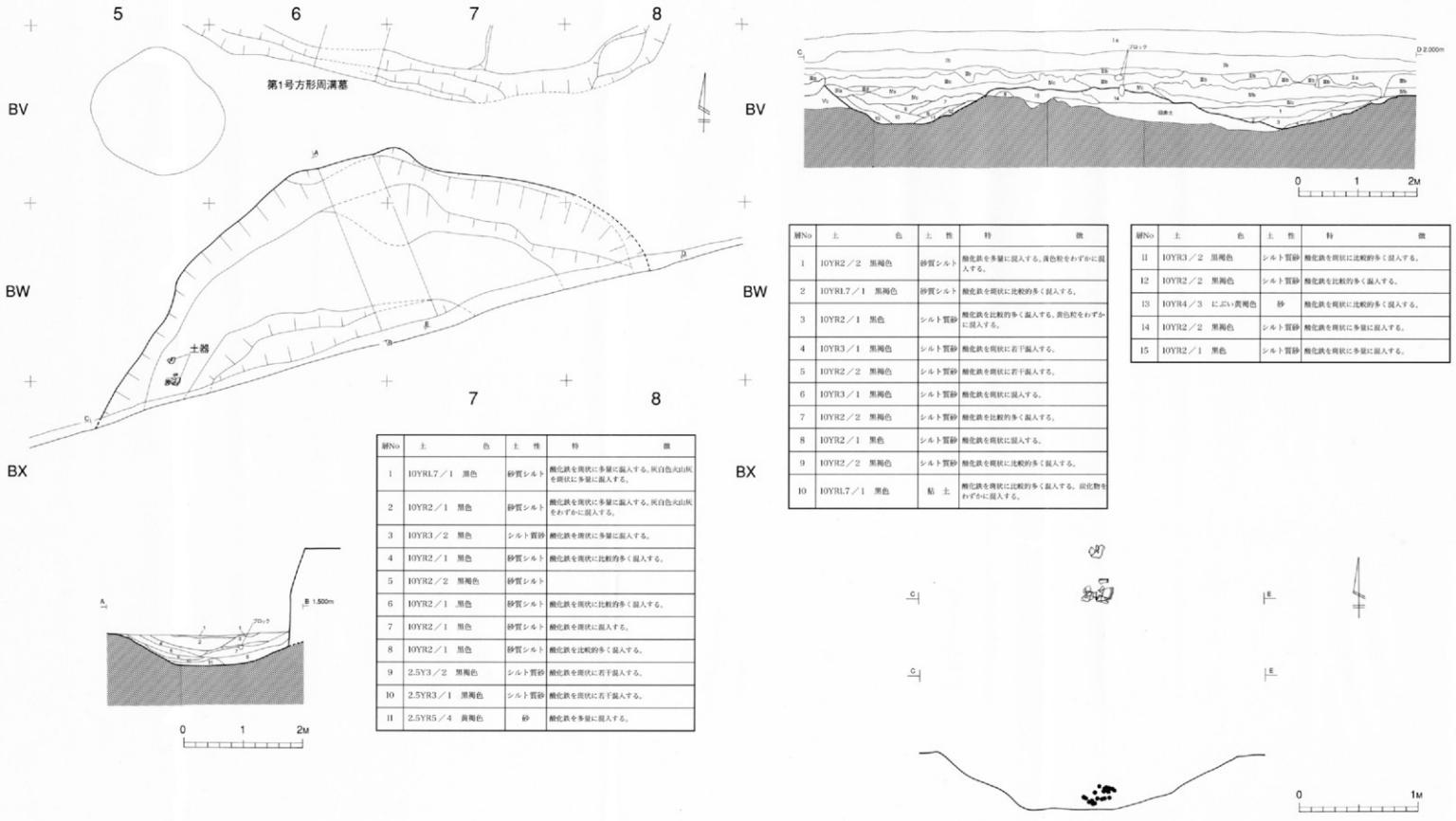
層No	土 色	土 性	特 質
1	10YR2／1 黒色	シルト	酸化鉄を多量に混入する。
2	10YR2／2 黒褐色	砂質シルト	砂を微粒に混入する。
3	10YR2／2 黒褐色	シルト	砂を微粒に若干混入する。
4	10YR4／2 深黄褐色	砂	黑色シルトを多量に混入する。



層No	土 色	土 性	特 質
1	10YR2／1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を頂状に多量に混入する。
2	10YR2／2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を現状に比較的多く混入する。
3	10YR2／1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を現状に比較的多く混入する。
4	10YR1.7／2 黒色	砂質シルト	酸化鉄を頂状に比較的多く混入する。
5	10YR2／2 黒褐色	砂質粘土	酸化鉄を現状に多量に混入する。
6	10YR1.7／1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を現状に比較的多く混入する。



南側周溝遺物出土状況(見通図)



第6図 第3号方形周溝墓

位置がほぼ周溝の底面であるため、第3号方形周溝墓に伴い、時期決定の材料となりうる遺物としてとらえて良いと考えられ、古墳時代前期のものと考えられる。

〔出土遺物〕図示できたものは3点であり、全て古墳時代前期の土師器である。1は外面赤彩の直口壺である。口唇部に平坦部を作出し、口縁部上部には、網文（LR）が施される。この部分には、赤彩されていない部分や、剥離の痕跡とも考えられる部分が認められる。器外面全体にミガキ調整が施され、頭部には、刻み目を有する断面三角形の突帯があげられ、体部上半が欠損しているが球形に近い形状と考えられる。底部には木葉痕が見られ、平坦である。2は器厚が比較的薄く、3とともに壺の破片であり、ナデによって調整が施される。

#### 第1号井戸跡（第8図、第2図版）

〔位置・検出状況〕調査区南西隅付近からやや北寄りの、BV-4から、BV-5グリッド中において検出された。

〔重複関係等〕第2号井戸跡と1m程の間隔を置いて隣接しているが、重複は認められなかった。

〔平面形・規模〕2.7m×2.2mの長楕円形を呈し、深さは、確認面から1.2mを測る。

〔内部の状況〕内部には、くり抜きの井戸枠が据えられており、井戸枠の底面は、地山の砂層まで達している。井戸枠は90cm×69cmの不整楕円形を呈し、高さは60cmを測る。内部底面にやや大型の礫を配し、水溜としている。第1号井戸跡内部においては、掘削時に多量の湧水があり、掘り方および人為堆積層の確認はできなかった。

〔出土遺物〕第1号井戸跡からは、時期決定の根拠となりうる遺物は出土していないため、構築時期については判然としない。

#### 第2号井戸跡（第9図、第11図、第3図版）

〔位置・検出状況〕調査区南西隅付近、BV-5グリッド中において検出され、第1号井戸跡、第1号方形周溝墓とそれぞれ1m程の間隔を置いて隣接している。

〔重複関係等〕第2号井戸跡の外縁部全周にビットが検出されており、後述することとする。

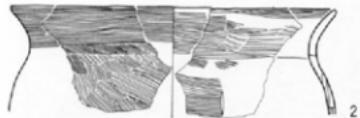
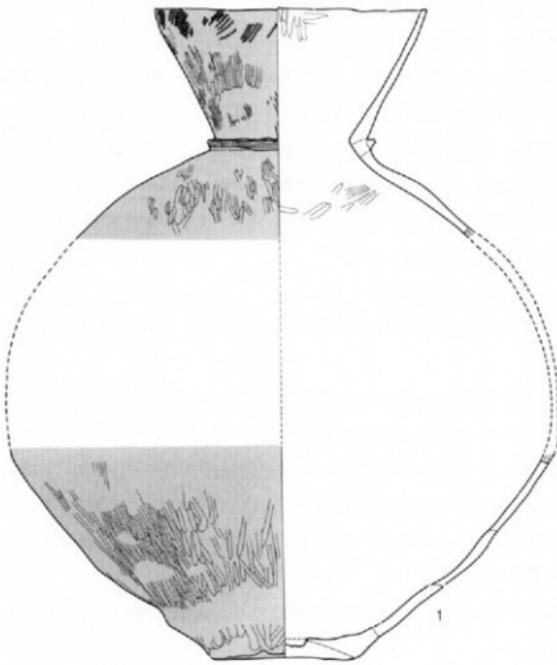
〔平面形・規模〕2.1m×1.9mの楕円形を呈する。深さは確認面から40cmであり、比較的浅い。素堀の井戸であると考えられる。

〔堆積土〕黒色または、黒褐色シルトを基調とし、部分的に地山の崩壊土をブロック状に混入しており、自然堆積であると考えられる。掘り方および人為堆積層の確認はできなかった。

〔内部の状況〕壁は、緩やかに外側に開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔その他の特徴〕前述のとおり、周間にビットを10個以上確認している。このようなビットは、第2号井戸の周囲のみであり、断ち割って確認した結果、井戸に伴うものであると考えられる。ビットの

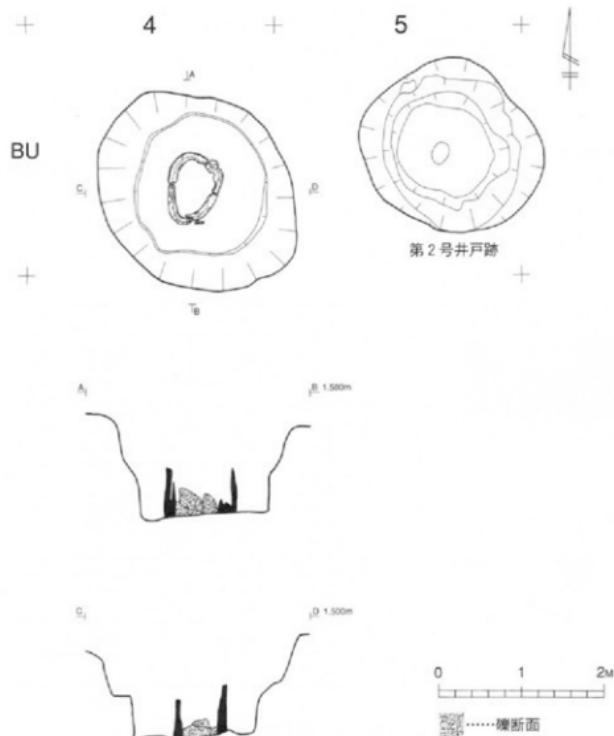




0 5 10cm

NO	器種	器型	出土場所	調査等の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外面	内面	器高	口径	底径		
1	土師器	壺	内周溝 底面	[口]ミガキ→織文陶文(1.0) 〔底〕ミガキ 米赤目(1.2~1.8)	[口]ミガキ 〔体〕ミガキ	(39.2)	16.4	8.1	3/5	27
2	土師器	壺	外周溝 底面	[口]ヨコナデ 〔脚〕ハケメーナデ	[口]ヨコナデ 〔脚〕ハケメーナデ	—	19.7	—	1/4	
3	土師器	壺	西周溝 底面	[口]ヨコナデ 〔脚〕ナデ	[口]ヨコナデ 〔脚〕ナデ	—	16.1	—	1/5	

第7図 第3号方形周溝墓出土遺物



第8図 第1号井戸跡

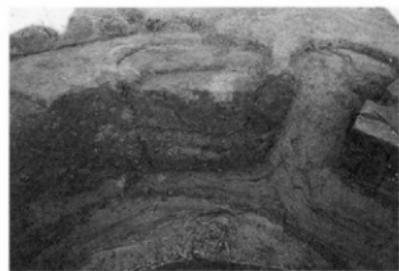
規模は、直径30cm～60cmであり、深さは確認面から20cm～30cm程度ある。第2号井戸跡の壁面に深く入り込んでおり、井戸の周囲にめぐらした柵の跡なのか、井戸の壁面の崩壊を防ぐための施設であるのか、あるいは、何らかの上屋構造の跡であるのかを明確にすることはできなかった。

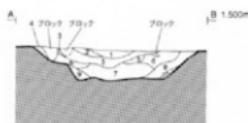
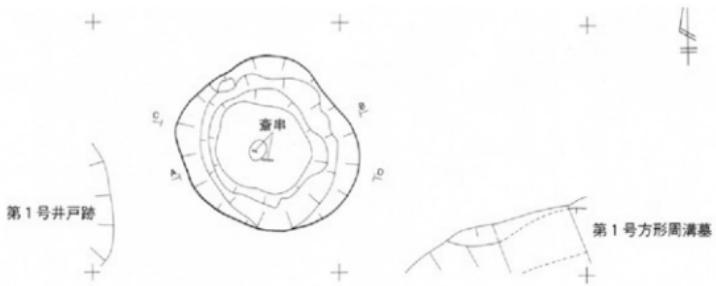
〔出土遺物〕 第2号井戸跡の底面から木製品が1

点出土しており、斎串であると考えられる。細い枝を削って下半部を劍先状に尖らせており、上端部は削り出してつまみ状の突起を作出している。材はブナである。

第3号井戸跡（第12図～第14図、第4・5図版）

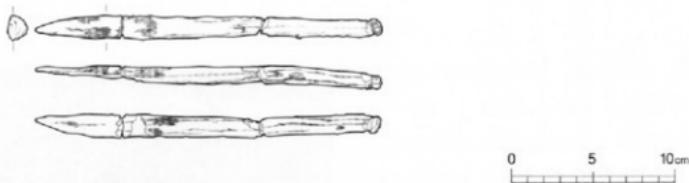
〔位置・検出状況〕 第1号方形周溝墓方台部南東隅付近、BT-7、8グリッドからBU-7、8グ





層No	土 色	土 性	特 徴
1	IOYR3／1 黒褐色	粘 土	酸化鉄を斑状に多量に混入し、灰白色火山灰を斑状に多量に混入する。
2	IOYR2／2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に多量に混入し、炭化物を混入する。
3	IOYR2／1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に多量に混入し、炭化物を混入する。
4	IOYR2／1 黒色	砂質シルト	
5	IOYR2／1 黒褐色	粘 土	酸化鉄を比較的多く混入する。
6	IOYRL7／1 黑色	砂質シルト	
7	IOYRL7／1 黑色	粘 土	酸化鉄を斑状に混入する。
8	IOYR2／1 黒色	シルト質砂	
9	IOYR5／2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を斑状に混入する。
10	IOYR2／1 黒色	シルト質砂	

第9図 第2号井戸跡



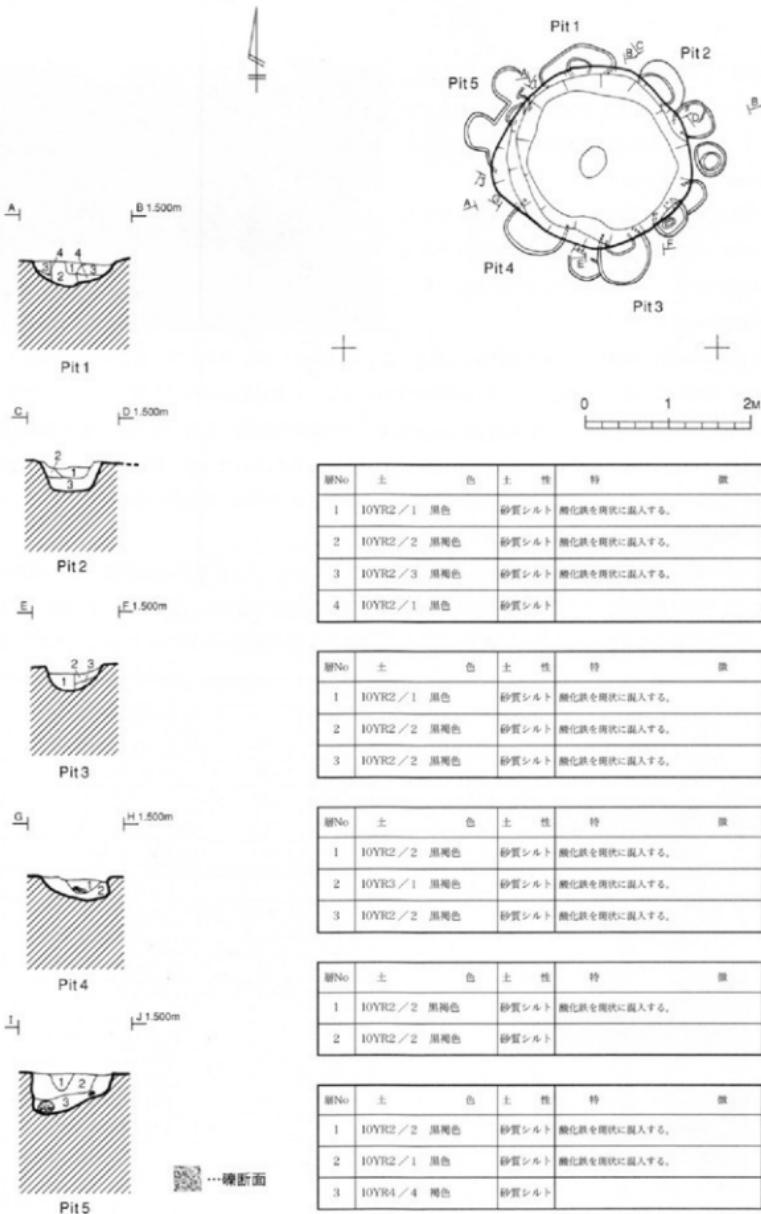
NO	種 别	遺 墓・層 号	残 在	計 長 度	幅 段	時期・年代	備 考	写真番号
1	斎串	第2号井戸跡面	1/1	21.1×1.3×1.0	ブナ			41

第10図 第2号井戸跡出土遺物

リッド中において多量の礫を伴って検出された。

〔重複関係等〕第1号方形周溝墓を切っている他、外縁部周囲に多数のピットが検出されており、後述することとする。

〔平面形・規模〕東西2.2m、南北2.7mの南北に長い長楕円形を呈する。深さは確認面から90cmであり、素掘の井戸であると考えられる。



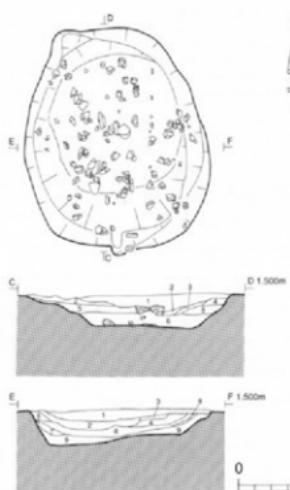
第11図 第2号井戸跡ピット

〔堆積土〕 黒色または、黒褐色シルトを基調とし、部分的に地山の崩壊土をブロック状に混入しており、井戸廃絶後の壁面崩壊等による自然堆積層であると考えられる。

〔内部の状況〕 壁は、緩やかに外側に開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。壁面にテラス状の段を有し、その部分より下方は水溜であつた可能性がある。

〔その他の特徴〕 周囲にビットを10個以上確認している。第1号方形周溝墓方台部上には、複数のビットを確認しているが、集中してしかも周囲を取り囲むように発見されたのは、第3号井戸の周囲のみである。ビットの規模は、直径60cm～20cmの円形や梢円形を呈するものであり、深さは確認面から10cm～5cmを測る。井戸跡との切り合い関係は認められなかつた。第2号井戸とともに、周囲にめぐらした柵の跡や井戸の壁面の崩壊を防ぐための施設、あるいは、何らかの上屋構造の跡などの可能性が考えられるが、明確にすることはできなかつた。

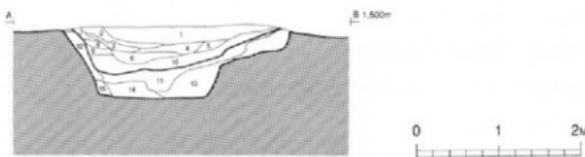
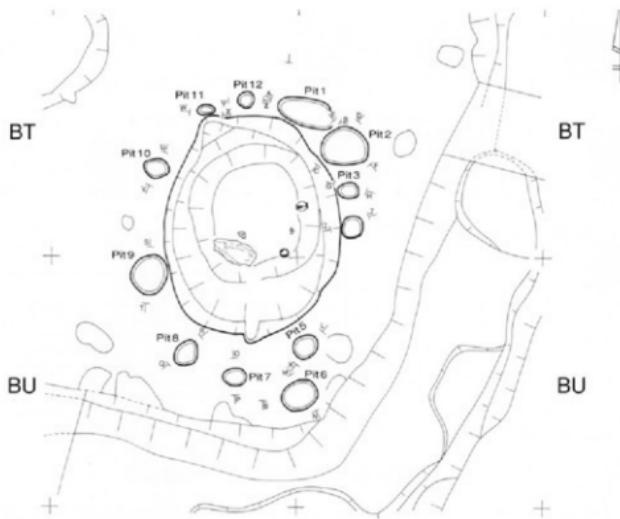
〔出土遺物〕 陶器、石鉢、下駄、漆塗りの杯などが出土している。1は白色の施釉陶器であり産地不明。2は安山岩製の石鉢であり、外面に明瞭な溝状の敲打痕が認められる。3は差歛下駄である。足が乗る台と歎を別々な部材で作り、脇差しによって結合させている露卯（ろぼう）である。木取りは、



編No	土 色	土 性	特 徴
1	10YR4./1 灰白色	粘 土	礫化鉄を多量に混入する。
2	10YR3./1 黒褐色	シルト	礫化鉄を比較的多く混入する。
3	10YR2./2 黒褐色	砂質シルト	礫化鉄を若干混入する。
4	10YR2./3 黒褐色	砂質シルト	
5	10YR2./3 黒褐色	シルト質粘	礫化鉄を多量に混入する。
6	10YR2./1 黒色	シルト	礫化鉄を多量に混入する。

編No	土 色	土 性	特 徴
1	10YR2./2 黒褐色	砂質シルト	礫化鉄を若干混入する。
2	10YR2./3 黒褐色	シルト質粘	礫化鉄を多量に混入する。
3	10YR0.7./1 黒色	粘 土	礫化鉄を比較的多く混入する。
4	10YR2./1 黒色	砂質シルト	礫化鉄を周辺に若干混入する。
5	10YR4./1 灰白色	粘 土	礫化鉄を周辺に比較的多く混入する。
6	10YR3./2 黒褐色	砂	礫化鉄を周辺に混入する。
7	10YR2./1 黒色	砂質シルト	礫化鉄を周辺に比較的多く混入する。
8	10YR2./1 黒色	シルト	礫化鉄を多量に混入する。
9	10YR2./1 黒色	砂質シルト	礫化鉄を比較的多く混入する。

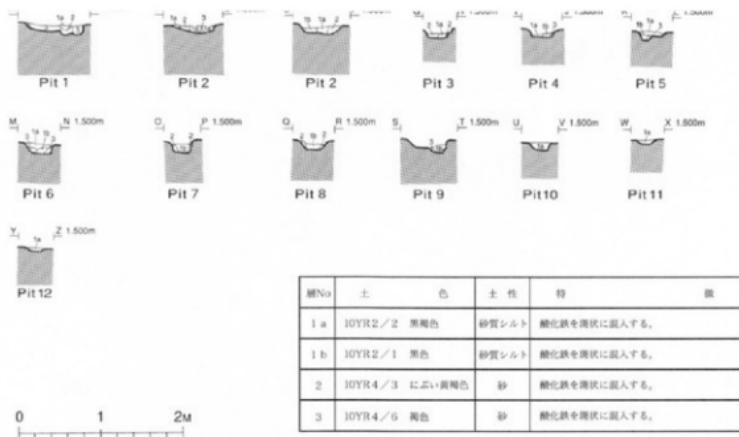
第12図 3号井戸跡上面土坑



層No	土 色	土 性	特 樹
1	10YR2 / 2 黒褐色	シルト	発化鉄を斑状に若干混入する。
2	10YR3 / 1 黒褐色	粘 土	発化鉄を斑状に比較的多く混入する。
3	10YR4 / 1 灰白色	粘 土	発化鉄を斑状に比較的多く混入する。
4	10YR3 / 2 黒褐色	砂	発化鉄を斑状に多量に混入する。
5	10YR2 / 1 黒色	砂質シルト	発化鉄を斑状に若干混入する。
6	10YR3 / 2 黒褐色	粘 土	発化鉄を若干混入する。
7	10YR2 / 3 灰黄褐色	砂質シルト	発化鉄を斑状に比較的多く混入する。
8	10YR2 / 2 黒褐色	シルト質砂	発化鉄を比較的多く混入する。

層No	土 色	土 性	特 樹
9	10YR3 / 1 黒褐色	砂質粘土	発化鉄を斑状に混入する。
10	10YR4 / 1 灰白色	粘 土	発化鉄を比較的多く混入する。
11	10YR3 / 1 黒褐色	砂質シルト	
12	10YR3 / 3 灰褐色	砂質シルト	発化鉄を斑状に混入する。
13	10YR4 / 1 灰灰色	砂質シルト	発化鉄を若干混入する。
14	10YR2 / 1 黒色	シルト	
15	10YR5 / 6 黄褐色	砂質シルト	発化鉄を斑状混入する。

第13図 3号井戸跡



第14図 第3号井戸跡ピット土層断面図

台、歯ともに柵目取りであり、前緒孔が前歯の前部に、後緒孔が後歯のやや後方に位置している。4は漆塗りの杯であり、高台部は欠損している。外面は黒漆によって、内面は赤色に塗られており、外側三方に家紋が配される。家紋は、「三つ引き」である。樹種同定の結果、3、4ともブナであることが判明した。第3号井戸の覆土からは、以上の他に須恵器片と瓦質土器と思われる破片がそれぞれ1点ずつ出土している。

#### 第4号井戸跡（第16図、第6図版）

【位置・検出状況】第1号方形周溝墓方台部中央南西寄り、B S - 6、7グリッドからB T - 7、8グリッド中において検出された。

【重複関係等】第1号方形周溝墓を切っている他、外縁部をピットによって切られる。

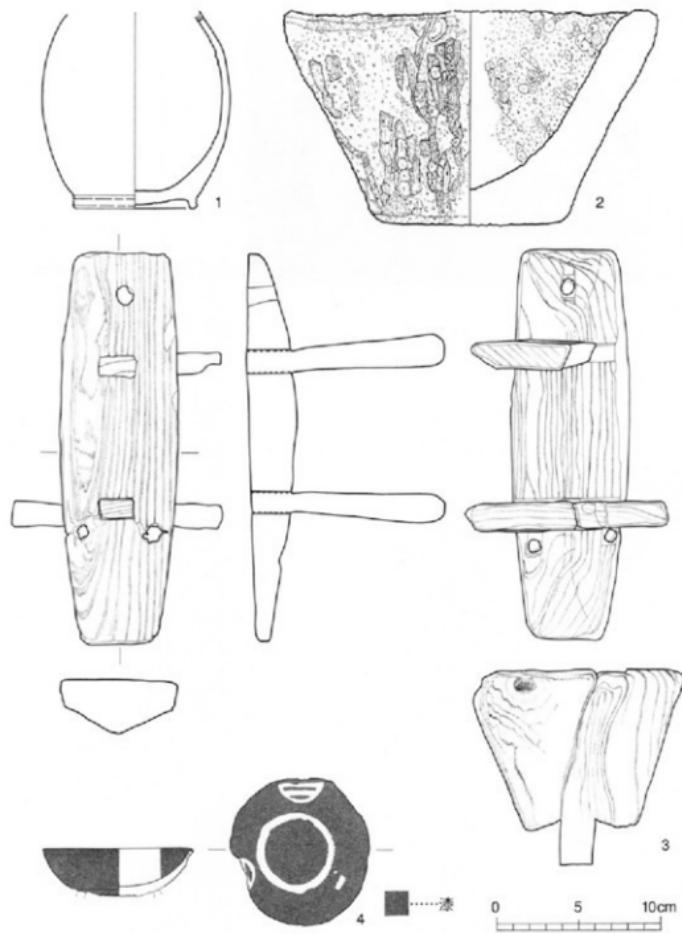
【平面形・規模】東西1.7m、南北1.7mの不整形を呈する。深さは確認面から90cmであり、曲げ物状の井戸枠を伴っている。

【内部の状況】壁は、内湾しながらほぼ直立して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

井戸枠は曲げ物で、掘り方の中央北寄りに据えられており、下部は地山直下の砂層まで及んでいた。井戸枠の直径は50cmであり、高さも50cmある。井戸枠は腐食が進んでおり、内皮が部分的に堆積土に貼り付いた状態で検出されたが、全体の形状は把握することができず、取り上げることができなかった。掘り方埋土は、地山ブロックを含む黒褐色土である。

【出土遺物】井戸枠の他、掘り方底面から花崗岩と考えられる大型の礫が出土している。花崗岩は、周辺地域には見られないものであり、持ち込まれた可能性がある。



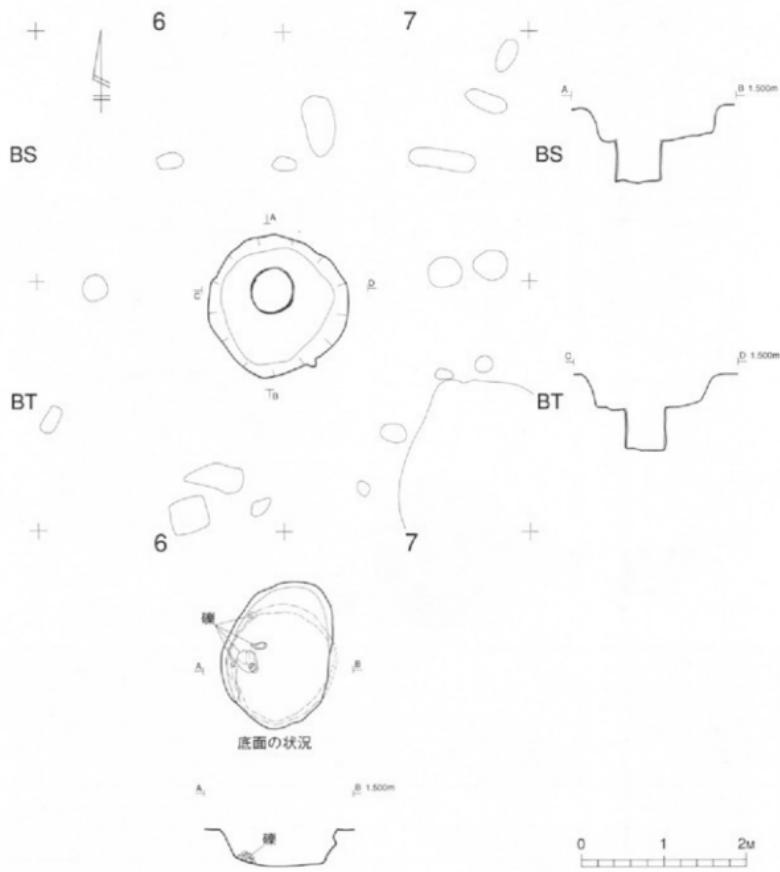


No.	器種 (材質)	形 態	出土場所	特	徴	法 量 (cm)				現 存	写真圖版
						面 高	口 径	径 幅	倍		
1	磁 器 高台付 座	高台付 座	表面付近	灰陶		12.1	—	7.6	4./5		
2	安山岩 石 鉢	圓面付近				13.1	22.8	10.8	2./3	40	
No.	種 別	造 形	寸 寸	現 存	計 測 組	樹 種	時期・年代	備	考	写真圖版	
3	下鉢	第3号井戸底面付近		L/1	23.1×12.3×3.05						41
No.	器種 (材質)	形 態	出土場所	特	徴	法 量 (cm)				現 存	写真圖版
4	漆器 (アマ)	高台付 座	表面付近	(外側) 黒漆、(内側) 漆。 ※外側三方に家紋「三つ引き」を漆で描く。		(2.8)	—	(4.3)	3./4	41	

第15図 第3号井戸跡出土遺物



第4号井戸跡井戸枠内面



第16図 第4号井戸跡

### 柱跡群（第2図、第7図版）

A-1地点の全域からは、100個余りのピットを検出している。そのほとんどが、深さ10cm～20cmほどの浅いものであり、堆積土等から柱の連接関係を確認し、建物の規模を推測することができたのは、一部のみであったが、ピットの中には、平面形が長楕円形を呈し、一定の方向性を持って並ぶものが見られた。これらは、20cm～30cmの深さを測り、堆積土は基本土層中の第Ⅲ層であると考えられる。第2図のA-1地点遺構全体図中に、それらピットの中で建物跡として判断されたものを示した。

まず、第1号方形周溝墓方台部上に2棟確認した。第1号建物跡は東西方向に長く、柱間は北側で3.4m、東側で1.9mを測る。第2号建物跡はやや南北方向に長く、柱間は北側で1.8m、東側で2.0mを測る。

第3号建物跡はB P-4からB P-5グリッド中において確認し、南北方向に長く、北西を向く。柱間は北西側で1.7m、北東側で1.8mを測る。

第4号・5号建物跡は調査区北西隅付近において確認した。第4号建物跡は南北方向に長く、北西を向く。柱間は北西側で1.3m、北東側で2.2mを測る。また、第5号建物跡はほぼ正方形を呈し、柱間は北西側で1.4mを測る。

第6号建物跡はB P-11からB Q-11グリッド中において確認した。ほぼ正方形を呈し、北西-南東方向を向く。柱間は北西側で2.3mを測る。

第7号建物跡はB L-10からB N-10グリッド中において確認し、検出した建物跡の中では最大のものである。南北方向に長く、やや北東を向く。柱間は北東側で2.2m、北東側で4.0mを測る。

当調査区では、この他にB P-6～10グリッドにおいて、東西に延びる柱列もしくは柵列と考えられる4間の遺構を検出しており（ピット列）、柱間は西から2.1m・2.4m・2.0m・1.9mである。

以上の遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

### 溝 跡（第17図、第7図版）

【位置・検出状況】調査区北端に位置し、調査区の西壁から北東隅へ抜ける溝である。

【重複関係等】A-2地点までおよぶ土坑によって切られている。

【方向・規模】やや蛇行しながら走行しており、方向はN-74°-Eである。確認した長さは20mであり、最大幅1.0m以上、深さは20cmを測る。

【堆積土】黒褐色を基調とする单一土層である。

【内部の状況】壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦であり、全体的に東方向に下降している。

【出土遺物】出土していない。



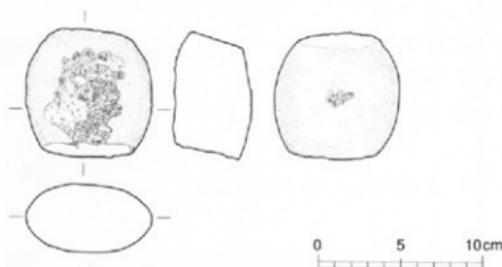
## IV. A-2 地点の調査

A-2地点はほ場整備の工事対象域にならなかった地点である。しかしA-1地点とB地点との間の遺構・遺物の存在を確認しておく必要があったため、確認調査を実施した。調査は平成8年10月7日から開始し、西側と東側に2本のトレンチを掘削した後、土層の観察および図化、遺構の検出および図化、写真撮影等を実施したが遺構は掘削していない。調査は12月9日に終了した。総掘削面積は、370m<sup>2</sup>である。

A-2地点の層序は、基本的には5層に分けられ、ほぼ水平堆積の様相を呈している。

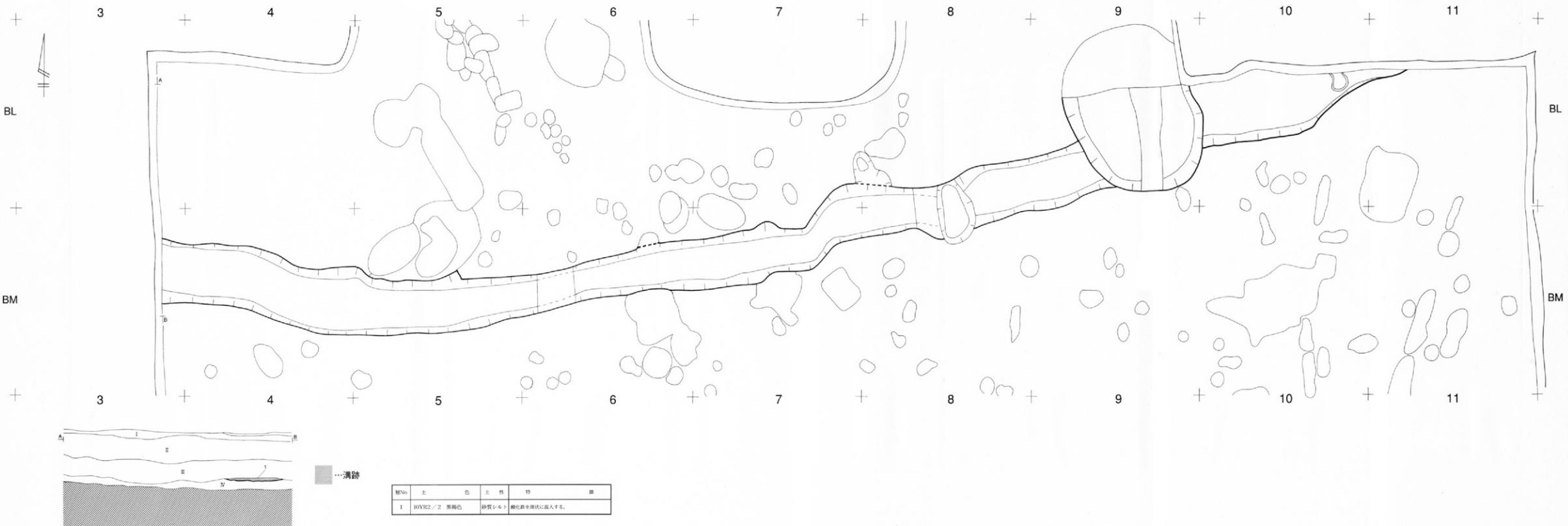
第Ⅰ層は表土層であり、全体的にしまりは弱い。A-1地点も含めてこの地点域にはほぼ普遍的に見られる耕作土であり、黒褐色を呈する。第Ⅱ層は黒褐色のシルトであり、しまりがある。また、灰白色火山灰を混入し、水性堆積の様相を呈している。第Ⅲ層は酸化鉄を多量に含む暗灰色のシルトである。しまりは強く、明らかに水性堆積の様相を呈している。A-2地点で検出した遺構のほとんどは、この土層から掘り込まれており、遺構や遺物の包含層であると考えられる。第Ⅳ層は地山漸移層である。A-2地点の地山は、暗黄褐色の砂質シルトであるが、後世の湧水や河川等の氾濫によって様々な影響を受けていると考えられる。このため第Ⅲ層との土の混在が顕著である。第Ⅴ層は黄褐色の砂質シルトである。浜堤上の堆積であり、上面には、アシ等の植物の痕跡が見られる。地山と考えられる。

A-2地点の遺構は、西側にはピット等と考えられるものが散見されるだけであるが、東側には大型の土坑や溝跡と考えられるものが検出された。また、包含層から凹石が出土している。

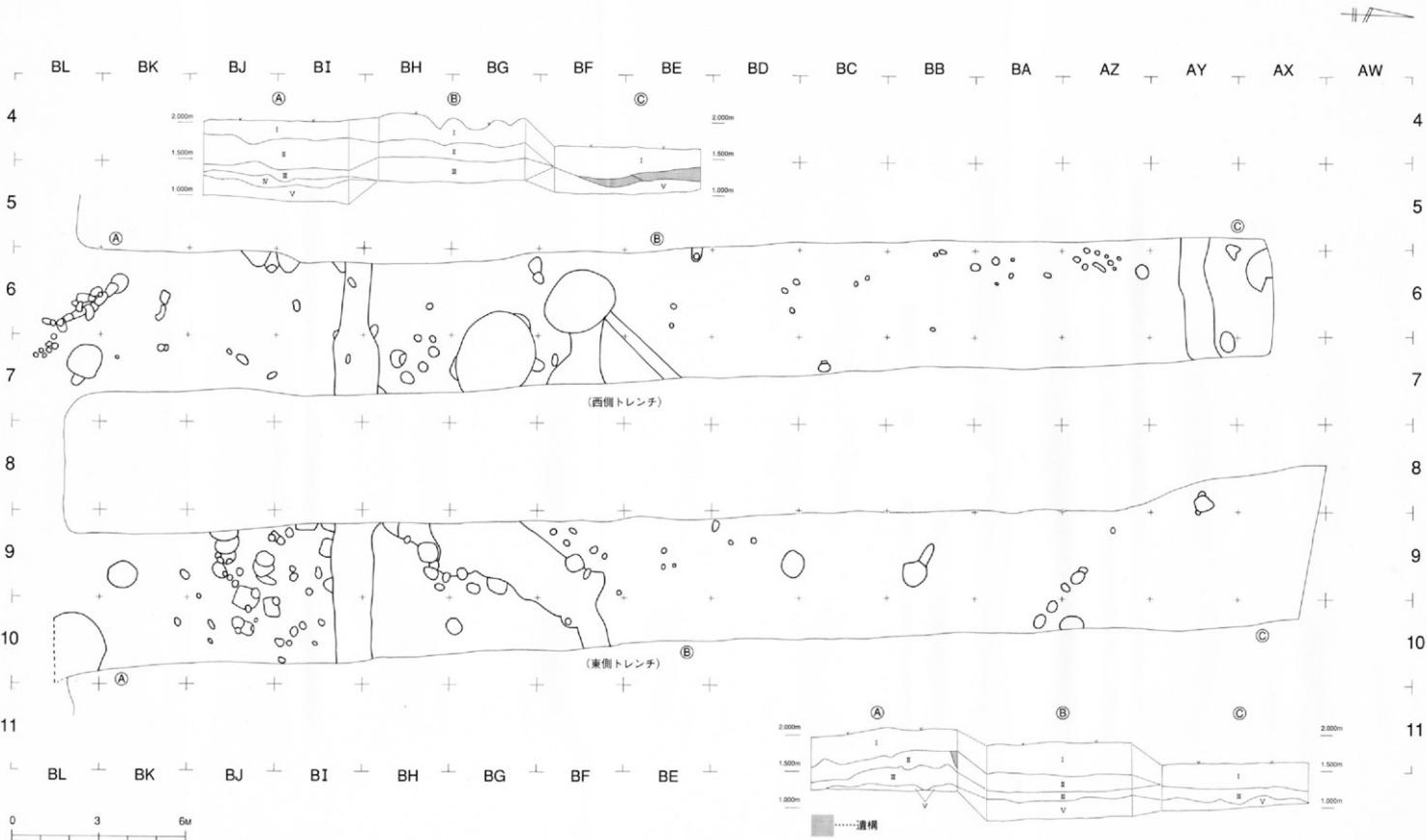


NO	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	表面調整等	側面調整等	裏面調整等	石材	残存	写真回数
1	四 石	調査区遺物袋 合巻	7.6	7.6	4.0	敲打痕	-	敲打痕	砂岩	1 / 1	40

第19図 A-2地点出土遺物



第17図 第1号溝跡・土抗



第18図 遺構検出状況図(A-2地点)

## 第3部 B地点・C地点



## 目 次

I. 調査の経過.....	59
II. 基本層序.....	59
III. 発見された遺構と遺物.....	60
1. B 地点	
■ 第1・2号土坑.....	60
□ 第1号井戸跡.....	60
■ 第2号井戸跡.....	66
2. C 地点	
I. 調査の経過.....	59
II. 基本層序.....	59
III. 発見された遺構と遺物.....	72
■ 第1号溝跡.....	72
■ 第2号・□ 第3号・■ 第4号溝跡.....	72
■ 第5号溝跡.....	72
■ 第1号土坑.....	73
■ 第2号土坑.....	73
■ 第6号溝跡.....	74
■ 第3号土坑.....	74
■ 第7号溝跡.....	74
■ 第8号溝跡.....	78
□ 第9号溝跡.....	78
■ 第5号土坑.....	78
□ 第10号溝跡.....	78
■ 第11号・■ 第12号溝跡 .....	85
■ ■ 第14号溝跡.....	85

■ …縄文時代のものと考えられる遺構

■ …古墳時代（前期）のものと考えられる遺構

■ …奈良・平安時代のものと考えられる遺構

■ …中世以降のものと考えられる遺構

□ …時期不明の遺構

## I. 調査の経過

B地点は、A地点の北方に位置する。ほ場整備による水路の掘削によって破壊されてしまう部分について、幅5mのトレンチを掘削して調査を実施した。総掘削面積は280m<sup>2</sup>である。調査は、平成8年12月10日から実施し、重機による表土掘削の後、個々の遺構の検出、掘削、平面図の作成、写真撮影等の記録保存を実施した後、翌年の1月28日に終了した。調査の結果、井戸跡2基、土坑2基、溝2条などとともに、若干のピットを検出し、平安～中世と考えられる土器片や木製品等が出土した。

C地点は、西側でB地点の北側とつながり、東方へと延びる地点である。調査は平成9年1月28日開始し、3月28日に終了した。総掘削面積は460m<sup>2</sup>である。C地点の調査では5基の土坑とともに溝跡が14条、他に多数のピットが検出された。なお、C地点の西側の一部分については、工事の関係上、遺構が一部しか破壊されないため、部分的な調査にとどめ、埋め戻した。

## II. 基本層序

### 1. B地点（第1図）

B地点の層序は、3層に分けられ、北に向かって下降している。

第Ⅰ層：表土であり、全体的にしまりは弱い。A～C地点からこの地域域にかけて、ほぼ普遍的に見られる耕作土であり、黒褐色を呈する。

第Ⅱ層：黒褐色のシルトであり、ややしまりがある。灰白色火山灰を混入し、多数の木根が見られる。B地点における遺構は、この層の上面から掘り込まれている。遺構・遺物包含層であると考えられ、平安時代以降の堆積土であると考えられる。

第Ⅲ層：黄褐色の砂質シルトであり、地山と考えられ、浜堤上を構成する土である。

### 2. C地点（第2図）

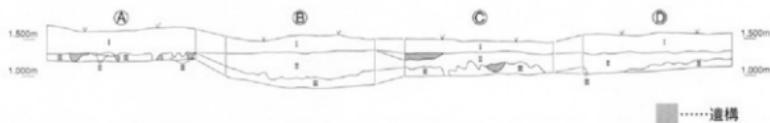
遺跡の東西におよぶC地点の層序は、4層に分けられ、東に行くに従って下降している。

第Ⅰ層：表土であり、全体的にしまりは弱い。現在の耕作土であり、黒褐色を呈する。

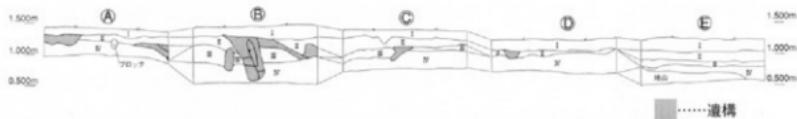
第Ⅱ層：暗灰褐色のシルトであり、しまりは良い。水田の最下層である。

第Ⅲ層：この層は灰白色火山灰をブロック状に混入しており、水性堆積の様相を呈する。時期的には、平安時代以降の堆積土であると考えられる。

第Ⅳ層：地山への漸移層であり、黄褐色の砂質シルトである。地点によっては、酸化鉄を多量に含み、水性堆積の様相を呈する。この層から掘り込まれている遺構も存在し、その覆土中には、氾濫によるものと考えられる黒褐色土のブロック状の堆積が見られる。



第1図 B地点層序模式図



第2図 C地点層序模式図

### III. 発見された遺構と遺物

#### 1. B 地点

##### 第1号・2号土坑（第5図、第9図版）

【位置・検出状況】調査区中央、A K・A L-2～3グリッド中において重複関係を持って検出された。

【重複関係等】第2号土坑が第1号土坑を切っている。

【平面形・規模】第1号土坑は東西2.7m、南北の残存部分2.4mの規模を持つ不整形円形を呈する。北側は第2号土坑に切られている。また、第2号土坑は東西1.6m、南北1.5mの不整形を呈し、第1号井戸跡よりも小型である。また、深さは第1号土坑、第2号土坑とも確認面から50cmを測り、比較的浅い。

【内部の状況】第1号、2号土坑とも断面形はすり鉢状を呈し、壁は緩やかに開いて立ち上がる。また、底面からは多量の湧水があり、水溜等の施設があった可能性があり、井戸跡とも考えられる。しかし、断面からの確認は不可能であった。これらの土坑は、廃絶後自然堆積により埋没したと考えられる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

##### 第1号井戸跡（第6図）

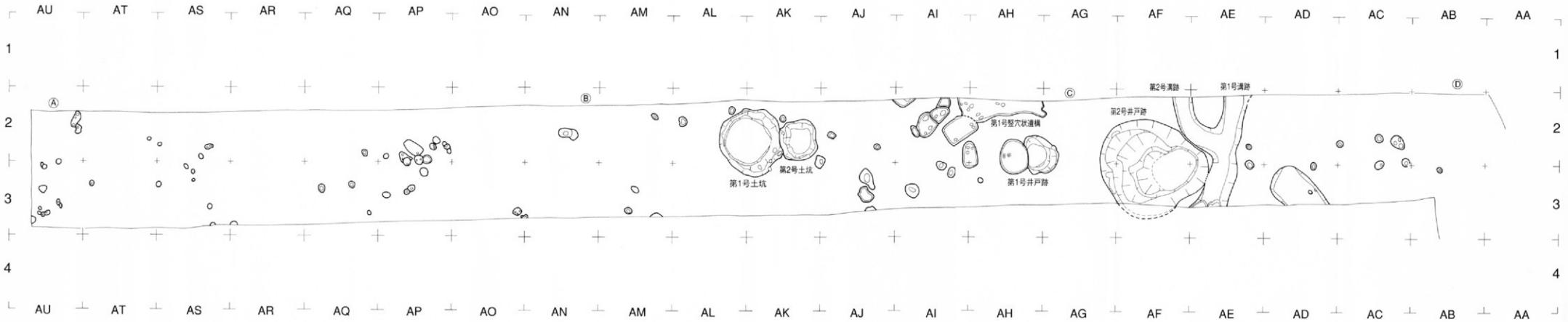
【位置・検出状況】調査区中央北寄り、A G-2・3、AH-2・3グリッド中において検出された。

【重複関係等】南側の一部が土坑によって切られている。

【平面形・規模】1.4m×1.5mの不整形を呈し、深さは確認面から70cmを測る。

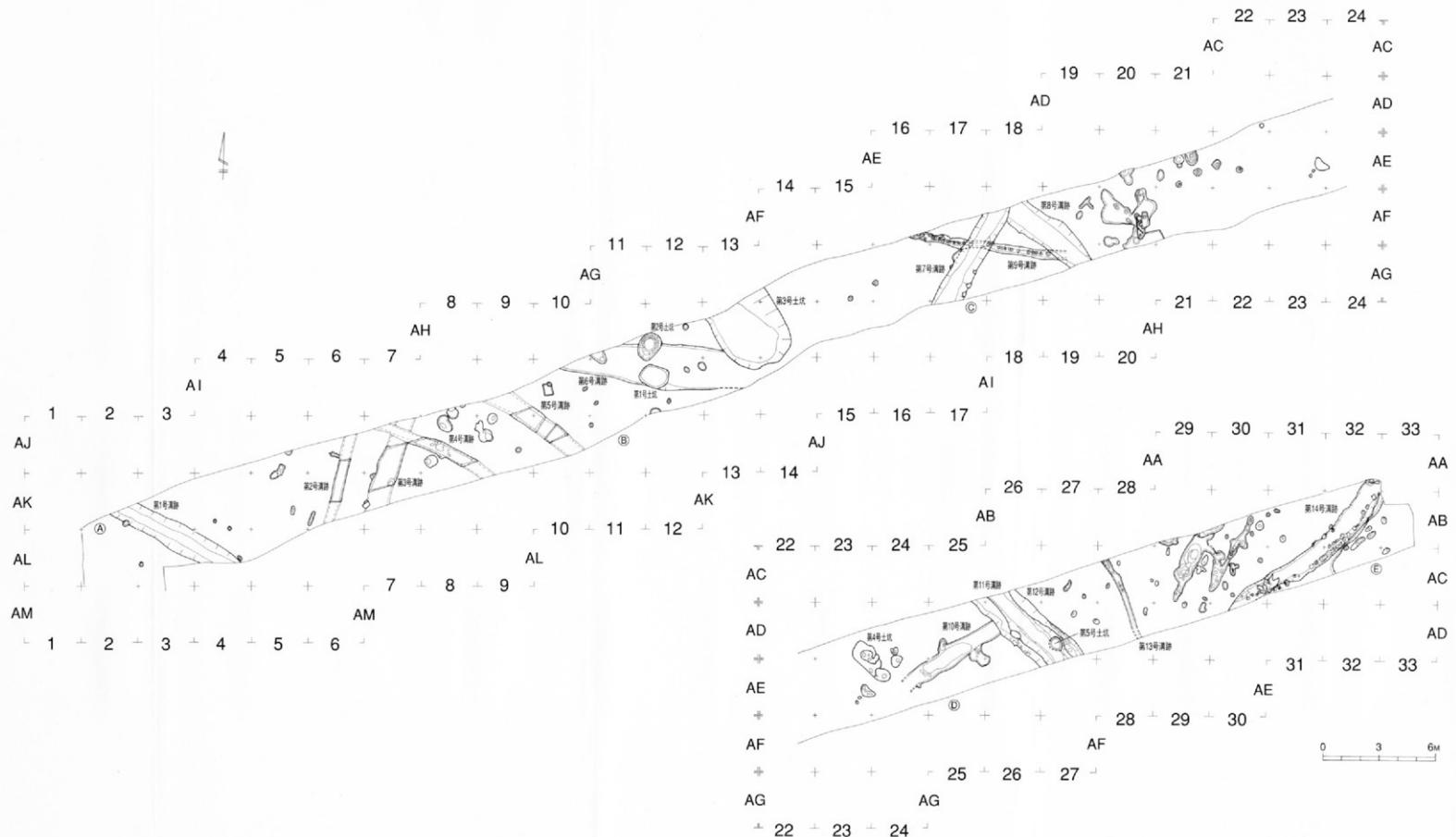
【内部の状況】内部はすり鉢状を呈し、壁は北側に開いて立ち上がる。底面はほぼ平坦である。また、堆積土は、井戸廃絶後、壁面崩壊によって自然堆積したものと考えられ、構造の詳細は不明である。

【出土遺物】覆土中から自然木、並びに加工されたと考えられる木片等が出土した。これらの木片は

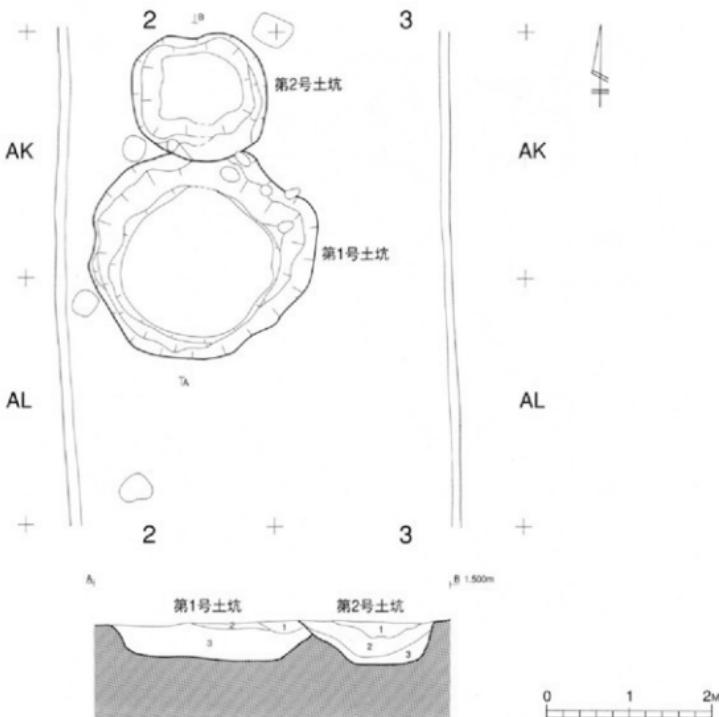


第3図 遺構全体図(B地点)





第4図 遺構全体図(C地点)



層No	土 色	土 性	特 徴
1	IOYR 6／4 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に混入する。
2	IOYR 3／2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に、灰白色火山灰を混入する。
3	IOYR 5／1 閑灰色	砂	酸化鉄を多量に混入する。

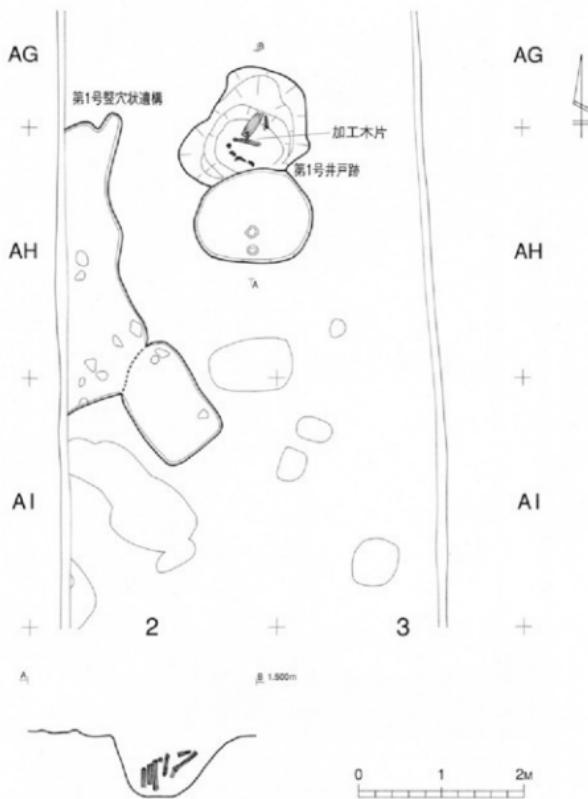
#### 第1号土坑

層No	土 色	土 性	特 徴
1	IOYR 3／1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に混入する。
2	IOYR 3／1 黒褐色	シルト	酸化鉄を多量に、炭化物を若干混入する。
3	IOYR 2／1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を多量に、灰白色火山灰を混入する。

#### 第2号土坑

第5図 第1号・2号土坑

井戸跡底面に列をなして突き刺さっており、恐らく井戸枠として使用されたものであると考えられる。また、製品の一部と考えられる木片も出土しているが、時期決定の根拠となりうるような遺物は出土



第6図 第1号井戸跡

しなかった。

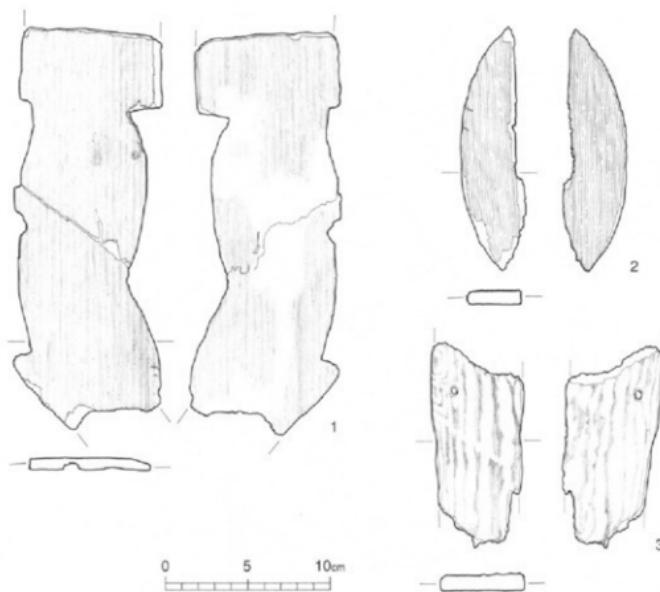
〔出土遺物〕 図示できた木製品は加工木片である。1は上端部側縁が台形状の加工された木片で、木取りは板目である。斎申、もしくは形代ではないかとも考えられる。2は蓋板の一部と考えられ、木取りは板目である。また3は端部に孔を有する加工木片である。

#### 第2号井戸跡（第8図・第10図、第9図版）

〔位置・検出状況〕 調査区北側、A E - 2、3グリッドからAG - 2、3グリッド中において検出され、東側の一部が調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕 第1号・2号溝との重複が若干見られ、第1号溝跡を切っているが、第2号溝跡との新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 東西3.6m、南北4.3mの南北に長い長楕円形を呈する。掘り方を掘り、その中に曲



NO	種別	場所・層位	残存	計測値	樹種	時間・年代	備考	写真図版
1	加工木片	第3号井戸底面		(24.5)×8.5×0.8	スギ			
2	加工木片	第3号井戸底面		(34.7)×(3.7)×0.8	サクラ			42
3	加工木片	第3号井戸底面		(12.4)×(5.7)×0.9	サクラ		孔あり(↓+側)	42

第7図 第1号井戸跡出土遺物

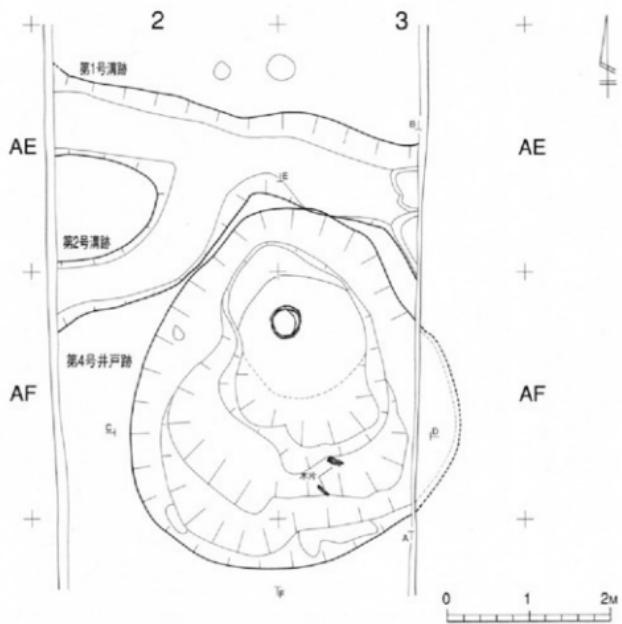
げ物の井戸枠が据えられた井戸跡で、掘り方は2.5m×1.7mの不整形を呈し、深さは1.0mを測る。

〔堆積土〕掘り方埋土は、地山を斑状に混入する黒褐色土であり、井戸枠内は2層に分けられ、下層は暗褐色の砂質シルト、上層は灰白色火山灰を含む黒褐色シルトが堆積していた。井戸跡の覆土には人為的に埋め戻された痕跡はない。また堆積土は、灰白色火山灰をブロック状に多量に混入する自然堆積層である。

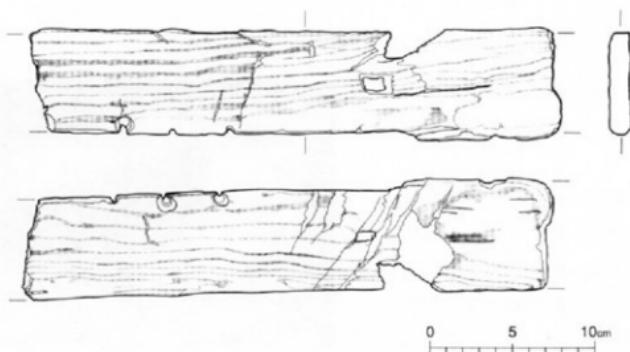
〔内部の状況〕壁は緩やかに外側に開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。井戸枠底面は地山の砂層までおよんでいる。

〔出土遺物〕曲げ物状の井戸枠の他、覆土から加工木片が出土している。



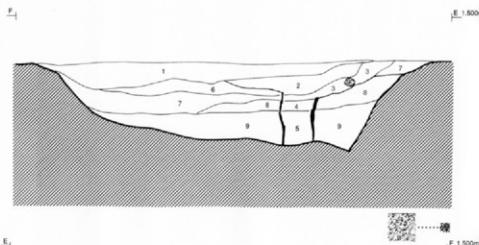
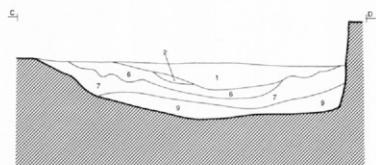
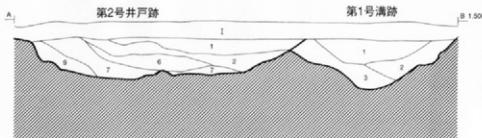


第8図 第4号井戸跡平面図



NO	種類	遺構・層位	残存	計測値	材種	時期・年代	備考	写真図版
1	加工木片	第4号井戸跡面		(32.0) × 16.0 × 1.3	サクラ		横穴六(1ヶ所), 丸(3ヶ所)あり, 大體白に転用か。	42

第9図 第2号井戸跡 出土遺物



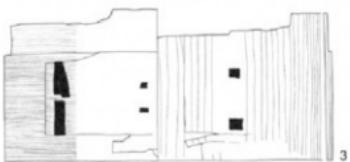
層No	土色	土性	特徴
1	IOYR2／1 黒色	シルト	灰白色火山灰、酸化鉄を斑状に比較的多く、黄褐色を若干混入する。
2	IOYR3／1 黒褐色	シルト	灰白色火山灰、酸化鉄を斑状に比較的多く、黄褐色を若干混入する。
3	IOYRL.7／1 黒色	シルト	灰白色火山灰を多量に、酸化鉄を斑状に若干混入する。
4	SY5／3 灰オリーブ	砂	IOYRL.7／1 (シルト) の礫上層。灰白色火山灰を斑状に若干混入する。
5	SY5／2 灰オリーブ	砂	IOYRL.7／1 (シルト) の礫上層。灰白色火山灰を斑状に若干混入する。
6	IOYR2／2 黒褐色	シルト	灰白色火山灰、酸化鉄を斑状に若干混入する。
7	IOYR2／1 黒色	シルト	灰白色火山灰を多量に、酸化鉄を斑状に若干混入する。
8	IOYR3／1 黒褐色	シルト	灰白色火山灰を多量に、酸化鉄を斑状に若干混入する。
9	IOYR5／3 はいの黄褐色	シルト+砂	IOYRL.7／1 との混土層、酸化鉄を比較的多く混入する。

#### 第2号井戸跡

層No	土色	土性	特徴
1	IOYR2.2／1 黒色	シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
2	IOYR2.2／2 黒褐色	シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
3	IOYR1.7／1 黒色	シルト	酸化鉄を比較的多く、灰白色火山灰を若干混入する。

#### 第1号溝跡

第10図 第2号井戸跡・第1号溝跡土層断面図



0 5 10cm

第2号井戸跡出土 井戸枠

1は、加工木片である。木目は板目であり、外面、内面ともに孔が開けられている。また胸穴も確認され、組物であった可能性が強い。また、表裏に見られる孔は、火鑽臼として転用された可能性を想定しうるものである。

## 2. C地点

### 第1号溝跡（第12図）

【位置・検出状況】調査区西端、AK-2・3、AL-3・4グリッド中において検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。

【重複関係等】北西側の一部がピットに切られるのみで、他に切合い関係は認められなかった。

【断面形・規模】上幅1.2m～1.5m、下幅50cm、断面形は緩やかに外側に開く「U」字形を呈し、深さは確認面から70cmを測る。また方向はN-63°-Wである。

【堆積土】5層あり、いずれも自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

### 第2・3・4号溝跡（第13図）

【位置・検出状況】調査区西側、AJ～AK-6グリッドラインからAK-9グリッドラインにかけて検出され、北側、南側は調査区外におよんでいる。は場整備の工事の関係から、検出部分全てを掘削・調査せず、中央部分の調査のみにとどめた。

【重複関係等】第4号溝跡が第3号溝跡を切っている。

【断面形・規模】第2号溝跡は上幅60cm、下幅50cmを測る。断面形は「U」字形を呈し、深さは確認面から50cmを測る。方向はN-11°-Eである。第3号溝は上幅1.2m、下幅1.0m、壁は緩やかに外側に向かって立ち上がる。方向はN-18°-Eである。第4号溝は上幅70cm、下幅50cm、断面形はやや外側に開く「U」字形を呈し、方向はN-65°-Wである。

【堆積土】第2号溝跡・第3号溝跡とも3層で構成され、自然堆積である。第4号溝跡は6層確認でき、自然堆積であり、灰白色火山灰を確認した。

【出土遺物】出土していない。

### 第5号溝跡（第14図）

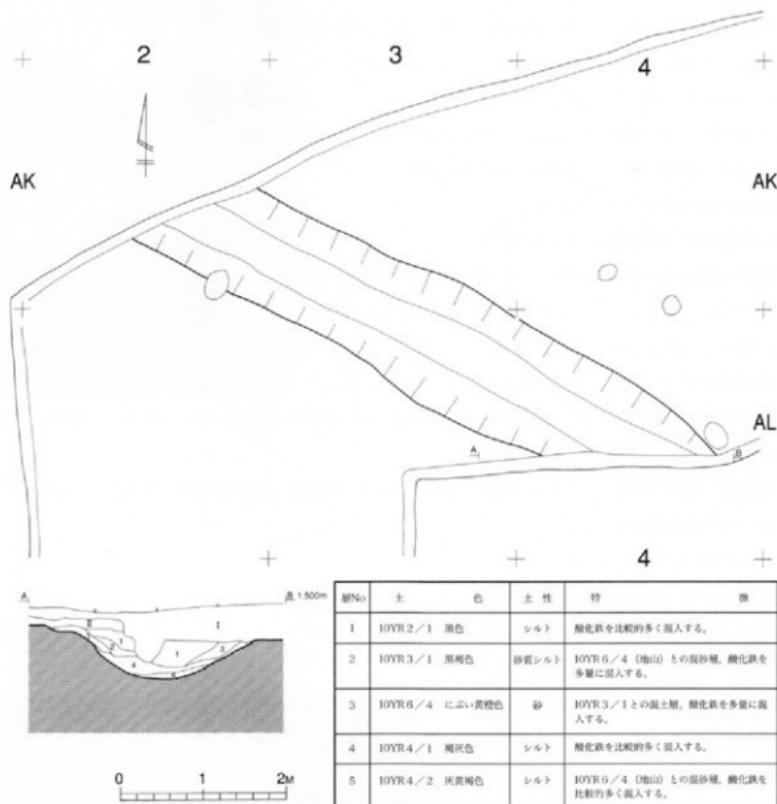
【位置・検出状況】調査区西側、AI-9グリッドからAJ-10グリッドにかけて検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。

【重複関係等】認められなかった。

【断面形・規模】上幅1.0m、下幅90cm、壁は緩やかに外側に向かって立ち上がり、深さは確認面から70cmを測る。方向はN-50°-Wである。

【堆積土】7層あり、第4層、第5層中に灰白色火山灰を含む。特に第5層中の灰白色火山灰はレンズ状に堆積し、水性堆積の様相を呈していた。全体的な層の堆積状況は自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】出土していない。



第12図 第1号溝跡

#### 第1号土坑（第15図、第10図版）

〔位置・検出状況〕調査区中央南西寄り、A I - II・12グリッド中において検出された。

〔重複関係等〕第6号溝跡を切っている。

〔平面形・規模〕1.5m×1.2mの楕円形を呈し、深さは10cm程度しかない。底部は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

〔堆積土等〕1層確認し、黒色のシルトで構成され、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

#### 第2号土坑（第15図、第10図版）

〔位置・検出状況〕AH-I1・12グリッド中において、第1号土坑の北側30cmの地点に検出された。

〔重複関係等〕第6号溝跡を切っている。

〔平面形・規模〕1.5m×1.1mの楕円形を呈し、深さは50cmを測る。断面は、緩やかに外側に向く「U」字形を呈し、壁面に内側にハンギングした部分が認められた。

〔堆積土等〕7層の堆積土を確認し、灰白色火山灰の混入が認められた。堆積状況は自然堆積であると考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

#### 第6号溝跡（第15図、第10図版）

〔位置・検出状況〕調査区西側、AH・AI-10グリッドからAI-13グリッドにかけて検出され、北西側および南東側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕第1号・2号・3号土坑によって切られる。

〔断面形・規模〕上幅2.0m～2.5m、下幅1.8m～2.0m、深さは確認面から1.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。方向はN-85°-Wである。

〔堆積土〕堆積土は酸化鉄を多く含む黒褐色のシルトで、灰白色火山灰を粒状に混入する。全体的には自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕出土していない。

#### 第3号土坑（第15図、第10図版）

〔位置・検出状況〕調査区中央南西寄り、AG-13・14、AH・AI-13・14グリッド中において検出され、北側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕第6号溝跡を切っている。

〔平面形・規模〕東西3.6m、南北の確認した部分で(3.9m)の長楕円形を呈すると考えられ、深さは確認面から1.2mを測る大型の土坑で、断面形はすり鉢状を呈する。

〔堆積土〕10層の堆積層を確認した。堆積土は酸化鉄を多く含む黒褐色のシルトで、灰白色火山灰を粒状に混入する。全体的には自然堆積の様相を呈する。

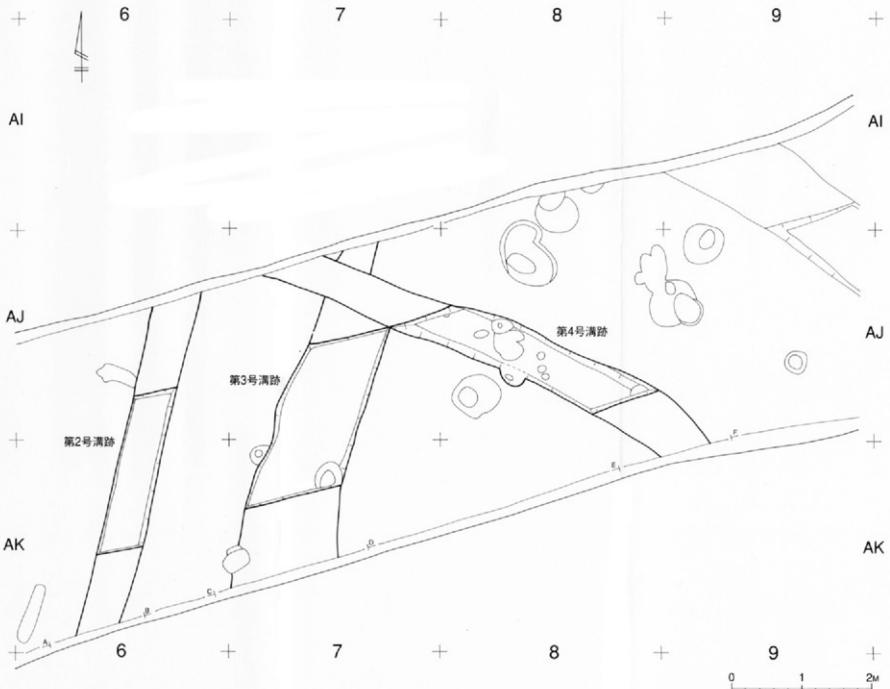
〔出土遺物〕出土していない。

#### 第7号溝跡（第16図、第10図版）

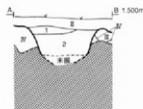
〔位置・検出状況〕調査区中央、AG-17からAF-18グリッドにかけて検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕第8号・第9号溝を切っている。



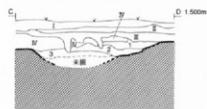


第13図 第2号溝跡・第3号溝跡・第4号溝跡



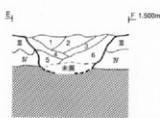
層No	土色	土性	特徴
1	IORY3／2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
2	IORY3／1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。

第2号溝跡



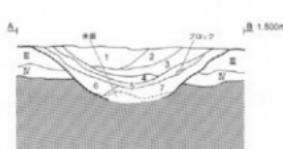
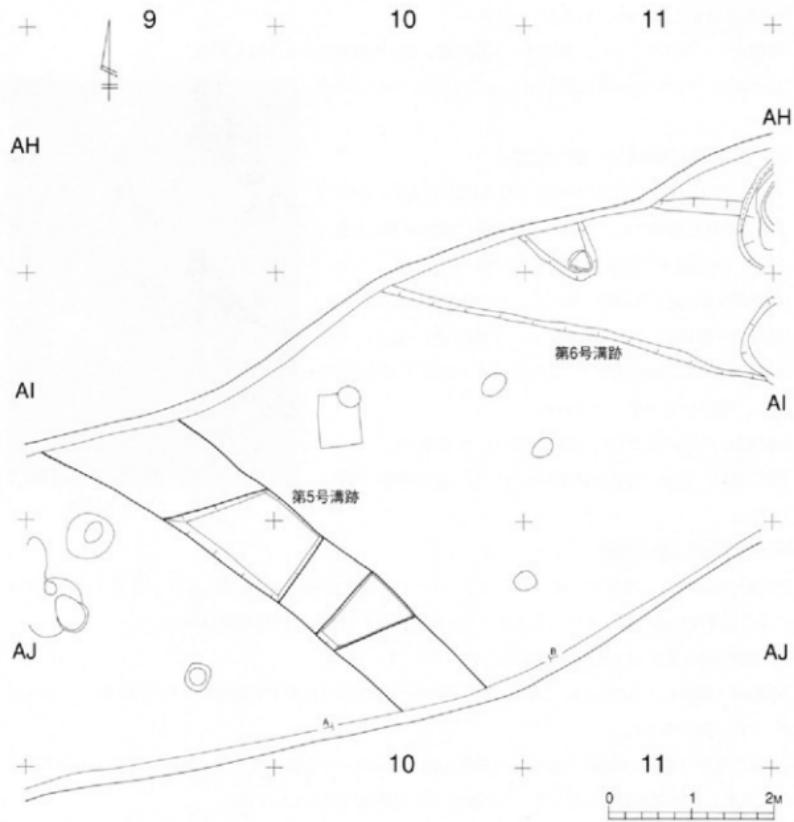
層No	土色	土性	特徴
1	IORY3／1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
2	IORY4／2 灰褐色	シルト質砂	酸化鉄を比較的多く混入する。
3	IORY6／4 に近い黄褐色	砂	IORY4／2との層土層。酸化鉄を比較的多く混入する。

第3号溝跡



層No	土色	土性	特徴
1	IORY1.7／1 黒色	シルト	炭化物を若干混入する。
2	IORY2／2 黒褐色	シルト	炭化物を若干混入する。
3	IORY2／1 黒色	シルト	灰白色大山田を若干混入する。
4	IORY3／1 黑褐色	シルト	灰白色大山田を若干混入する。
5	IORY2／2 黑褐色	砂質シルト	IORY4／6 (砂)との混紛。
6	IORY2／2 黑褐色	砂質シルト	IORY4／6 (砂)との混紛。

第4号溝跡



層No	土 色	土 性	特 徴
1	IYR 1.7 / I 黒色	シルト	炭化物を若干混入する。
2	IYR 2 / I 黒色	シルト	炭化物を若干混入する。
3	IYR 1.7 / I 黒色	シルト	炭化物を若干混入する。
4	IYR 2 / I 黒色	シルト	灰白色火山灰を粒状に若干混入する。
5	IYR 5 / I 暗褐色	シルト	灰白色火山灰、酸化鉄を多量に混入する。
6	IYR 3 / I 黑褐色	シルト	IYR 6 / 6 (シルト) を斑状に混入する。
7	IYR 2 / I 黒色	シルト	IYR 6 / 2 (砂) を斑状に混入する。

第14図 第5号溝跡

〔断面形・規模〕上幅1.2m～1.3m、下幅50cm～80cm、深さは確認面から60cmを測り、断面形は逆台形を呈する。方向はN-25°-Eである。

〔堆積土〕6層に分けられ、第2層から第6層までに灰白色火山灰を混入する。

〔出土遺物〕底面から須恵器片が出土しているが、時期は不明である。

#### 第8号溝跡（第16図、第10図版）

〔位置・検出状況〕調査区中央、AG-19からAF-18グリッドにかけて検出され、北側および南側は調査区外におよんでおり、南側で第7号溝跡と切り合っている。

〔重複関係等〕第7号溝跡に切られ、第9号溝跡を切っている。

〔断面形・規模〕上幅1.3m～1.7m、下幅80cm～1.1m、深さは確認面から20cmを測り、比較的浅い。断面形は逆台形を呈し、方向はN-55°-Wである。

〔堆積土〕4層に分けられ、黒褐色シルトを基調としている。

〔出土遺物〕底面から須恵器片が出土しているが時期は判然としない。



第7・8・9号溝跡

#### 第9号溝跡（第16図）

〔位置・検出状況〕調査区中央、AG-19グリッドで第8号溝跡に切られ、AF-17グリッドでさらに第7号溝跡に切られ、AF-16グリッドで調査区外におよぶ布堀状の溝である。

〔重複関係等〕第7号・第8号溝跡によって切られている。

〔断面形・規模〕上幅40cm、下幅10cm～30cm、深さは確認面から底面まで25cmを測り、方向はN-85°-Wである。

〔構造〕第9号溝跡は幅40cm程度の布堀状の掘り方に丸太材を並べたものと考えられる。間隔は不規則であり、材は抜き取られてしまっている。上部の構造は判然としない。

〔出土遺物〕出土していない。

#### 第5号土坑（第17図）

〔位置・検出状況〕調査区東側、AD-27グリッドで検出された。

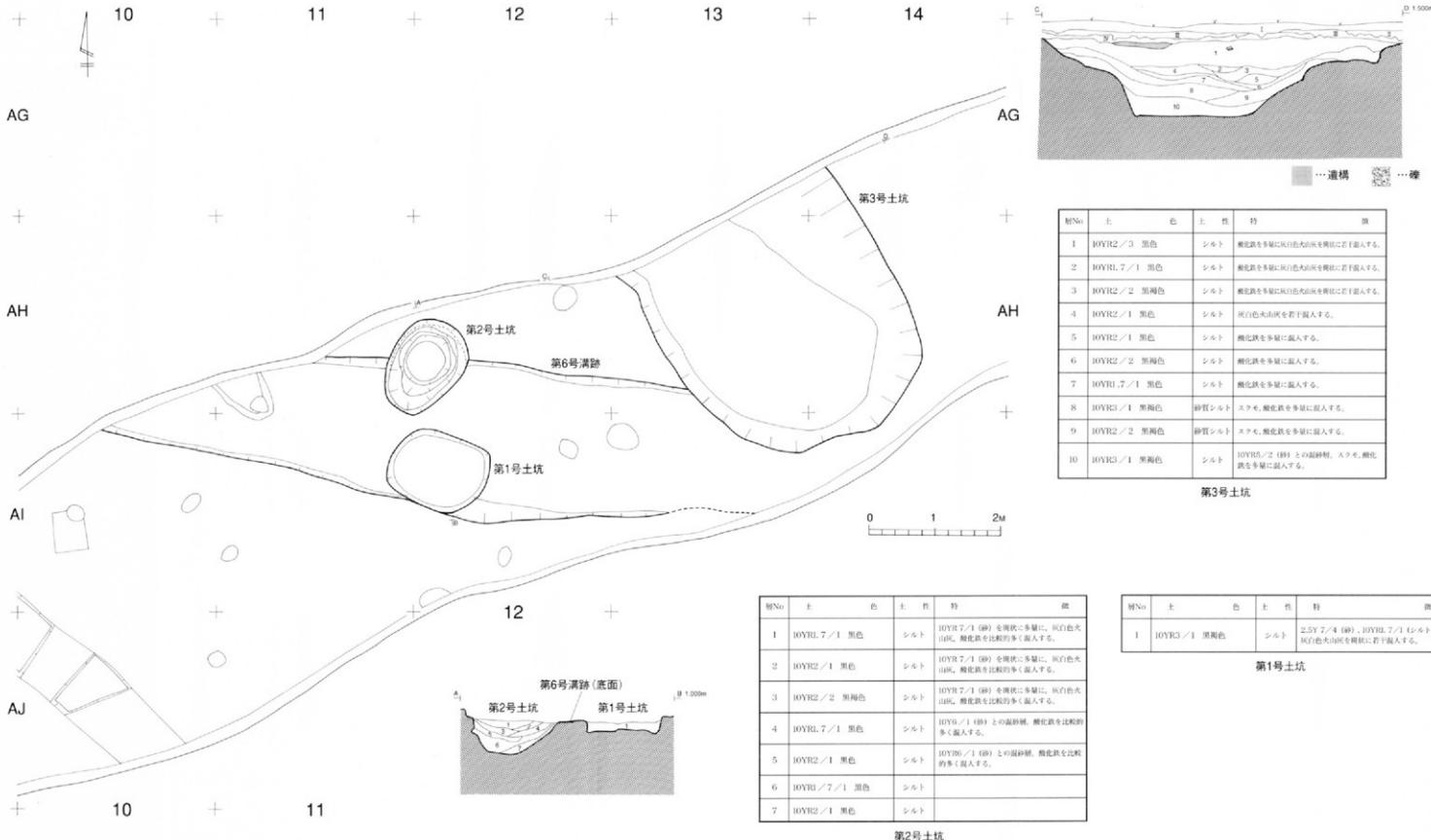
〔重複関係等〕第11号溝跡を切っている。

〔平面形・規模〕直径70cm×70cmの梢円形を呈し、深さは10cm程度しかない。底部は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

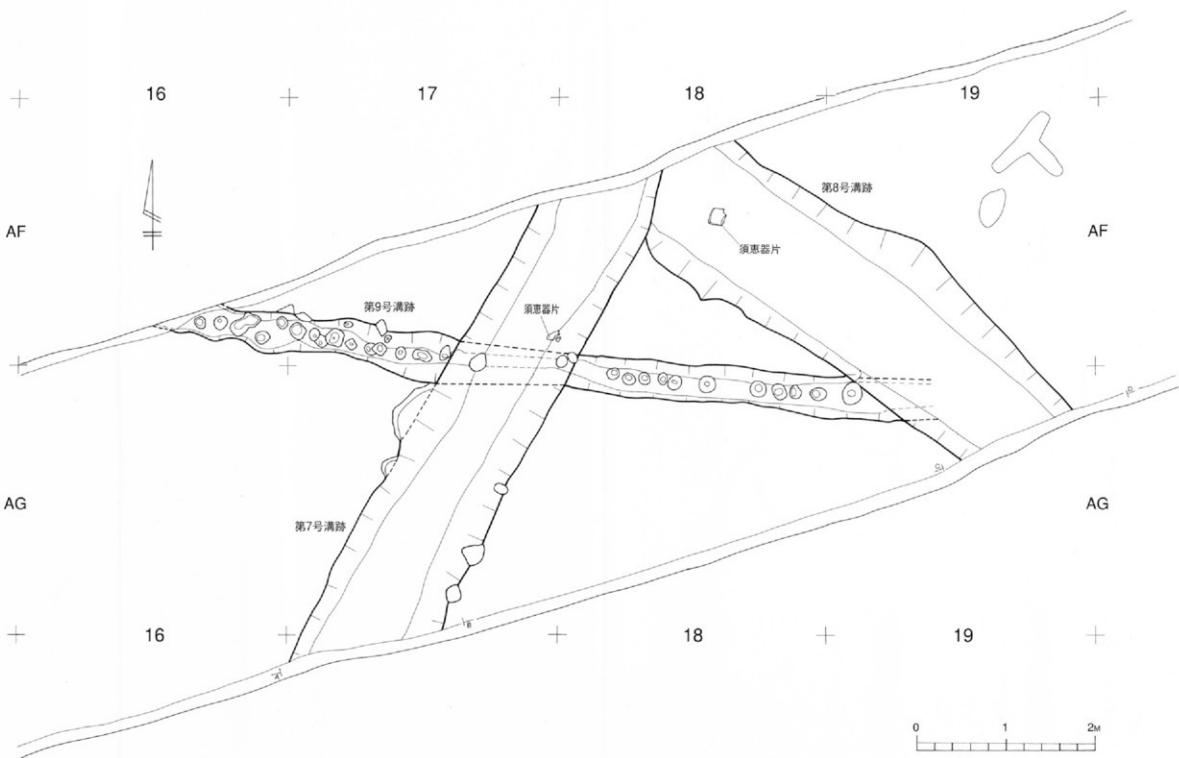
〔出土遺物〕出土していない。

#### 第10号溝跡（第17図）

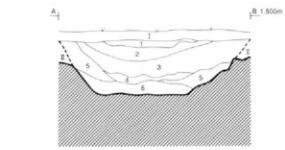
〔位置・検出状況〕調査区東側、AE-24グリッドからAD-26グリッドにかけて検出され、西端は削平され、東端は第12号溝跡によって切られている。



第15図 第1号土坑・第2号土坑・第3号土坑・第6号溝跡

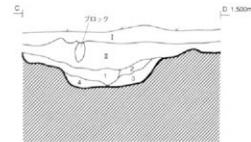


第16図 第7号溝跡・8号溝跡・9号溝跡



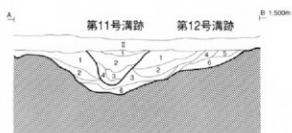
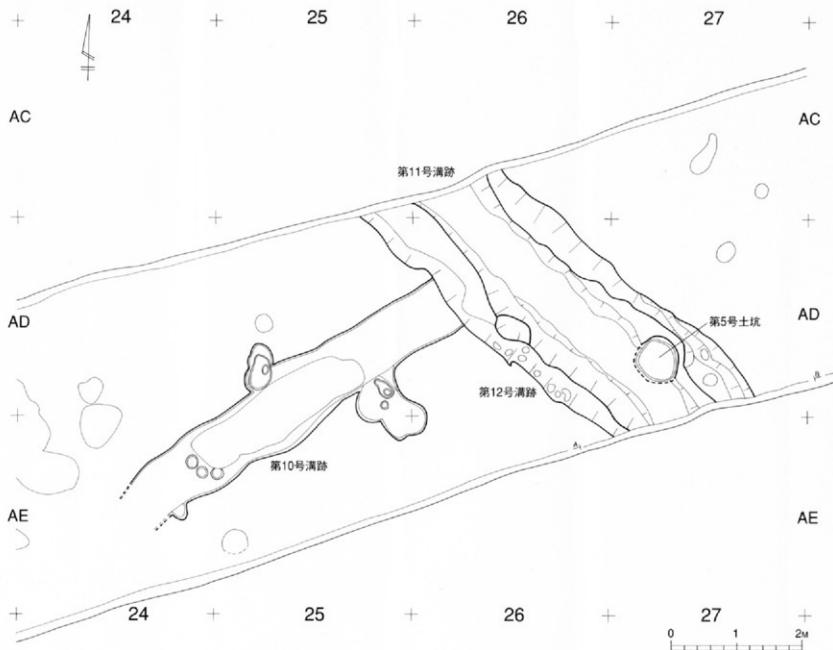
層No	土 色	土 性	特 殊	鉄
1	I0YR4／2 灰黃褐色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。	
2	I0YR3／1 黑褐色	シルト	灰白色木炭、スクモをラミナ状に多量に混入する。	
3	I0YR2／1 黒色	シルト	灰白色木炭、スクモをラミナ状に多量に混入する。	
4	I0YR3／1 黑褐色	シルト	灰白色木炭、スクモをラミナ状に多量に混入する。	
5	I0YR2／1 黒色	砂質シルト	I0YR6-4 (6) を後方に、酸化鉄を比較的多く混入する。	
6	I0YR1-7／1 黒色	シルト	灰白色木炭、スクモを1.1倍に混入する。	

第7号溝跡



層No	土 色	土 性	特 殊	鉄
1	I0YR3／2 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。	
2	I0YR4／3 にごい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。	
3	I0YR3／1 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。	
4	I0YR2／1 黒色	砂質シルト	I0YR6-4 (6) の反砂層、酸化鉄を比較的多く混入する。	

第8号溝跡



層No	土色	土性	特徴
1	IOYRl.7 / 1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。
2	IOYR2 / 1 黒色	シルト	灰白色火山灰を厚く(1ミリ以上)混入する。
3	IOYR3 / 1 灰褐色	シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
4	IOYRl.7 / 1 黒色	シルト	酸化鉄を比較的多く、灰白色火山灰を粒状に若干混入する。

第11号溝跡

層No	土色	土性	特徴
1	IOYR 3 / 2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
2	IOYR 3 / 1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
3	IOYR 2 / 2 黒褐色	砂質シルト	灰白色火山灰を粒状に若干、酸化鉄を比較的多く混入する。
4	IOYR 2 / 3 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
5	IOYR 2 / 2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
6	IOYR 3 / 3 褐褐色	砂質シルト	IOYR 6 / 6 (6cm) の風砂層、灰白色火山灰と共に、酸化鉄を比較的多く混入する。

第12号溝跡

第17図 第5号土坑・第10号溝跡・11号溝跡・12号溝跡

〔重複関係等〕第12号溝跡や複数のピットによって切られている。

〔断面形・規模〕上幅1.0mを測り、深さは10cmに満たない。方向はN-60°-Eである。

〔出土遺物〕出土していない。

#### 第11・12号溝跡（第17図）

〔位置・検出状況〕調査区東側、AD-25・26グリッドからAD・AE-27グリッドにかけて検出され、両溝跡とも北側・南側が調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕第11号溝跡は、第5号土坑によって切られる。また、第11号溝跡が第12号溝跡に重なった状況を呈し、第11号溝跡が第12号溝跡を切っている。方向は両溝跡ともN-47°-Wである。

〔断面形・規模〕第11号溝跡は上幅90cm～1.5m、下幅60cmを測り、断面はすり鉢状を呈する。底面は平坦で壁の各所にテラスが見られる。第12号溝跡は上幅2.0mを測り、壁は



第5土坑・第11・12号溝跡

大きく開いて立ち上がり、底面はおおむね平坦であると考えられる。

〔堆積土〕第11号溝跡・第12号溝跡とも黒褐色土を基調とし、自然堆積の様相を呈する。両溝跡とも覆土中に灰白色火山灰を混入するが、特に第11号溝跡中からは多量の灰白色火山灰が確認された。

〔出土遺物〕第12号溝跡覆土中から、土師器片が出土しているが、時期は判然としない。

#### 第14号溝跡（第18図、第11図版）

〔位置・検出状況〕調査区東端、AB-32グリッドからAC-30グリッドにかけて検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕若干、小ピットによって切り合い関係があるのみで、ほとんど確認されなかった。

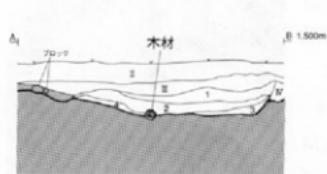
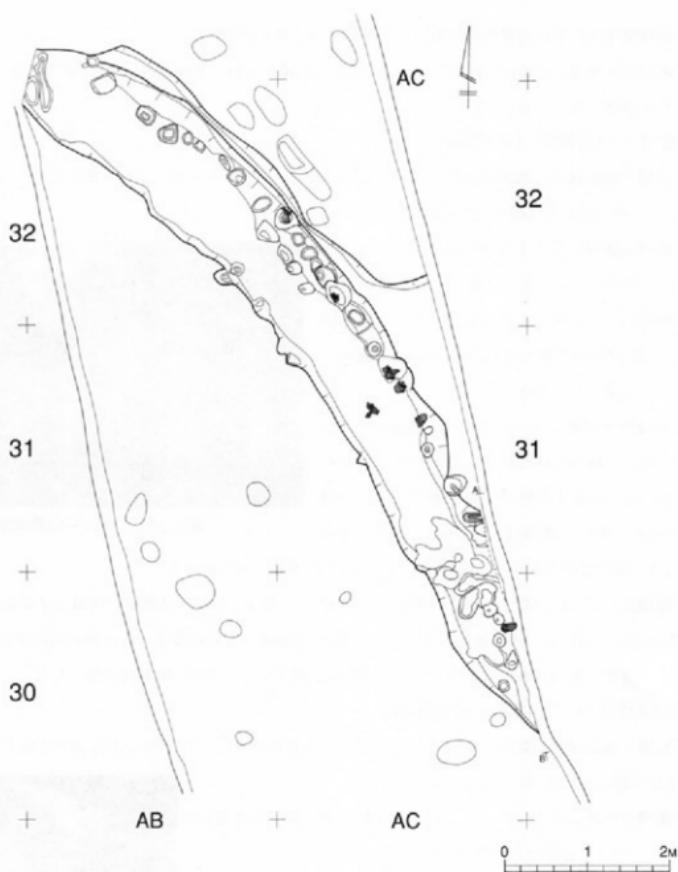
〔断面形・規模〕上幅1.4m～2.0m以上、下幅は70cm～1.1m以上を測り、深さは確認面から20cmを測る。方向はN-50°-Eである

〔堆積土〕4層に分けられる。黒色を基調とし、自然堆積である。

〔構造〕底部東側側縁部に材木列を確認し、部分的に木材も出土している。確認し得た掘り方の深さは、5～10cmと極めて浅かったため、本来布堀り状を呈していたのかどうかは判然としない。しかし、材木列は、溝跡の側縁に沿ってほぼ隙間無く



並べられており、その直径は15～40cmを測る。また材木列は、緩やかに屈曲している溝跡の北壁に沿う状態で検出されたため、これに伴うものであると考えられ、柵等の施設ではないかと考えられる。



層No	土 色	土 性	特 標
1	I0YR 3 / 1 黒褐色	シルト	鉱化鉄を比較的多く混入する。
2	I0YR 2 / 1 黒色	シルト	鉱化鉄を比較的多く混入する。
3	I0YR 6 / 3 (シルト質砂)	シルト	I0YR 6 / 3 (シルト質砂) を斑状に若干、鉱化鉄を比較的多く混入する。
4	I0YR 2 / 1 黒色	シルト	I0YR 7 / 3 (砂)との混砂層。鉱化鉄を比較的多く混入する。

第18図 第14号溝跡

(出土遺物) 木材が部分的に残存している以外には、時期決定の要因となる遺物は出土していない。

## 第4部 D地点



# 目 次

I. 調査の経過.....	89
II. 基本層序.....	89
III. 発見された遺構と遺物.....	90
■ 第1号井戸跡.....	90
□ 第1号土坑.....	97
■ 竪穴状遺構.....	97
□ 第4号溝跡.....	99
■ 第5号溝跡.....	99
■ 第10号溝跡 .....	105
■ 第11号溝跡・■ 第12号溝跡 .....	105
■ 第13号溝跡・■ 第14号溝跡 .....	105
■ 第15号溝跡・■ 第16号溝跡 .....	108
■ 土器集中地点 .....	108
■ 第2号土坑 .....	115
■ 柱跡群 .....	115
□ 第3号土坑・□ 第4号土坑・□ 第5号土坑 .....	118
■ 第17号溝跡 .....	118
□ 第18号溝跡 .....	118
□ 第8号土坑 .....	120
■ 第19号溝跡 .....	123
■ 柱跡群 .....	124
遺構外出土遺物 .....	124

■ …縄文時代のものと考えられる遺構	■ …古墳時代（前期）のものと考えられる遺構
■ …奈良・平安時代のものと考えられる遺構	■ …中世以降のものと考えられる遺構
□ …時期不明の遺構	

## I. 調査の経過

D地点は、C地点の北東端部から始まる東西に延びる部分である。この地点の調査は、は場整備による水路の掘削によって破壊されてしまう部分について、幅5mのトレンチを掘削して実施した。調査区は、農道によって分断されてしまう所から西を西側トレンチ、東を東側トレンチとして便宜的に区分した（第2部 第14図）。総掘削面積は、830m<sup>2</sup>である。

D地点の発掘調査は、平成9年4月24日から実施し、重機による表土掘削の後、遺構の検出、平面図の作成、写真撮影等を実施し、7月15日に終了した。

調査の結果、竪穴状遺構1基、井戸跡1基、土坑8基、溝20条などとともに、多数のピットを検出し、古墳時代前期、奈良・平安時代、中世と考えられる土器片や木製品等が出土した。

## II. 基本層序

D地点の層序は、I～V層に分けられ、地形的には西側トレンチ西端部から東に向かって下降し、東端部付近でピークを迎え、東トレンチで再度下降し、また上昇するといった地形の下降・上昇の繰り返しが見られ、高まった部分には、竪穴状遺構や井戸跡、ピットなどが見られ、低い部分からは溝跡等が検出されている。D地点は遺跡を東西に横切る地点であり、以上の事実は、最も標高が高い西側トレンチ西部から地形が単純に下降して低湿地におよぶのではなく、東側トレンチの東端に至るまでに何回かの居住可能域が存在することを示唆するものである。

D地点の基本土層は、I～VI層に分けられる。

第I層：表土であり、全体的にしまりは弱い。A～I地点からこの地点域にかけて、ほぼ普遍的に見られる耕作土であり、黒褐色を呈する。

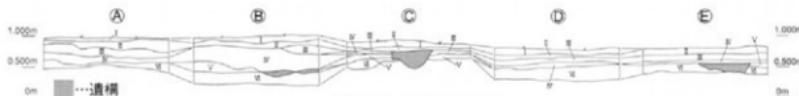
第II層：水田の最下面の層であり、しまりがある。灰色を呈し、酸化鉄を多量に混入する。

第III層：黒色のシルトであり、粘性が強く、酸化鉄を多量に混入する。

第IV層：黒色のシルトであり、遺構・遺物包含層である。地点によっては、黒色を呈し灰白色火山灰粒子を混入しており、時期的には、平安時代以降の堆積土であると考えられる。

第V層：灰黒褐色を呈し、古墳時代のものと考えられる層である。

第VI層：地山漸移層であり、灰色を呈する。地山ブロック（黄褐色）を多量に混入しており、氾濫による影響を受けていると考えられる。



第1図 層序模式図

また、地山は、暗灰褐色の砂質シルトであり、酸化鉄を多量に混入する。

### III. 発見された遺構と遺物

#### 第1号井戸跡（第4図～第7図、第12・27・45図版）

〔位置・検出状況〕西側トレント調査区北西隅付近、B U-7 グリッド中において検出され、北側は調査区の北壁におよんでいる。

〔重複関係等〕重複は認められなかった。

〔平面形・規模〕1.8m×1.8mの隅丸方形に近い梢円形を呈し、深さは確認面から1.1mを測る。

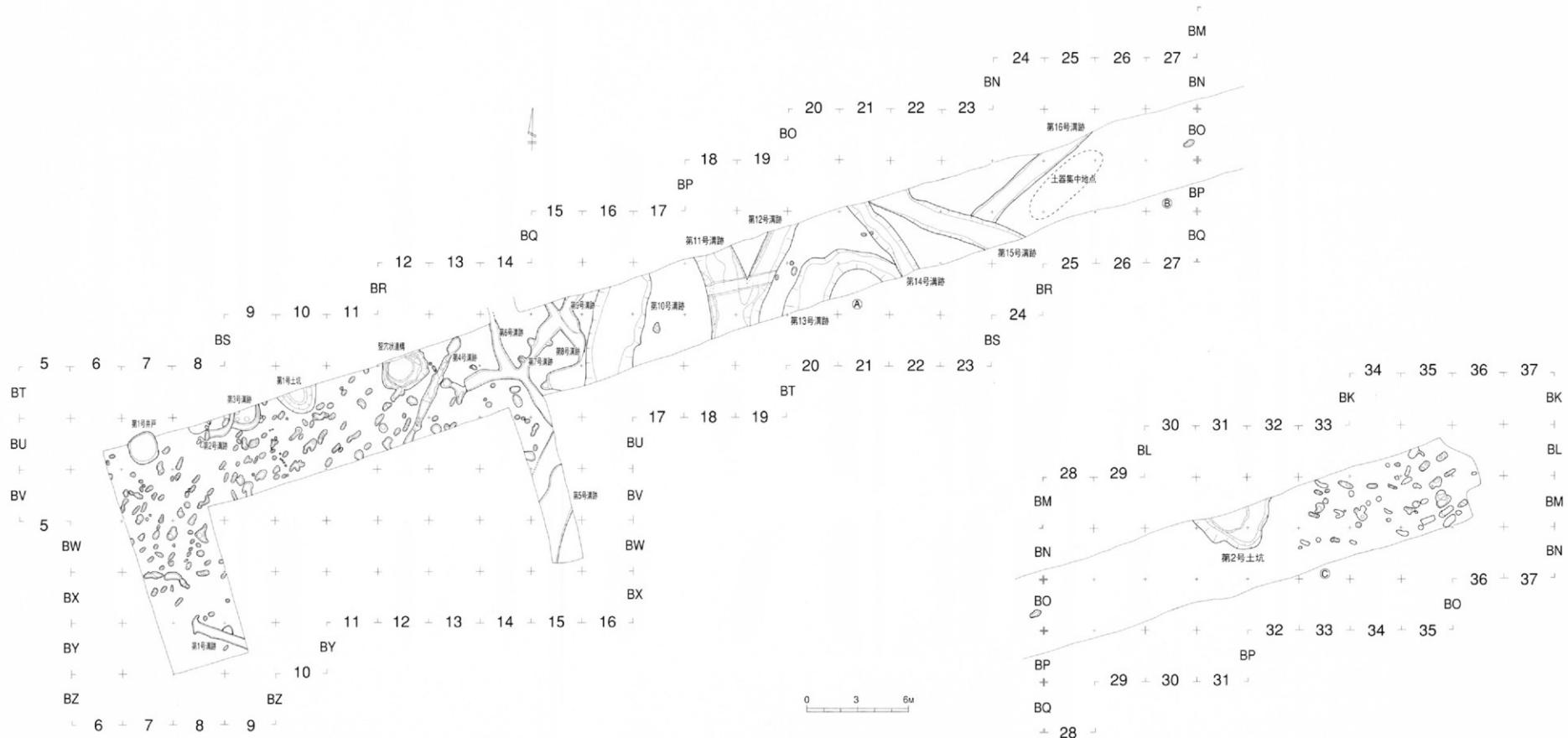
〔堆積土〕掘り方埋土は黒色、暗灰黄色等の砂

質シルトである。井戸枠内堆積土も黒色または灰黄色等の砂質シルトであり、自然堆積土であると考えられる。

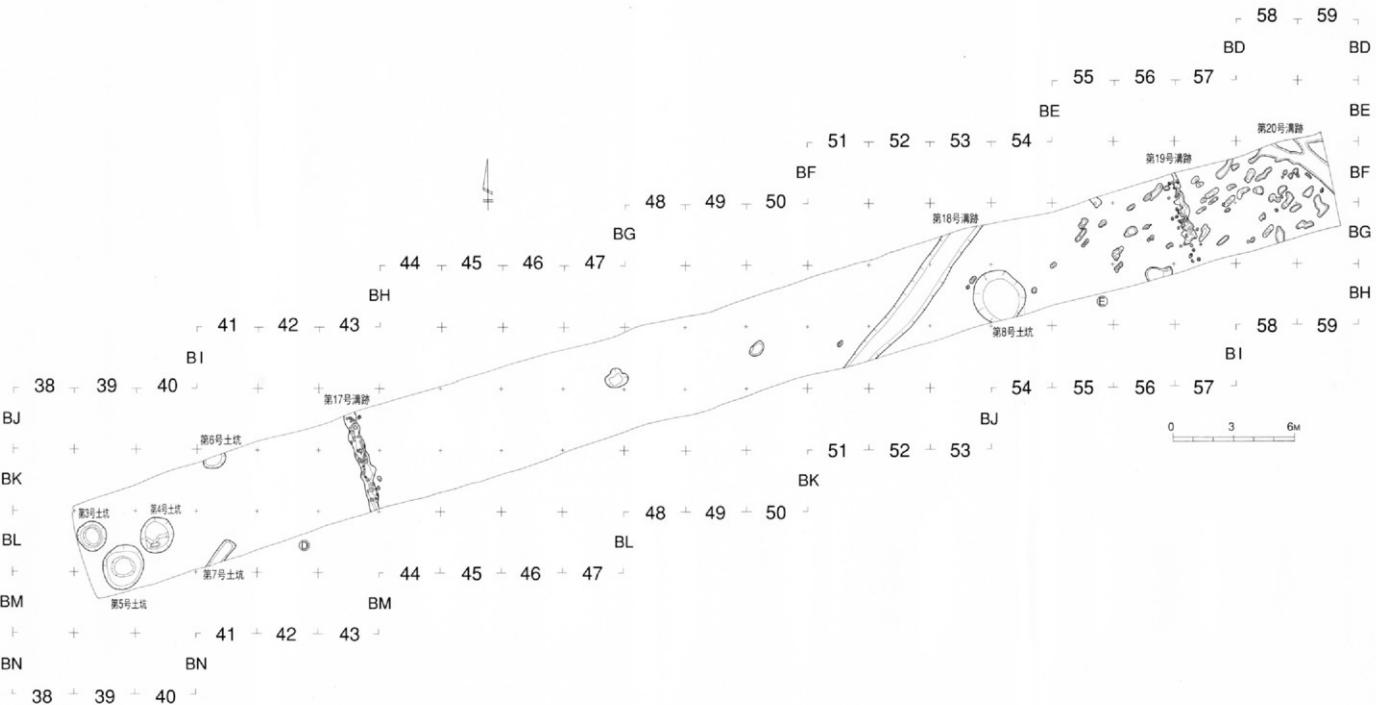
〔内部の状況〕壁はほぼ垂直、ないしはやや外側に開く形で立ち上がり、底面は平坦である。内部の北寄りには、くり抜きの井戸枠が据えられていた。井戸枠の底面は、地山の砂層まで達しており、その大きさは53cm×60cmの梢円形を呈し、高さは30cmを測る。この井戸枠は、中央部に据えられておらず、北側の壁に近い部分に配されていた。遺物は全て井戸枠の内部からのみからしか発見されておらず、当井戸跡に伴うものであると考えられる。井戸枠内での遺物の出土状況は、枠内の上面から底面まではばまんべんなく出土しており、井戸が使用されている段階で内部に入り込んだものであると考えられる。

〔出土遺物〕底部付近から土器が複数出土している。以下に図示し得たものについて説明を加える。1は壺の口縁部でありハケ調整の後ミガキが施され、口唇部にはさらにもコナデが施されている。2は壺の体～底部である。外面にはミガキが、内面にはヘラナデが施されている。3はやや大型の壺であり、底部を欠く。口縁部は短く、やや内湾気味に立ち上がる。外面には深いハケメが全面に施され、胴下部には輪積痕を残す。内面は口縁部がハケ調整、胴部はヘラナデがそれぞれ施されている。特に2、3は体（胴）部～底部にかけて、スヌが多量に付着しており、このようなことから、日常生活に使用されていたと推測される。これらの土器は、みな古墳時代前期の塩釜式に位置づけられると思われ、第1号井戸跡からは、以上の他にも土器片が出土しているが、いずれも小片であり、器形を推測し得るものはなかった。また、井戸跡の覆土（第1層）から玉状の土錘が1点出土しているが、恐らく井戸跡の廃絶後流れ込んだものと考えられる。4（第7図）は井戸枠であり、材質はクリである。平面形は梢円形を呈し、大きさは外径が53cm×60cm、内径は31cm×39cmあり、厚さは最も厚い部分で8.4cm、薄い部分で2.5cmを測る。最も厚い部分は枠の底面にあり、薄い部分は上部にある。

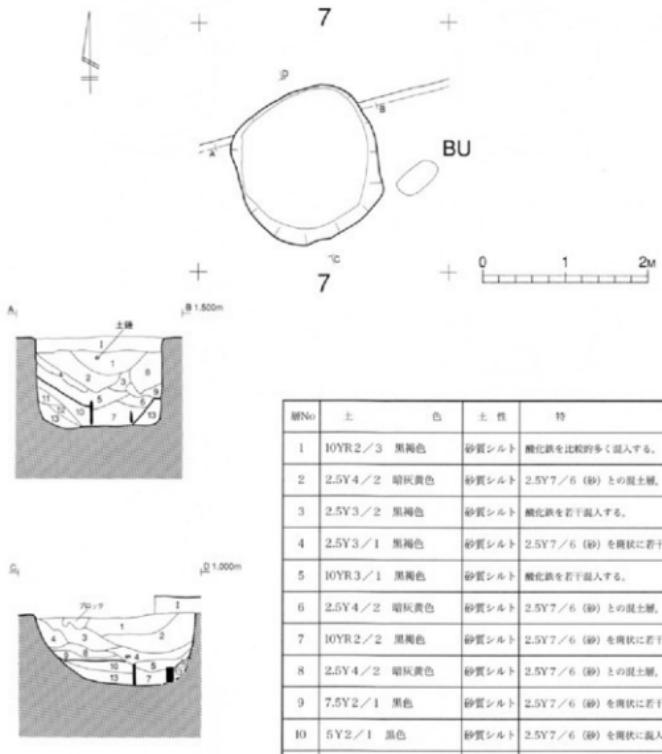




第2図 遺構全体図(D地点西側)



第3図 遺構全体図(D地点東側)

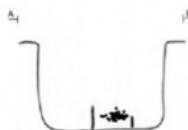


第4図 第1号井戸跡平面断面図

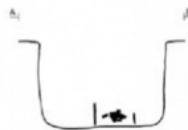
井戸枠の底部はおおむね平坦である。また切り離されたと考えられる部分が認められた。枠の内部はくり抜かれているが、内部の工具痕跡は判然としない。また外面には表皮が残存している部分が認められた。



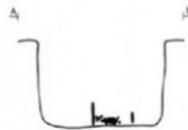
遺物分布状況①



遺物分布状況②

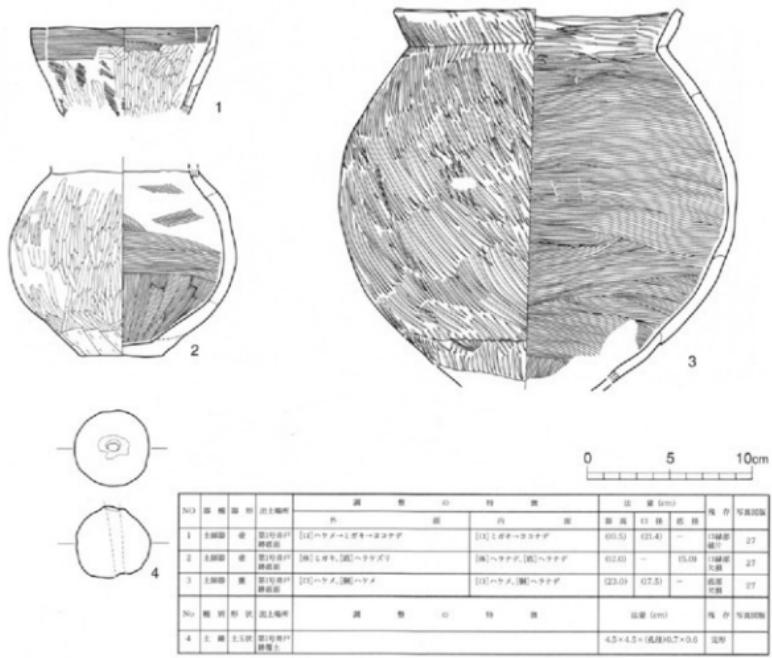


遺物分布状況③



遺物分布状況④

第5図 第1号井戸跡遺物分布図



第6図 第1号井戸跡出土遺物

### 第1号土坑（第8図）

〔位置・検出状況〕 調査区西側、BT-10グリッド中において検出され、北側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 北側が調査区外におよんでいるため、全体は判然としないが、東西2.5mの楕円形を呈すると考えられ、深さは確認面から90cmを測る。

〔内部の状況〕 壁は緩やかに外側に開いて立ち上がり、底面は平坦に近い。

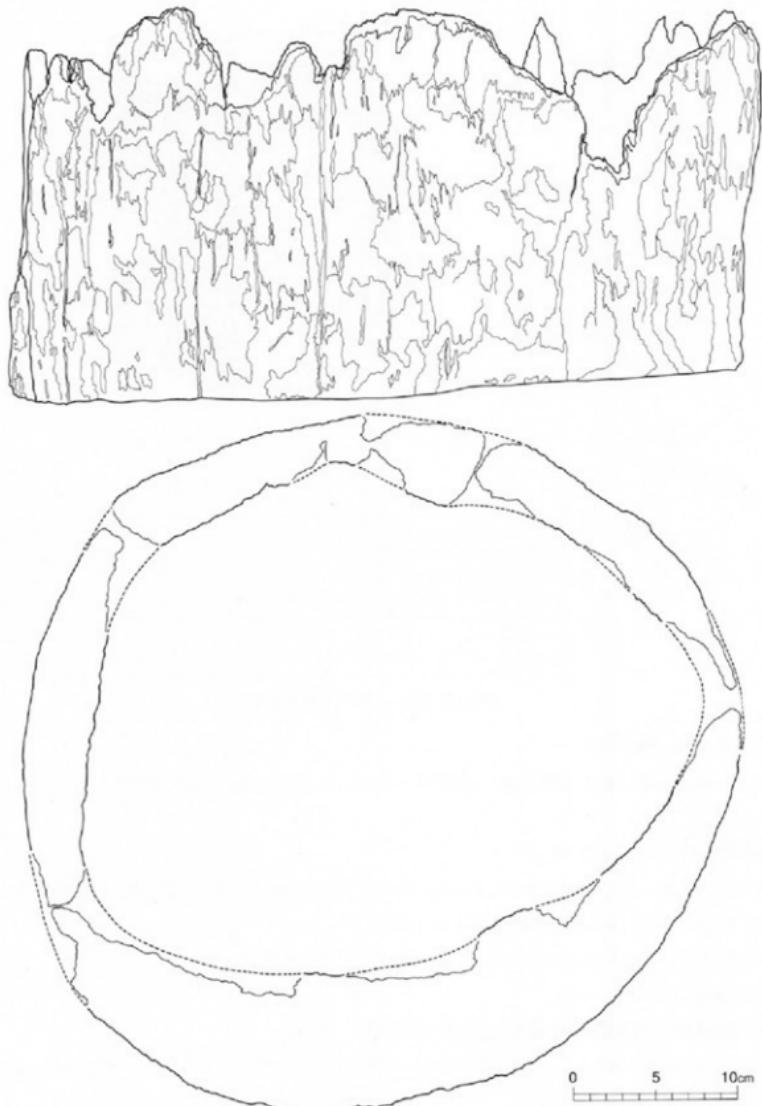
〔出土遺物〕 出土していない。

### 竪穴状遺構（第9図～第10図、第13・28図版）

〔位置・検出状況〕 西側トレンチ調査区の西側、BSからBT-12グリッドにおいて検出され、遺構の北側は調査区外におよんでいる。

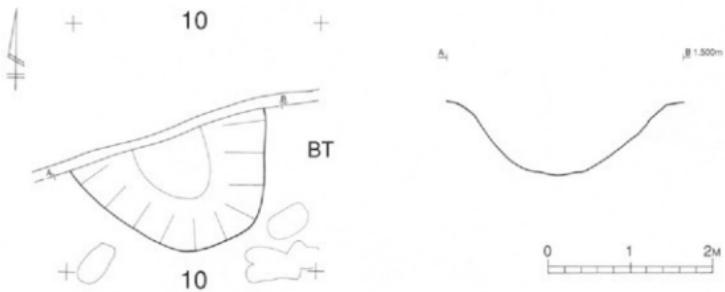
〔重複関係等〕 南側の一部をピットによって切られる。

〔平面形・規模〕 北側が調査区外におよndeいるため、全体の規模は不明であるが、東西2.8m、南北(2.0m)の不整形を呈する。



No.	番号	遺構・部位	残存	計測値(cm)	幅	時期・年代	備考	写真図版
1	井戸跡(くち抜)	第1号井戸跡底面	4/5	縦53×(60)	クリ	古墳時代後期		45

第7図 第1号井戸跡井戸枠実測図



第8図 第1号土坑平面図

【堆積土】黒褐色の砂質シルトを基調とし6層に分けられる。堆積土中に炭化物を含む層が認められた。

【内部の状況】壁はやや外側に開く形で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。床面と認定し得る硬質の部分は発見することができなかった。また柱穴等の施設も発見されなかつたが、底面の周囲に周溝状の小溝を確認している。



【出土遺物】覆土及び底面直上から土師器片および器台が出土している。器台は外面ともミガキが施され、脚部には円窓が認められない。古墳時代のものであると考えられる。この他にも、赤彩されミガキが施された壺の口縁部や体部の破片や、ハケメを有する甕の胴部・底部破片などが出土している。これらは、その特徴から、古墳時代前期のものであると考えられる。

#### 第4号溝跡（第11図）

【位置・検出状況】調査区西側、B S～B U-12～13グリッド中において検出され、南側は調査区外におよんでおり、北側は調査区の壁付近で収束する。

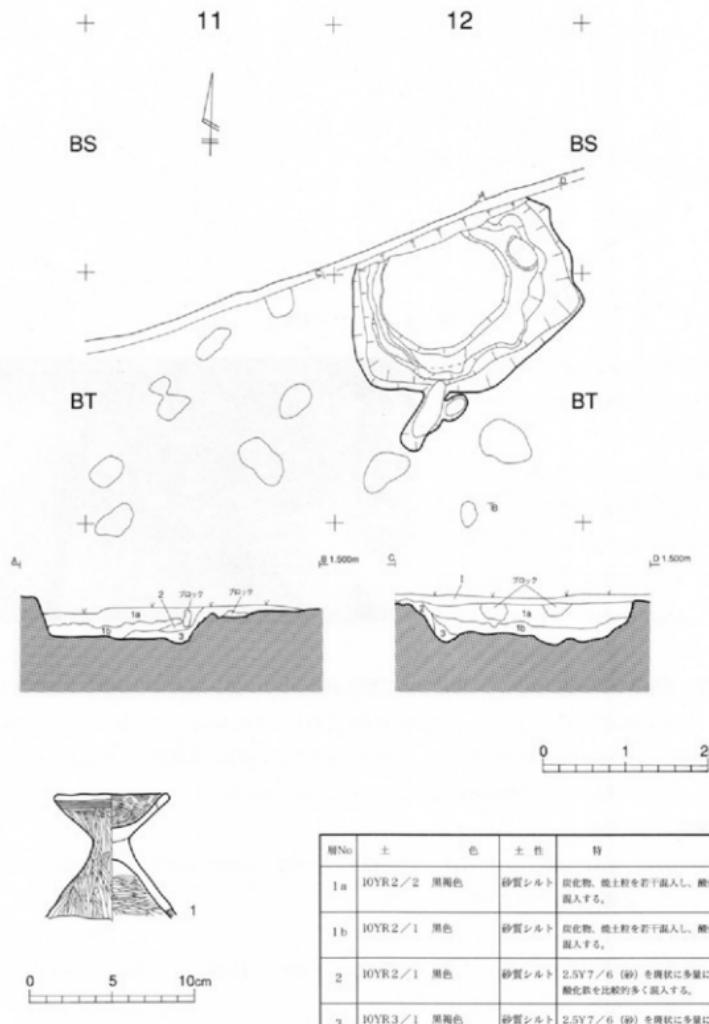
【重複関係等】認められなかった。

【断面形・規模】上幅20cm～60cm、下幅15cm～40cmを測り、断面形はすり鉢状を呈する。方向はN-25°-Eである。

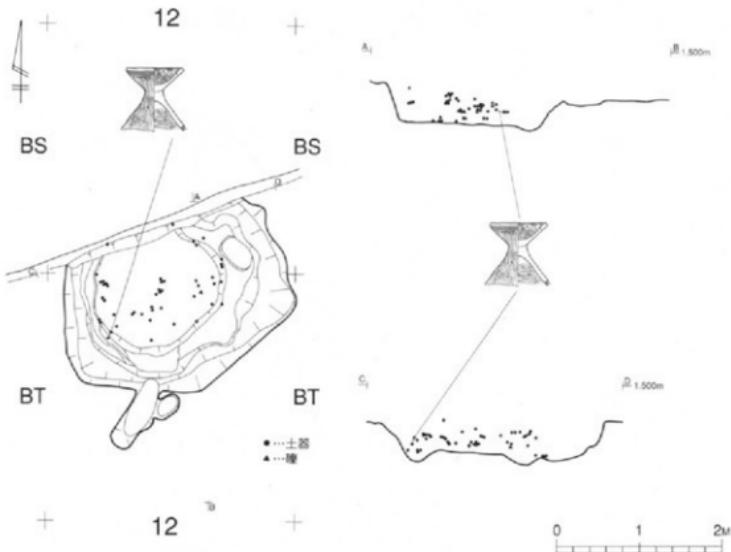
【出土遺物】出土していない。

#### 第5号溝跡（第12図～第14図、第13・28・45図版）

【位置・検出状況】調査区西側から南へ延びるトレンチを掘削した。このトレンチは、当初E地点として調査していたが、D地点として取り扱うこととしたい（南側トレンチ）。第5号溝跡は、このトレンチ内のB U～BW-15グリッド中において検出した南西から北東へ延びる溝跡であり、東側およ



第9図 豊穴状遺構



第10図 竪穴状遺構遺物分布図

び西側は調査区外におよんでいる。

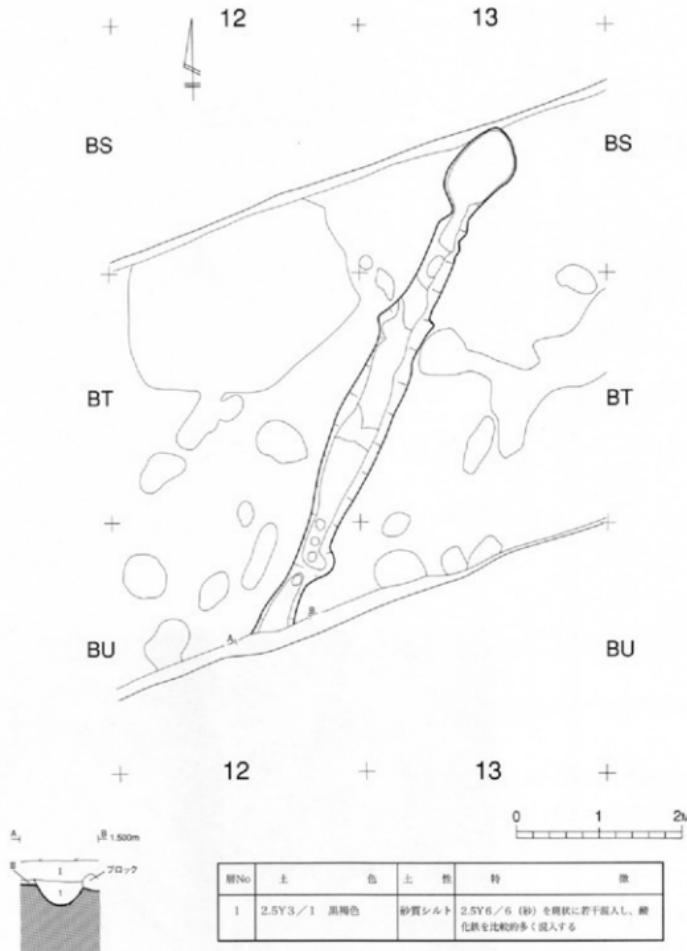
〔重複関係等〕認められなかつた。

〔断面形・規模〕上幅3.4m、下幅3.1mを測り、北側に向かって非常に緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕第5号溝跡からは、土器、木製品などが出土している。1は南西端部から出土した土師器内黒の壊である。

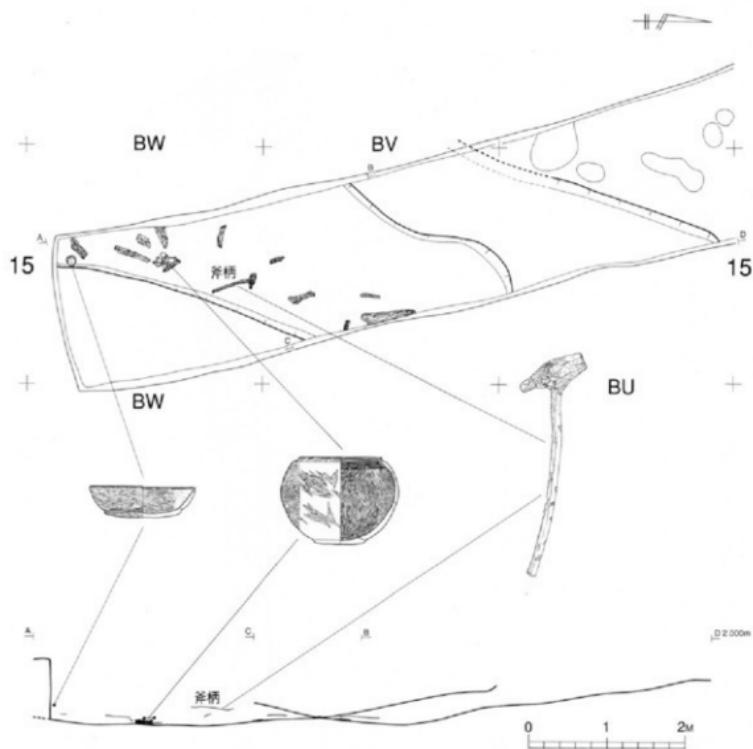


底部はヘラケズリであり、外面は丁寧なミガキによって調整が施されている。内面は、黒色処理されており、奈良時代の国分寺下層式と考えられる。2は鉢である。口縁部に指頭による溝が作出され、球胴形の体部を持つ。外面は磨滅しているが、内外面ともに丁寧なミガキが施され、黒色処理されている。3は袋状鉄斧の柄と考えられる。材質はカヤであり、幹を斧台部とし、そこから外側に延



第11図 第4号溝跡

びた枝を柄部として作出しており、斧台部の裏面が欠損している。全長は57.5cmを測り、斧台部の長さは17.6cmである。斧台部は先端から3.8cmのところまで装着用の削り込みがなされ、細くなっている。また、柄部には所々に指頭大の抉りが入りその周囲は焦げている。滑り止めのために造出されたものであるとも考えられる。斧台部は、横幅よりも縱軸方向の長さが長く作られていることから、縦斧状の柄であると考えられる。

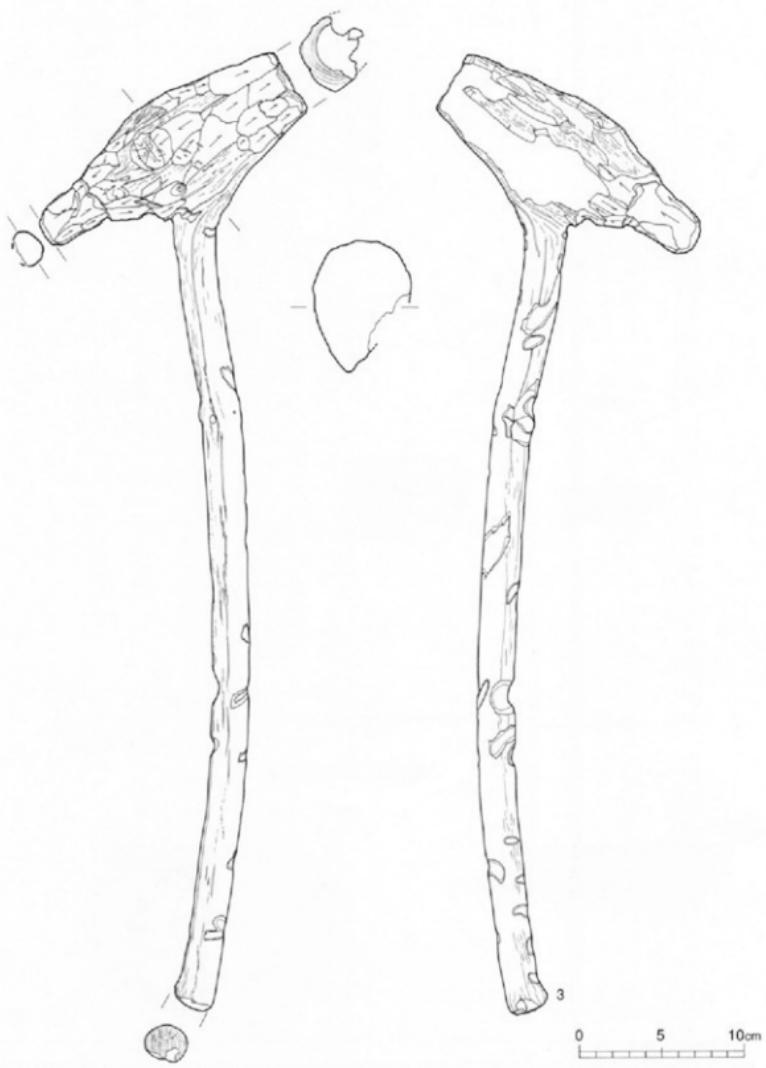


第12図 第5号溝跡



第13図 第5号溝跡出土遺物

NO	第種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)	現存	写真図版
				外 面	内 面			
1	土加函	坪 底 面	[口]ミガキ、[体]ミガキ、[底]ヘラケズリ	[口]～[底]ミガキ(黑色處理)	[口]～[底]ミガキ(黑色處理)	4.0	13.3	9.7 完形 28
2	土加函	坪 底 面	[口]ミガキ、[体]ミガキ(黑色處理)	[口]～[底]ミガキ(黑色處理)	[口]～[底]ミガキ(黑色處理)	11.0	10.4	6.3 8/10 28



NO	種別	器種	法量(cm)							特徴・備考	形態	時期年代	写真回数			
			全長	斧台長	斧台幅	斧刃厚	柄部長	柄部径	嵌着員	嵌着幅	嵌着厚					
3	斧柄	斧頭柄	57.5	17.6	6.0	8.0	47.0	2.5	4.0	(1.5)	2.3	2.5	斧台裏面欠損、柄部に指屈大の跡りあり。	カヤ	奈良	45

第14図 第5号溝跡出土手斧柄

### 第10号溝跡（第15図）

〔位置・検出状況〕 調査区西トレンチ西側B R～B T-16～17グリッド中において検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。



〔重複関係等〕 第8号溝跡と調査区の南壁にかかるて検出された性格不明遺構を切つている。

〔断面形・規模〕 上幅2.7m～3.1m、下幅1.3m～2.3mを測り、壁は外側に向かって緩やかに開く形で立ち上がる。また、深さは、確認面から50cmを測る。

〔堆積土〕 5層に分けられ、黒色を基調とした砂質シルトの自然堆積層である。

〔出土遺物〕 出土していない。

### 第11号溝跡・第12号溝跡（第16図、第14・41図版）

〔位置・検出状況〕 調査区西トレンチ西側、B Q～B S-18～20グリッド中において検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。



〔重複関係等〕 第11号溝跡と第12号溝跡はY字状に接続した状態で検出されたが、切り合ひ関係は不明であり、同時期に存在した可能性も考えられる。

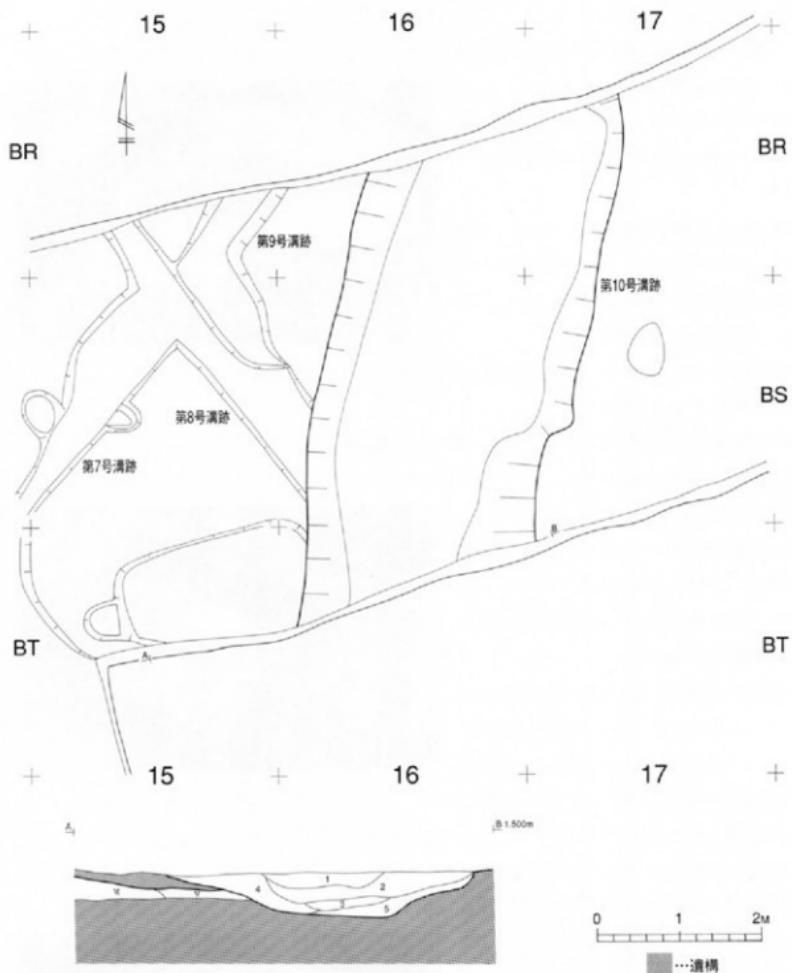
〔断面形・規模〕 第11号溝跡は上幅2.3m～2.5m、下幅50cm～1.1m、第12号溝跡は上幅1.5m、下幅90cmを測り、ともに壁は外側に向かって緩やかに開く形で立ち上がる。また、深さは、確認面から30cmを測る。

〔出土遺物〕 覆土上面から石鎚が1点、またその下方からハケメが認められる土器片や赤彩された土器の破片が出土しており、古墳時代前期のものと考えられる。

### 第13・14号溝跡（第17図、第14・28・46図版）

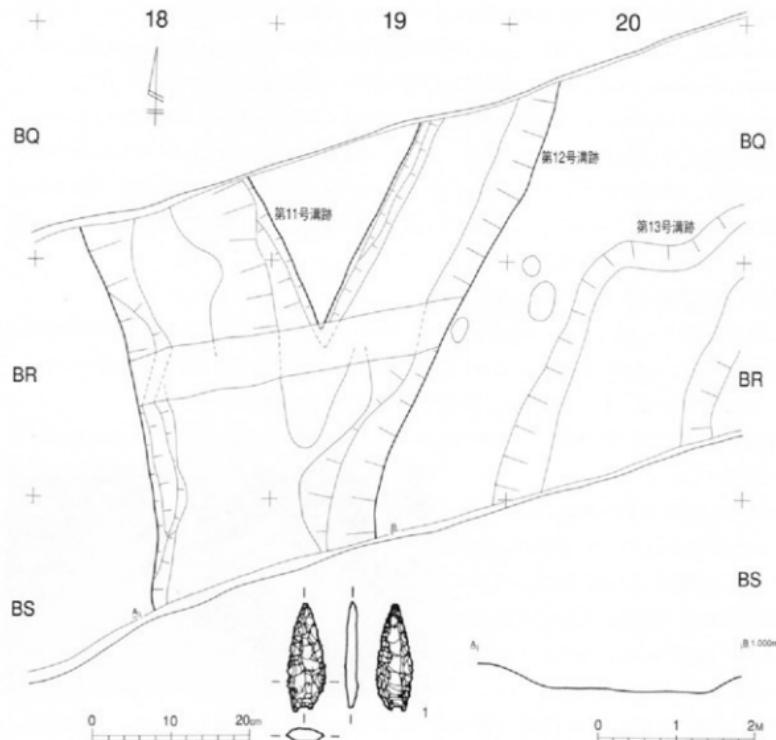
〔位置・検出状況〕 西側トレンチ調査区中央東寄り、B P～B R-20～22グリッド中にいて、切り合ひ関係をもって検出した。第13号溝跡はU字状に屈曲し、その両端部とも調査区の南壁外におよんでいる。また、第14号溝跡は、調査区を南北に横切り、両端部はそれぞれ調査北および南壁外におよんでいる。第14号溝跡の方向はN-35°-Wである。





層No	土 色	土 性	特 復
1	5Y2/1 黒色	砂質シルト	鰐化鉄を比較的多く混入する。
2	5Y2/2 オリーブ黒色	砂質シルト	鰐化鉄を若干混入する。
3	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	鰐化鉄、スクモを若干混入する。
4	5Y3/1 黒色	砂質シルト	鰐化鉄、スクモを比較的多く混入する。
5	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	鰐化鉄、スクモを若干混入する。

第15図 第10号溝跡



第16図 第11・12号溝跡

〔重複関係等〕第13号溝跡の東側端部において切り合い関係が認められ、第14号溝跡が第13号溝跡を切っている。

〔断面形・規模〕第13号溝跡は上幅1.1m～2.9m、下幅40cm～1.8m、断面形は逆台形を呈し西壁は緩やかに外側に開く。また、確認面からの深さは40cmを測る。第14号溝跡は上幅1.0m～1.3m、下幅50cm～

80cmを測り、断面形は逆台形を呈する。確認面からの深さは20cm～30cmを測る。両溝跡とも底面は比較的平坦である。



〔堆積土〕第13号溝跡はV層下面から掘り込まれており、古墳時代の遺構の可能性がある。当溝跡が大きく屈曲していることも加味した場合、方形周溝墓の可能性も考えられる。堆積土は4層確認され、砂質シルトである。第14号溝跡は3層の堆積土が確認され、自然堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕第13号溝跡からは古墳時代前期のものと考えられる土器片がまとまって出土している。第14号溝跡からは、底面直上付近から土器、土製品、木製品が複数出土している。1は小型の高杯と考えられる。比較的丁寧なミガキが施され、内外面ともに赤彩されている。2は玉状の土錘である。3は挽物の椀であり、口縁部および高台部の一部を欠損している。4～6は板状の加工木片である。共に柾目であり、5と6は湾曲している。

#### 第15・16号溝跡（第18図、第15・28図版）

〔位置・検出状況〕西側トレント調査区東側 BO～BR-21～25グリッド中において、切り合い関係をもって検出し、両溝とも調査区の北および南壁外におよんでいる。方向は第15号溝跡がN-70°W、第16号溝跡がN-45°-Eであり、第15号溝跡に切られる形で検出した。

〔重複関係等〕第15号溝跡が第16号溝跡を切っており、第16号溝跡の南側端部は第15号溝跡に切られて終了している。

〔断面形・規模〕第15号溝跡は上幅1.2m～2.4m、下幅1.0m～2.1m、断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは60cmを測る。第16号溝跡は上幅1.0m～1.3m、下幅80cm～1.1m、断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは25cmを測る。



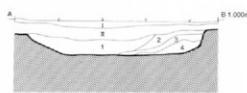
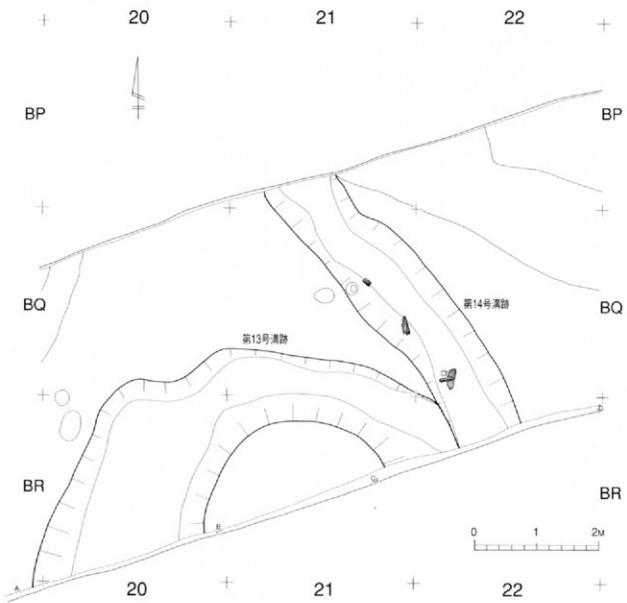
〔堆積土〕第15号溝跡はV層下面から掘り込まれており、古墳時代の遺構と考えられる。堆積土は2層確認され、砂質シルトである。

〔出土遺物〕第15号溝跡の覆土から円形浮文を持つ土師器の破片が出土しており、外面に燃糸文（LR）が施されている。また、第16号溝跡の覆土からも、ハケメが施された土器片が出土しているため、古墳時代前期と考えられる。

#### 土器集中地点（第19図、第15・29図版）

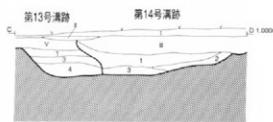
第15号溝跡および第16号溝跡の東側に土器の集中地点を確認した。この集中地点はBP～BR-24～26グリッド中において、2.0×6.5mの範囲に広がっており、掘り込みは確認していない。土器はほとんどが破片であり、土師器である。一部に器台の脚部や壺の口縁部と考えられる土器も見られるが、表面の磨減が激しく、器形等から古墳時代のものと考えられる。多くの破片が第V層中から発見されているが、その上層（第I層、第II層）にも認められた。後世の擾乱によって混入した可能性も考えられる。





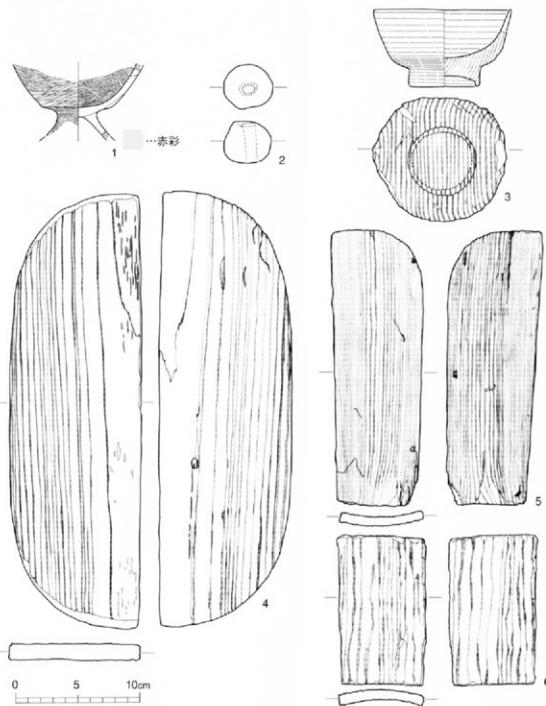
層No.	土 色	土 性	特 殊
1	5Y3／1 黒色	砂質シルト	鈣化鉄、スクモを比較的多く混入する。
2	5Y4／1 灰色	砂質シルト	鈣化鉄を若干混入する。
3	5Y7／3 浅褐色	砂質シルト	鈣化鉄を若干混入する。
4	5Y3／1 黒色	砂質シルト	鈣化鉄、スクモを比較的多く混入する。

第13号溝跡



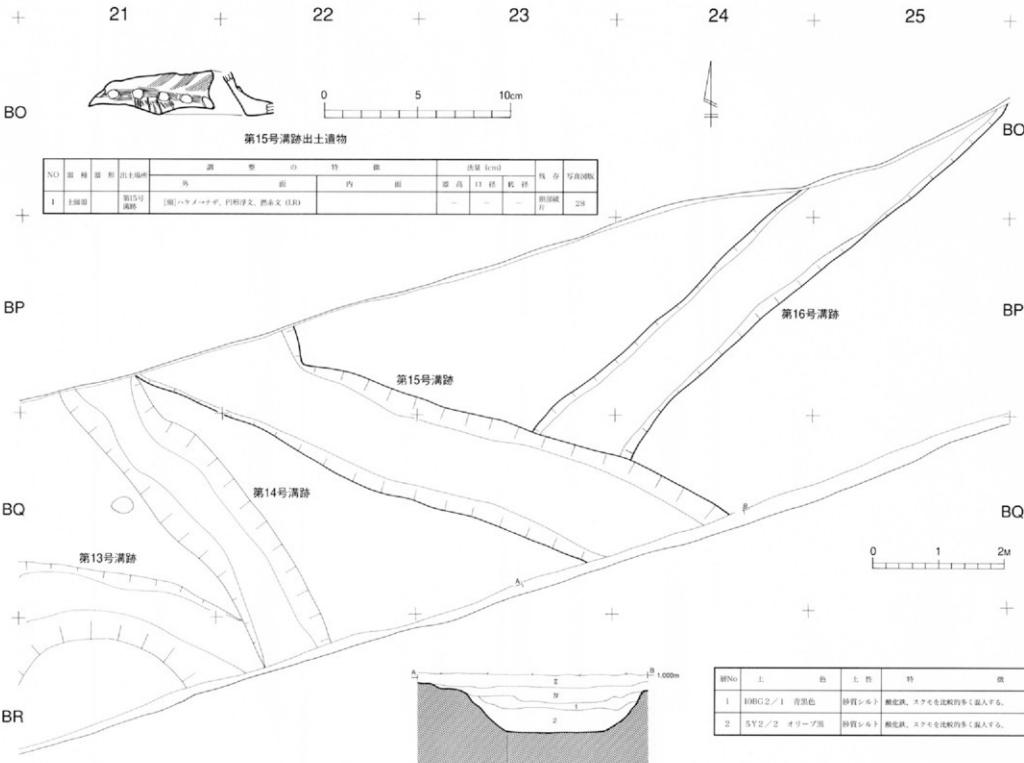
層No.	土 色	土 性	特 殊
1	5Y4／1 灰色	砂質シルト	鈣化鉄を比較的多く混入する。
2	5Y4／1 オリーブ灰	砂質シルト	鈣化鉄を若干混入する。
3	5Y2／2 オリーブ灰	砂質シルト	鈣化鉄、スクモを比較的多く混入する。

第14号溝跡



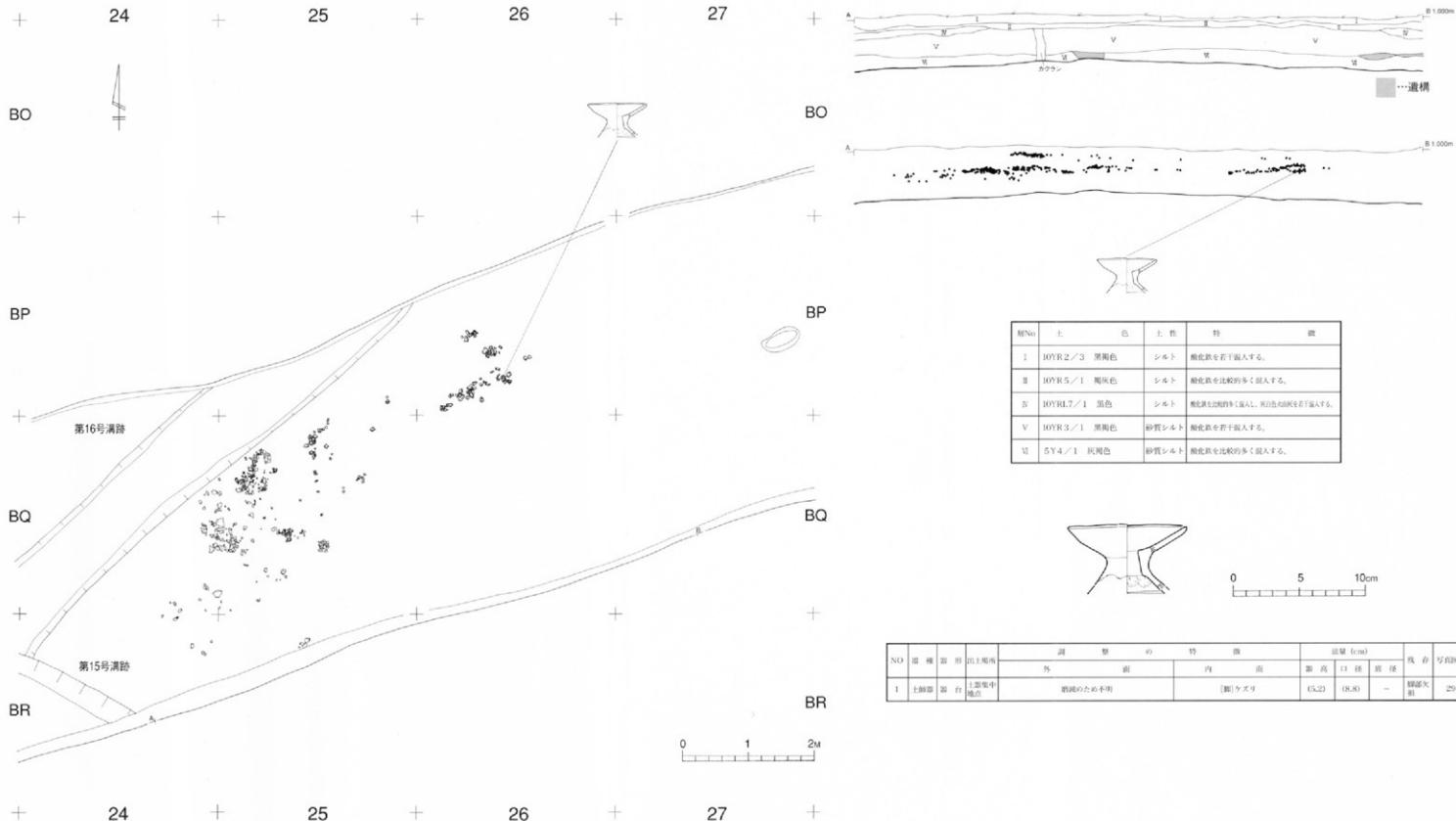
No.	種 別	器 形	出土場所	調 整 の 特 徴			法量 (cm)	残 存	写真図版
				外 面	内 面	縫 合			
1	上部器	高 杯	第14号 [H]ミガキ。(赤鉄)、[H]ミガキ。(赤鉄)	[H]ミガキ。(赤鉄)、[H]ミガキ。(赤鉄)	[H]ミガキ(赤鉄)	(0.62)	—	—	1/2 28
No.	種 別	形 状	出土場所	調 整 の 特 徴			法量 (cm)	残 存	写真図版
2	下 部	上玉枝	第14号 [H]ミガキ				4.0×3.4×(高さ) 1.0×0.7	完形	
No.	種 別	器 形	出土場所	遺 墓	周 宽	測定値 (cm)	粗 程	時 代・年 代	備 考
3	挽 物	椀	第14号調査坑面	1/3	(直径) 0.6×2.2				46
4	加工木片		第14号調査坑面	1/3	34.5×(0.5)×1.4				46
5	加工木片		第14号調査坑面	1/3	22.0×7.0×0.8				46
6	加工木片		第14号調査坑面		11.9×6.9×0.9				46

第17図 第13号溝跡・第14号溝跡、第13号溝跡・第14号溝跡出土遺物



+ 21 +

第18図 第15号溝跡・第16号溝跡



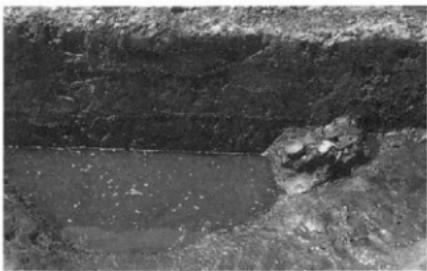
第19図 土器集中地点

## 第2号土坑（第20図～第21図、第41・47図版）

〔位置・検出状況〕西側トレンチ調査区東側 BM～BN-30～32グリッド中において検出し、北側は調査区の北壁外におよんでいる。

〔重複関係等〕認められなかった。

〔平面形・規模〕不整形を呈すると考えられ東西4.7m、南北(2.4m)を測り、確認面からの深さは80cmを測る。



〔堆積土〕7層確認され、ともにシルト質の土層で自然堆積の様相を呈する。

〔内部の状況〕壁は外側に開きながら立ち上がり、南側から東側にかけて、テラス状の平坦面を有する。また、井戸枠の一部と考えられる板材が出土しており、井戸として機能していた可能性がある。

〔出土遺物〕土器、石製品、木製品等が出土しており、土坑の東側テラス部分に集中して発見された。1は中世陶器の甕の口縁部破片である。口径が55cm以上あり、大型の土器である。2は加工痕がある石製品であると考えられる。3～5、7は加工された板材であり、5は中央部に孔を有する。6は曲物の一部であり、井戸枠であった可能性が考えられる。

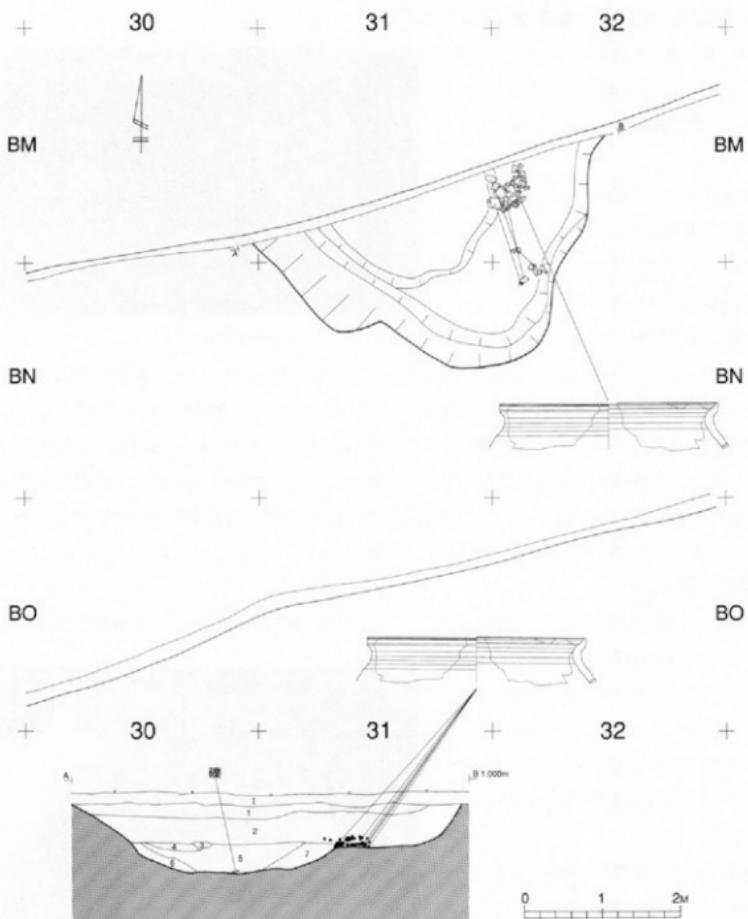
## 柱跡群（第2図）

西側トレンチ調査区の西側と東端部から多数のビットが検出された。これらのビットは調査区の他の部分からはほとんど検出されておらず平面形が長楕円形を呈し、配列に規則性が見られるもので、柱跡群としてとらえることとした。しかし、調査区全体の高低差を考えた場合、これらのビットは地山直上から検出されたもののみである。



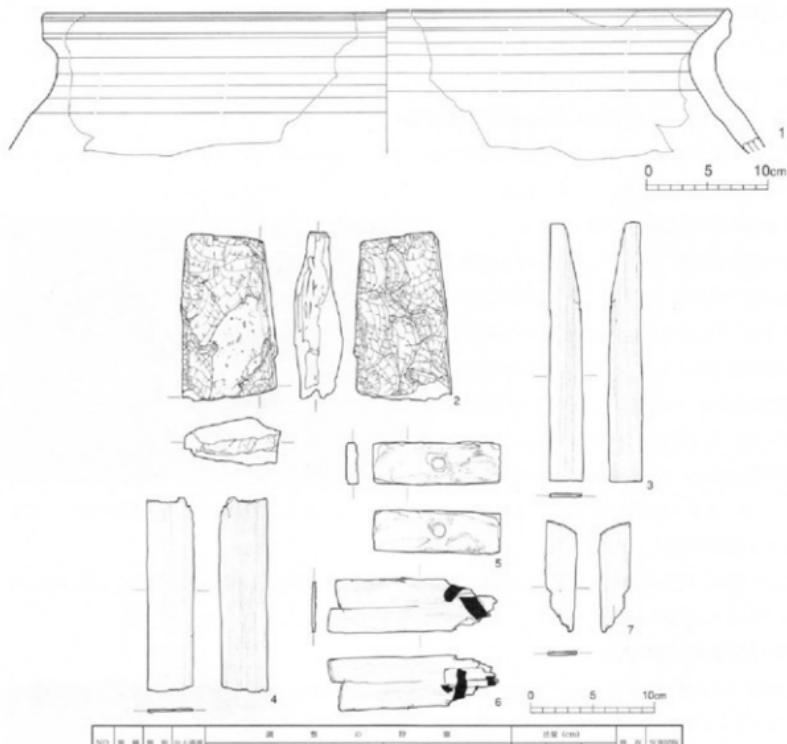
〔調査区西側の柱跡群〕柱跡群は調査区西側端部からE地点との合流点(BT～BU-13～14グリッド)あたりまで広がっている。ビットの形状は円形の小型のものや楕円形、不整形のもの等さまざまであるが、A地点においても検出された特徴的な長楕円形のビットが多数検出されている。規模は20cm～40cmのものがほとんどであり、一定の方向を持って並ぶ可能性をもった複数のビットが確認された。しかし、明瞭なつながりを持つ





層No	土色	土性	特徴
1	IYR4./3. 黄褐色	シルト	酸化鉄を若干多く混入する。
2	IYR3./2. 黒褐色	シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
3	IYR3./3. 明褐色	シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
4	2.5YR4./1. 黄灰色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。
5	5Y4./2. 灰褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
6	5Y3./1. 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
7	5Y2./1. 黑色	砂質シルト	酸化鉄、スコモを若干混入する。

第20図 第2号土坑



No.	器種	断面	出土場所	調査区分		寸法 (cm)	現存	年月
				内	外			
1	陶器 壺	圓	土壁上	[1]ヨコクナギ、[2]ヨカクナギ	[3]ヨカクナギ、[4]ヨカセナギ	10.7	156.03	—
2	陶器 壺	圓	出土地盤	27.00mm (cm)	外 内	—	—	年月
3	石製品	圓	(33.4) × 7.7 × 5.8	外 内	—	—	—	—
4	陶器 壺	圓	土壁上	8.5mm (cm)	外 内	—	—	年月
5	陶器 壺	圓	土壁上	10.7mm (cm)	外 内	—	—	年月
6	加工木片	圓	土壁上	10.7mm (cm)	外 内	—	—	年月
7	加工木片	圓	土壁上	10.7mm (cm)	外 内	—	—	年月
8	加工木片	圓	土壁上	10.7mm (cm)	外 内	—	—	年月
9	加工木片	圓	土壁上	10.3mm (cm)	外 内	—	—	年月
10	動物	圓	土壁上	4.3 × 0.3 (cm)	—	—	—	—
11	加工木片	圓	土壁上	10.0mm (cm)	外 内	—	—	年月

第21図 第2号土坑出土遺物

たものは確認することができなかった。しかし、調査区西壁付近から検出されたピットには、柱痕が残存しているものがあり、何らかの建物跡の可能性がある。また、時期については第IV層から掘り込まれていることから、奈良・平安時代以降のものである可能性が強

い。



〔調査区東側の柱跡群〕この地域から検出されたピットにも西側で検出されたものと同様に長楕円形を呈し、一定の方向性を有するものが認められ、規模も西側のものに準じている。しかし、建物としての状況を把握するには至らなかった。

### 第3号土坑・4号土坑・5号土坑（第22図）

〔位置・検出状況〕東側トレンチ調査区西側端部、B L～BM-39～40グリッド中においてそれぞれ隣り合って検出された。

〔重複関係等〕認められない。

〔平面形・規模〕第3・4・5号土坑とも円形に近い楕円形を呈し、第3号土坑は1.3m×1.4m、第4号土坑は1.6m×1.8m、第5号土坑は2.0m×2.1mを測る。底面は平坦で確認面からの深さは第3・4号土坑が70cm、第5号土坑が80cmを測る。



〔内部の状況〕3つの土坑の壁面には全てにテラスがあり、底部は水溜のような状況になっている。このため、これらの土坑は素掘りの井戸であった可能性が高い。

〔出土遺物〕時期を決定するような遺物は出土していないが、第5号土坑の底面付近から比較的大型の加工された板材が出土している。

### 第17号溝跡（第23図）

〔位置・検出状況〕東側トレンチ調査区西側B J～B L-43～44グリッド中において検出し、溝跡の両端部は調査区の北および南壁外におよんでいる。方向はN-16°-W、であり、内部に布掘状のピットを有する。



〔重複関係等〕認められなかった。

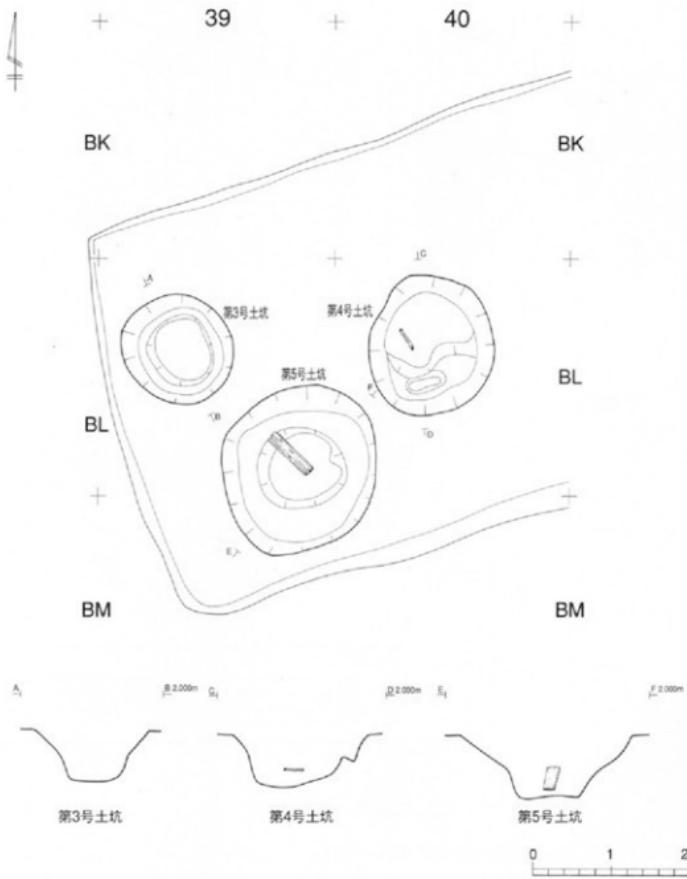
〔断面形・規模〕断面は逆三角形を呈し、上幅は40cm～80cm、下幅10cm～40cmを測る。また底面のピットは径10cm～25cmを測り、配置に規則性はない。底面から確認面までの深さは25cmを測る。

〔堆積土〕第III層上面から掘り込まれており、砂質のシルトを基調とする。

〔出土遺物〕出土していない。

### 第18号溝跡（第24図、第48図版）

〔位置・検出状況〕東側トレンチ調査区東側B G～B J-51～53グリッド中において検出し、溝跡の両端部は調査区の北および南壁外におよんでいる。方向はN-15°-W、である。

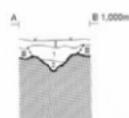
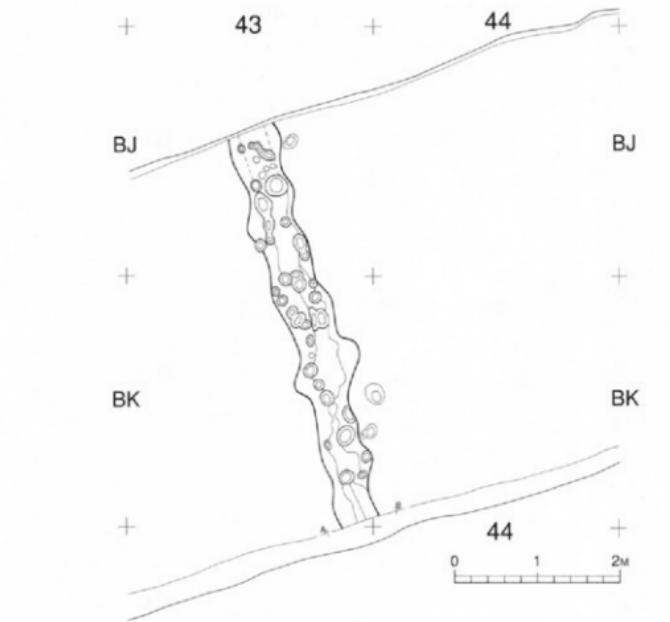


第22図 第3号土坑・第4号土坑・第5号土坑

〔重複関係等〕調査区南壁の土層断面によれば、第18号溝跡の上層に遺構が存在し、当溝跡と重複している。断面のみの観察なので、全容は判然としない。

〔断面形・規模〕断面は逆台形を呈し、上幅は1.0m~1.4m、下幅60cm~90cmを測る。





解No	土 色	土 性	特 徴
1	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。
2	5Y6/4 オリーブ黄色	シルト質砂	

第23図 第17号溝跡

底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cmを測る。

【堆積土】V層中から掘り込まれており、灰色の砂質のシルトである。

【出土遺物】底面付近から加工木片が1片出土している。

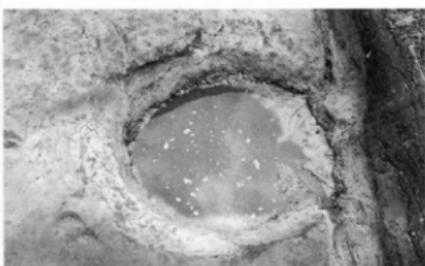
#### 第8号土坑（第24図）

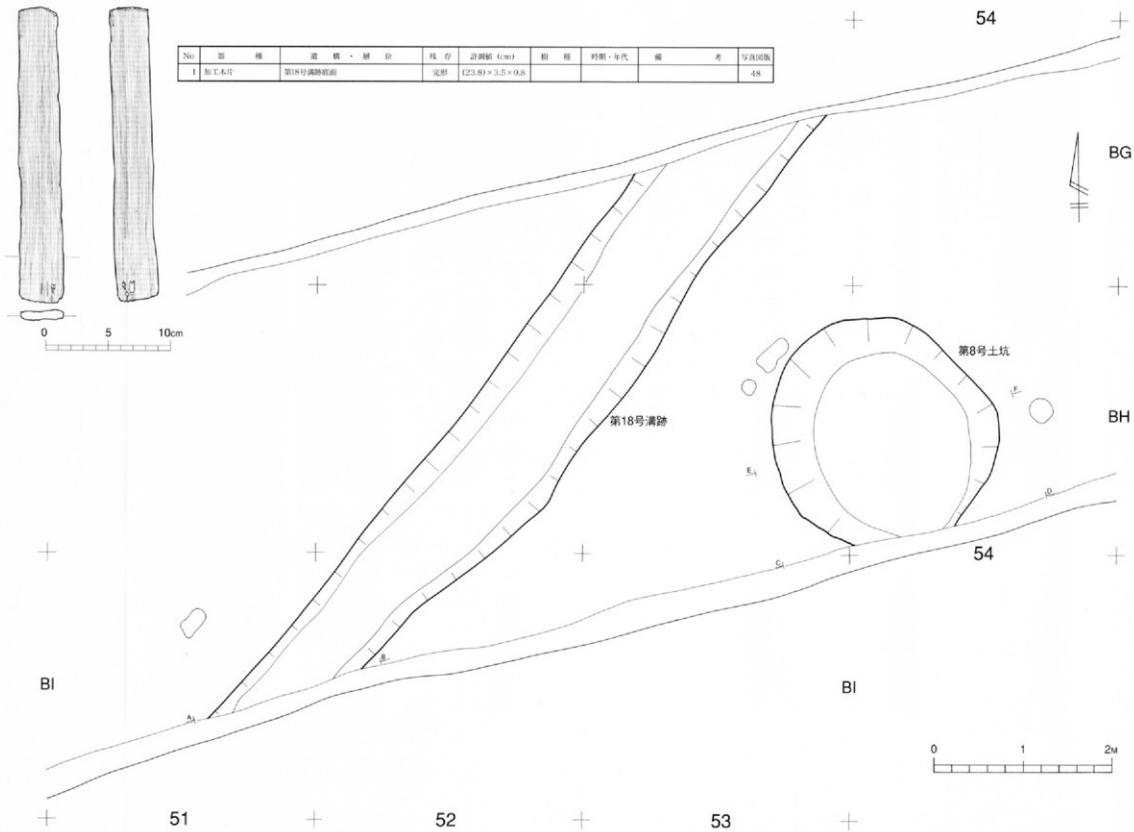
【位置・検出状況】東側トレント調査区東側

BH-53~54グリッド中において調査区の  
南壁にかかって検出された。

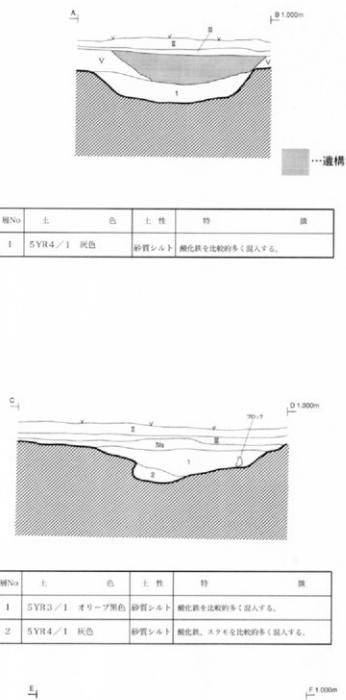
【重複関係等】認められない。

【平面形・規模】円形に近い橢円形を呈し、  
直径は約2.5mを測る。底部はほぼ平坦で、





第24図 第18号溝跡・第8号土坑



確認面からの深さは70cmを測る。壁は外側に開く形で立ち上がる。

〔出土遺物〕 出土していない。

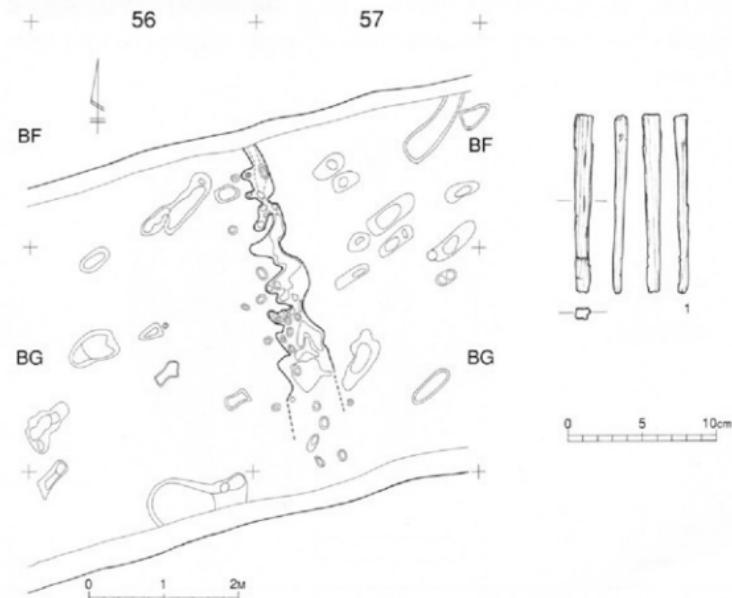
#### 第19号溝跡（第25図、第48図版）

〔位置・検出状況〕 東側トレンチ調査区東側B F～B G-56～57グリッド中において検出し、溝跡の北端部は調査区の北壁外におよび、南側は調査区内で途切れている。方向はN-15°-Wであり、内部に多数の小ビットを有する。検出状況から見て、溝状遺構の底面部分が検出されたものであると考えられる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 底面部分のみの検出であるため、断面形や壁の状況などは判然としない。形状も極めて不規則であり、確認された幅は20～70cmである。また底面のビットの配列に規則性はない。確認面からの深さは10cm程度である。

〔出土遺物〕 加工された木片が出土している。



NO	器種	遺構・層位	残存	計測値(cm)	樹種	時期・年代	備考	写真図版
1	加工木片	第19号溝跡底面		(縦9.8×横7.7)				48

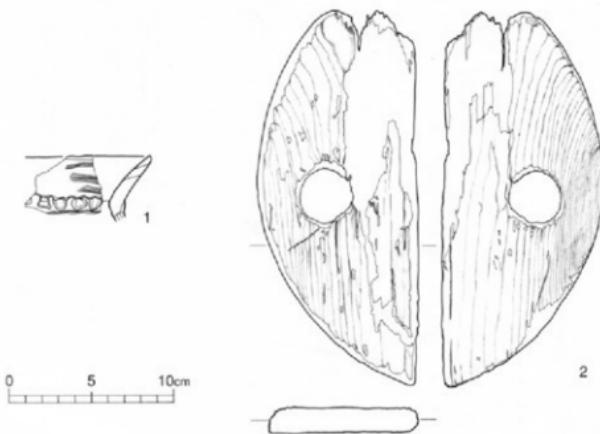
第25図 第19号溝跡、第19号溝跡出土遺物

### 柱跡群（第3図）

調査区東端部からは、西側トレンチと同様に長楕円形の形状を有するピット群が多数検出されている。これらピット群はB G～B H-55グリッドから調査区東端部（B E～B G-59グリッド）にかけて分布しており、その間には第19号、第20号溝跡が検出されている。ピットの規模は最大のもので80cm×50cm、最小のもので30cm×20cmである。しかし、明瞭な配列を確認できたものはなかった。

### 遺構外出土遺物（第26図、第29・48図版）

1は土師器の甕の口縁部～頸部の破片である。頸部には、指頭による圧痕が認められ、外面はナデによる横方向の調整が施されている。古墳時代前期のものであると考えられる。2は中央部に径3cm程の孔が穿たれた木製品の一部である。材はスギで、両面を削って平坦にしており、方向は柾目である。大きく湾曲した縁辺部にも工具による面取りがなされている。



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			現存	写真図版
				外面	内面	幅	12径	底径		
1	土師器	甕	遺構外 [口]ヨコナギ、[底]茎付縫帶に指頭圧痕			-	-	-	口縁部 破片	29
2	加工木片		遺構外	1/2	測定値(cm) 22.5×9.7×1.5	柾目	時間・年代	箇	参考	写真図版 48

第26図 遺構外出土遺物

## 第5部 E地点・F地点



# 目 次

I. 調査の経過 .....	127
II. 基本層序 .....	127
III. 発見された遺構と遺物 .....	128
1. E 地点	
□ 第4号溝跡・□ 5号溝跡・□ 6号溝跡 .....	128
■ 土器集中地点 .....	136
■ 第9号溝跡 .....	136
■ 第10号溝跡 .....	139
■ 第2号土坑 .....	139
■ 第11号溝跡 .....	141
その他の出土遺物 .....	141
2. F 地点	
■ 第1号溝跡 .....	145
■ 第1号土器集中地点 .....	146
■ 第1号土坑 .....	146
■ 第2号溝跡 .....	152
■ 第2号土器集中地点 .....	152
■ 第3号溝跡 .....	152
■ 第3号土坑 .....	154
■ 第3号土器集中地点 .....	156
■ 第4号溝跡 .....	158
■ 第5号土坑 .....	160
遺構外出土土器 .....	170

■ …縄文時代のものと考えられる遺構

■ …古墳時代のものと考えられる遺構

■ …奈良・平安時代のものと考えられる遺構

■ …中世以降のものと考えられる遺構

□ …時期不明の遺構

## I. 調査の経過

E地点は、D地点の北東端部から始まる。ほ場整備による水路の掘削によって破壊されてしまう部分について、幅5mのトレンチを掘削して調査を実施した。総掘削面積は、830m<sup>2</sup>である。

調査は、平成9年4月24日から実施し、重機による表土掘削の後、遺構の検出、平面図の作成、写真撮影等を実施した後、7月15日に調査を終了した。この結果、土坑2基、溝跡12条、性格不明遺構3基を検出した。

F地点は、E地点の北側トレンチ南側から始まる。ほ場整備による当地点の工事は面工事となり、多くの部分が削平されてしまうことになっていたため、東西21.0m、南北36.0mの部分を面的に調査するに至った。総掘削面積は756m<sup>2</sup>である。調査は平成9年7月16日から実施し、一連の調査過程を実施した後、平成9年9月13日に終了した。この結果、5基の土坑、4条の溝跡の他、3ヶ所の土器集中地点を検出した。

なお、E地点とF地点は接しており、E地点北側トレンチの第9号溝跡と、F地点西側の第4号溝跡は、同一の遺構として扱うこととする。

## II. 基本層序

### 1. E地点

E地点は南側が低く、北側に向かってやや高くなっている。特に北側トレンチは、微高地に位置していると考えられ、多くの遺構が良好な状態で検出されることが予想されたが、後世の耕作等による削平が進んでおり、表土から地山まで30cm程度の深さしかなかった。層序は、I～III層に分けられ、黒色のシルトを基調とする。

第I層：表土であり、耕作土である。

第II層：黒褐色を呈し、灰白色火山灰を粒子状に若干混入する。平安時代以降の層であると考えられる。

第III層：黒色を呈し、地山ブロックを比較的多く混入する。古墳時代の遺構はこの層から掘り込まれている。

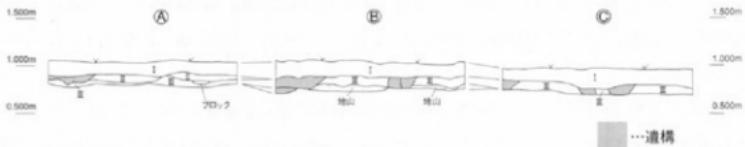
### 2. F地点

F地点は中央部がやや高く、縁辺部に向かって若干下降している。F地点の南側土層断面の層序模式図によれば、当地点の中央部にやや高まった微高地が存在することがわかる。この微高地は、小規模な浜堤の可能性も考えられる。層序は、後世の削平が進んでいたため、2層に分けられたのみであったが、黒色のシルトを基調とする砂質のシルトである。

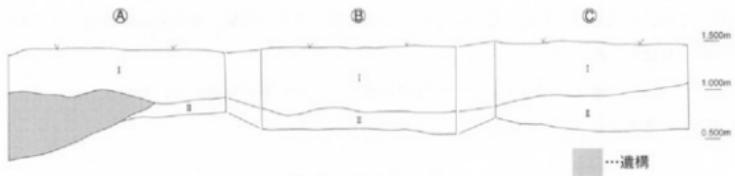
第I層：表土であり、耕作土である。

第II層：黒褐色を呈し、灰白色火山灰を粒子状に若干混入する。平安時代以降の層であると考えられる。

なお、古墳時代のものと考えられる土層については、後世の削平等により失われてしまっている。当地点では、古墳時代前期と考えられる遺構がまとまって発見されているが、それらはみな底面に近い部分が検出されているのみであり、上部はすでに削平されてしまっていると考えられる。



第1図 E地点層序模式図



第2図 F地点層序模式図

### III. 発見された遺構と遺物

#### 1. E地点

第4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡（第6図）

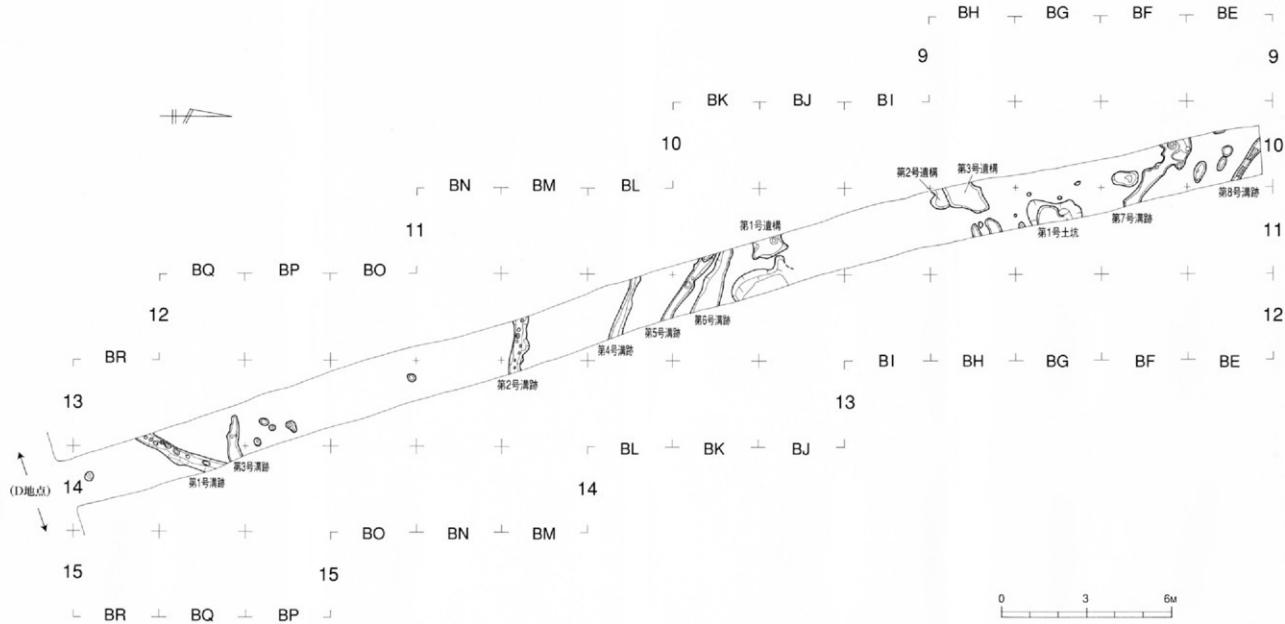
〔位置・検出状況〕南側トレンチ調査区北側B K ~ B L - 11、12グリッド中において検出した。

〔重複関係等〕認められなかった。ただ第5号溝跡と第6号溝跡は、西側の調査区外で切り合い関係を有している可能性がある。

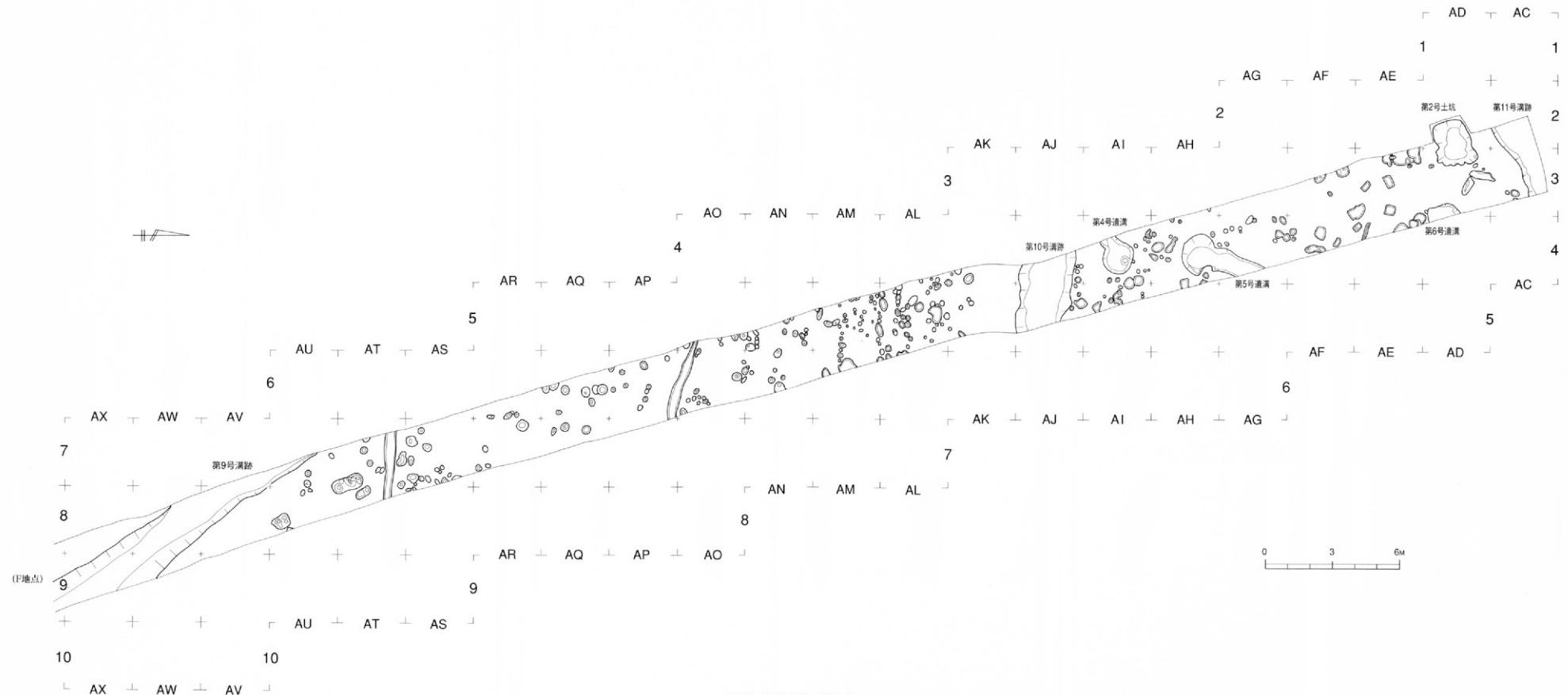
〔規模〕第4号溝跡は上幅29cm~40cm、下幅22cm程度、第5号溝跡は上幅40cm~80cm、下幅20cm~60cmを測り、深さは20cm~30cm程度の比較的小規模な溝跡である。方向は第4号溝跡がN-75°-W、第5号溝跡がN-62°-W、第6号溝跡がN-80°-Wである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



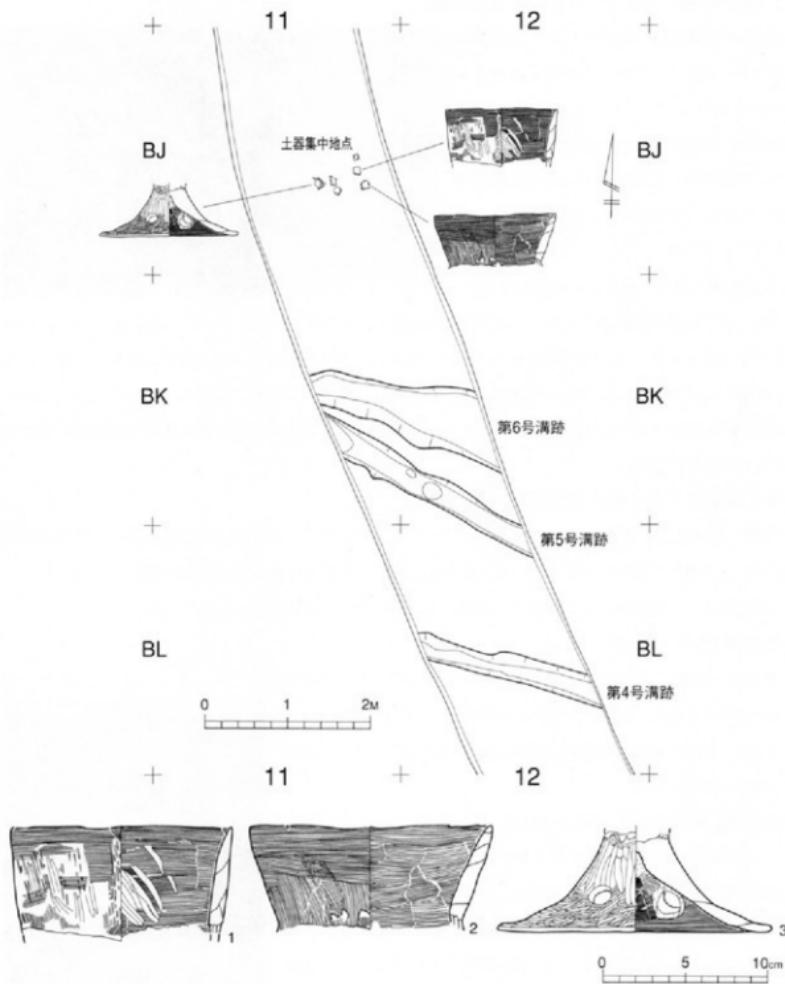


第3図 遺構全体図(E地点南側)





第5図 遺構全体図 (F地点)



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	幅 高	口 径	底 径		
1	土器部	壺	土器集中 地点	[口]ハゲメ→ヨコナデ→ミガキ	[口]ヨコナデ→ミガキ	(7.1)	13.4	—	口縁部 破片	29
2	土器部	壺	土器集中 地点	[口]ヨコナデ、[頸]ヘラ状工具による圧痕	[口]ヨコナデ	(6.2)	(14.8)	—	口縁部 破片	29
3	土器部	器台	土器集中 地点	[口]ミガキ	[脚]ヨコナデ、ケズリ	(6.4)	—	(8.6) 10.7	脚部 破片	29

第6図 第4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡、土器集中地点出土遺物

### 土器集中地点（第6図、第16・29図版）

〔位置・検出状況〕南側トレンチ調査区北側B J - II グリッド中において土器がまとまって出土した。これらの土器は東西80cm、南北60cmの範囲から出土している。明確に掘り込みと判断し得るものは検出されなかつたため、土器集中地点として扱うこととした。



〔出土遺物〕図示できたものは3点である。

1および2は壺の口縁部である。1は口縁部は直立し、外面はハケメ、ナデ、ミガキが、内面はナデ、ミガキが施される。2は内外面ともヘラナデが施され、頸部付近にヘラ状工具によるものと考えられる圧痕が見られる。3は器台の脚部である。裾は大きく外側に広がり、円窓は3つ存在する。外面には比較的丁寧なミガキが施され、内面はヘラナデがはいる。以上の土器は全て古墳時代前期に位置づけられると思われる。

### 第9号溝跡（第7図、第16図版）

〔位置・検出状況〕北側トレンチ南側、AU～AX-7～9グリッドにおいて検出され、西側は調査区外に、東側はF地点におよんでいる。第9号溝跡は、F地点においては第4号溝跡として検出した。この溝跡は、F地点を南北に横切り、南端部は南壁に至って調査区外に及んでいる。

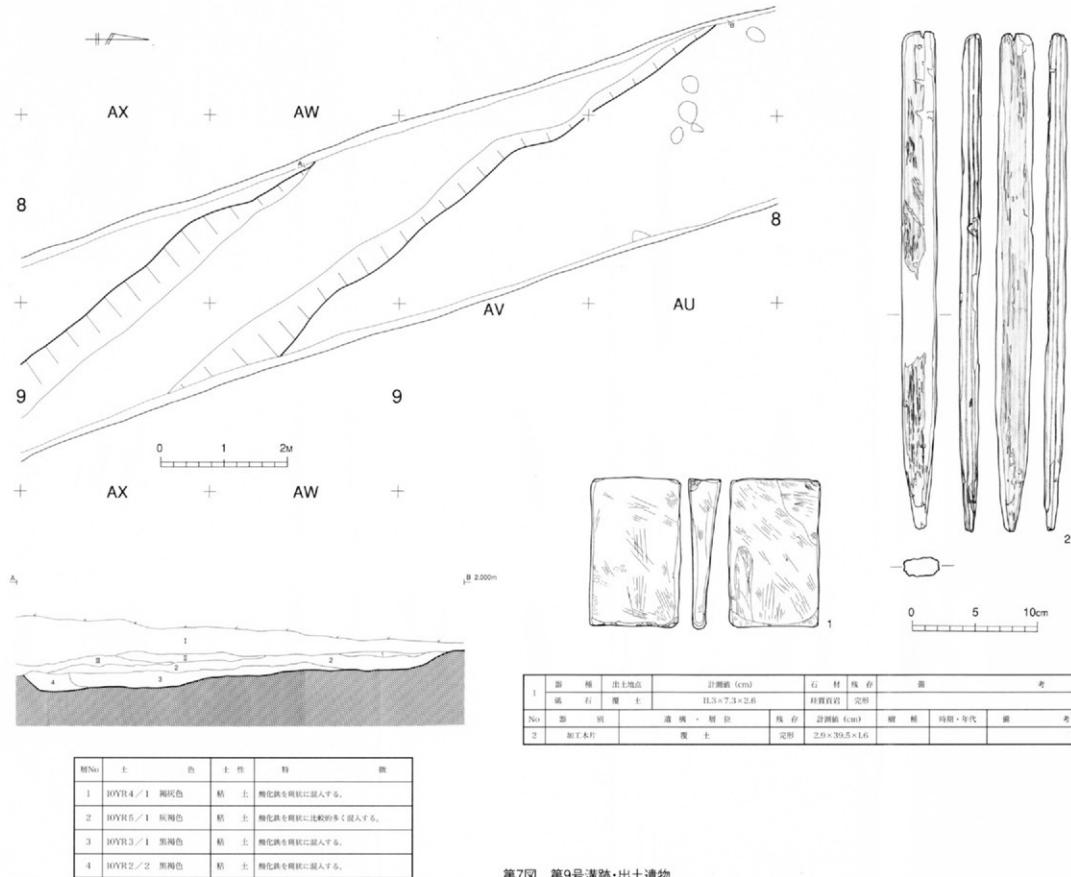
〔重複関係等〕認められなかった。

〔断面形・規模〕断面形は逆台形を呈し、壁は大きく外側に開きながら立ち上がる。底面は平坦で湧水が認められ、確認面からの深さは50cmである。溝跡の上幅は1.9m～2.5mであり、下幅は1.4m～1.2mである。

〔堆積土〕第9号溝跡は時期的には新しいものである可能性が高い。堆積土は黒褐色を基調とするややグラウル化した腐食土であり、基本土層中には見られない土層である。

〔出土遺物〕覆土中から砥石と木製品などが出土している。1は砥石であり、珪質頁岩製である。長方形を呈し、表裏および側縁に擦痕が認められる。2は杭状の木製品であり、柵目で面取りがなされ、先端部は削って尖らせている。第9号溝跡からは、この他にも陶器類の破片が出土しているが、新しいものであり、近世以降のものであると考えられる。





第7図 第9号溝跡・出土遺物

### 第10号溝跡（第8図）

〔位置・検出状況〕北側トレンチ北側、A J～AK-4～5グリッド中において検出され、西端および東端はそれぞれ調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕認められなかった。

〔断面形・規模〕断面形は逆台形を呈し、壁は南側がやや広がりながら立ち上がる。底面はおむね平坦で、確認面からの深さは50cmを測る。



〔堆積土〕黒色ないしは黒褐色の砂質シルトを基調とし、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、木製品、破碎砾等が出土した。土器は全て破片であり、奈良・平安時代の物と考えられるが、図示し得た物は木製の椀のみである。遺物は溝跡の検出部分の中央部に集中しており、断面上では、底面から覆土全域で出土している。1は、挽物の白木の椀の底部であり、高台があったと思われるが欠損してしまっている。

### 第2号土坑（第10～12図、第17・18・30図版）

〔位置・検出状況〕北側トレンチ調査区北端部付近、AD-1～2グリッドにおいて検出され、遺構の西側の一部分は調査区西壁外におよんでいる。

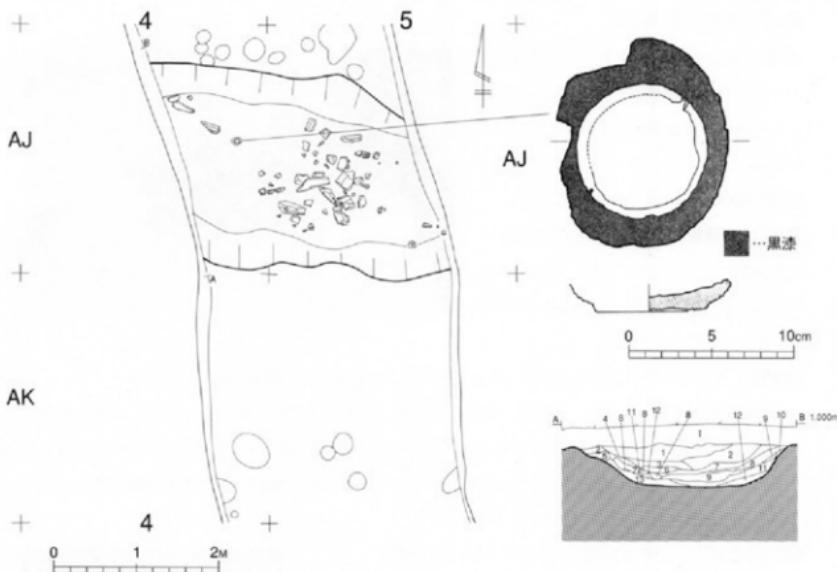
〔重複関係等〕認められなかった。

〔平面形・規模〕東西(1.4m)、南北1.8mの不整形を呈し、壁は大きく外側に開く形で立ち上がる。底面には若干の凹凸が見られるが、おむね平坦で、確認面からの深さは30cmを測る。

〔堆積土〕6層に分けられ、黒褐色土の砂質シルトを基調とし自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕第2号土坑からまとまった土器の出土が見られた。遺物は平面的には土坑の中央から南西寄りに散布しており、覆土全域に見られる。1は壺の体部～底部と考えられる。外面は比較的丁寧なミガキが施され、ススが付着しており、内面はミガキとヘラナデが施される。2は複合口縁の壺の口縁部から頸部の破片である。外側に大きく開く複合口縁を持ち、外面はナデ、内面にはミガキとヘラナデが認められる。3は瓶であり、外面はヘラナデ、内面はヘラナデとケズリによって調整されている。以上の土器は全て古墳時代前期に位置づけられる。





No	種別	遺構・層位	残存	計測値(cm)	層種	時期・年代	備考	写真図版
1	熱物 烙	底面	1/3	(3HL0×6.2)				48

層No	土色	土性	特徴
1	IOYR2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。
2	IOYR3/1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。
3	IOYR2/2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。スクモと互層を成す。
4	IOYR3/1 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
5	IOYR4/2 深黄褐色	砂	
6	IOYR2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。スクモと互層を成す。
7	IOYR1.7/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。スクモと互層を成す。
8	IOYR2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。
9	IOYR3/1 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入する。スクモと互層を成す。
10	IOYR2/2 黑褐色	砂質シルト	
11	IOYR3/1 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄、スクモを比較的多く混入する。
12	IOYR1.7/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
13	IOY2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄、スクモを比較的多く混入する。

第8図 第10号溝跡 出土遺物



第9図 第10号溝跡遺物分布図

#### 第11号溝跡（第10図、第18図版）

〔位置・検出状況〕 北側トレンチ北端部、AC-1~2グリッド中において検出され、西端および東端、北側の半分はそれぞれ調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 壁は大きく外側に開く形で立ち上がりを考えられ、底面はおおむね平坦で、確認面からの深さは32cmを測る。

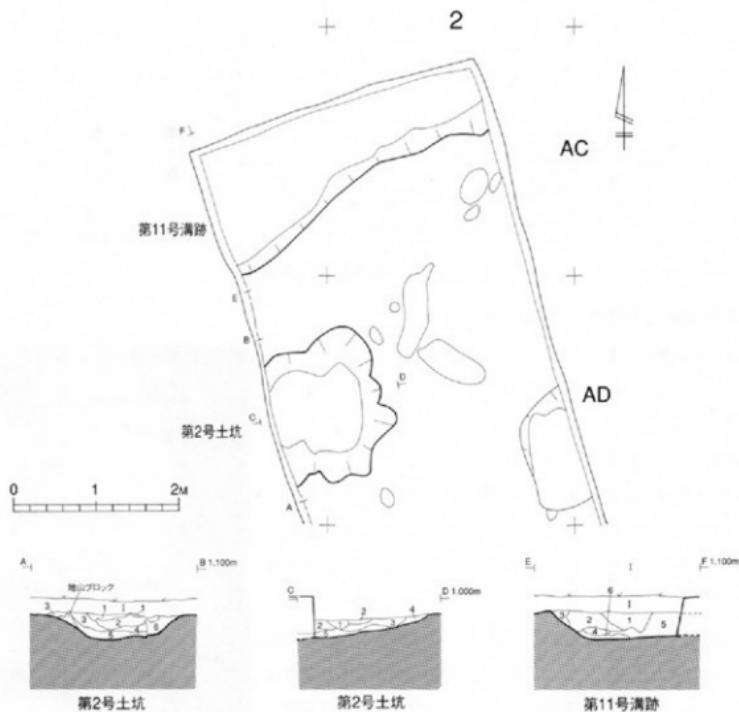
〔堆積土〕 黒色ないしは黄灰褐色の砂質シルトを基調とし、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕 覆土中から土師器の破片が、底面付近から須恵器の破片がそれぞれ出土している。1は土師器の口縁部であり器種は不明。外面には細かい刺突痕が認められるが調整もしくは文様として施されているのかどうかは不明である。また、この土器片は覆土中から出土したため、当遺構に伴うものかどうかは判然しない。2は須恵器の口縁部であり、クロ調整である。

#### その他の出土遺物（第14図、第29~30図版）

1は北側トレンチのピット199から出土したやや小ぶりの土師器窓の口縁部破片である。口縁部外面には横ナデが、胴上半部にはハケメが施される。また内面はヘラナデによって調整されている。2は遺構外出土の器台である。内外面とも摩滅が激しく、調整は不明。円窓は3つある。3も遺構外出土の複合口縁窓の口縁部～頸部の破片である。口縁部には横ナデが施されている。





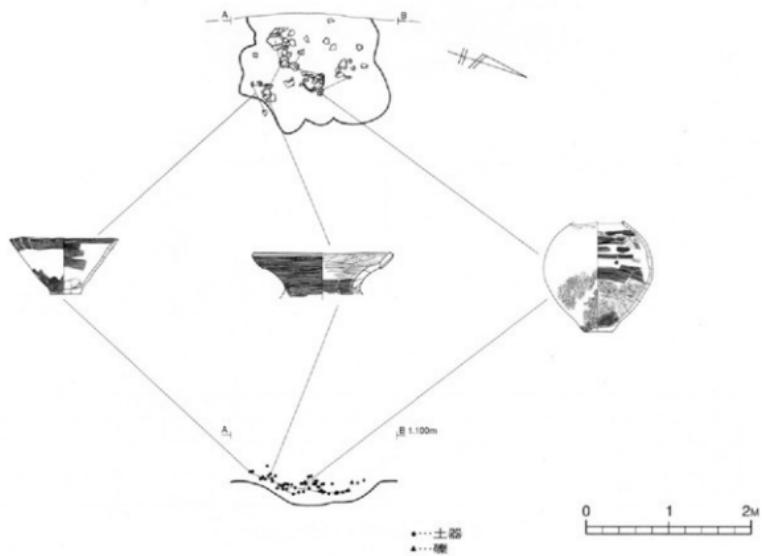
層No	土色	土性	特徴
1	IOYR4./1 黒灰色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
2	IOYR3./1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に比較的多く混入する。
3	IOYR2./1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
4	IOYR2./1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
5	IOYRL7./1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
6	IOYR4./2 黒黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を若干混入する。

第2号土坑

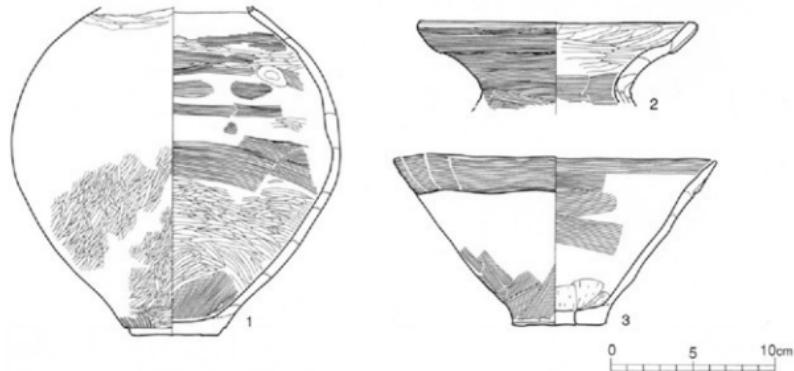
層No	土色	土性	特徴
1	IOYR2./1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
2	IOYR3./1 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に比較的多く混入する。
3	IOYR4./2 黑黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を若干混入する。
4	IOYR2./1 黑褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。
5	IOYR4./2 黑黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を若干混入する。
6	IOYRL7./1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に若干混入する。

第11号溝跡

第10図 第11号溝跡・第2号土坑

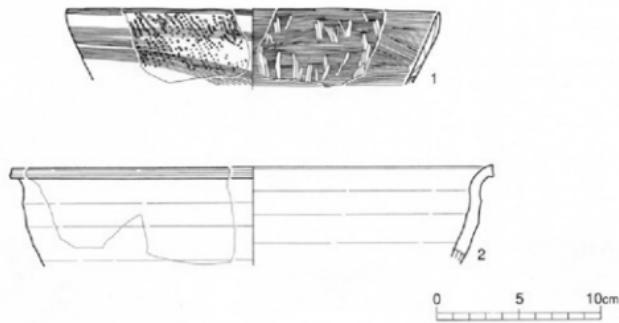


第11図 第2号土坑遺物分布図



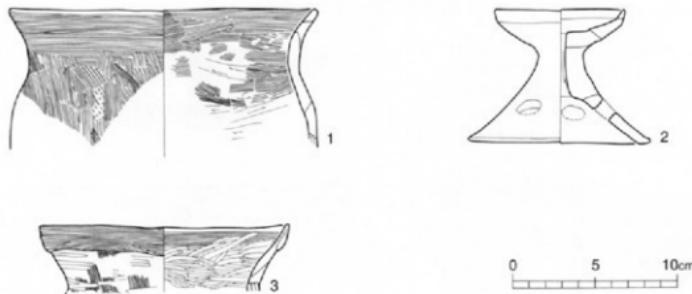
NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴			法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	器高	口径	底径			
1	土師器	壺	底面	[網]ミガキ、[底]ハケヌ	[網]ヨコナゲ+ミガキ、[底]ナゲ	(20.0)	—	5.2	口縁欠損	30	
2	土師器	壺	底面	[口]ヨコナゲ	[口]ミガキ、ヨコナゲ	(5.5)	16.8	—	口縁部破片	30	
3	土師器	有孔鉢	底面	[口]ヨコナゲ、[体]ヘラナゲ	[口]~[底]ヘラナゲ、[底]ケズリ	10.1	19.5	5.7	完形	30	

第12図 第2号土坑出土遺物



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	器高	口径	底径		
1	土師器		第11号溝跡	〔口〕側面→ヨコナデ	〔口〕ヨコナデ→ミガキ	—	22.7	—	口縁部 破片	31
2	瓦芯器	壺	第11号溝跡	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	—	29.3	—	口縁部 破片	31

第13図 第11号溝跡出土遺物



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	器高	口径	底径		
1	土師器	壺	北トレンチ ピット109	〔口〕ヨコナデ、〔脚〕ハケメ	〔口〕ヘラナデ、〔脚〕ヘラナデ	(8.8)	18.7	—	2／8	29
2	土師器	器台	道機外	焼成が極しく不明	焼成が極しく不明	8.0	7.9	(9.0) 11.1	4／5	29
3	土師器	壺	道機外	〔口〕ヨコナデ、〔体〕ハケメ→ミガキ	〔口〕～〔体〕ヨコナデ→ミガキ	(4.0)	15.1	—	口縁部 破片	30

第14図 その他の出土遺物

## 2. F 地点

第1号溝跡（第17図、第19・20・31図版）

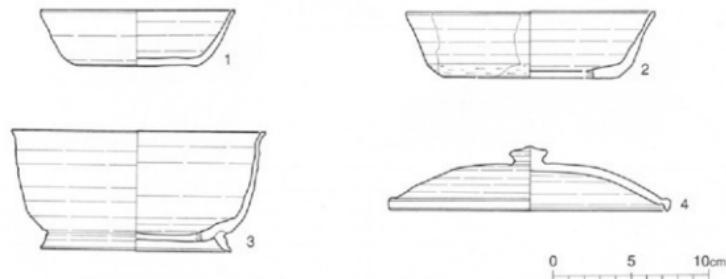
〔位置・検出状況〕 調査区東端、AW～BA-19～20グリッドにおいて検出され、南北端部および東側は調査区外におよんでいる。また、方向は、N-20°-Eである。

〔重複関係等〕 部分的に小ピットに切られるのみである。

〔断面形・規模〕 上幅は最も広い部分の確認部分で1.5mを測り、下幅は1.1mを測る。壁は外側に開きながら立ち上がり、底面は比較的平坦であると考えられる。また確認面からの深さは70cmである。

〔堆積土〕 黒色およびオリーブ色の砂質シルトを基調とし、4層確認された。第2層には灰白色火山灰を多量に混入する。堆積状況は自然堆積であると考えられる。

〔出土遺物〕 底面付近から土器が出土している。図示できたものは4点である。1および2は須恵器坏で調整はロクロナデ、底部は回転糸切である。3は高台付の坏であり、ロクロナデである。また4は蓋でロクロ調整がなされ、3と対になると考えられる。以上の須恵器は奈良時代のものであると考えられる。溝跡内に堆積している灰白色火山灰とも考え合わせると、当遺構の時期は奈良時代から平安時代であると思われる。



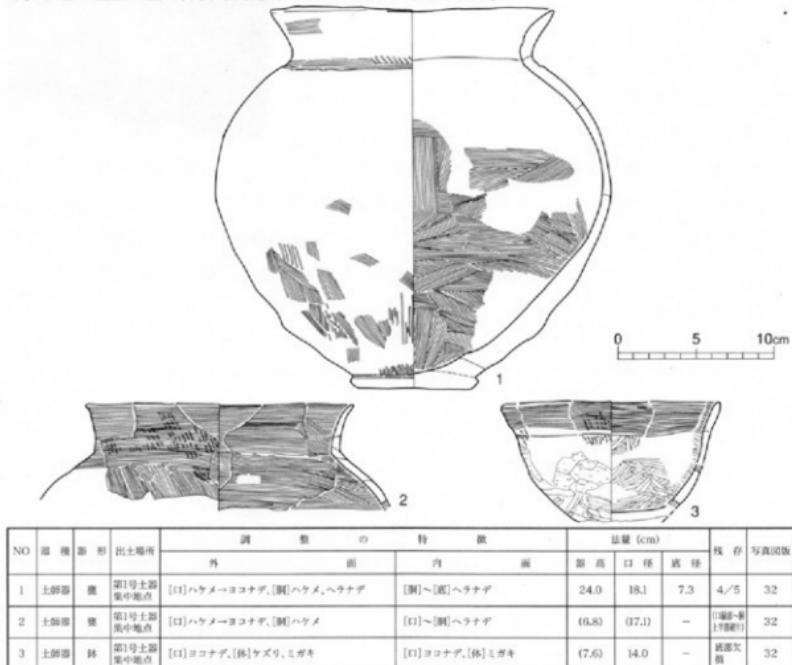
NO	器種	縁形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			現存	写真図版
				外 面	内 面	縦 横	口 径	底 径		
1	須恵器	坏	底面	[口]～[底]ロクロナデ、[底]回転糸切	[口]～[底]ロクロナデ	3.6	12.4	7.8	3/5	31
2	須恵器	坏	底面	[口]～[底]ロクロナデ、[底]回転糸切	[口]～[底]ロクロナデ	4.3	15.9	11.1	3/5	31
3	須恵器	高台坏	底面	[口]～[底]ロクロナデ	[口]～[底]ロクロナデ	7.6	16.2	(高台)[12.1]		31
4	須恵器	蓋	底面	ロクロナデ	ロクロナデ	4.1	—	(蓋)[18.0]		31

第15図 第1号溝跡出土遺物

### 第1号土器集中地点（第16図、第20・32図版）

【位置・検出状況】第1号溝跡の西側側縁部のAZ-19グリッドにおいて検出され、土器は東西1.3m、南北90cmの範囲に広がっており、掘り込みを伴っていない。

【出土遺物】出土した土器は全て土師器の破片であり、図示できたものは3点である。1は壺で口縁部は大きく外反しながら立ち上がる。磨滅が激しく、全体の調整は判然としないが、外面はハケメの後ヘラナデ、内面はヘラナデが施されている。古墳時代前期と思われるが、他の土器と異なり、胎土が白色を呈する。2は口縁部が直立に近い形で立ち上がる壺である。内外面ともハケメの後ヘラナデが施されている。3は鉢である。比較的厚手で、口縁部にはヨコナデ、体部にはミガキとケズリが入る。以上の土器は全て古墳時代前期のものであると考えられる。



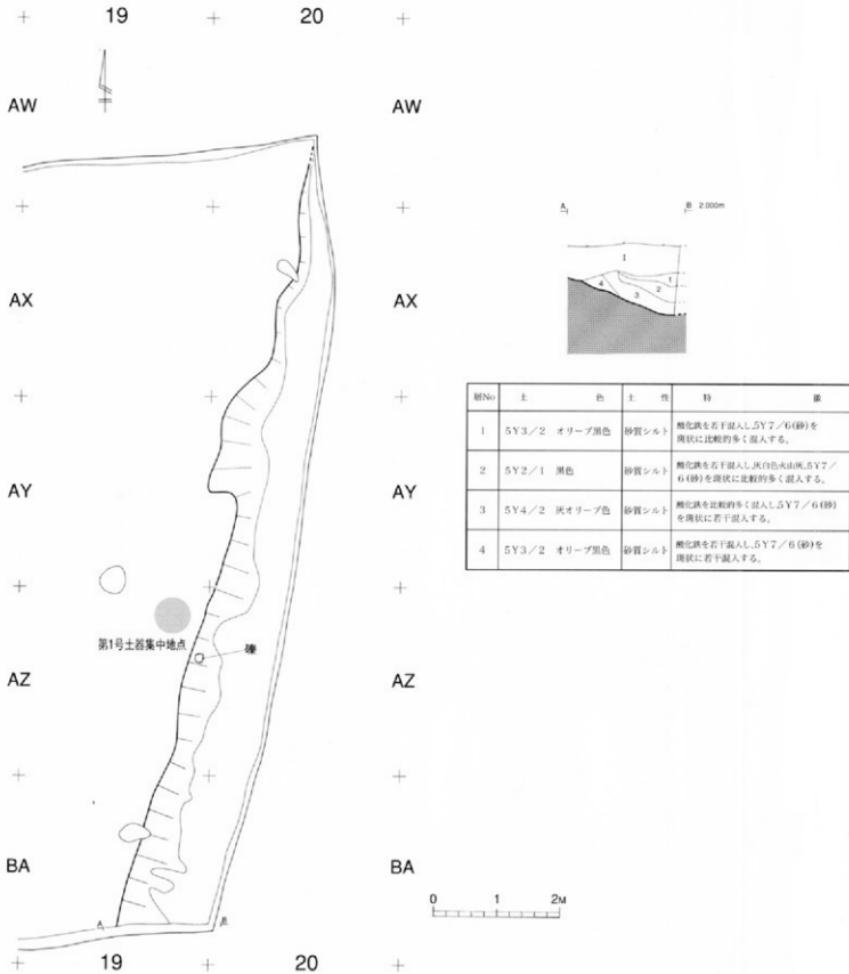
第16図 第1号土器集中地点出土遺物

### 第1号土坑（第18・19・20図、第20・32図版）

【位置・検出状況】第1号溝跡の西側、AX～AY-18～19グリッドにおいて検出され、第2号溝跡と近接関係にある。

【重複関係等】認められなかった。

【断面形・規模】東西に長い不整長楕円形を呈し、規模は2.6m×1.4mを測る。壁は大きく外側に開



第17図 第1号溝跡・第1号土器集中地点



第18図 第1号土坑・第2号溝跡

きながら立ち上がり、底面には凹凸が見られる。確認面からの深さは30cm程度で浅い。土坑内全面から多量の土器片が出土している。

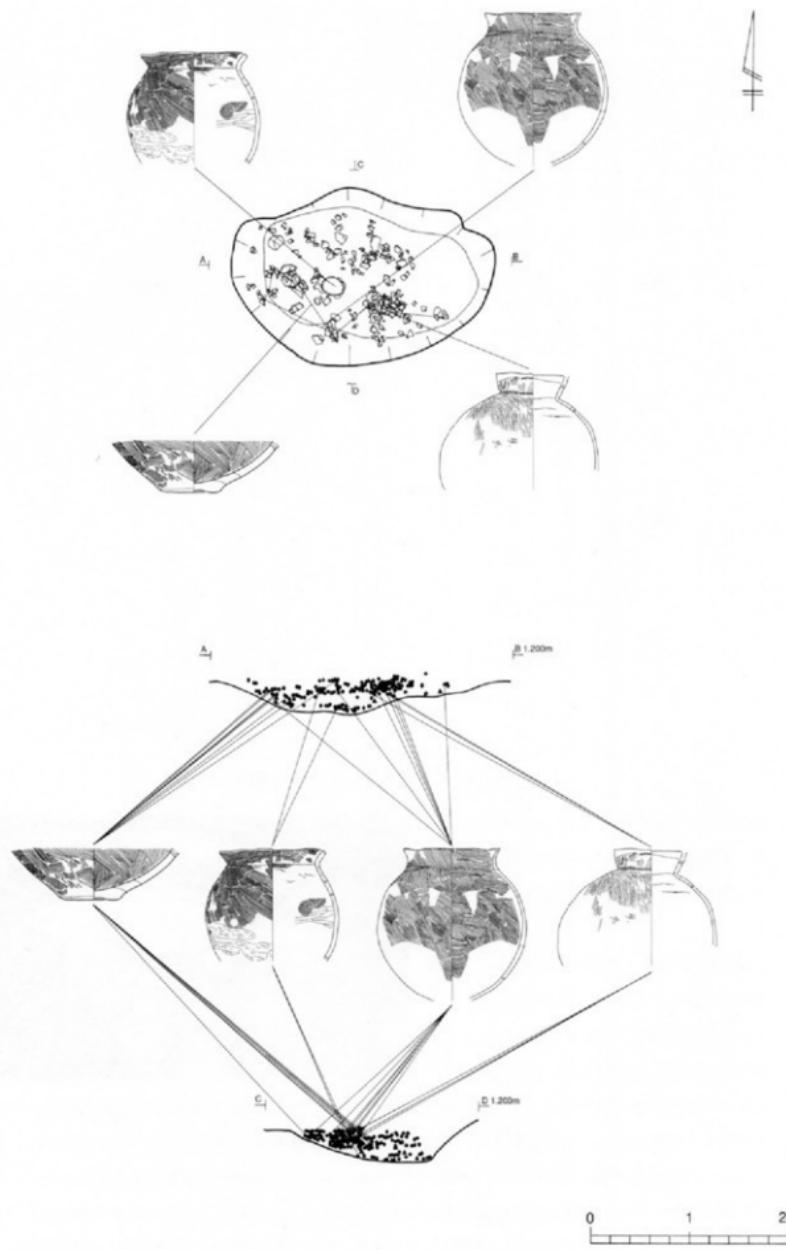
〔出土遺物〕出土した遺物は土師器片と石器であり、図示できたものは5点である。

1は土師器甕であり、胴下半部を欠損する。

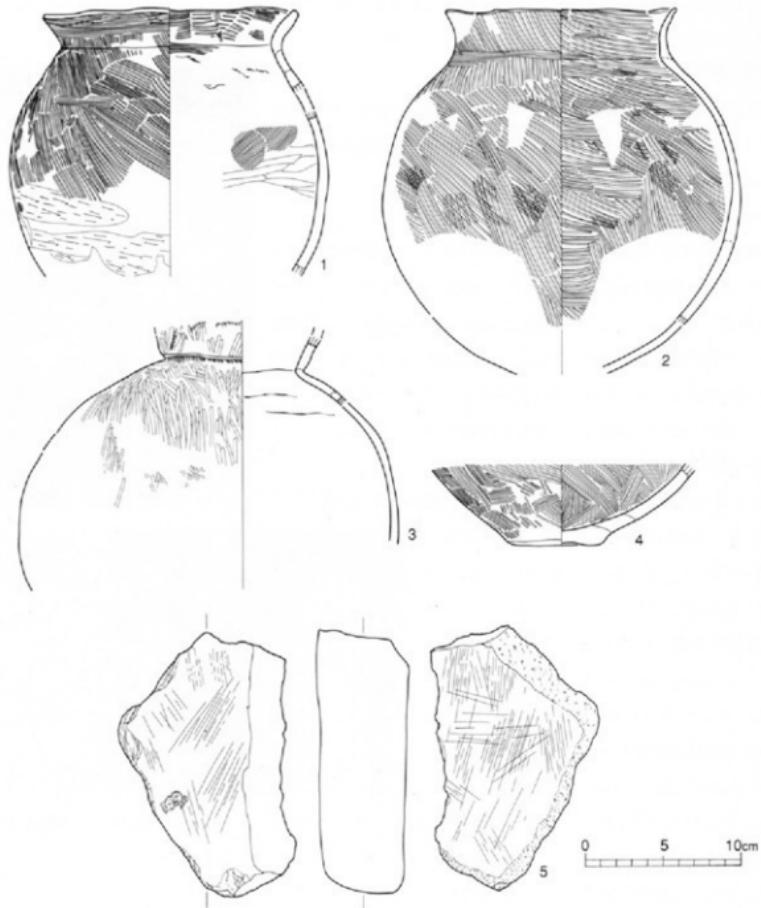
口唇部は面取りされており、外面はハケメと

ヨコナデが、内面にはハケメ、ナデ、ミガキが施されている。2は胴下半部欠損の土師器甕である。内外面とも比較的深いハケメが施され、外面頸部にヨコナデが巡る。球形を呈する土器である。3は体口唇部並びに下半部欠損の球形の体部を呈する壺である。口縁部の中心軸がややずれています。表面の剥落が激しいが、外面には比較的丁寧なミガキが施されていたと考えられる。4は甕の底部であると考えられる。底部は上げ底で、外面はヘラナデとハケメ、内面はヘラナデによって調整されている。5は砥石である。自然石（粘板岩）を利用し、外面には敲打痕が認められ、内外面ともに多くの





第19図 第1号土坑遺物分布図



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴			法量(cm)	残存	写真図版
				外 面	内 面	面高 口径 底径			
1	土師器	甕	底面	【口】ハケメ→ヨコナゲ、【腹】ケズリ→ハケメ	【口】ハケメ、【腹】ナゲ、ミガキ	17.0	16.2	—	脚下半 部欠損 32
2	土師器	甕	底面	【口】ハケメ、【腹】ヨコナゲ、【腹】ハケメ	【口】～【腹】ハケメ	23.0	14.8	—	脚下半 部欠損 32
3	土師器	壺	底面	【口】ハケメ→ミガキ、【体】ミガキ		17.0	—	—	4/10 32
4	土師器	甕	底面	【腹】ヘナナゲ	【腹】ヘナナゲ	5.1	—	5.1	底部 鏡片
5	器種	出土地点	計測値(cm)	石材	残存	備	考		写真図版
5	砾石	底面	16.8×10.7×5.9	粘板岩	完形				41

第20図 第1号土坑出土遺物

擦痕が観察される。1から4までの土器は全て塩釜式期に位置づけられ、当土坑の時期は古墳時代前期であると考えられる。

#### 第2号溝跡（第18図、第21図版）

【位置・検出状況】調査区東側、AX～AY-18グリッドで第1号土坑の西側において検出され、北側および南側は調査区外におよんでいる。

【重複関係等】認められなかった。

【規模・形態】溝跡の方向はN-15°-Eで、上幅は40cm～70cm下幅は10cm～44cmを測り、内部に布掘上のピットを多数検出している。ピットの直径は15cm～24cmであり、円形ないしは梢円形を呈し溝跡の底面に一列に配置されている。間隔は不規則である。また方向が第1号溝跡とほぼ一致するため、並行して構築されていた棚などの施設の可能性が考えられる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

#### 第2号土器集中地点（第21・22図、第22・23図版）

【位置・検出状況】調査中央部、AZ～BA-14～15グリッドにおいて検出した複数の土器片が集中して出土した地点である。

【規模・形態】土器片は北東～南西方向に1.4m、北西～南東方向に80cmの範囲に広がっており、底面に若干の凹凸が見られるが、明確な掘込は確認することができなかった。

【出土遺物】出土した遺物は全て土器で図示できたものは1点である。1は土師器の甕口縁部～胴上半部である。外面口縁部はハケメの後ヨコナデ、胴部にはハケメが施され、内面口縁部にはハケメの後ヨコナデ、胴部にはヘラナデがそれぞれ観察される。古墳時代前期のものであると考えられる。

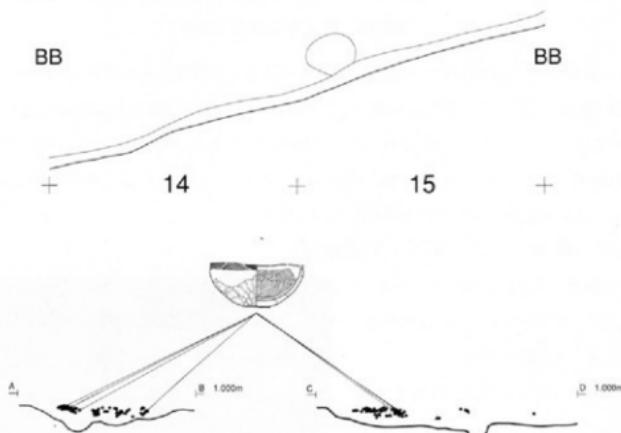
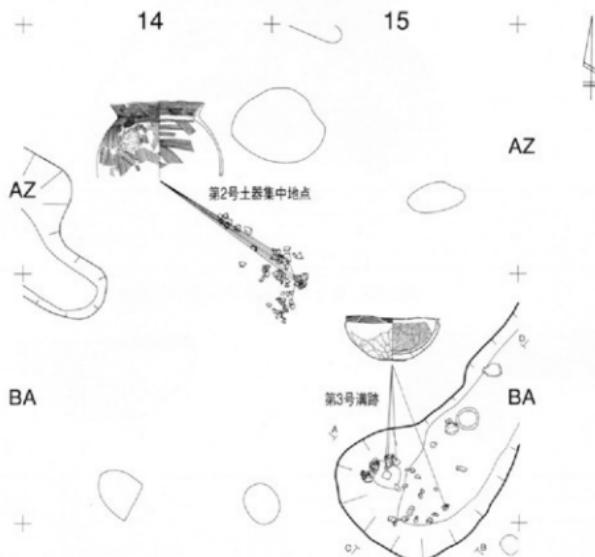
#### 第3号溝跡（第21・23図、第33図版）

【位置・検出状況】調査中央部、AZ～BB-15～16グリッド中において検出され、北側は第3号土坑に切られ、南側はBB-15グリッドで収束している。

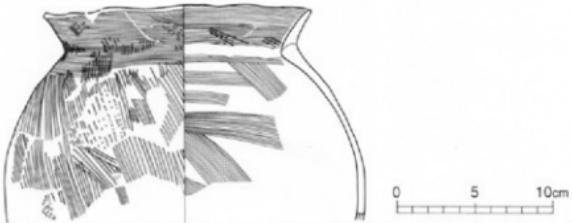
【重複関係】北側が第3号土坑に切られている。

【断面形・規模】上幅は1.0m～1.4m、下幅





第21図 第2土器集中地点 第3号溝跡



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	器高	口径	底径		
1	土師器	壺	底面	【(1)】ハケメ→ヨコナデ、【(2)】ヨコナデ、【(3)】ハケメ 【(4)】ヘラナデ	【(1)】ハケメ→ヨコナデ、 【(2)】ヨコナデ、 【(3)】ハケメ 【(4)】ヘラナデ	(13.9)	17.1	—	脚下半 腹次頭	33

第22図 第2号土器集中地点出土遺物



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	器高	口径	底径		
1	土師器	壺	底面	【(1)】ヨコナデ、【(2)】ハケメ	【(1)】～【(2)】ヘラナデ	(7.6)	17.0	—	口縁部 鏡片	33
2	土師器	鉢	底面	【(1)】ヨコナデ、【(2)】ケズリ	【(2)】ミガキ	5.2	11.2	3.4	完形	33

第23図 第3号溝跡出土遺物

は50cm～1.0mを測り、底面には若干の凹凸が見られるが浅く、確認面からの深さは30cm程度しかない。  
 (出土遺物) 遺物は土器で図示できたものは2点である。1は複合口縁壺の口縁部であると考えられ、外表面にはハケメとヨコナデが、内面にはヘラナデがそれぞれ施されている。2は小型の浅い鉢で、口唇部に屈曲が見られ、ヨコナデが施され、体部にはヘラケズリが見られる。また内面にはミガキが施されている。以上の土器は古墳時代前期と考えられる。

### 第3号土坑 (第24・25図、第21・33図版)

〔位置・検出状況〕 調査区東側、AY～A

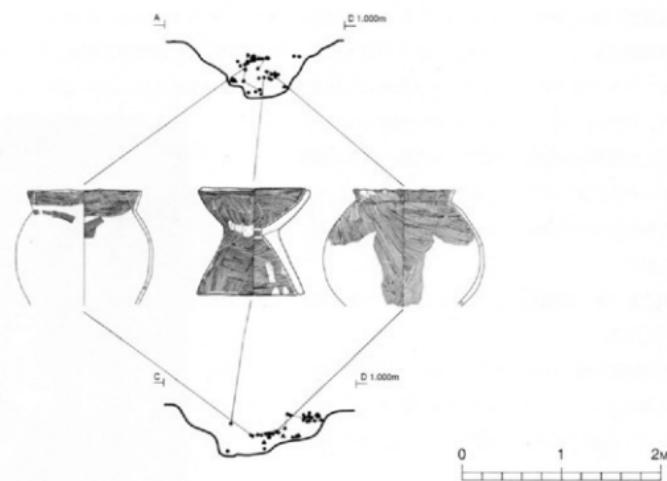
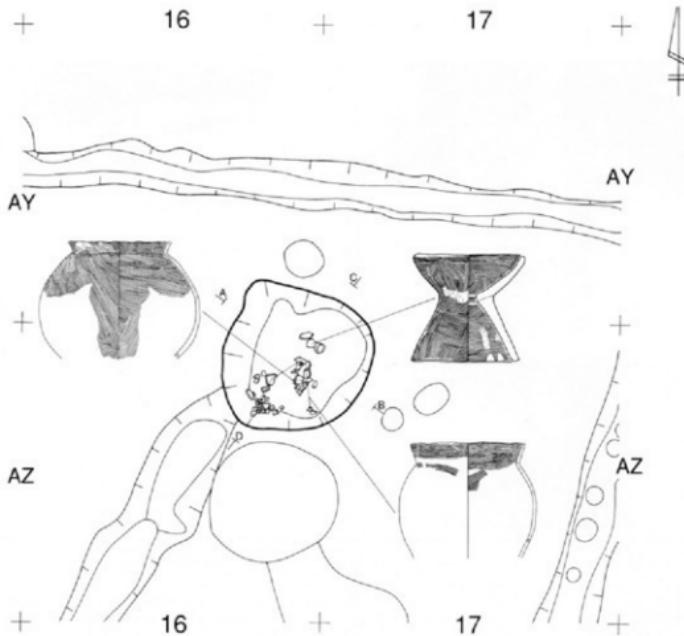
Z-16～17グリッド中において検出された。

〔重複関係〕 第3号溝跡を切っている。

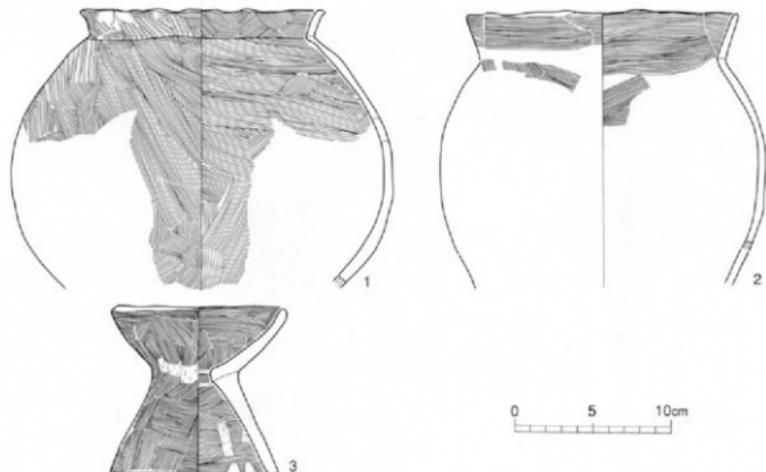
〔平面形・規模〕 直径1.5mの不整形を呈し、断面形は浅いすり鉢状を呈する。壁は凹凸を持ちながら外側に開く形で立ち上がる。また、底面にも凹凸が見られ、確認面からの深さは50cmである。



〔出土遺物〕 遺物は土器で、中央部南西側の覆土から底面全域において出土した。図示できたものは



第24図 第3号土坑



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図
				外 面	内 面	高 さ	口 径	底 径		
1	土師器	甕	底面	[口]ハケメ、割頭注瓶、[側]ハケメ→ヘラナデ	[口]～[側]ヘラナデ	(17.9)	15.6	—	側下半 部欠損	33
2	土師器	甕	底面	[口]ヨコナデ、[側]ヘラナデ	[口]ヨコナデ、[側]ヘラナデ	(17.5)	17.4	—	側下半 部欠損	33
3	土師器	器台	底面	[器受]ケズリ→ヘラナデ、[側]ヘラナデ	[器受]ヘラナデ、[側]ケズリ→ ヘラナデ、割頭注瓶	10.7	11.2	10.8	完形	33

第25図 第3号土坑出土遺物

3点である。1は甕であり胴下半部を欠損する。口縁部は短く、やや外側に開きながら立ち上がる。胴部は球形に近い形を呈すると考えられる。外面にはハケメの後へラナデが、内面にはヘラナデがそれぞれ観察される。2も甕であり、2次焼成等に伴う剥落が激しく、調整の詳細は不明である。内外面ともにヘラナデが観察される。3は粗製の器台である。第3号土坑では、この土器のみが完形で出土した。内外面ともヘラナデ、ケズリが施されている。

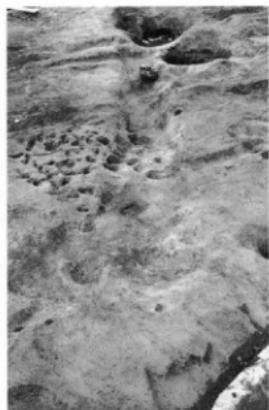
#### 第3号土器集中地点（第26・27図、第34図版）

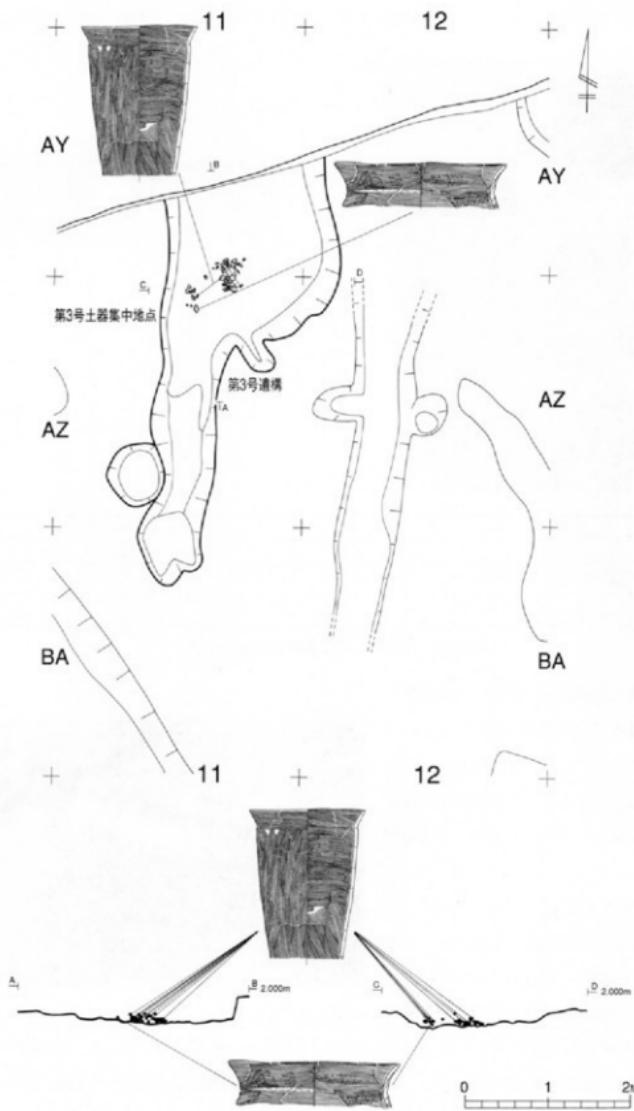
〔位置・検出状況〕調査区西側、AY～BA-II～12グリッドにおいて検出された土器片が集中して出土した地点で、若干の掘り込みを持つ。

〔重複関係〕第3号遺構と重複関係にあると考えられるが新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕掘り込みは東西2.0m、南北2.8mであり、北側は調査区外におよんでいる。深さは確認面から15cm程度しかない。土器片はこの掘り込みの中央部分から南西側に広がっており、底面部分に集中している。

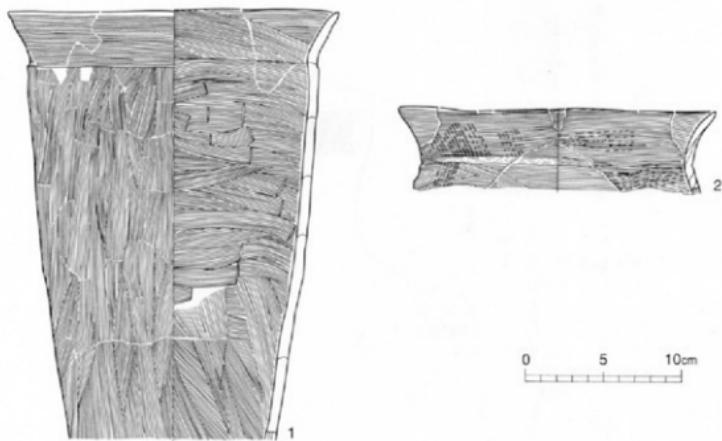
〔出土遺物〕図示可能なものは2点である。1は土師器長胴甕で





第26図 第3号遺構・第3号土器集中地点

ある。内外面とも口縁部にヨコナデ、胴部にはヘラナデが施されている。2は甌の口縁部破片である。内外面ともハケメの後ヨコナデヘラナデが施されている。以上の土器は古墳時代後期の可能性がある。



第27図 第3号土器集中地点出土遺物

#### 第4号溝跡（第28図、第23・34図版）

〔位置・検出状況〕 調査区西側、A-Z～B-C-9～12グリッドにおいて検出され、南側は調査区南壁外におよび、北側は調査区北壁からE地点北側トレンチへと抜け、第4号溝跡となる。

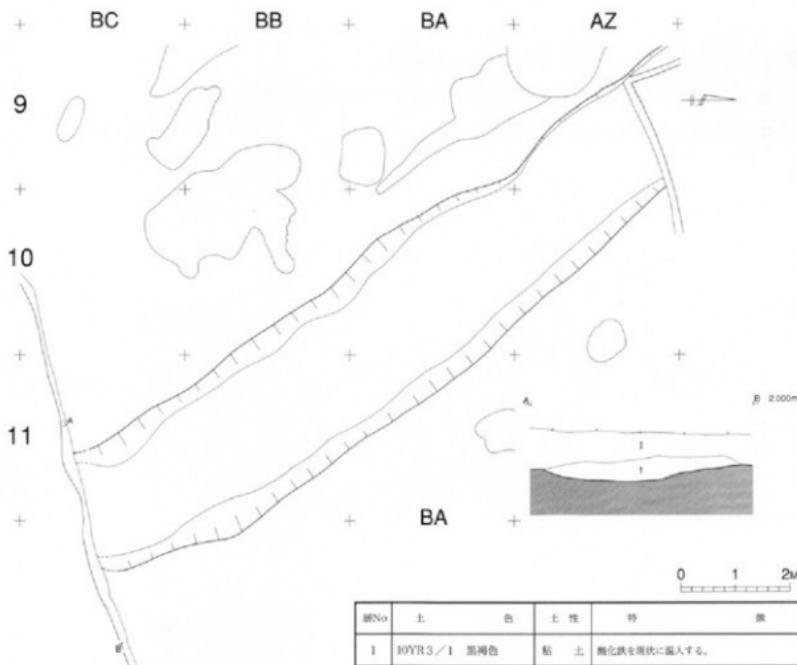
〔重複関係〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 上幅2.2m～2.8m、下幅1.6m～2.0mを測り、壁は大きく外側に開き

ながら立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは40cmを測る。

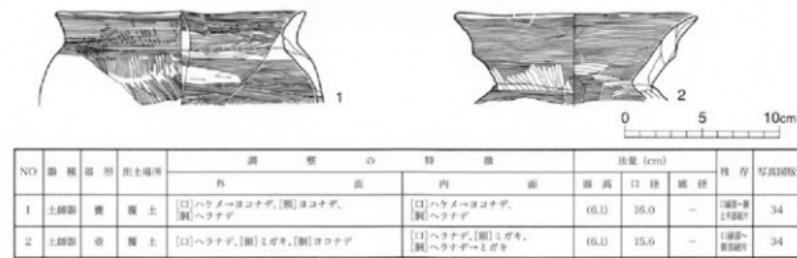
〔堆積土〕 黒褐色の砂質シルトであり、基本土層第I層下面から掘り込まれている。E地点の第4号溝跡の時期的な判断は、近世以降であり、この土層堆積状況はF地点においてもそれを肯定し得ると考えられる。





第28図 第4号溝跡

〔出土遺物〕覆土から、古墳時代前期と考えられる土器片が出土しているが、溝跡の土層から見て、流れ込みの可能性が強い。1はやや小ぶりの壺の口縁部～胴上半部の破片である。外面口縁部はハケメの後ヨコナデ、胴部はハケメがそれぞれ施されている。内面口縁部はハケメ、胴部はヘラナデがそれぞれ観察される。2は壺の口縁部～頸部破片である。膨らみを持つ口縁を有し、外面はミガキの後ヨコナデ、内面はヨコナデ、ヘラナデの後ミガキが施されている。

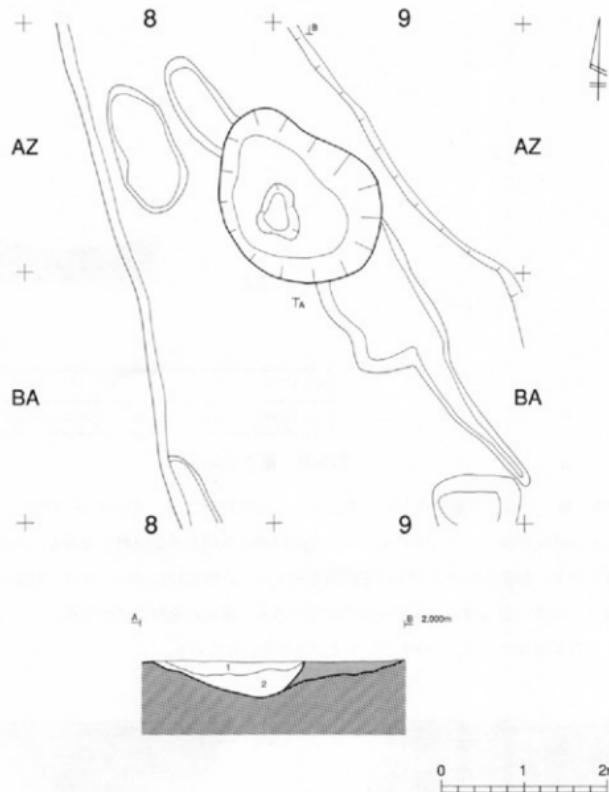


第29図 第4号溝跡出土遺物

第5号土坑（第30～40図、第23・34～38図版）

〔位置・検出状況〕 調査区西端、AZ～BA-8～9グリッドにおいて検出された。

〔重複関係〕 性格不明の掘り込みを切っている。



層No	土　　色	土　性	特　　徴
1	10YR 3 / 1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入し、10YR 7 / 4 (S)を斑状に若干混入する。
2	5Y 2 / 1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を若干混入し、10YR 7 / 4 (S)を斑状に比較的多く混入する。

第30図 第5号土坑



第31図 第5号土坑遺物分布図

〔平面形・規模〕 2.3m×1.8mの不整角円錐を呈し、断面はすり鉢状で、壁は南側が緩やかで北側が急な傾斜を持って立ち上がる。底面は比較的平坦で、一段低くなったピット状の落ち込みが見られ、確認面からの深さは40cmを測る。

〔堆積土〕 2層に分けられ、黒褐色土、黒色土の砂質シルトであり、自然堆積の様相を呈する。

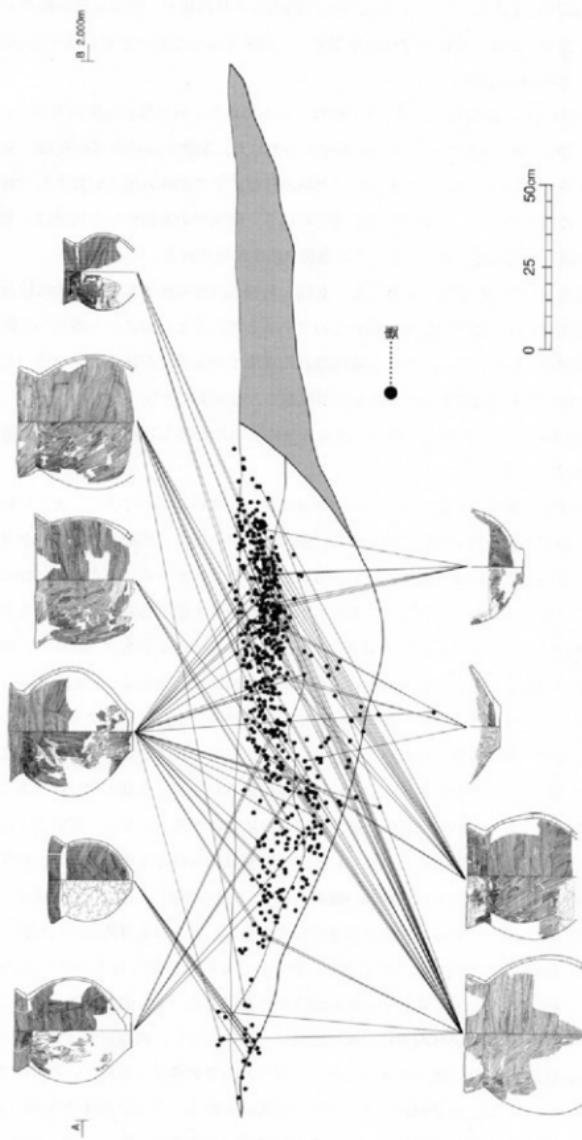
〔内部の状況〕 土坑内部からは極めて多量の土器片が出土した。遺物の面的な広がりは、土坑の北側に多く、南側にはやや少ない。また、南東側では土坑の外部にまで遺物の出土がおよんでおり、この土坑の上面はすでに削平されてしまっていると考えられる。断面での遺物の分布状況は、北側が上面に近い部分に、南側は底面に近い部分にそれぞれ遺物の集中が見られる。

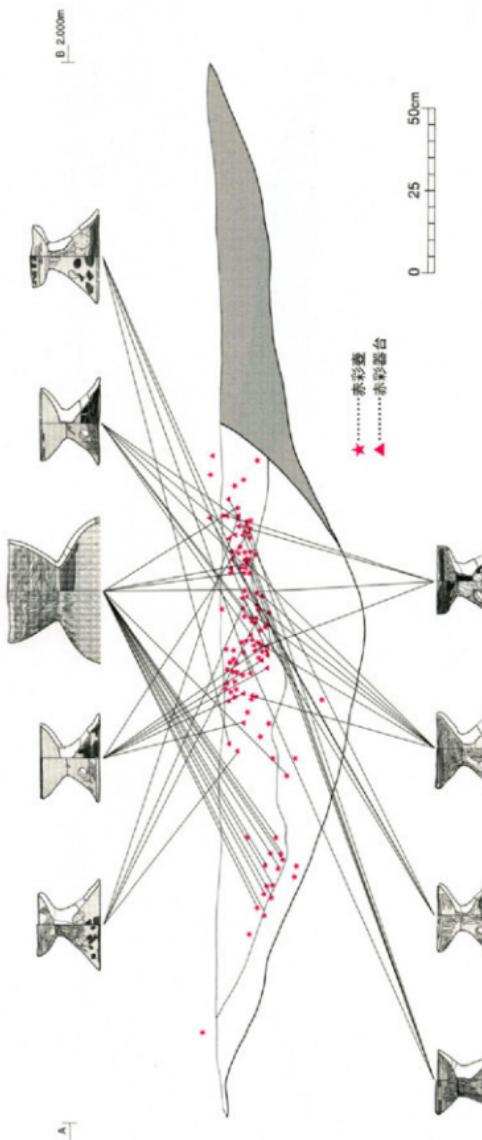
これを接合関係を示した図に表現してみると、北側と南側双方から出土した土器片に接合関係が見られ、当土坑の出土遺物は一括性が極めて高いものであると言えると同時に、土器片が北側から南側へ流れ込んだ状況が見受けられる。一方、比較的離れた場所での土器片が接合関係を持つものがあることから、破片の状態で土坑内に廻棄されたものがあることを示唆できる。

〔出土遺物〕 第5号土坑からは極めて多量の土器ならびに土器片が出土した。これらの土器のうち図示できたものは36点におよぶ。

第35図1から3までは壺で、外面に深く太いハケメが施されているものである。また口唇部には平坦面が作出され、わずかに内湾気味に立ち上がる。胸部は球形に近く、内面まで太いハケメが施されているもの(1)とヘラナデにより調整されているもの(2、3)がある。また3は外面にケズリも見られる。以上の土器は、第5号土坑出土の土器の中で特徴的な土器である。第36図1もまた外面に深いハケメが施されているものであるが、口縁部が外側に大きく開きながら立ち上がり、胸部はやや直立傾向をもつものである。このハケメは口唇部から口縁部内面にまでおよび、胸部内面はヘラナデが施されている。2、3は大きく外反しながら開く口縁部を持ち、上部にピークを有するやや継長の胸部を呈する壺である。外面に施されたハケメはまばらで、口縁部にはヨコナデが施されている。また、内面はヘラナデによる調整である。4、5は口唇部に刻み目を有する壺の口縁部である。刻み目は浅く、間隔もまばらである。小片であるため、器形の全体像は判然としない。第37図1はいわゆる元屋敷系の高壺である。内外面とも赤彩されているが、調整はそれほど丁寧ではない。壺部から脚部へ至る屈曲も明瞭でなく、脚部にも内湾傾向が認められず、外側に開く。孔は3つである。比較的新しい段階のものであると考えられる。2は赤彩された壺である。外面および内面の口縁部には丁寧なミガキが施され、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。3は複合口縁を有する壺の口縁部である。ヘラナデによって調整されている。4～7は比較的小型の壺である。4は直立気味の短い口縁部を有し、比較的厚手である。外面および内面口縁部には粗いハケメを有し、内面胸部はヨコナデが施されている。5は外面胸部にケズリの後ハケメが、6はケズリのみで調整が行われているものである。双方とも口縁部にはヨコナデが、内面胸部にはヘラナデが認められる。5の口縁部は外側に開きながら立ち上がり、6は口唇部で内湾傾向を持つ。7は比較的薄手の外面胸部に粗いハケメが見られるものである。破片であるため全体の形状は不明であるが、比較的長い口縁部を有し、胸部のピークは上面

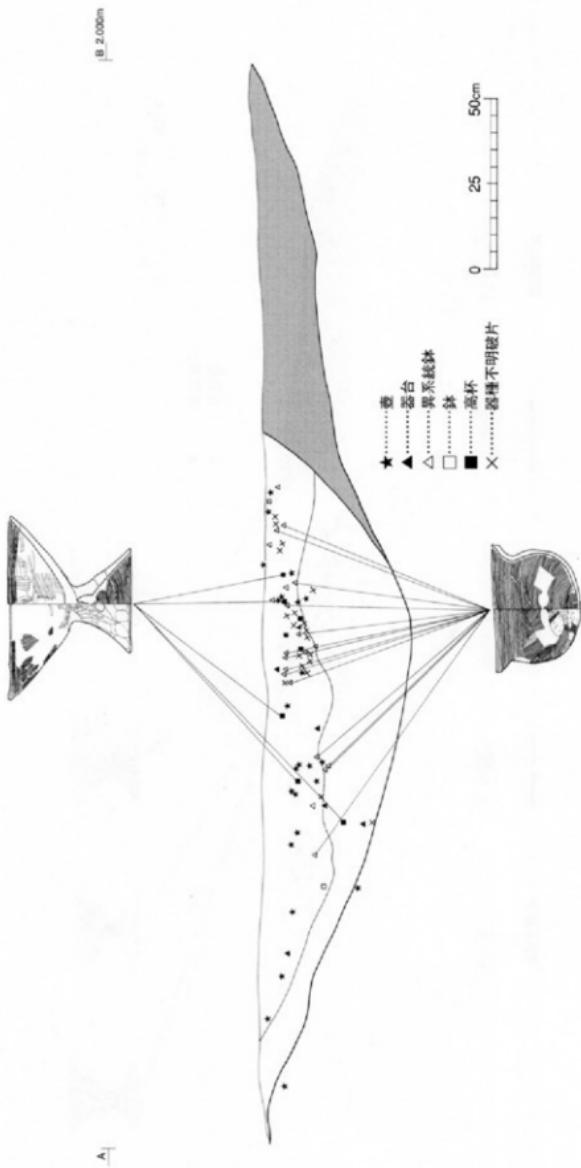
第32図 第5号土坑出土遺物②

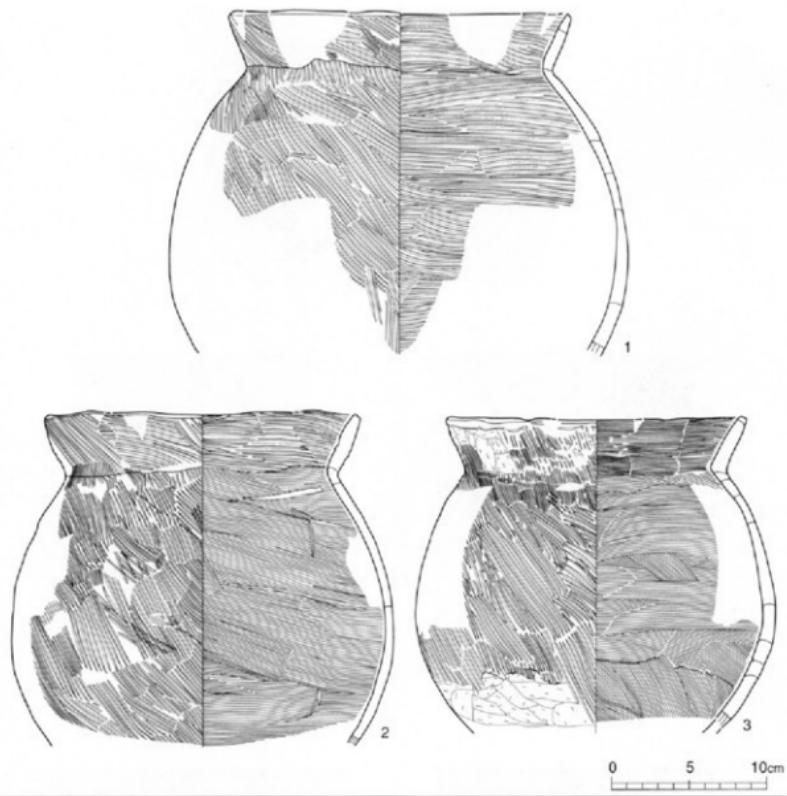




第33圖 第5號土坑出土遺物③

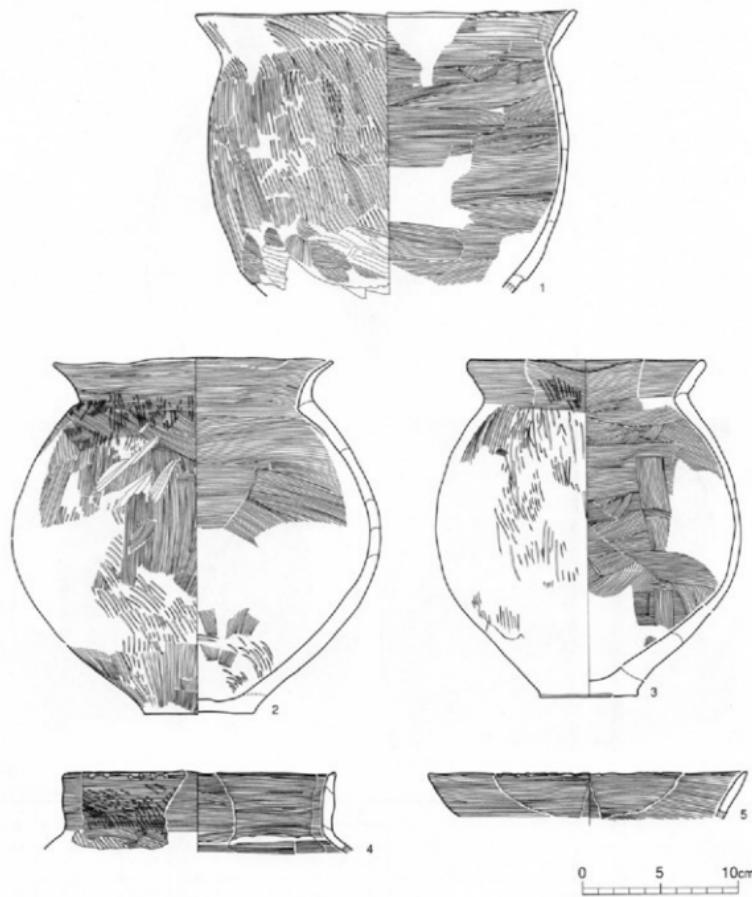
第34図 第5号土坑出土遺物4





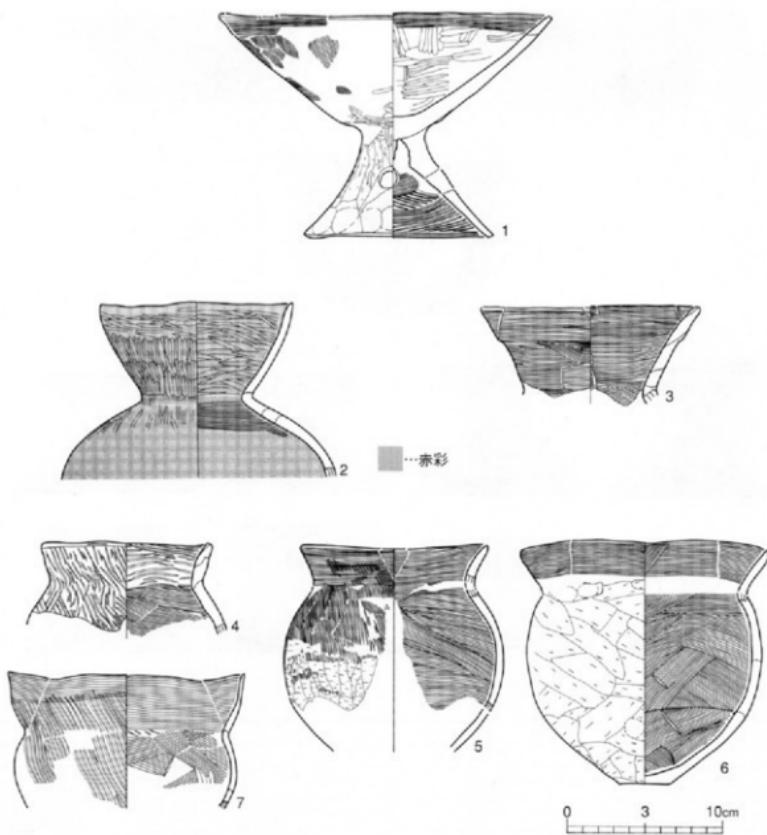
第35図 第5号土坑出土遺物①

に認められる。第38図1、2は内外面とも赤彩された鉢の破片である。内外面とも丁寧なミガキが施され、1よりも2の方がやや外側にひらきながら立ち上がるを考えられる。3は球形の底部を持つ鉢である。口縁部上端に沈線を有し、口唇部はつまみ上げた形状を呈する。体部上部から底部にかけては球形にすぼまり、底部は若干ではあるが上げ底である。調整は内外面ともヘラナデが主であるが、外面底部にはケズリやミガキも認められる。県内には見られないものであると考えられる。4から11は器台で円窓は全て3つである。4は直立傾向をもつもの、5、6は口縁部がわずかに直立するものである。7、8、9は比較的偏平で、大きく外側に開く脚部を有する。7は脚部端部がやや内湾気味のもの、8、9は外反するものである。また、10は口縁部が内湾するもの、11は直立して立ち上がる



第36図 第5号土坑出土遺物②

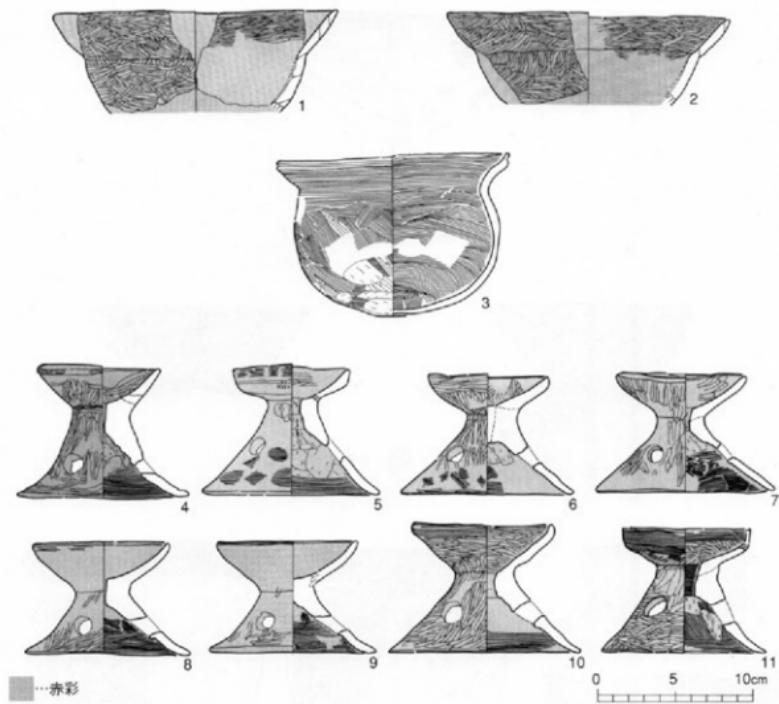
ものである。これらの器台は全て外面全面と内面器受部に丁寧なミガキが施され、赤彩されている。第39図1、2は底部である。1は外面にハケメが、内面にヘラナデが施され、2はミガキによって調整されている。第40図は甕の口縁部～胴上半部の破片である。口縁部は外反しながら立ち上がり、ヨ



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	幅 高	口 径	底 径		
1	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ヨコナデ、【身】ハナデ、ミガキ、【脚】ヘラケズリ	【口】ヨコナデ、【身】ミガキ、 【脚】ヘラメ、ナデ	14.4	21.2	(12.2)	完形	34
2	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ミガキ、【身】ミガキ	【口】ミガキ、【身】ハラナデ	(11.2)	12.3	-	体下平 部欠損	36
3	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ヨコナデ、ヘラナデ	【口】ヘラナデ	(6.2)	14.0	-	口縁部 破片	
4	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ハケメ、【脚】ハケメ	【口】ハケメ、【脚】ヘラナデ	6.0	11.0	-	口縁部 破片	
5	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ハケメ→ヨコナデ、【身】ハケメ→ケズリ	【口】ヨコナデ、【脚】ヘラナデ	(13.0)	(12.0)	-	脚部 破片	38
6	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ヨコナデ、【脚】ケズリ	【口】ヨコナデ、【脚】ヘラナデ	(15.3)	(16.0)	-	4／5	38
7	土師器	壺	第5号 土坑	【口】ハケメ→ヨコナデ、【脚】ハケメ	【口】ヨコナデ、【脚】ヘラナデ	(8.6)	(15.1)	-	脚部 破片	38

第37図 第5号土坑出土遺物③

コナデが施される。胴部外面にはハケメ、内面にはヘラナデがそれぞれ認められる。



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外 面	内 面	横 溝	口 径	底 径		
1	土師器	鉢	第5号 土坑	【口】ミガキ、赤彩、【体】ミガキ、赤彩	【口】ミガキ、赤彩	(6.7)	(18.2)	—	口縁部～ 側縁部	36
2	土師器	鉢	第5号 土坑	【口】ミガキ、赤彩、【体】ミガキ、赤彩	【口】ミガキ、赤彩、【体】ミガキ、赤彩	(5.8)	(18.1)	—	口縁部～ 側縁部	36
3	土師器	鉢	第5号 土坑	【口】ヨコナデ、【体】ヘラナデ～ケズリ、ミガキ、 赤彩	【口】ヨコナデ、【体】ヘラナデ～ ケズリ	(10.2)	14.9	2.2	完形	36
4	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ミガキ、赤彩、【脚】ミガキ、赤彩	【腹受】ミガキ、赤彩、 【脚】ケズリ、ヘラナデ	8.5	8.0	(脚) 11.0	完形	35
5	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ヨコナデ、赤彩、【脚】ミガキ、ナデ、赤彩	【腹受】ミガキ、赤彩、 【脚】ヘラナデ～ヨコナデ	8.5	7.5	(脚) 11.4	完形	35
6	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ミガキ、赤彩、【脚】ミガキ、ナデ、赤彩	【腹受】ミガキ、赤彩、 【脚】ヘラナデ～ヘラナデ	7.7	7.7	(脚) 11.1	完形	35
7	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ミガキ、赤彩、【脚】ミガキ、赤彩	【腹受】ミガキ、赤彩、 【脚】ヘカメ～ヘラナデ	7.5	8.4	(脚) 11.0	完形	35
8	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ヨコナデ、赤彩、【脚】ミガキ、赤彩	【脚】ヘラナデ	7.2	8.8	(脚) 10.6	完形	35
9	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ヨコナデ、赤彩、【脚】ミガキ、赤彩	【脚】ヘラナデ	7.1	9.0	(脚) 10.7	完形	35
10	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ヨコナデ、ミガキ、赤彩、【脚】ミガキ、赤彩	【腹受】ミガキ、赤彩、【脚】ヘラナデ	8.2	9.0	(脚) 12.3	完形	35
11	土師器	盤 台	第5号 土坑	【腹受】ハケメ、ヨコナデ、ミガキ、赤彩、 【脚】ミガキ、赤彩	【腹受】ヨコナデ、ミガキ、赤彩、 【脚】ヘラナデ	8.0	8.1	(脚) 10.6	完形	35

38図 第5号土坑出土遺物④

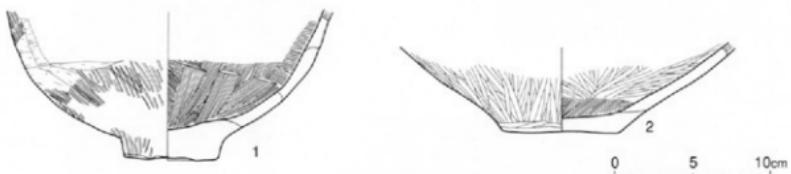
#### 遺構外出土土器（第41図、第38・39図版）

1は複合口縁壺の頭部である。内外面ともにミガキが施され、赤彩されている。2は甕の口縁部から胴上半部である。やや短い口縁部を有し、内外面とも深いハケメが施されている。3は壺の口縁部



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外面	内面	器高	口径	底径		
1	土師器	甕	第5号 土坑	【外】ヨコナデ、【内】ヘラケズリ、ハケメ	【外】ヨコナデ、ヘラケズリ	(7.6)	18.9	—	第39図 1	38

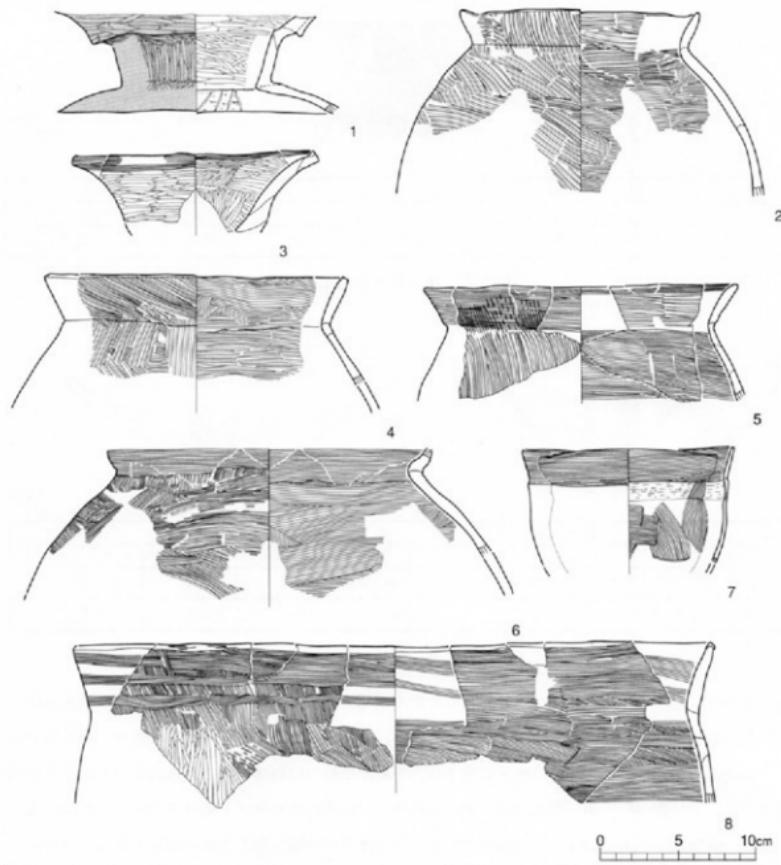
第39図 第5号土坑出土遺物⑤



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴		法量(cm)			残存	写真図版
				外面	内面	器高	口径	底径		
1	土師器	甕	第5号 土坑	【外】ハケメ→ヘラケズリ、【内】ハケメ	【内】ヘラナデ	(9.4)	—	6.0	第39図 2	39
2	土師器	甕	第5号 土坑	【外】ミガキ、【内】ミガキ	【内】ミガキ、ヘラナデ	(5.4)	—	7.4	第39図 3	40

第40図 第5号土坑出土遺物⑥

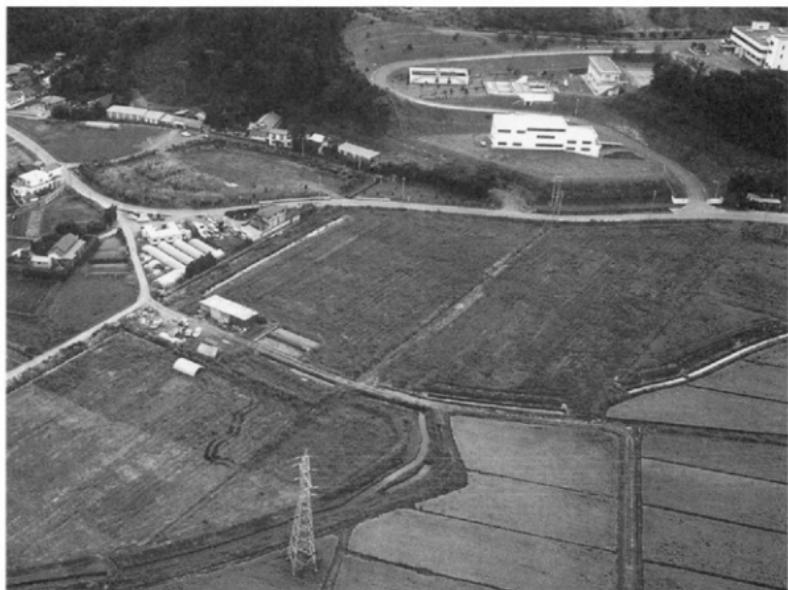
破片である、大きく外側に開き、内外面ともミガキが認められる。口唇部内面には内側につまみ出した部分が観察され、加えて平坦面を造り出している。4は甕の口縁部～胴上半部であり、第5号土坑出土の特徴的な甕と同様に深いハケメが施され、平坦面を持つ口唇部と直立気味に立ち上がる口縁部を有する。5は甕の口縁部～胴上半部の破片であり、口縁部にはハケメの後ヨコナデが、胴部外面はハケメ、内面はヘラナデがそれぞれ観察される。6も甕の口縁部～胴上半部の破片であるが口唇部を欠損する。外面口縁部はヨコナデ、胴部はハケメで、内面にはヘラナデが施される。胴部の上部にピークを有する器形であると考えられる。7は鉢の口縁部～体部破片であるが、磨滅のため調整の詳細は判然としない。頸部で若干屈曲したほぼ直立に近い口縁部を有する薄手の土器である。外面口縁部にはヨコナデ、内面にはヨコナデとヘラナデが認められる。8は大型の甕の口縁部～胴上半部の破片である。直立してやや外側に開きながら立ち上がる口縁部を有し、外面口縁部には縦方向のヘラナデの後3段に渡って帯状にヘラナデが認められる。また、胴部にはヘラナデ、ハケメの他、ミガキも観察される。内面にはヨコナデ、ヘラナデが施されている。



NO	器種	器形	出土場所	調査の特徴			法量(cm)	残存	写真図版
				外 面	内 面	器高 口径 底径			
1	土師器	複合口 ダリッド	AX-10	【口】ミガキ、【腹】ミガキ、【体】ミガキ、赤彩	【口】ミガキ、【腹】ミガキ、【体】ケツリ	(6.2)	—	—	38
2	土師器	甕	AY-9、 出石川	【口】ハケメ、【腹】ハケメ	【口】ハケメ、【腹】ハケメ→ハナダ	(11.5)	(15.4)	—	39
3	土師器	甕	AY-12 ダリッド	【口】ミガキ→ヨコナデ	【口】ミガキ→ヨコナデ	(5.2)	(15.8)	—	38
4	土師器	甕	AY-12 ダリッド	【口】ミガキ→ヨコナデ	【口】ヘラナデ、【腹】ハケメ	(8.8)	(19.4)	—	39
5	土師器	甕	AY-12 ダリッド	【口】ハケメ→ヨコナデ、【腹】ハケメ	【口】ハケメ→ヨコナデ、 【腹】ハナダ	(7.4)	(20.2)	—	39
6	土師器	甕	AY-12 ダリッド	【口】ヨコナデ、【腹】ハケメ	【口】ヨコナデ、【腹】ヘラナデ	(10.1)	—	—	39
7	土師器	鉢	—	【口】ヨコナデ	【口】ヨコナデ、【腹】ナデ、 【体】ヘラナデ	(8.0)	(13.1)	—	39
8	土師器	甕	AY-12 ダリッド	【口】ヘラナデ→ヨコナデ、【腹】ハケメ→ヨコナデ ミガキ	【口】ヨコナデ、【腹】ヘラナデ	(9.3)	(40.1)	—	39

第41図 遺構出土遺物

## 第6部 G地点・H地点・I地点



# 目 次

I. 調査の経過 .....		175
II. 基本層序 .....		175
III. 発見された遺構と遺物 .....		184
1. G 地 点		
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第1号土坑 .....	184
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第1号溝跡 .....	184
2. H 地 点		
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第1号・2号溝跡 .....	187
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第3号・4号溝跡 .....	187
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	ビット群 .....	190
3. I 地 点		
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第1号土坑 .....	190
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第2号溝跡 .....	191
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B0000; border: 1px solid black;"></span>	ビット33 .....	194
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B0000; border: 1px solid black;"></span>	第2号土坑 .....	195
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第3号土坑 .....	199
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第9号溝跡 .....	200
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	ビット群・□性格不明遺構 .....	204
東側トレンチの状況 .....		205
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第1号溝跡 .....	190
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第3号・□4号溝跡 .....	191
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第5号溝跡 .....	195
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第7号溝跡 .....	196
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第8号溝跡 .....	200
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #8B8B8B; border: 1px solid black;"></span>	第10号・■11号溝跡 .....	200
<span style="display: inline-block; width: 15px; height: 15px; background-color: #D9D9D9; border: 1px solid black;"></span>	第12号溝跡 .....	205
遺構外出土遺物 .....		205

…縄文時代のものと考えられる遺構       …古墳時代（前期）のものと考えられる遺構  
 …奈良・平安時代のものと考えられる遺構       …中世以降のものと考えられる遺構  
 …時期不明の遺構

## I. 調査の経過

G地点は、三ツ口南地区の北側に東西に単独で設定したトレーニングであり、この部分の水路工事を実施するに伴い、5mの幅で調査を実施した。総掘削面積は390m<sup>2</sup>である。

調査は、平成9年7月28日から実施し、重機による表土掘削の後、遺構の検出、平面図の作成、写真撮影等を行い、8月5日に調査を終了した。この結果、土坑1基、溝跡3条、性格不明遺構1基、ピット12基を検出した。

H地点は、三ツ口南地区の北側から北西方向に延びるトレーニングである。ほ場整備による水路工事で破壊されてしまう部分について、幅3mのトレーニングを設定して調査を実施した。総掘削面積は505m<sup>2</sup>である。調査は平成9年8月6日から実施し、平成9年10月2日に終了した。H地点からは目立った遺構は検出されず、溝跡5条、ピット16基あまりを検出した。

I地点は三ツ口南地区の北側から始まり、河南町と石巻市の境界部分を東方へ延びる4つのトレーニング群であり、事実記載では南側トレーニング、西側トレーニング、北側トレーニング、東側トレーニングと呼称することとする。調査は平成9年9月17日から実施し、平成9年10月28日に終了した。総掘削面積は745m<sup>2</sup>である。調査の結果、土坑3基、溝跡12条、性格不明遺構6基およびピット100基あまりを検出した。これらのうち、一部の土坑とピットからは縄文時代の土器や石器が出土した。

## II. 基本層序

各地点の基本土層を記述する。なお、G地点についてはH地点と同一の地形内に含まれていると判断されるため、H地点の基本土層中に包括して記載することとする。

### 1. H地点

H地点は東側から下降し、西側に向かって再度上昇する地形を呈し、比高差は50cm程度である。土層中には灰白色火山灰が各所に見られた。層序は、I～III層に分けられ、黒色のシルトを基調とする。

第I層：場所によって土色が異なるが、基本的には黒褐色を呈する腐食土で、水田耕作土である。水田最下面に存在したと考えられるスクモ層（I b層）が観察される部分もある。

第II層：黒褐色を呈する。灰白色火山灰を粒子状に混入する層（II a層）と灰白色火山灰のみで構成される層（II b層）があり、これらの灰白色火山灰は水性堆積によるものである可能性が高い。

第III層：地山（2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト）直上の黒色シルトである。灰白色火山灰は含まれていない。多量の湧水を伴い、部分的には地山漸移層を形成する。

## 2. I 地点

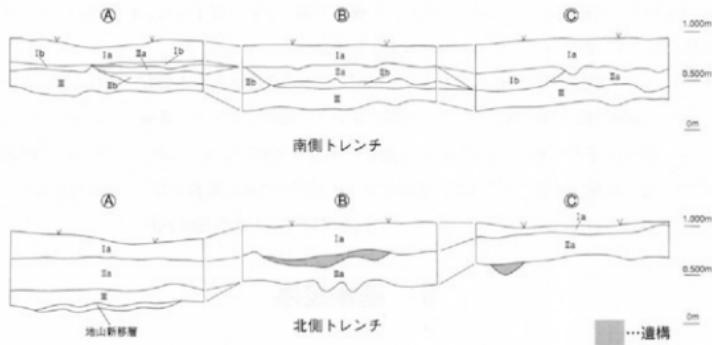
I 地点は西側が高く、東側に向かうに従って下降し、その比高差は50cm以上を測る。基本土層はI～IV層に分けられ、多量の湧水が認められ、黒褐色のシルトを基調とする。

第I層：黒褐色の腐食土を主にした耕作土である。

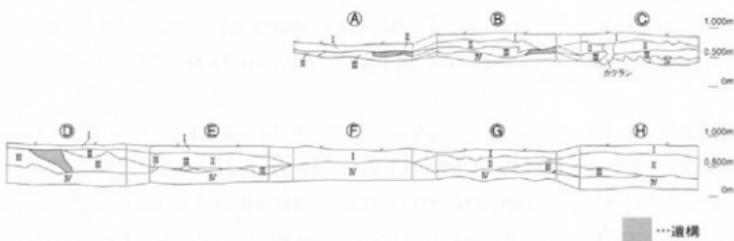
第II層：黒色のシルトであり灰白色火山灰をラミナ状または斑状に混入する。

第III層：黒褐色の砂質シルトであり、酸化鉄を比較的多く混入する。

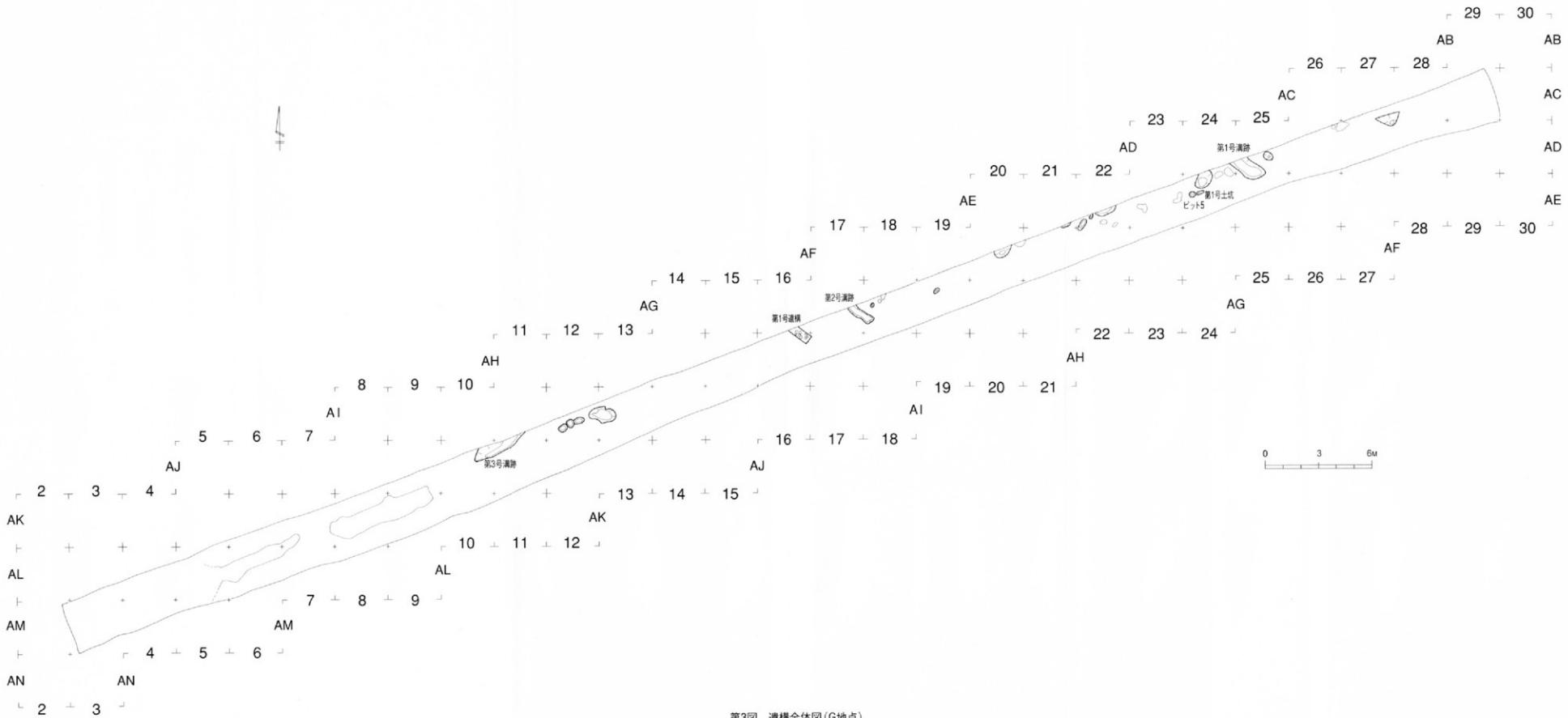
第IV層：地山漸移層に近い灰黄褐色または褐灰色のシルト質の砂であり、縄文土器を出土した遺構はこの層から掘り込まれていた。



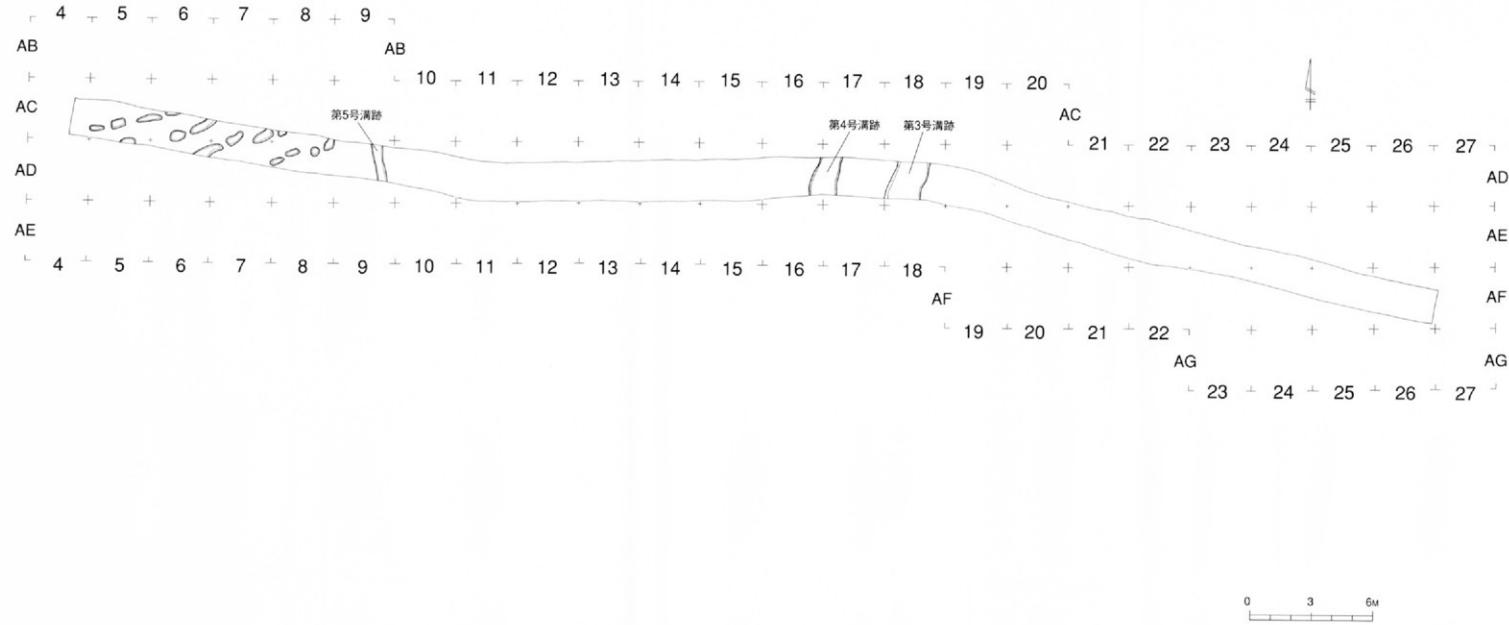
第1図 H地点層序模式図



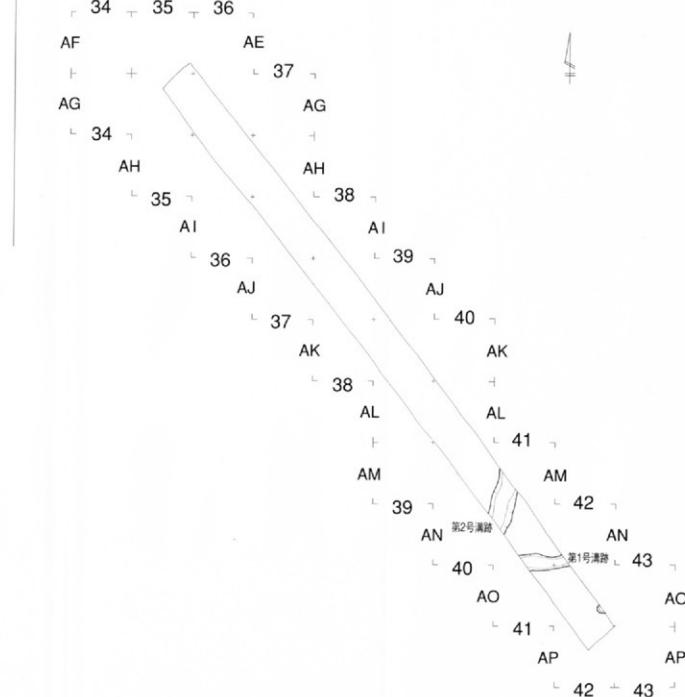
第2図 I地点層序模式図

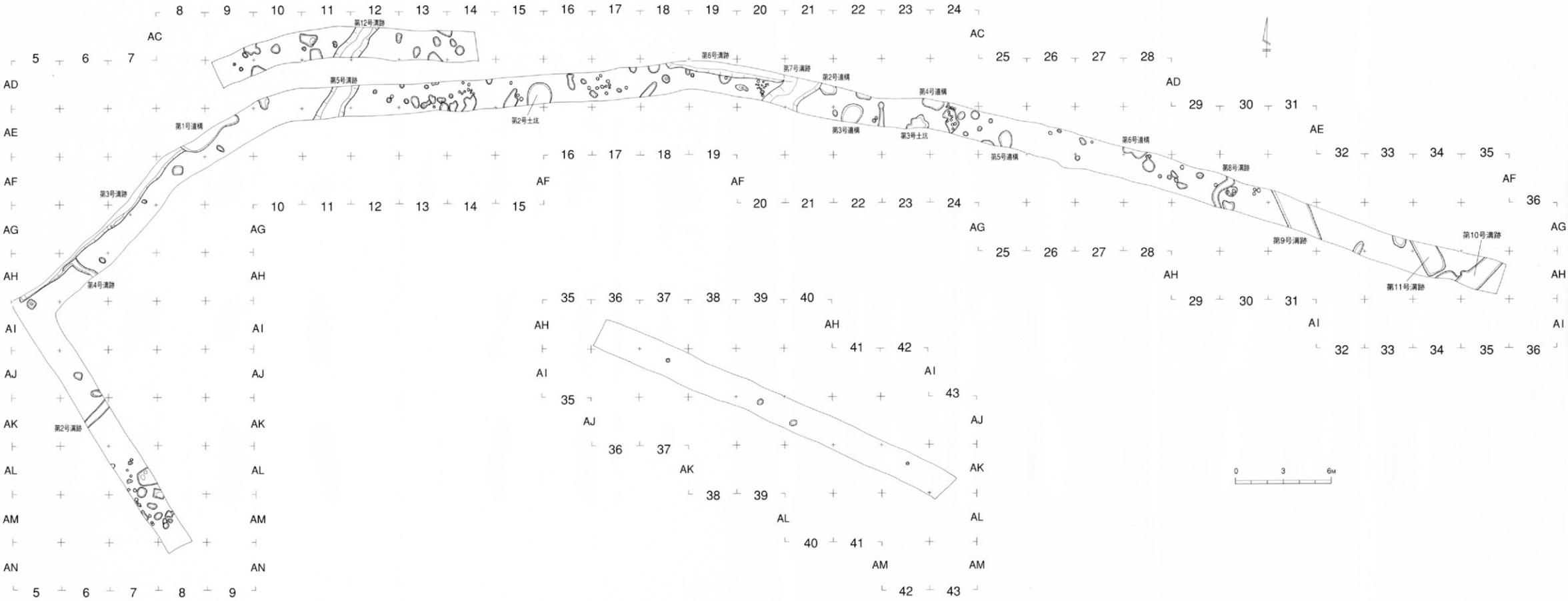


第3図 遺構全体図(G地点)

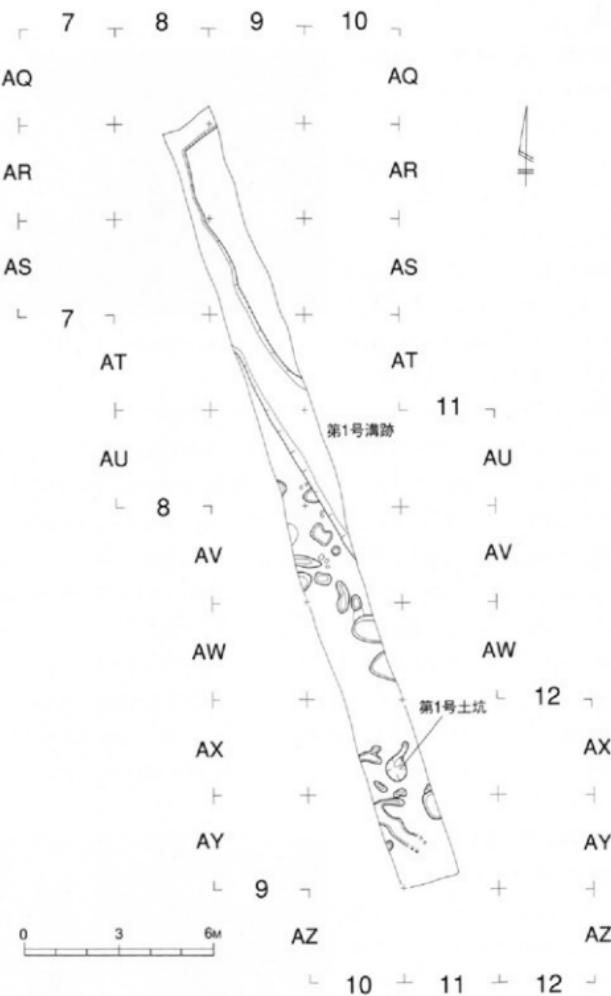


第4図 遺構全体図(H地点)





第5図 遺構全体図(Ⅰ地点①)



第6図 遺構全体図（I地点②）

### III. 発見された遺構と遺物

#### 1. G地点

##### 第1号土坑（第7図、第24・40図版）

【位置・検出状況】調査区西側、A C～A D-25グリッド中において検出し、土坑の北側は調査区外におよんでいる。また、南西側に隣接してピット5を検出している。

【重複関係等】認められなかった。

【平面形・規模】東西1.1m、南北(70cm)

の梢円形を呈すると考えられる。壁は外側に



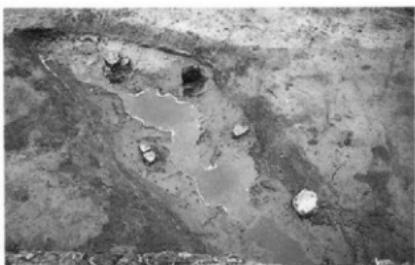
開きながら立ち上がり、底面は平坦で、確認面からの深さは22cmと浅い。土坑の上面は検出時にはすでに削平されてしまっていたと考えられる。

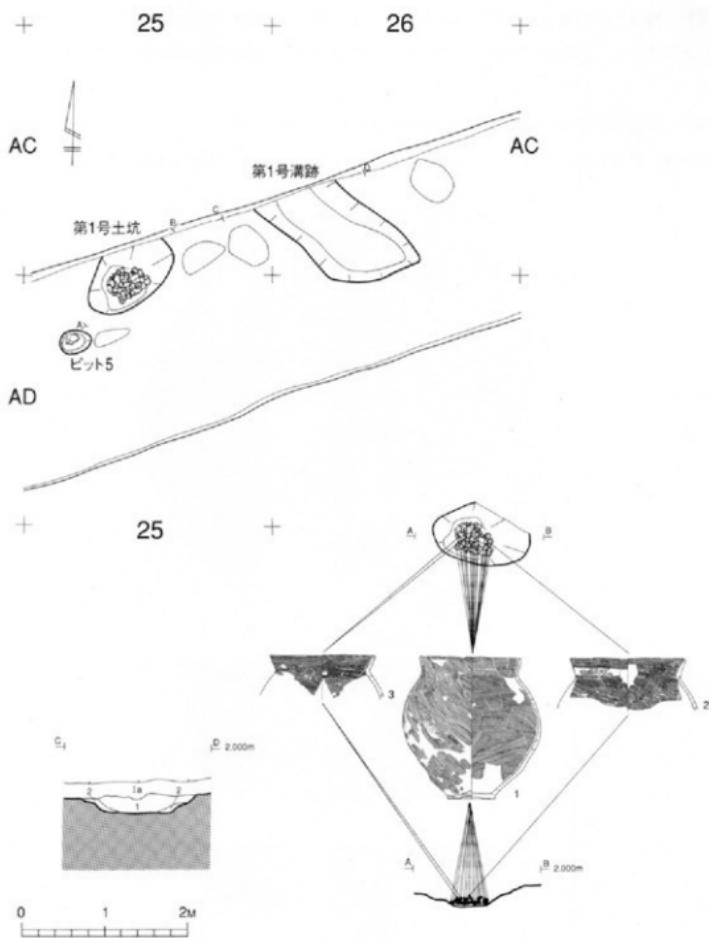
【堆積土】黒褐色土と黒色土の2層に分けられ、自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】底面にまとまった土器の出土が見られた。出土した遺物は全て破片であり、接合によつて3個体分の土器であることが判明した。1～3は全て土師器の甕である。1はほぼ完形に近い状態にまで復元できた個体であり、直立した口縁部を有し、外面にはハケメとヨコナデが施され、外面の調整は、器面がやや硬化してから施されたものと考えられ、浅くなされている。また内面口縁部にはヨコナデが、体部にはヘラナデがそれぞれ施されている。2は甕の口縁部～胴上半部の破片である。内外面ともにハケ調整がなされ、口縁部にはハケメの後ヨコナデが施されている。3の甕は口縁部～胴上半部の破片であり、外面口縁部にはハケメの後ヨコナデ、以下はハケメが、内面にはハケメがそれぞれ観察される。2、3もまた、1と同じく調整は比較的浅くなされている。以上の土器は全て古墳時代前期に位置づけられ、土坑の時期もこれに準じると考えられる。一方、第1号土坑に隣接して検出されたピット5からも土師器の破片が出土しているが、胴（体）部の破片と考えられ、図示するには至らなかった。

##### 第1号溝跡（第7図、第24図版）

【位置・検出状況】調査区西側、A C～A D-25～26グリッド中において検出し、第1号土坑の北西約1mの場所に位置しており、溝跡の北側は調査区北壁外に及んでいる。また、南側端部はA D-26グリッドにおいて収束しているか、すでに削平されてしまっていると考えられる。





層NO	土色	土性	特徴
1	IORY3/1 黒褐色	シルト	酸化鉄を若干混入する。
2	IORY2/1 黒色	砂質シルト	10YR 5/3 (赤)山)を斑状に、酸化鉄を若干混入する。

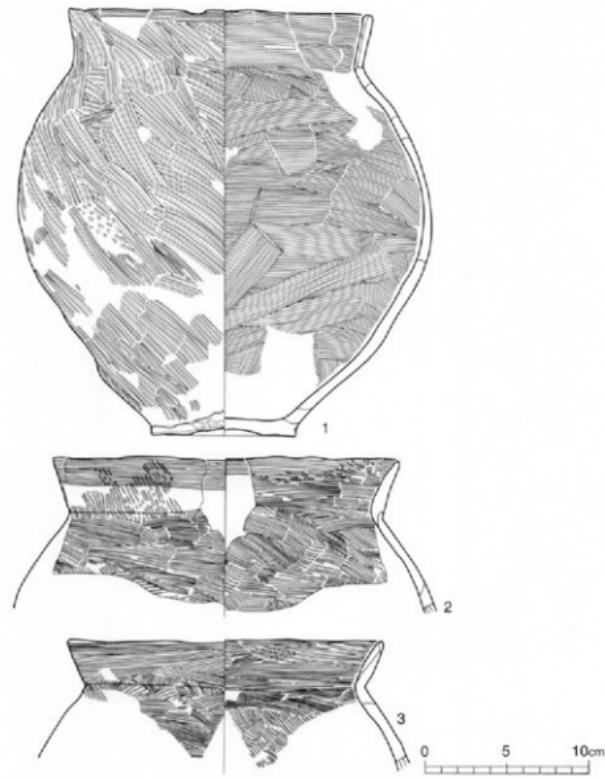
第7図 第1号土坑・第1号溝跡

〔重複関係等〕認められなかった。

〔断面形・規模〕壁は大きく外側に開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。溝跡の上幅は1.0m程度であり、下幅は40~60cmを測る。底面は比較的平坦で確認面からの深さは18cm~22cmと浅い。

〔堆積土〕2層に分けられ、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕底面付近から数点の土師器の破片が出土しているが、図示するには至らなかった。これ



NO	基 標	基 形	出土地所	調査の特徴			法量 (cm)			現 存	写真図版
				外 面	内 面	基 高	口 径	底 部			
1	土師器	便 盆	[口]ハケメ→ヨコナギ、[底]ハケメ、[底]物置注瓶	[口]ヨコナギ、[底]ハラナギ		25.6	18.4	8.7	完形	40	
2	土師器	便 盆	[口]ハケメ→ヨコナギ、[底]ハケメ	[口]ハケメ→ヨコナギ、[底]ハケメ	(9.6)	(20.9)	—	—	未発見	40	
3	土師器	便 盆	[口]ハケメ→ヨコナギ、[底]ハケメ	[口]ハケメ→ヨコナギ、[底]ハケメ	(8.1)	(19.2)	—	—	未発見	40	

第8図 第1号土坑出土遺物

らの土師器片の中には口縁部破片、胸部破片、底部破片が見られた。口縁部破片にはヨコナデが、胸部破片にはハケメがそれぞれ観察され、時期的には古墳時代前期のものと考えてよい。

## 2. H地点

### 第1号溝跡・2号溝跡（第9図）

〔位置・検出状況〕 北側トレンチ調査区東側、AM～AO-40～42グリッド中において検出し、方向は第1号溝跡がN-25°-E、第2号溝跡がE-10°-Nであり、両溝跡とも調査区外へおよんんでいる。

〔重複関係等〕 調査区の南西壁においては、第1号溝跡が第2号溝跡を切っている可能性がある。

〔断面形・規模〕 第1号溝跡は上幅60cm～80cm、下幅30cm～60cmを測り、逆台形の断面形を呈し、壁は南東側に開きながら立ち上がる。底面は平坦で確認面からの深さは15cmを測る。第2号溝跡は上幅1.1m～1.2m、下幅65cm～70cmを測り、壁は緩やかに弧を描いて外側に開きながら立ち上がる。底面には若干起伏が見られ、確認面からの深さは20cm程度である。両溝とも内部から多量の湧水が認められた。



〔堆積土〕 両溝跡とも黒褐色、黒色の單一土層であり、灰白色火山灰を僅かに混入している。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

### 第3号溝跡・4号溝跡（第10図）

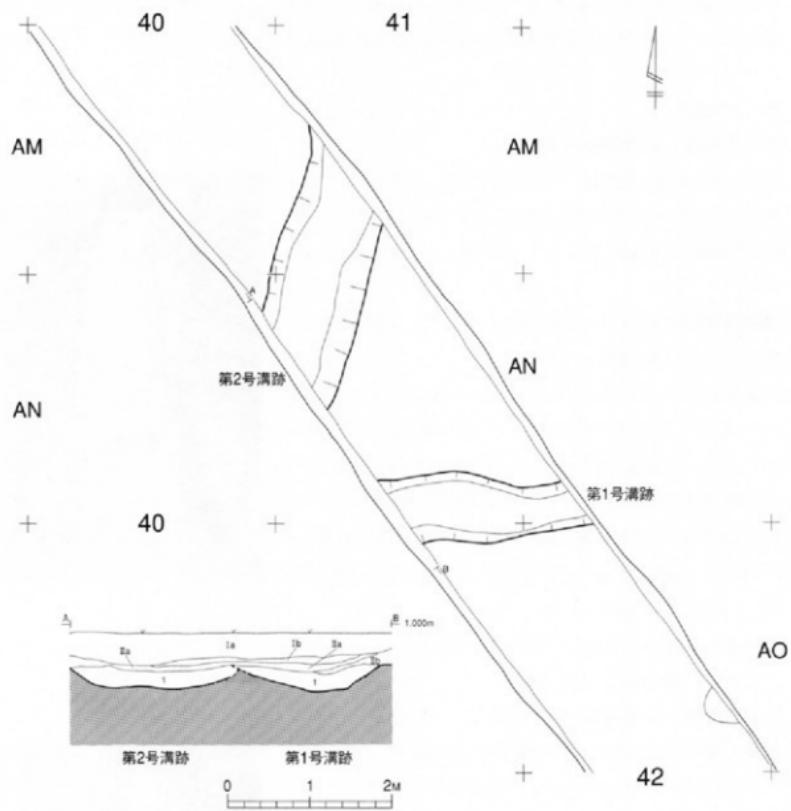
〔位置・検出状況〕 北側トレンチ調査区中央東寄り、AD-16～18グリッド中において検出した。方向は第3号溝跡がN-10°-E、第4号溝跡がN-15°-Eであり、並列して走行し、両溝跡とも調査区外へおよんんでいる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 第3号溝跡は上幅1.6m～1.8m、下幅1.3m～1.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。

また、壁は西側が弧を描きながら、東側は直線的に開きながら立ち上がる。底面は平坦で確認面からの深さは50cmを測る。第4号溝跡は上幅1.1m～1.4m、下幅1.0m～1.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。壁は大きく外側に開きながら立ち上がるが、土層断面図を見る限りでは、東側の壁面にテラス状の平坦面が認められる。なお、この部分は面的には確認できなかった。また、底面は平坦で確認面からの深さは50cm





層No	土 色	土 性	特 復
1	10YR 3 / I 黒褐色	砂質シルト	灰白色火成灰を粒状に若干、酸化鉄を比較的多く混入する。

第1号溝跡

層No	土 色	土 性	特 復
1	10YR 2 / I 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。

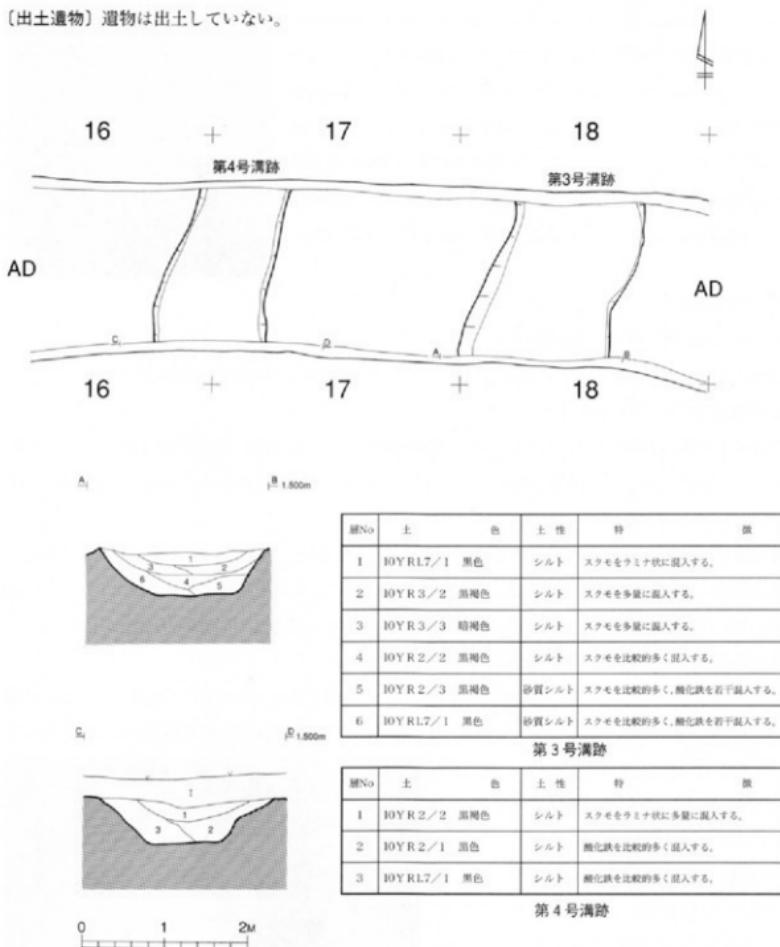
第2号溝跡

第9図 第1号・第2号溝跡

程度である。両溝とも内部から多量の湧水が認められた。

〔堆積土〕第3号溝跡の堆積土は6層に分けられ、黒色ないしは黒褐色のシルトを基調としており、自然堆積の様相を呈する。第4号溝跡の土層は3層に分けられ、第3号溝跡と同様に黒色ないしは黒褐色のシルトであり、自然堆積である。また、両溝跡とも灰白色火山灰のブロックが観察されている。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



第10図 第3号溝跡・第4号溝跡

### ピット群（第4図、第25図版）

北側トレンチ調査区西端から15基のピットを検出している。これらのピットは長軸80cm～1.3m、短軸25cm～50cmの楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、3～4基を1単位として北東～南西方向へ一列に並ぶ。検出時には、この一体から多量の湧水があり、土層堆積状況等を確認することができず、性格等が不明であるため、ピット群とした。しかし、ピットの大きさや形状、配列に規則性が見られるため、柱跡などの可能性が考えられる。また、遺物は出土していない。一方、新山崎遺跡の中で最も北西に位置する当地点から他に、溝跡等の遺構が検出されたことで、遺跡の広がりを明確な形で特定できる要因が発見されたと言えるだろう。



### 3. I 地点

#### 第1号土坑（第11図、第25図版）

〔位置・検出状況〕 南側トレンチ調査区南側、AX-10～11グリッド中において検出した。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 東西65cm、南北1.2mの不整楕円形を呈し、北東側に突出部分が認められる。断面形はすり鉢状を呈し、壁は外側に聞く形で立ち上がり、中途にテラスを持つ。また、底面の深さは確認面から40cmを測る。

〔堆積土〕 黒褐色、ないしは黒色の砂質シルトを基調とし、4層に分けられ、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 覆土中にまとまった土器の出土が見られた。出土した遺物は全て土師器片であり、口縁部破片等、器形を復元しうる遺物はなかったが、ハケ調整等、古墳時代に特徴的な調整が見られた。

#### 第1号溝跡（第12図、第25図版）

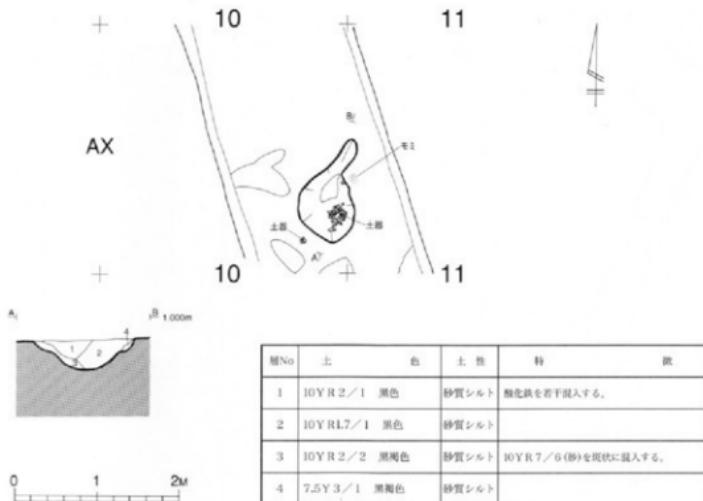
〔位置・検出状況〕 南側トレンチ北側、AV～AQ-8～10グリッド中において検出した。溝跡は調査区を南東～北西へ斜めに縱断し、南側端部は東壁外へ、北側端部は調査区北端部からほぼ直角に近い形で東方へ屈曲している。

〔重複関係等〕 南側端部付近において、小ピットを切っている他は認められなかった。

〔平面形・規模〕 上幅1.1m～1.5m、下幅80cm～1.2mを測り、壁は大きく外側に開きながら緩やかに弧を描いて立ち上がる。また、底面は平坦で確認面からの深さは最も深い部分で40cmを測る。

〔堆積土〕 黒褐色の单一土層で、シルトである。





第11図 第1号土坑

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

#### 第2号溝跡（第13図、第25図版）

〔位置・検出状況〕 西側トレンチ南側、AK-6～7グリッド中において検出した。溝跡の北東側、南北側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 上幅45cm～55cm、下幅35cm～45cmを測り、壁は外側に開きながら立ち上がる。検出段階では確認できなかつたが、土層断面を観察すると、溝跡の北西側にテラスを有している。底面は比較的平坦であり、深さは確認面から45cmを測る。

〔堆積土〕 黒色、黒褐色を基調としたシルトで、4層に分けられる。

〔出土遺物〕 出土していない。

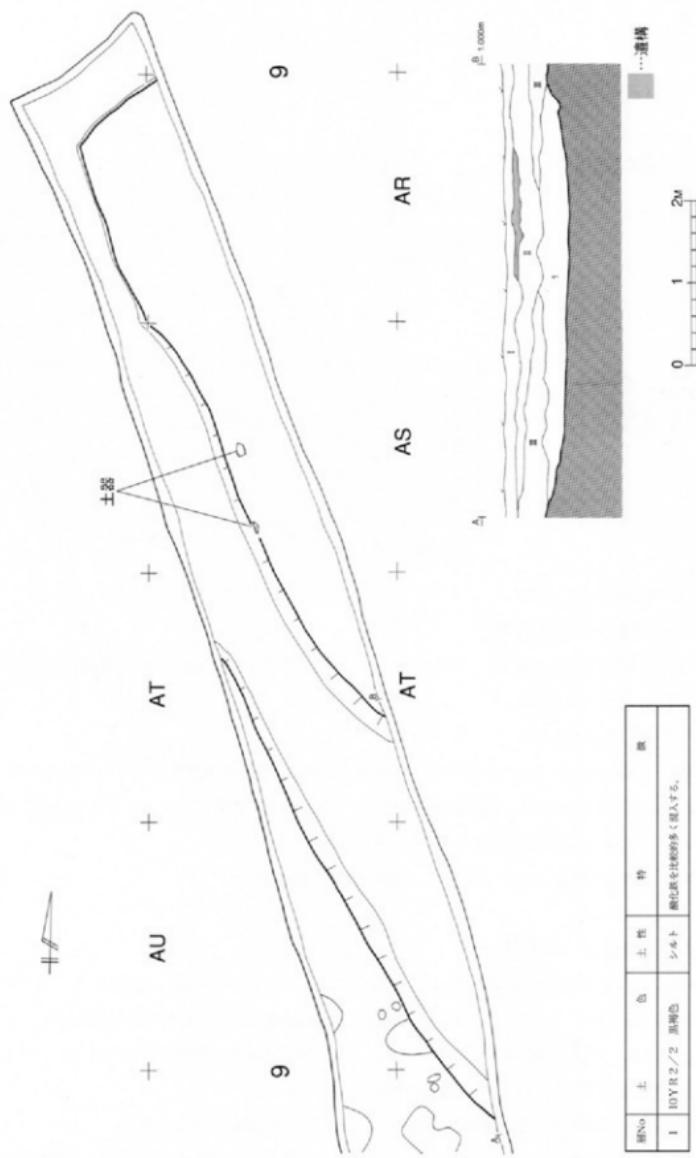
#### 第3号溝跡・4号溝跡（第14図）

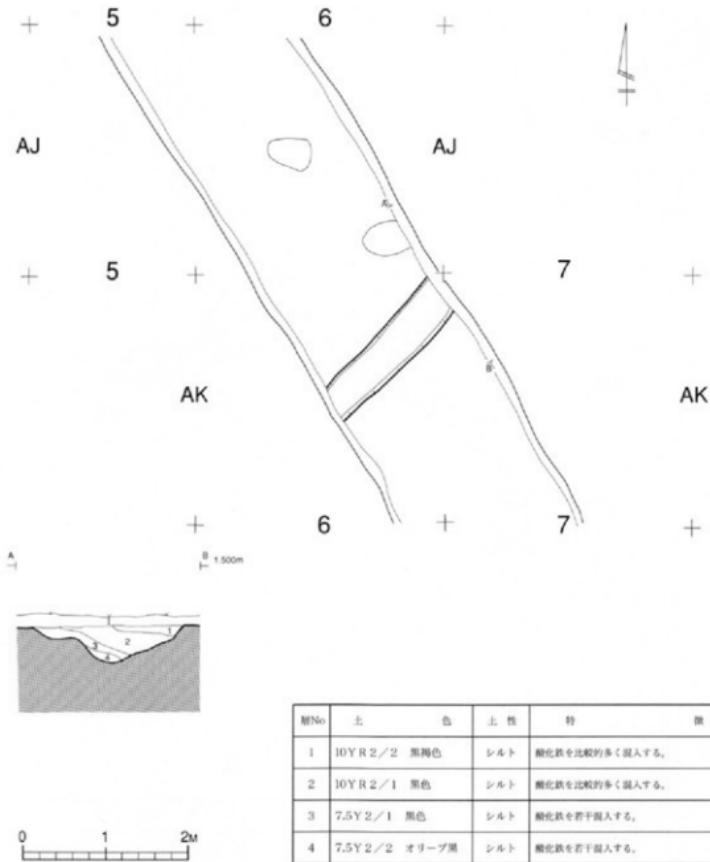
〔位置・検出状況〕 西側トレンチ北西側、AH～AG-5～6グリッド中において検出した。第3号溝跡の南西側端部はAH-5グリッドにおいて収束し、北東端部は調査区の北壁沿いに北上し、AD-5グリッドにおいて第1号遺構に切られている。また、第4号溝跡の北側端部はAH-6グリッドにおいて第3号溝跡と接し、南側端部は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕 第3号溝跡と第4号溝跡は互いに接しているが新旧関係は判然としない。

〔断面形・規模〕 第3号溝跡は北側が調査区外におよんでいるため、規模等は不明である。第4号溝

第12圖 第1号溝跡



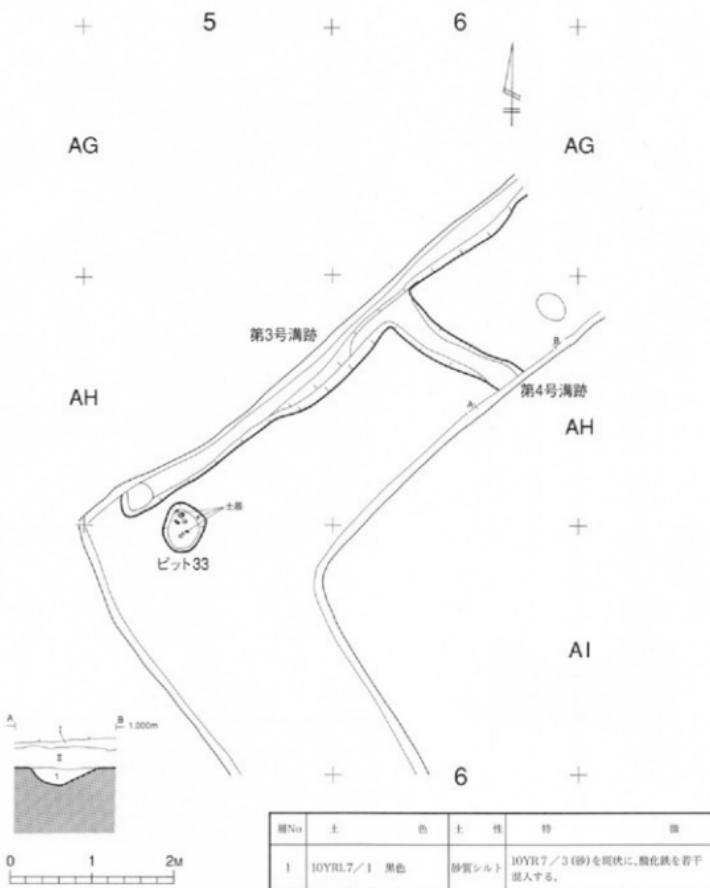


第13図 第2号溝跡

跡は上幅40cm、下幅30cm~40cmを測り、壁は緩やかに外側に開きながら立ち上がる。また、底面までの深さは確認面から20cmを測る。

〔堆積土〕 黒色の砂質シルトの單一土層であり、第II層下面から掘り込まれている。

〔出土遺物〕 出土していない。



第14図 第3号遺跡・第4号遺跡、ビット33

#### ビット33（第14図～第15図）

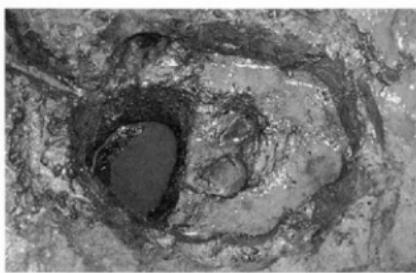
〔位置・検出状況〕 西側トレンチ北西側、A

H～AI-56グリッド中において検出した。

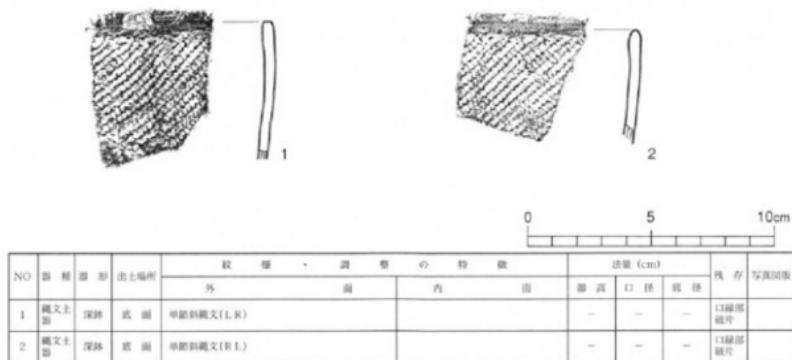
〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 60cm×50cmの不整梢円形を呈する。

〔出土遺物〕 内部から数片の縄文土器片が出土している。土器片は口縁部と胴部破片であ



り全てに単節斜縄文が施されている。また、頁岩製のチップが底面付近から数片出土している。



第15図 ピット33出土遺物

### 第5号溝跡（第16図）

〔位置・検出状況〕西側トレンチ北西側、AD～AE-II～12グリッド中において検出し北側、南側は調査区外におよんでいる。

〔重複関係等〕認められなかった。

〔断面形・規模〕上幅1.3m～1.7m、下幅90cm～1.1mを測り西側の壁は途中にテラスを持って立ち上がる。また、底面は平坦で確認面からの深さは40cmを測る。

〔堆積土〕5層に分けられ、黒色ないしは黒褐色を基調とした砂質シルトで、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕出土していない。

### 第2号土坑（第17図・第18図、第40図版）

〔位置・検出状況〕西側トレンチ西側、AD-15～16グリッド中において検出し、土坑の南側は調査区南壁外へおよんでいる。

〔重複関係等〕認められなかった。

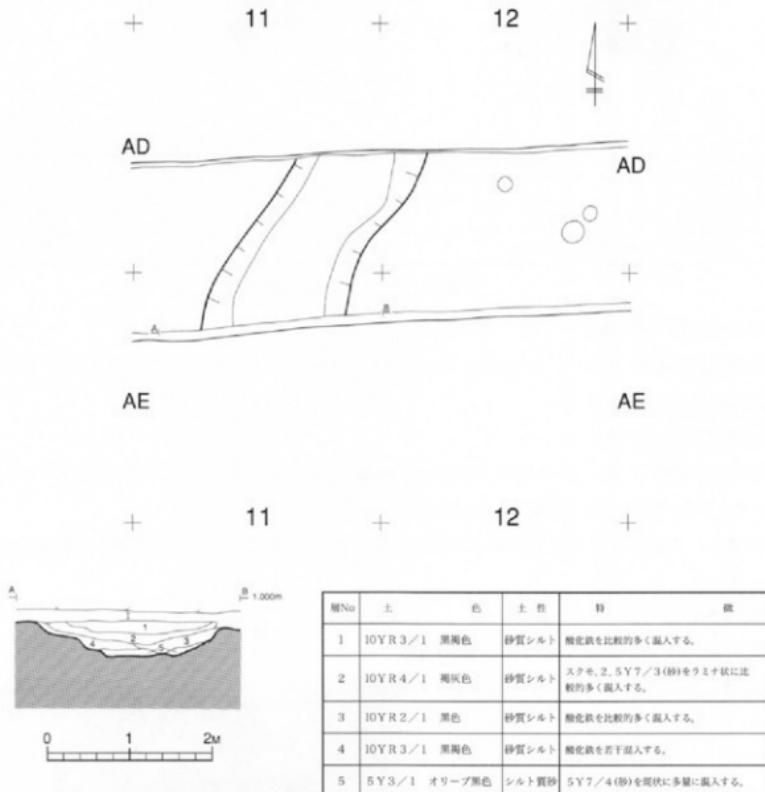
〔平面形・規模〕東西1.5m、南北(1.3m)楕円形を呈し、壁はほぼ直立に近い形で立ち上がる。また底面は平坦で、確認面からの深さは30cmを測る。

〔堆積土〕黒褐色、ないしは黒色の砂質シルトを基調とし、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕覆土中から縄文土器片が数点出土している。第18図の1は浅鉢の口縁部破片であると考えられ、外面口縁部は小波状線であり、小突起と弧線の繰り返しであると考えられる。その下には刻



目と沈線が横走し、さらに下に単節斜縄文（LR）が施文されている。大洞C1期のものであると考えられる。2は単節斜縄文（LR）施文の口縁部破片である。3は外面の上下二段に渡って単節斜縄文（LR、RL）による羽状縄文が施文された深鉢型土器の胴下半部～底部である。第2号土坑からは、土器の他に頁岩製のチップがまとまって出土している。



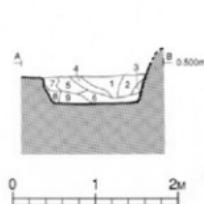
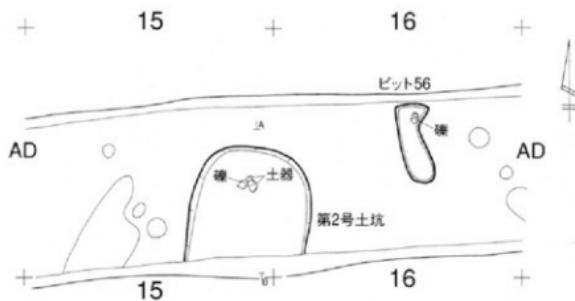
第16図 第5号溝跡

#### 第7号溝跡（第19図）

〔位置・検出状況〕西側トレンチ中央、東寄り、AD～AE-20～21グリッド中において検出し、溝跡の北側と南側は調査区外へおよんでいる。

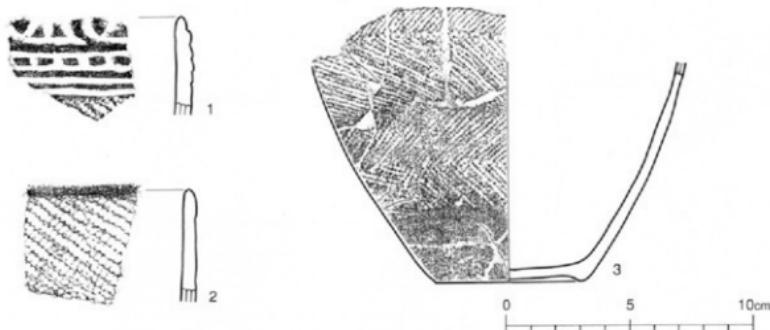
〔重複関係等〕第6号溝跡と重複関係にある





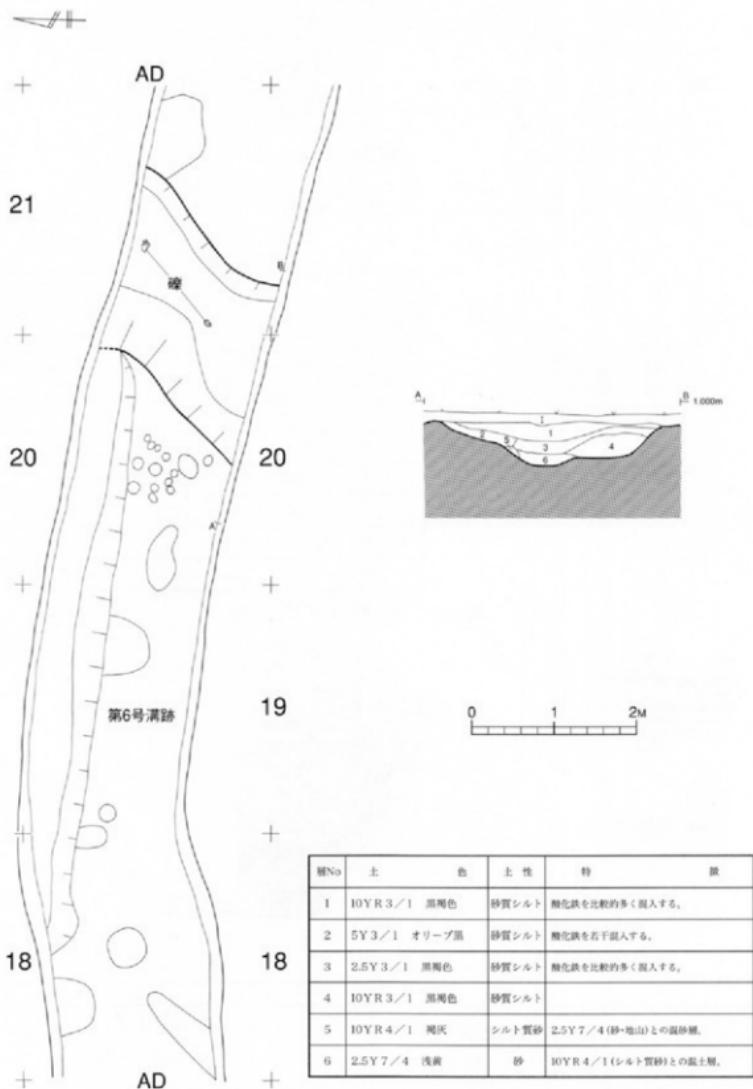
編No	土色	土性	特徴
1	10YR 3/1 黒褐色	砂質シルト	発化鉄を若干混入する。
2	10YR 2/1 黒色	砂質シルト	発化鉄を若干混入する。
3	10YR L7/1 黒色	砂質シルト	発化鉄を若干混入する。
4	10YR 3/1 黒褐色	砂質シルト	
5	10YR 2/1 黒色	砂質シルト	
6	10YR 2/2 黒褐色	砂質シルト	発化鉄をわずかに混入する。
7	2.5Y 7/6 明褐色	砂	10YR 2/1(砂質シルト)との混土層。
8	2.5Y 7/6 明褐色	砂	10YR L7/1(砂質シルト)との混土層。
9	10YR L7/1 黒色	砂質シルト	発化鉄を比較的多く混入する。

第17図 第2号土坑・ピット56



NO	器種	器形	出土場所	枚様・調査の特徴			法量(cm)			残存	写真図版
				外面	内面	器高	口径	底径			
1	縄文土器	浅鉢?	底面	(口脇)小突起。(口)連續弦文、横格沈線。 (側上)単節斜綱文(L.R)	—	—	—	—	—	口縁部 破片	
2	縄文土器	深鉢	底面	単節斜綱文(L.R)	—	—	—	—	—	口縁部 破片	
3	縄文土器	深鉢		羽状綱文(L.R)	—	(10.7)	—	5.9	側面～ 底盤片	40	

第18図 第2号土坑出土遺物



第19図 第7号溝跡

が、新旧は不明である。

〔断面形・規模〕上幅1.6m～2.1m、下幅60cm～1.4mを測り、断面形は逆台形に近い状況を呈する。西壁にテラスが認められ、底面にも起伏が観察された。また確認面からの深さは50cmを測る。

〔堆積土〕黒褐色を基調とした砂質のシルトが主であり、6層に分けられ、自然堆積の様相を呈する。

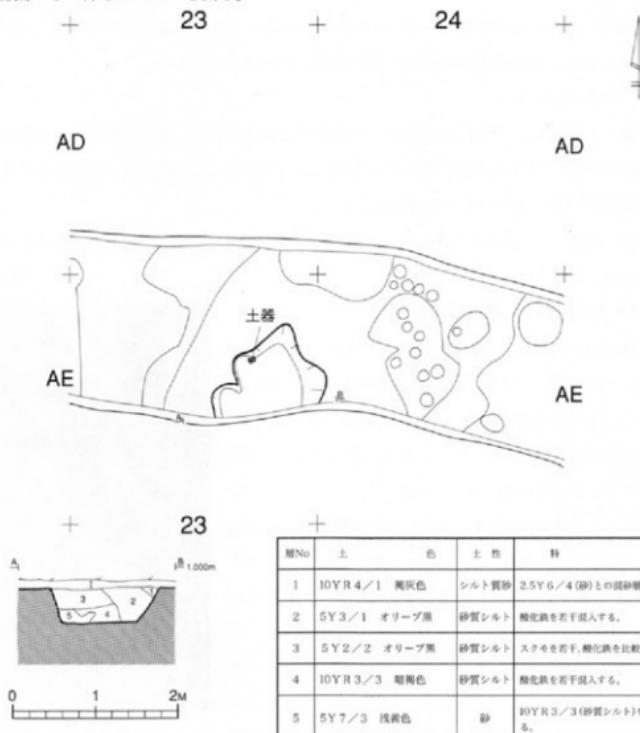
〔出土遺物〕底面から礫が出土しているが、土器等、時期を決定する要素となり得る遺物は出土していない。

### 第3号土坑（第20図）

〔位置・検出状況〕西側トレーニング中央東寄り、AE-23グリッド中において検出し、土坑の南側は調査区南壁外へおよんでいる。

〔重複関係等〕認められなかった。

〔平面形・規模〕東西1.4m、南北（1.0m）の不整形を呈し、壁はやや開いて立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは40cmを測る。



第20図 第3号土坑

〔堆積土〕 砂質シルトであり、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 底面から土器片が数点出土しているが、小片であり、図示できるものはなかった。

#### 第8号溝跡（第21図）

〔位置・検出状況〕 西側トレンチ東側、A F～AG-29～30グリッド中において検出し北側と南側は調査区外へおよんでいる。

〔重複関係等〕 複数の小ピット切っているのみである。

〔断面形・規模〕 上幅40cm～55cm、下幅35cm～40cmを測り、断面形は逆台形を呈し、壁は直立に近い形で立ち上がる。また底面は平坦で、確認面からの深さは25cm程度しかない。

〔堆積土〕 第8号溝跡は、第II層下面から掘り込まれおり、堆積土は6層確認され、黒色ないしは黒褐色を基調とした砂質シルトである。

〔出土遺物〕 出土していない。

#### 第9号溝跡（第21図）

〔位置・検出状況〕 西側トレンチ東側、A F～AG-31～32グリッド中において検出し、方向はN-20°-Wである。また、第9号溝跡の北側と南側は調査区外へおよんでいる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 上幅1.6m、下幅1.4mを測り、断面形は逆台形を呈し、壁は西側がやや急角度にひらきながら、東側は北東に向かって緩やかに開きながら立ち上がる。底面には若干起伏が認められ、確認面からの深さは最も深い部分で60cmを測る。

〔堆積土〕 黒色、黒褐色、浅黄色の砂質シルトから成り、4層確認され、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕 出土していない。

#### 第10号溝跡・11号溝跡（第22図）

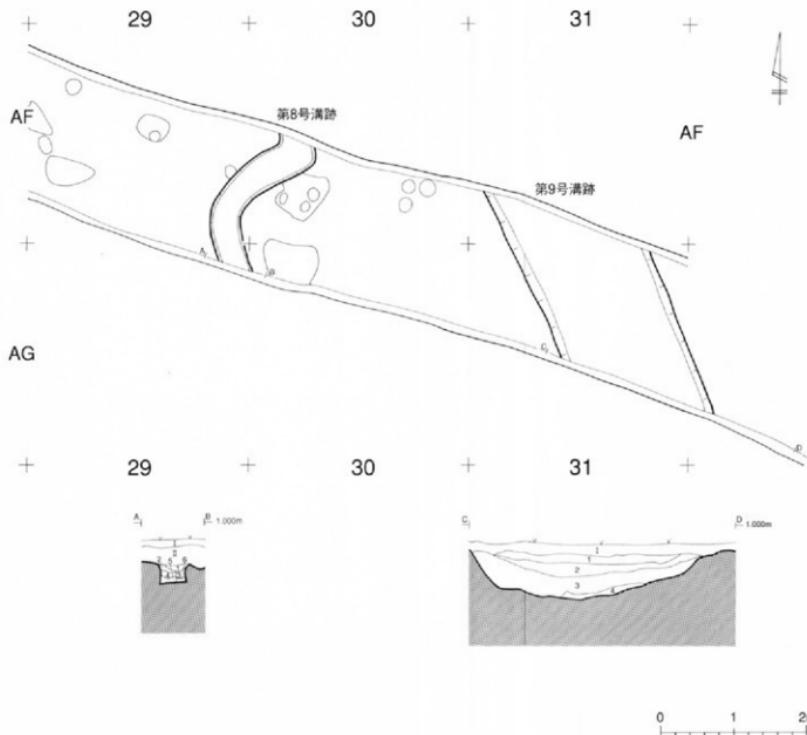
〔位置・検出状況〕 西側トレンチ東端部、AG～AH-33～35グリッド中において検出し、方向は第10号溝跡がN-20°-W、第11号溝跡がN-33°-Eである。また、第10号溝跡の北側と南側、および第11号溝跡の北側は調査区外へおよび、第11号溝跡の南側はAH-34グリッドにおいて収束している。

〔重複関係等〕 第10号溝跡が調査区南壁において第7号遺構を切っている他、その北側に検出されたピットに切られている。第7号遺構は基本上層第II層から掘り込まれていた性格不明遺構である。

〔断面形・規模〕 第10号溝跡は上幅1.0m～1.2m、下幅80cm～1.1mを測り、断面形は逆台形を呈し、壁は西側が直立気味に、東側は南東に向かって緩やかに開きながら立ち上がる。また、東壁にテラスが認められる。底面は平坦で、確認面からの深さは最も深い部分で55cmを測る。第11号溝



調査区東端部の状況



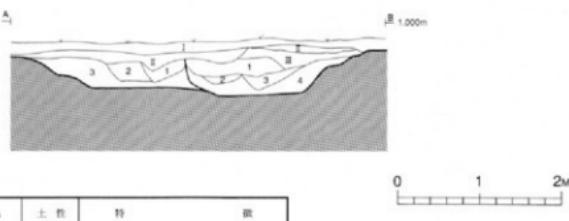
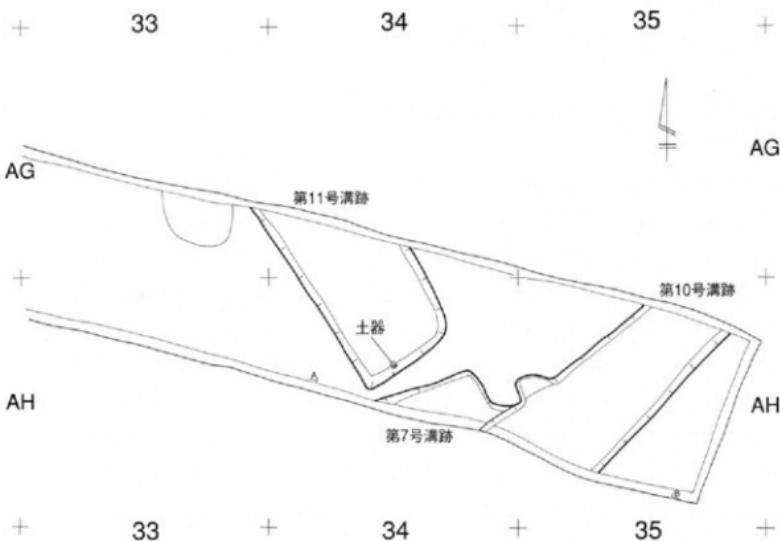
剖面No	土 色	土 性	特 徴
1	IOYR2／1 黒色	砂質シルト	鉄化鉄を比較的多く混入する。
2	IOYRL7／1 黒色	砂質シルト	鉄化鉄を若干混入する。
3	IOYR2／2 黒褐色	砂質シルト	鉄化鉄を比較的多く混入する。
4	IOYR3／1 黒褐色	砂質シルト	鉄化鉄を若干混入する。
5	2.5Y3／1 黑褐色	砂質シルト	鉄化鉄を若干混入する。
6	2.5Y2／1 黒色	砂質シルト	2.5Y7／4 (B)との混融層。

第8号溝跡

剖面No	土 色	土 性	特 徴
1	IOYR1.7／1 黒色	砂質シルト	鉄化鉄を比較的多く混入する。
2	IOYR2／2 黒褐色	砂質シルト	砂を含むように、鉄化鉄を多量に混入する。
3	IOYR2／4 黒色	砂質シルト	鉄化鉄を比較的多く混入する。
4	2.5Y7／3 淡黄色	砂	IOYR2／1(砂質シルト)との接觸層。

第9号溝跡

第21図 第8号溝跡・第9号溝跡



層No	土 色	土 性	特 横
1	10YR1.7/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
2	10YR2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
3	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。

第7号遺構

層No	土 色	土 性	特 横
1	10YR2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
2	10YR2/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
3	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。
4	10Y1.7/1 黒色	砂質シルト	酸化鉄を比較的多く混入する。

第10号遺構

第22図 第7号溝跡・第10号溝跡・第11号溝跡

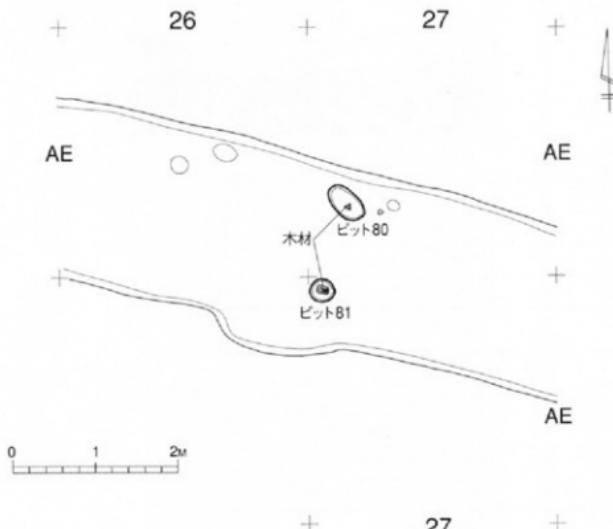
跡は上幅1.3m、下幅1.1mを測る。

【堆積土】第10号溝跡は黒色の砂質シルトを基調とし、堆積土は4層確認され、自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】第11号溝跡の南端部底面から土師器台付壺の脚部が1点出土しており、古墳時代のものである可能性がある。

#### ピット群、性格不明遺構（第23図）

西側トレーンチ調査区西南端部（AK～AL-7～8グリッド）、調査区東側（AC～AD-12～15グリッド、AC-16～17グリッド）、調査区中央（AD～AF-26～30グリッド）からはピット群が、調査区中央東寄り（AC～AD-21～25グリッド）からは複数の性格不明遺構が検出されている。それぞれのピットは円形、楕円形、不整形等、形状や大きさがまちまちであり、深さも確認面から10cm～20cm程度で、規則性、位置関係、時期等も不明である。ただ、ある一定の地域にまとまって検出されており、何らかの施設があった可能性は否定できない。また、AD～AE-27グリッド中において検出されたピット80と81からは、柱痕が出土しており、何らかの上屋構造を持つ建物が存在していた可能性もある（第23図）。調査区中央東寄りの地点に集中して検出された性格不明の掘り込み（遺構）については、出土遺物がなく、上部がほとんど削平されてしまった状態で検出されたため、詳細については判然としない。



第23図 ピット80・ピット81

## 第12号溝跡（第24図）

〔位置・検出状況〕 北側トレンチ中央、A C-II~I2グリッド中において検出し、方向はN-30°-Wで、溝跡の北側と南側は調査区外へおよんでおり、南側は東側トレンチの第5号溝跡と連接すると考えられる。

〔重複関係等〕 認められなかった。

〔断面形・規模〕 上幅1.0m~1.9m、下幅45cm~1.0mを測り、断面形は逆台形を呈し、壁は大きく外側に開きながら立ち上がる。底面には若干起伏が認められるが、おおむね平坦で、確認面からの深さは最も深い部分で50cmを測る。

〔堆積土〕 黒褐色の砂質シルトを基調とし、6層確認し、自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕 出土していない。

## 東側トレンチの状況（第5図）

北側トレンチは、西側トレンチの北方、A G~AJ-36~43グリッドに設定した幅3.0mのトレンチである。調査の結果、小ピットが4基検出されたのみで、目立った遺構は発見されなかった。また、遺物も全く出土していない。

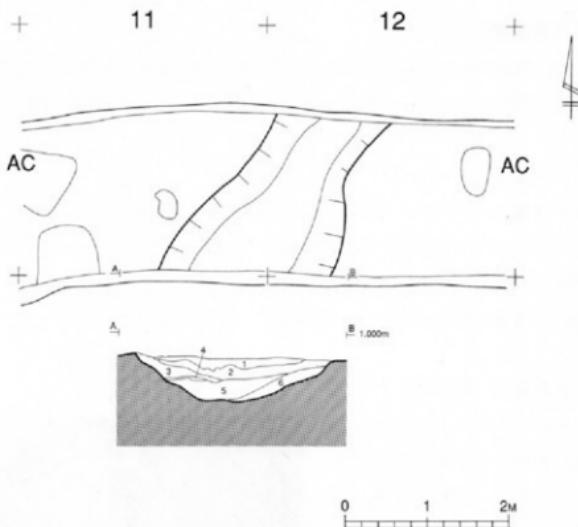
## 遺構外出土遺物（第25図）

遺物包含層から出土した高杯の脚部である。磨滅が極めて激しいため、調整等はほとんど不明であるが、内面にケズリの痕跡が認められ、古墳時代のものではないかと考えられる。

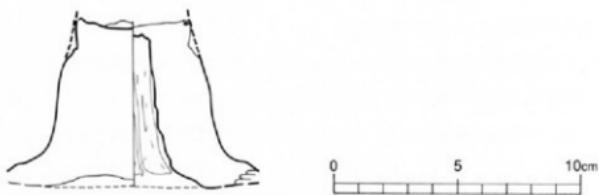


I地点では、古墳時代の土層のさらに下に、部分的にではあるが、縄文時代の包含層を確認している（第IV層）。この包含層からは、土器片の他に、頁岩や黒曜石製のチップがまとまって出土している。このような縄文時代の遺物が集中して発見された地域は、AD-21グリッド付近であり、他にも遺構が存在していた可能性がある。

新山崎遺跡の発掘調査においては、A-2地点で凹石（時期不明）が出土した事実があるが、明確な形で縄文時代の遺物が発見されたのはI地点以外では見られない。I地点は当遺跡のなかでは最も北側に位置する地点であり、この地域が縄文時代晩期には既に生活の舞台となっていた可能性が考えられる。第III層からは、古墳時代前期に特徴的に見られる土器片がまとまって出土している。確認調査の段階で、この地域においても該期の遺物が発見されており、新山崎遺跡における古墳時代（前期）の遺構・遺物の広がりがこの地域にまでおよんでいることが予測されていた。今回の調査の成果は、この予想を裏付けるものと解釈することができ、古墳時代前期の生活の痕跡は全調査地域の南端部から北端部のほぼ全域におよんでいることが明らかとなつた。



第24図 第12号溝跡



NO	器 様	器 形	出土場所	紋様・調査の特徴		法量(cm)			挽	存	写真図版
				外 面	内 面	深 高	口 径	底 径			
I	土拂器	高杯				ケズリ	(6.5)	—	—	脚部破片	

第25図 遺構外出土遺物

## 第7部 自然科学分析

## 目 次

石巻市新山崎遺跡の自然科学分析【1】 .....	209
I. 新山崎遺跡の土層とテフラ .....	209
1. はじめ .....	209
2. 地質層序 .....	209
3. 層折率測定 .....	210
4. 小 結 .....	211
II. 新山崎遺跡におけるプラント・オパール分析 .....	212
1. はじめ .....	212
2. 試 料 .....	212
3. 分 析 法 .....	212
4. 分析結果 .....	213
5. 考 察 .....	213
6. ま と め .....	214
石巻市新山崎遺跡の自然科学分析【2】 .....	216
I. 新山崎遺跡における種実同定 .....	216
1. 試 料 .....	216
2. 方 法 .....	216
3. 結 果 .....	216
4. 所 見 .....	217
II. 新山崎遺跡出土木製品の樹種同定 .....	219
1. 試 料 .....	219
2. 方 法 .....	219
3. 結 果 .....	219
4. 所 見 .....	223
新山崎遺跡出土土器の胎土分析 .....	224
X線回析試験及び化学分析試験 .....	224
1. 実験条件 .....	224
2. X線回析試験・蛍光X線分析結果の取扱い .....	224
3. X線回析試験結果 .....	227
4. 化学分析結果 .....	233
5. ま と め .....	235

# 石巻市、新山崎遺跡の自然科学分析【1】

株式会社 古環境研究所

## I. 新山崎遺跡の土層とテフラ

### 1.はじめに

宮城県域には、東北地方や中部地方、さらに九州地方や北海道地方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く分布している（たとえば早田・八木、1991）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされた示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることにより、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

新山崎遺跡の発掘調査でも、堆積年代の不明な土層が認められた。そこで地質調査を行って土層層序の記載を行うとともに、テフラについて屈折率を測定し、噴出年代が明らかな示標テフラの層位との同定を行い、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、H地点南側トレンチ、H地点北トレンチ、F地点I号溝跡の3地点である。

### 2. 地質層序

#### (1) H地点南側トレンチ

本地点では、下位より灰色砂層のブロック混じり暗灰色泥炭層（層厚14cm）、黄黒灰色泥炭層（層

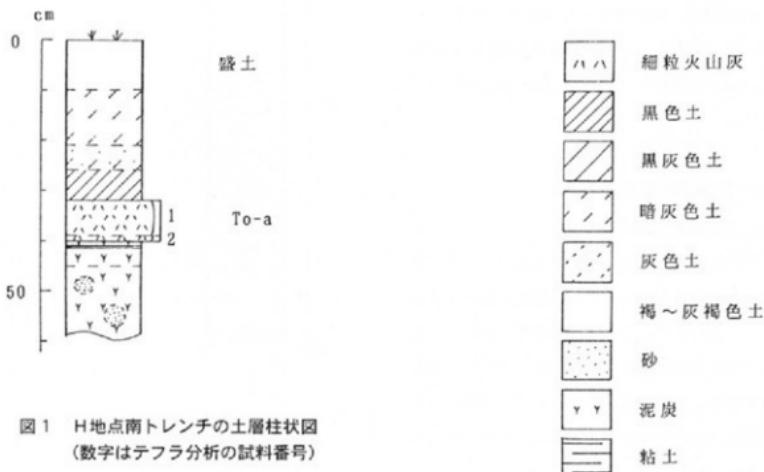


図1 H地点南トレンチの土層柱状図  
(数字はテフラ分析の試料番号)

厚4cm)、黄灰色粘土層(層厚0.2cm)、黒泥層(層厚0.9cm)、成層した火山灰層(層厚8cm)、黒色土(層厚6cm)、暗灰色砂質土(層厚5cm)、暗灰色作土(層厚11cm)、盛土(層厚10cm)が認められる(図1)。

これらのうち、成層した火山灰層は、下部の白色細粒火山灰層(層厚1cm)と上部の灰色がかかった白色細粒火山灰層(層厚7cm)から構成されている。

#### (2) H地点北側トレンチ

ここでは、下位より黒褐色泥層(層厚16cm)、黄灰色粘土層(層厚0.2cm)、黒泥層(層厚1cm)、黄白色細粒火山灰層(層厚6cm)、黒灰色泥層(層厚17cm)、灰色砂質土(層厚14cm)が認められる(図2)。

#### (3) F地点第1号溝跡

1号溝の覆土は、下位より灰色砂層(層厚11cm)、砂混じり黒灰色土(層厚2cm)、黄色がかかった白色細粒火山灰層(層厚5cm)、砂混じり黒灰色土(層厚19cm)、葉理の発達した灰色砂層(層厚14cm)、灰褐色砂質土(層厚23cm)、褐色作土(層厚22cm)が認められる(図3)。

### 3. 屈折率測定

#### (1) 測定試料と測定方法

H地点南側トレンチ、H地点北トレンチ、F地点1号溝の3地点において認められた3層のテフラについて、位相差法(新井、1972)により屈折率測定を行って、示標テフラとの同定の制度を向上させることにした。なおF地点1号溝跡で認められたテフラについては、下部と上部の2層を対象に測定を行った。

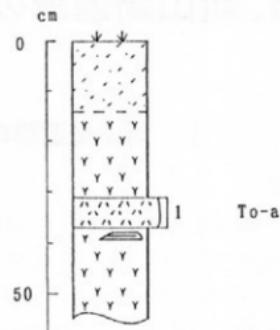


図2 H地点北トレンチの土層柱状図  
(数字はテフラ分析の試料番号)

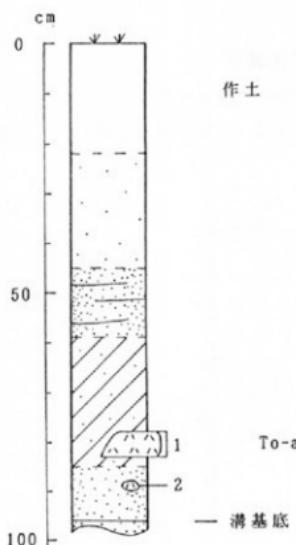


図3 F地点第1号溝覆土の土層柱状図  
(数字はテフラ分析の試料番号)

## (2) 測定結果

H地点南側トレンチの試料番号1には、透明や白色の軽石型火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や、単斜輝石がわずかに含まれている。H地点北側トレンチの試料番号1にも、透明や白色の軽石型火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.502-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石や、単斜輝石がわずかに含まれている。

F地点1号溝跡の試料番号2(下部)には、透明の軽石型火山ガラスが少量含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石がごくわずかに含まれている。また試料番号1(上部)には、透明や白色の軽石型火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.502-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石がわずかに含まれている。斜方輝石の屈折率(y)は、1.502-1.506である。

屈折率測定を行った試料に含まれるテフラ粒子は、火山ガラスの色調、形態、屈折率などから、915年に十和田火山から噴出した十和田a火山灰(To-a、大池、1972、町田ほか、1981)に由来すると考えられる。ただし、(町田・新井、1991)により記載されているTo-a(n:1.496-1.504)と比較して、火山ガラスの屈折率が若干高い傾向にある。同様な傾向は、仙台市周辺の多くの遺跡で認められている(古環境研究所、未公表試料)。これについては、To-aの噴出年代が新しく、地点により火山ガラスの水和の程度が異なることに起因している可能性がある(新井房夫・群馬大学名誉教授談)。現段階においては、To-aの可能性がもっとも大きいと思われるものの、さらに多くの地点で分析測定を行う必要がある。

## 4. 小結

新山崎遺跡において、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰(To-a、915年)に同定される可能性の高いテフラ層を認めることができた。

## 文 献

- 新井 房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究、第四紀研究、11、p. 254-269.
- 町田 洋・新井 房夫(1992)火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
- 町田 洋・新井 房夫・森脇 広(1981)日本海を渡ってきたテフラ、科学、51、p.562-569.
- 早田 勉・八木 浩司(1991)東北地方の第四紀テフラ研究、第四紀研究、30、p.369-378.
- 大池 昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11、p.232-233.

表1 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス				組合せ	重鉱物
		量	形態	色調	屈折率(n)		
H地点南	1	+++	pm	tr, wh	1.501-1.506	(opx, cpx)	-
H地点北	1	+++	pm	tr, wh	1.502-1.507	(opx, cpx)	-
F地点1号溝	1	+++	pm	wh, tr	1.502-1.506	(opx, cpx)	1.706-1.707
	2	+	pm	tr	1.502-1.505	(opx, cpx, ho)	-

+++：多い、++：中程度、+：少ない、-：認められない。pm：軽石型、bw：バブル型、tr：透明、wh：白色。opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石。屈折率の測定は、位相差法（新井、1972）による。

## II. 新山崎遺跡におけるプラント・オパール分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山、1984）。

### 2. 試料

試料は、H地点南側トレンチ（溝内）のTo-a直下層から採取された2点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40μmのガラスピーブズを約0.02g添加  
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)

- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オバールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オバールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オバール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}g$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケアキ科は0.48である。

#### 4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケアキ科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

#### 5. 考察

##### (1) 稲作跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。

H地点南側トレンチ（溝内）のTo-a直下層（試料1、2）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。密度は800～2,300個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。

これらのことから、当時は溝の周辺で稻作が行われており、そこから何らかの形で溝内にイネのプラント・オバールが混入したものと推定される。

表1 新山崎遺跡におけるプラント・オバール分析結果  
検出密度 (単位： $\times 100\text{個/g}$ )

分類群\試料	H地点南トレンチ	
	1	2
イネ	23	8
ヨシ属	38	60
ススキ属型	15	8
タケアキ科	8	

推定生産量 (単位： $\text{kg/m}^2 \cdot \text{cm}$ )		
イネ	0.67	0.22
ヨシ属	2.41	3.79
ススキ属型	0.19	0.09
タケアキ科	0.04	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

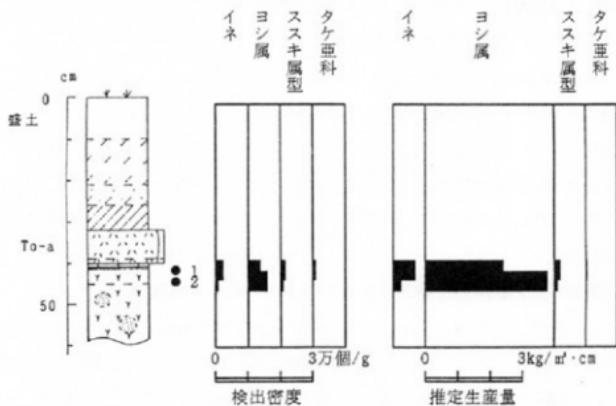


図1 新山崎遺跡、H地点南トレンチにおける  
プラント・オパール分析結果

## (2) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿润）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、ヨシ属が多く検出され、ススキ属型やタケ亜科は比較的小量である。おもな分類群の推定生産量（図1の右側）によると、ヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

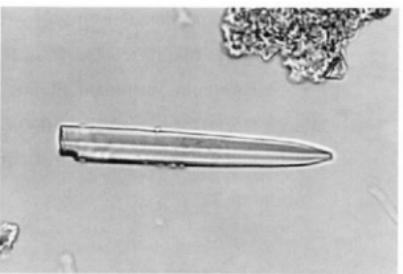
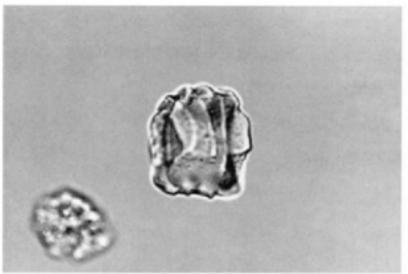
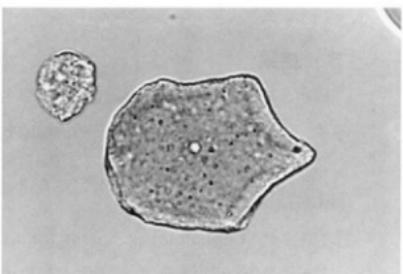
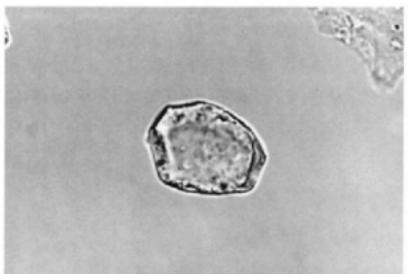
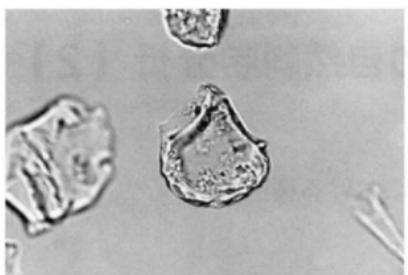
以上のことから、当時の溝内はヨシ属などが繁茂する湿地的な環境であったものと推定される。

## 6. まとめ

H地点南側トレンチ（溝内）のTo-a直下層についてプラント・オパール分析を行った。その結果、比較的少量ながらイネが検出され、溝の周辺で稻作が行われていた可能性が認められた。当時の溝内はヨシ属などが繁茂する湿地的な環境であったものと推定される。

## 参考文献

- 藤原 宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原 宏志・杉山 真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—考古学と自然科学、17、p.73-85.



# 石巻市新山崎遺跡の自然科学分析【2】

株式会社 古環境研究所

## I. 新山崎遺跡における種実同定

### 1. 試料

試料は、新山崎遺跡の井戸跡、土坑、溝跡より出土した22点の種実類である。出土地点は結果表に一覧する。

### 2. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 3. 結果

樹木5、草本2の計7が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

#### 〔樹木〕

a.イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K.Koch 種子 イヌガヤ科

茶褐色で長楕円形を呈す。表面には顆粒状の隆起がある。断面は両凸レンズ形である。

b.オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縫に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。断面は円形である。

c.ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. 核 バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

d.モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

e.トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子・幼果 トチノキ科

黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

幼果は茶褐色で倒卵形を呈す。長さ26.2mm、幅22.7mm程度。

## [草本]

f.イネ *Oryza sativa* L. 穂 イネ科

穂は茶褐色で扁平梢円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

g.カナムグラ *Humulus scandens* Merrill 種子 クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

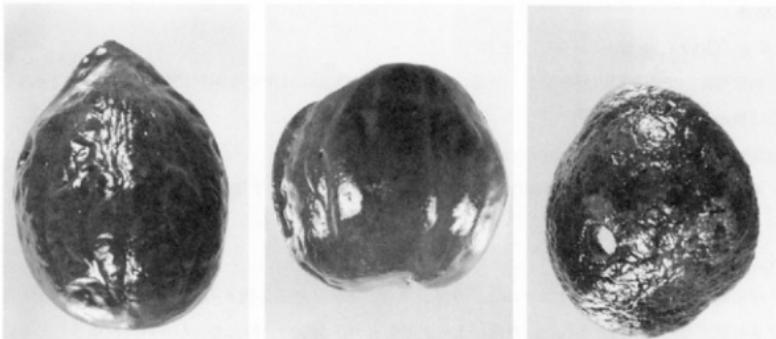
## 4. 所見

同定の結果、イヌガヤ、オニグルミ、ウメ、モモ、トチノキ等の樹木の種実、イネ（穂）、カナムグラの草本の種実が同定された。食用による大型のものばかりで、特にモモが多い。投棄されたものが堆積物に取り込まれたと考えられる。ウメ、モモ、イネは栽培植物であり、カナムグラは人為環境を好む草本である。ウメとモモは縄文時代晩期から弥生時代にかけて大陸から伝來した外来の栽培植物である。本遺跡のモモ核を金原（1996）の分類に照らし合わせると、弥生時代以降に継続して存在する丸みをもつA類と中世以降に出現する長めのE類に相当する。

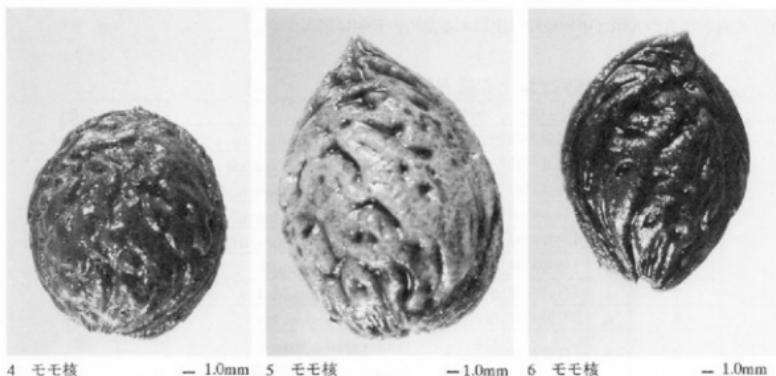
表1 新山崎遺跡における種実同定結果

試料番号	地点	出土場所	和名	学名	部位	個数
1	A	1号井戸跡	オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核	1
2	A	1号井戸跡	ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
3	A	1号井戸跡	イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	種子	1
4	A	1号井戸跡	トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	果実片	1
5	A	1号井戸跡	オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核片	1
6	A	1号井戸跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核片	1
7	A	1号井戸跡	オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核片	1
8	A	2号井戸跡	カナムグラ	<i>Humulus scandens</i> Merr.	種子	54
9	A	3号井戸跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
			オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核	1
10	B	1号井戸跡	オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核片	1
11	B	2号井戸跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
12	B	1号溝跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	4
13	B	1号溝跡				
14	B	1号井戸跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核片	1
15	D	11号溝跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
16	D	12号溝跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核片	1
17	D	16号溝跡	カナムグラ	<i>Humulus scandens</i> Merr.	種子	6
18	D	2号井戸跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
19	D	2号井戸跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
20	D	13号溝跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核片	1
21	D	5号溝跡	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核片	1
22	I	南トレンチ 1号土坑	イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	穂	11+

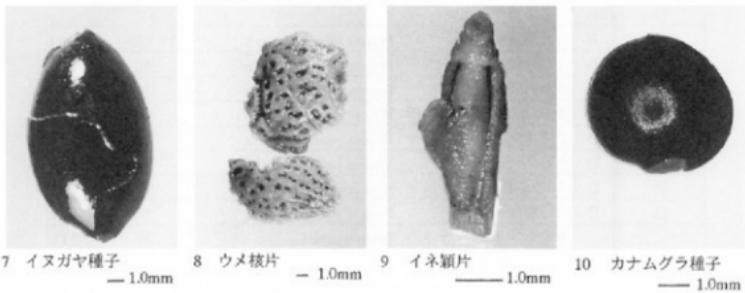
新山崎遺跡出土種実 I



1 オニグルミ核 —— 5.0mm 2 オニグルミ核 —— 1.0mm 3 トチノキ果実片 —— 1.0mm



4 モモ核 —— 1.0mm 5 モモ核 —— 1.0mm 6 モモ核 —— 1.0mm



7 イヌガヤ種子 —— 1.0mm 8 ウメ核片 —— 1.0mm 9 イネ穎片 —— 1.0mm 10 カナムグラ種子 —— 1.0mm

## 参考文献

- 南木 瞳彦 (1993) 葉・果実・種子.日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.
- 金原 正明 (1996) 古代モモの形態と品種.月刊考古学ジャーナルNo409、ニューサイエンス社、p.15-19.

## II. 新山崎遺跡出土木製品の樹種同定

### 1. 試料

試料は、新山崎遺跡出土の木製品9点である。出土地点は結果表に一覧する。

### 2. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 3. 結果

結果は第1表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表1 新山崎遺跡出土木製品の樹種同定結果

試 料 (No./製品名/出土場所)		樹 種	( 和 名 / 学 名 )
1 曲物状井戸枠	B地点	1号井戸跡	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
2 井戸枠(塙釜期)	D地点	1号井戸跡	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
3 棒(呪術用具)	A地点	2号井戸跡	ブナ科 <i>Fagaceae</i>
4 朱塗杯	A地点	3号井戸跡	ブナ属 <i>Fagus</i>
5 斧柄	E地点	5号溝跡	カヤ <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.
6 梹	D地点	14号溝跡	ブナ属 <i>Fagus</i>
7 加工木片	D地点	14号溝跡	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
8 加工木片	D地点	14号溝跡	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
9 加工木片	D地点	14号溝跡	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don

a.カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の濟州島に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

b.スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

図版2・3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

c.ブナ属 *Fagus* ブナ科

図版4・5

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。

早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるが、ほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

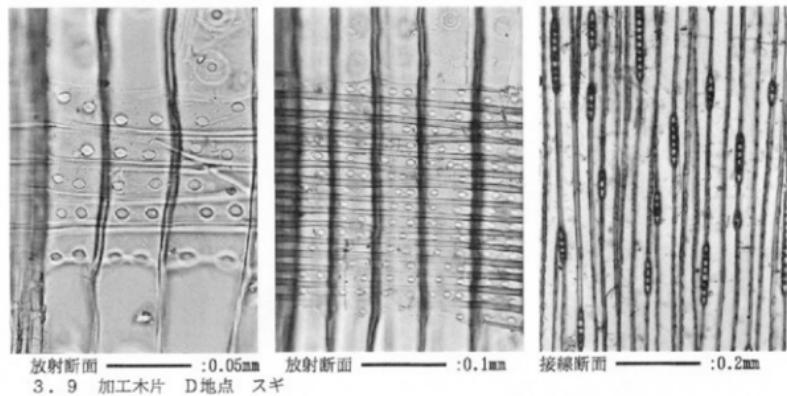
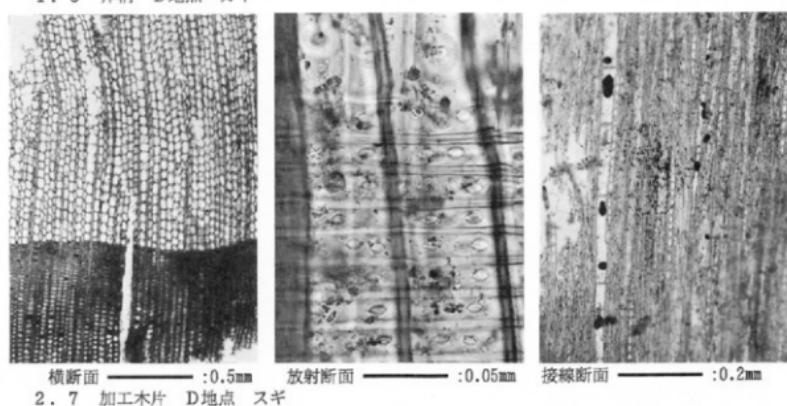
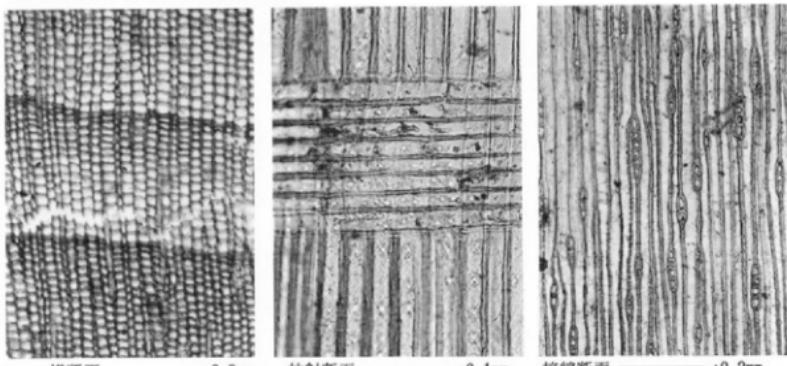
以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、韌性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

d.クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

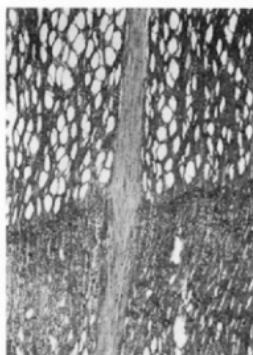
図版6

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状

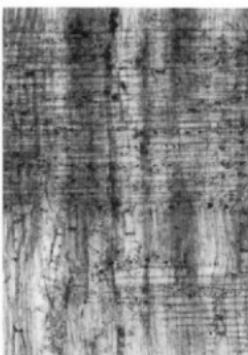
新山崎遺跡出土木製品の顕微鏡写真 I



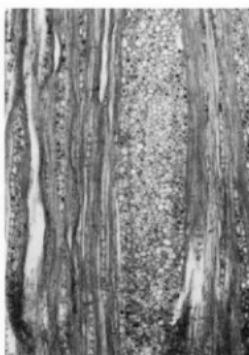
新山崎遺跡出土木製品の顕微鏡写真Ⅱ



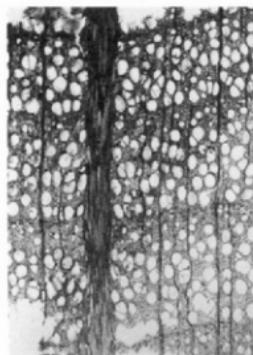
横断面 :0.5mm  
4.4 朱塗杯 A地点 3号井戸跡 ブナ属



放射断面 :0.2mm



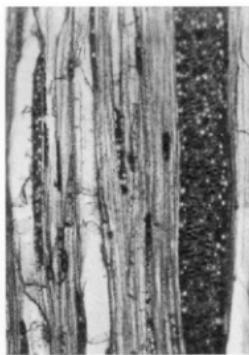
接縫断面 :0.2mm



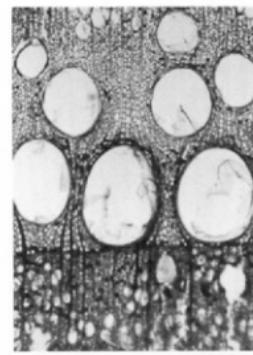
横断面 :0.5mm  
5.6 槌 D地点 ブナ属



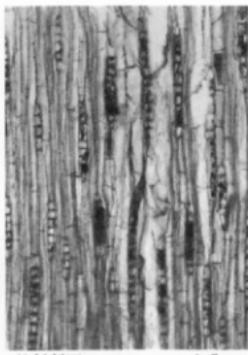
放射断面 :0.2mm



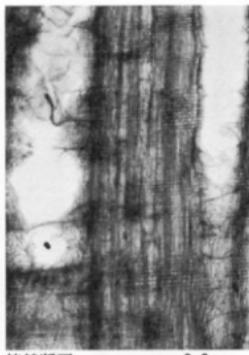
接縫断面 :0.2mm



横断面 :0.5mm  
6.2 井戸杵 (塩釜期) D地点 1号井戸跡 クリ



放射断面 :0.5mm



接縫断面 :0.2mm

に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など広く用いられる。

#### e. ブナ科 Fagaceae

横断面：部分的ではあるが、中型から大型の道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節のいずれかである。なお本試料は小片であり、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科の同定にとどまる。

## 4. 所見

同定の結果、スギ4、ブナ属2、ブナ科1、カヤ1、クリ1であった。井戸桟や加工材はスギとクリであり、いずれも水質に耐える木材である。杯と椀に用いられたブナ属は朝りものに多用される材である。斧柄はカヤであるが、粘りけのあるカヤは弓や柄に各時期において用いられる。

## 参考文献

- 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p.20-48.  
佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p.49-100.  
島地 謙・伊東 隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

# 新山崎遺跡出土土器の胎土分析

株式会社 第四紀地質研究所 井上 嶽

## I. X線回析試験及び化学分析試験

### 1 実験条件

#### 1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコートイングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

#### 1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計測時間: 0.5秒。

#### 1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素を行った。

## 2 X線回析試験・蛍光X線分析結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せによって焼成ランクを決定した。

## 2-1 組成分類

### 1) Mont-Mica-Hb 三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb\*100でパーセントとして求め、同様にMica、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMont、Mica、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

### 2) Mont-Ch、Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20とし別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、

- a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Chの2成分が含まれない、  
c) Mica、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回析試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch\*100と計算し、Mica、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。

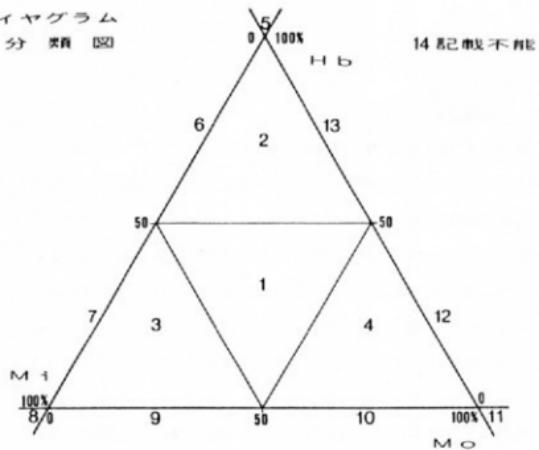
菱形ダイアグラム内にある1~7はMont、Mica、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMont、Mica、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

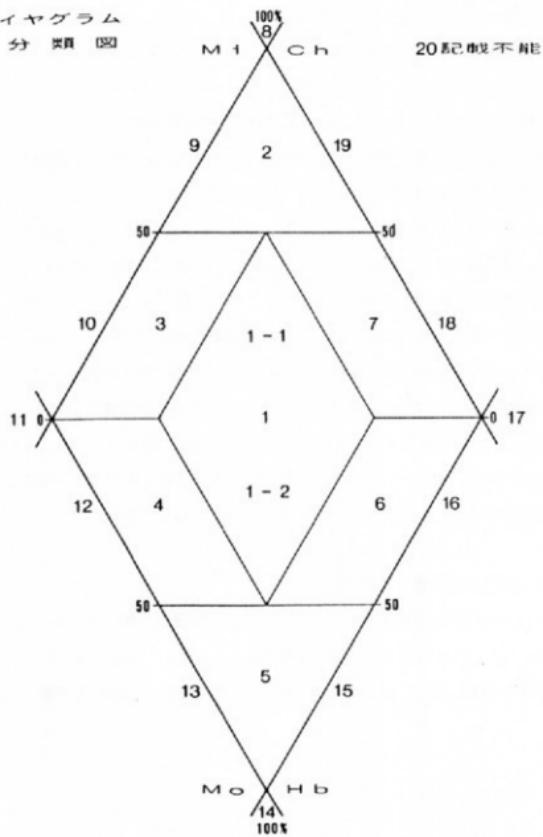
### 3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO図、K<sub>2</sub>O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

### 第1図 三角ダイヤグラム 位置分類図



第2図 楕形ダイヤグラム  
位置分類図



### 3 X線回析試験結果

#### 3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には新山崎遺跡より出土した土器が記載してある。

第3表に示すように土器胎土はA～Jの10タイプに分類された。

Aタイプ：Hb I成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。

Cタイプ：Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont I成分に欠ける。

Dタイプ：Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。組成的にはBタイプと同じであるが検出強度が異なる。

Eタイプ：Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。

Fタイプ：Mica以成分を含み、Mont、Hb、Chの3成分に欠ける。

Gタイプ：Mont、Micaの2成分を含み、Hb、Chの2成分に欠ける。

Hタイプ：Mont、Mica、Chの3成分を含み、Hb I成分に欠ける。

Iタイプ：Ch I成分を含み、Mont、Mica、Hb野3成分に欠ける。

Jタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。

主に、 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot H_2O$ （アロフェン質ゲル）で構成される。

最も多いタイプはA、D、Fタイプで各11個、次いで、Cタイプの6個、EとJタイプの各3個、B、G、H、Iタイプの各1個で構成される。DとFタイプは甕と器台が集中し、Aタイプは甕、器台、鉢、瓶など器種に富む。この3タイプで全体の約70%を占める。個体数の多いことから判断して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

#### 3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。

土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図Qt-Pl図に示すようにI～IIIの3グループに分類された。

Iグループ：Qt（石英）の強度が1800～2800の低い領域にある。

IIグループ：Pl（斜長石）の強度が400以上の領域にあり、Qtの強度が2800～4500の広い領域に分散する。

IIIグループ：Qtが3000～5000、Plが0～400の領域に集中するIとIIグループは明らかに異

第1表 胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	粘土風物および岩質物										備 考	土器番号						
		Mo-Mn-Hb	Mo-Ch	Mn-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pt	Crist	Multite	K-fels	Hallay	Kao	Pyrite	Au	
新山崎-1	E	8	20	144						4250	977	170							43
新山崎-2	H	14	20							3463	278	103							45
新山崎-3	A	5	20	112						3201	621	157							46
新山崎-4	A	5	20	65						3437	1038	185							5
新山崎-5	B	7	9	136	129	193				3321	226	97							50
新山崎-6	A	5	20	216						2108	433	132							49
新山崎-7	B	7	9	137	121	206				3831	370								52
新山崎-8	B	7	9	114	89	138				4507	521	143							53
新山崎-9	F	10	17	290	147					4041	373	99							54
新山崎-10	A	5	20	517						2865	585								55
新山崎-11	B	7	9	156	101	258				4798	460	113							56
新山崎-12	D	8	8	160	220					3598	376								1
新山崎-13	C	7	20	119	106					4030	340	124							2
新山崎-14	E	8	20	162						3943	860								3
新山崎-15	H	14	20			179				1778	302	172							4
新山崎-16	A	5	20	57						3509	374	177							5
新山崎-17	C	7	20	117	79					4454	282	113							6
新山崎-18	B	7	9	147	81	149				3989	278								7
新山崎-19	C	7	20	134	88					3408	235	109							9
新山崎-20	C	7	20	66	56					4655	182								10
新山崎-21	H	14	20							3115	500	150							11
新山崎-22	E	8	20	112						3516	304	118							12
新山崎-23	E	8	20	63						2524	357	187							13
新山崎-24	G	10	18	260	165					70	4013	169	119						14
新山崎-25	A	5	20	113						4267	789	127							15
新山崎-26	C	7	20	135	92					4191	737	159							17
新山崎-27	C	7	20	117	118					4353	400	128							19
新山崎-28	E	8	20	144						4194	1068	96							22
新山崎-29	A	5	20			97				3423	641	160							23
新山崎-30	D	8	8	164	216					3731	702								24
新山崎-31	A	5	20	80						3910	632	161							25
新山崎-32	E	8	20	125						3683	481	126							28

第1表 胎土性状表

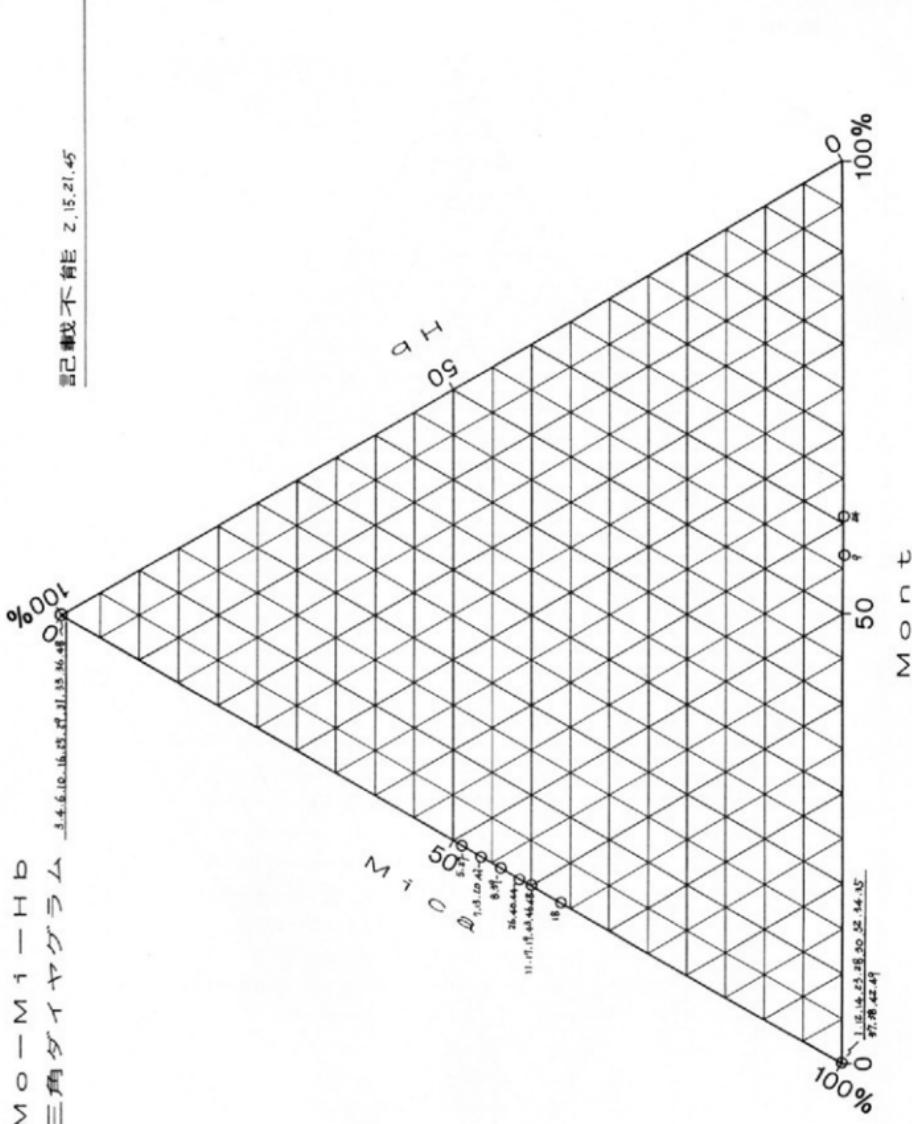
試料 No	タイプ 分類	組成分類						粘土鉱物および造岩鉱物			粘土鉱物および造岩鉱物			土器番号
		Mo-Ch/Hb	Mo-Ch/Hb	Mica	Hb	Ch(Fe)/Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halley	Kno/Pyrite/Au	
新山崎-33	A	5	20		87		395/9	397	187					29
新山崎-34	E	8	20		132		397/5	298	95					30
新山崎-35	E	8	20	121		378/0	454							31
新山崎-36	A	5	20	90		405/2	301	137						32
新山崎-37	E	8	20	141		410/7	293							33
新山崎-38	E	8	20	135		380/8	364	110						34
新山崎-39	C	7	20	97	72	409/1	348							35
新山崎-40	C	7	20	131	88	362/6	568	122						36
新山崎-41	B	7	9	142	119	192	358/1	949						37
新山崎-42	D	8	8	149		164	337/5	337	104					40
新山崎-43	C	7	20	142	88	396/4	254	110						41
新山崎-44	C	7	20	140	94	407/8	236	91						42
新山崎-45	H	14	20			335/1	141	119	116					101
新山崎-46	C	7	20	143	93	381/9	425	121						102
新山崎-47	C	7	20	137	86	412/9	329	110						103
新山崎-48	A	5	20		96	387/1	413	165						104
新山崎-49	E	8	20		116	437/4	267	142						105

Mont : モンモリロナイト Mica : 黒雲母 Hb : 角閃石 Ch : Fe-一次反射, Ch : Mg-二次反射 Qt : 石英 Pl : 錫石 Crist : クリストバライト

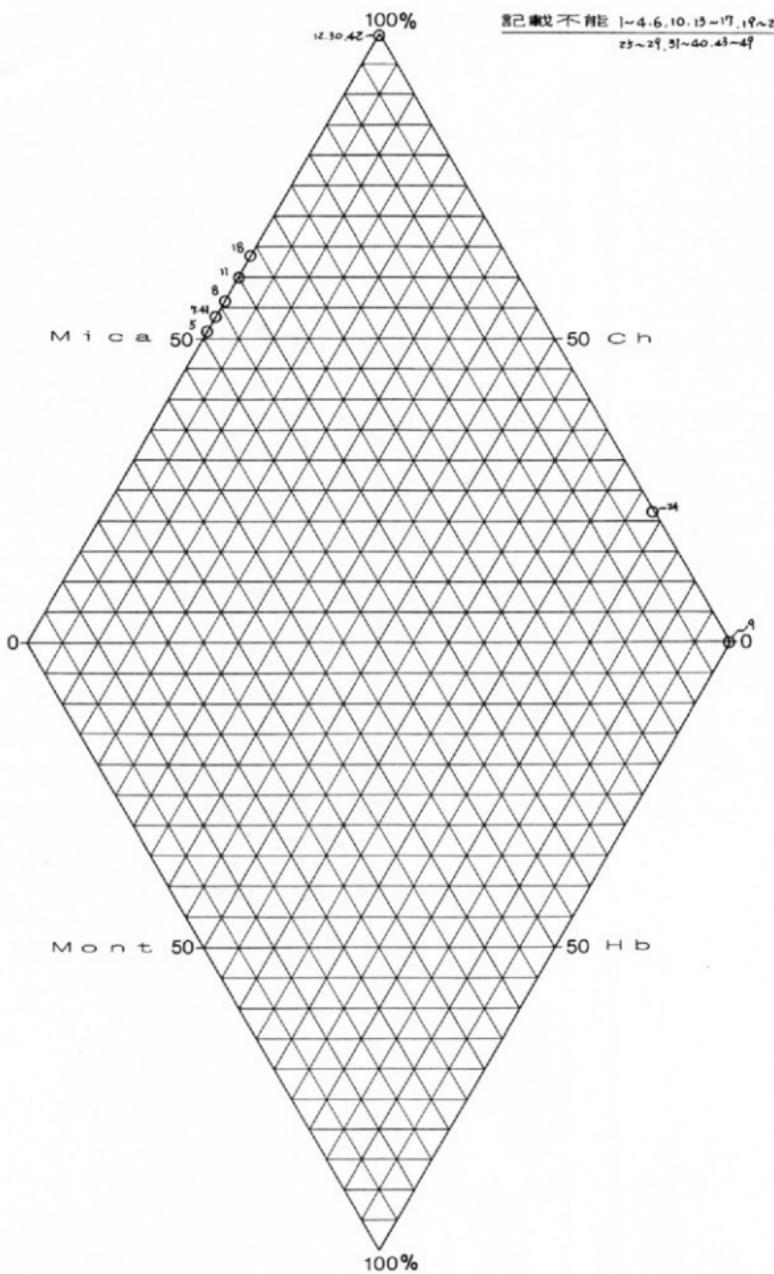
第3表 タイプ分類一覧表

試料 No	タイプ 分類	参考 No	土器番号	試料 No	タイプ 分類	参考 No	土器番号
新山崎-3	A	瓶	a 古墳前	土師器	E 2 土坑	46 新山崎-43	C 高环
新山崎-4	A	甕	b 古墳前	土師器	F 1 土器集中	5 新山崎-44	C 裂
新山崎-6	A	甕	b 古墳前	土師器	E 2 土坑	49 新山崎-46	C 裂
新山崎-10	A	甕	b 古墳前	土師器	A 2 方形周溝	55 新山崎-47	C 裂
新山崎-16	A	甕	a 古墳前	土師器	F 3 土坑	6 新山崎-12	D 带
新山崎-25	A	甕	a 古墳前	土師器	F 3 土坑	17 新山崎-30	D 带
新山崎-29	A	盆	a 古墳前	土師器	F 週溝外	23 新山崎-42	D 带
新山崎-31	A	盆	a 古墳前	土師器	F 3 溝	25 新山崎-1	E 裂
新山崎-33	A	器台	a 古墳前	土師器	F 3 土坑	29 新山崎-14	E 裂
新山崎-36	A	器台	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	32 新山崎-22	E 裂
新山崎-48	A	甕?	b 古墳前	土師器	F 週溝外	104 新山崎-23	E 裂
新山崎-5	B	甕	b 古墳前	土師器	G 1 土坑	50 新山崎-28	E 裂
新山崎-7	B	甕	a 古墳前	土師器	カクニニ	52 新山崎-32	E 裂
新山崎-8	B	小甕	a 古墳前	土師器	D 1 井口	53 新山崎-34	E 器台
新山崎-11	B	甕?	a 古墳前	土師器	カクニニ	56 新山崎-35	E 器台
新山崎-18	B	甕	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	9 新山崎-37	E 器台
新山崎-41	B	器台	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	37 新山崎-38	E 器台
新山崎-13	C	甕	B 古墳前	土師器	F 5 土坑	2 新山崎-49	E 裂?
新山崎-17	C	甕	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	7 新山崎-9	F 壺
新山崎-19	C	甕	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	10 新山崎-24	G 裂
新山崎-20	C	甕	a 古墳前	土師器	F 1 土坑	11 新山崎-2	H 器台
新山崎-26	C	甕	a 古墳前	土師器	F 週溝外	18 新山崎-15	H 器台
新山崎-27	C	甕	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	19 新山崎-21	H 器台
新山崎-39	C	器台	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	35 新山崎-45	H 裂
新山崎-40	C	器台	a 古墳前	土師器	F 5 土坑	36	H 裂

第3図



## 菱形ダイヤグラム



質であり、III群は個体数も多く、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。III群は(仮称)在地系( $\alpha$ タイプ)の器台と壺、(仮称)外来系( $\beta$ タイプ)の壺と壺などが集中する。ここでは器種のタイプは $\beta$ タイプであるが $\alpha$ タイプと同じ領域にあり、明らかに関連性が窺われる。

#### 4 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように、新山崎遺跡の土器と土器を化学分析した。

分析結果に基づいて第6図 $S_{iO_2}-Al_{2O_3}$ 図、第7図 $Fe_{2O_3}-MgO$ 図、第8図 $K_{2O}-CaO$ 図を作成した。

##### 4-1 $S_{iO_2}-Al_{2O_3}$ の相関について

第6図 $S_{iO_2}-Al_{2O_3}$ 図に示すように新山崎遺跡の土器はIとIIの2群と“その他”に分類された。 $S_{iO_2}$ の値の低い領域にはI群、高い領域にII群を形成する。

I群： $S_{iO_2}$ が55～65%、 $Al_{2O_3}$ のが20～35%の広い領域に分散する。このグループは $Qt-Pt$ 相関の中でのIとII群に対応するものである。

II群： $S_{iO_2}$ が64～74%、 $Al_{2O_3}$ のが15～30%の領域に集中する。このグループは $Qt-Pt$ 相関でのIII群に対比される。

“その他”：新山崎-16、17、25、31の4個はIとIIの2群に入らないもので、異質である。新山崎-16、17は成分的にはII群に近い。

土器胎土は明瞭に2タイプあることを示している。I群とII群はともに $\alpha$ タイプと $\beta$ タイプの土器が共存し、明瞭な分類はできない。

##### 4-2 $Fe_{2O_3}-MgO$ の相関について

第7図 $Fe_{2O_3}-MgO$ 図に示すように、I～Vの5群に分類される。

I群： $Fe_{2O_3}$ が2～8%、 $MgO$ が0～0.5%の領域に集中する。個体数は37個と $\alpha$ タイプ、 $\beta$ タイプを問わずそのほとんどが集中する。

II群：新山崎-30、46の鉢が集中する。

III群：新山崎-10、48は $Fe_{2O_3}$ が4～12%、 $MgO$ が1.4%以上の高い領域にあり、異質である。

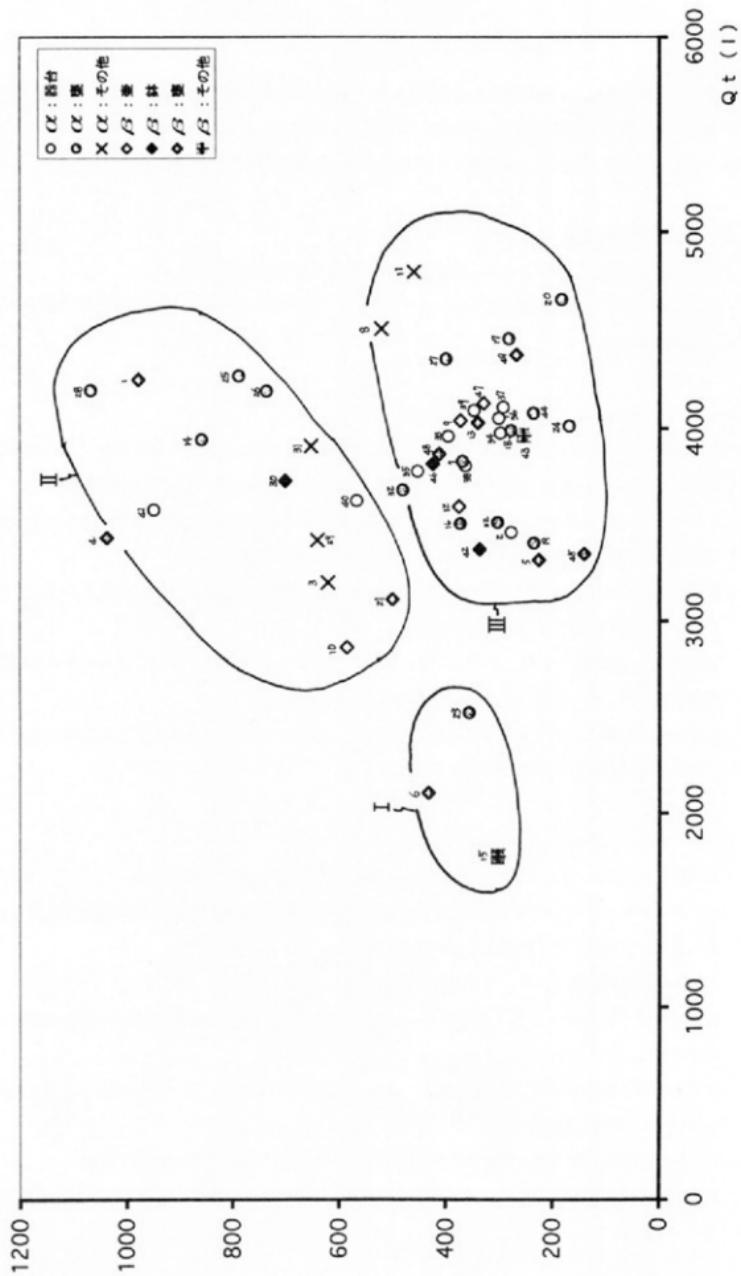
IV群：新山崎-3、16、21、31、36の5個は $Fe_{2O_3}$ が8～10%、 $MgO$ が0～0.3%の狭い領域に集中する。

V群：新山崎-2、9、33の3個は $Fe_{2O_3}$ が11～14%の高い領域にある。

I群は $\alpha$ タイプと $\beta$ タイプが共存する。II～Vは明らかに異なる領域を形成し、異質である。

P I (I)

第5図 Q t - P I 図



#### 4-3 K<sub>2</sub>O-CaOの相関について

第8図K<sub>2</sub>O-CaO図に示すように、新山崎遺跡の土器はI～IVの4グループに分類される。

I グループ：新山崎-6、15、21、24、25、29、46の7個はK<sub>2</sub>Oが0.5～1.3%の低い領域にある。新山崎-24と46はIIIグループに近い。

II グループ：新山崎-10、28、39、48の4個はK<sub>2</sub>Oが1.5～2.5%、CaOが1.0～2.8%の高い領域に分布する。

III グループ：新山崎遺跡の土器の大半が集中する。K<sub>2</sub>Oが1.0～2.5%、CaOが0.0～0.8%の領域に分布する。

IV グループ：新山崎-31、33の2個はK<sub>2</sub>Oが2～3.5%、CaOが0.5～1.0%の領域に分布する。

### 5 まとめ

1) 土器胎土はA～Jの10タイプに分類され、A、D、Fの3タイプで70%以上を占める。これら3タイプが個体数の多いことから判断して在地および在地近傍の可能性が高い。

2) X線回析試験に基づくQt-Pt相関ではI～IIIの3グループに分類され、Iグループの新山崎-6、15、23はQtの強度が低く異質である。IIグループはPtの強度が高く異質であり、IIIグループは $\alpha$ タイプと $\beta$ タイプが共存し、集中度が高い。少なくとも3タイプに分類される。

3) 化学分析結果に基づいて第4表土器分類表を作成した。分類では①～⑦の7タイプに分類された。

①タイプはQt-Ptの中で異質、②タイプはMgOの値が高く異質、③タイプはFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が低い領域と高い領域に分かれ異質、④タイプはK<sub>2</sub>OとCaOの領域が異なり異質、⑤タイプはSiO<sub>2</sub>とAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の領域が異なり、これら5タイプは少なくとも在地近傍の中で異質なものである。

⑥タイプは在地の粘土を使って、砂の混合比が異なるタイプ。⑦タイプは明らかに在地あるいは在地近傍のタイプ。⑦タイプを検討すると分類では $\beta$ タイプと $\alpha$ タイプに分類されるが土器胎土としては成分が類似し、土器胎土からは分けることはできない。すなわち、 $\beta$ タイプも在地の粘土を使って製作されているのではなかろうか。

第2表 化学分析表

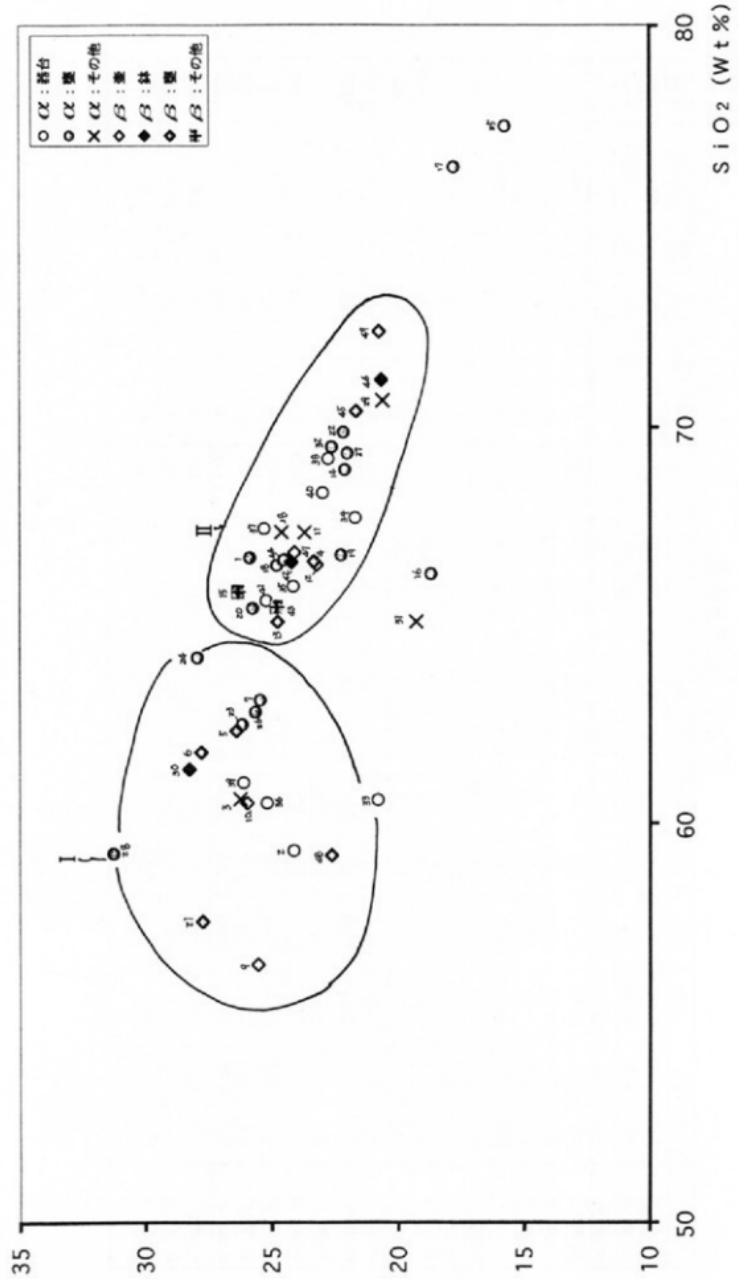
試料番号	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	TiO <sub>2</sub>	MnO	FeO <sub>Ts</sub>	NiO	Total	器形	備考	時代	出土地	出土位置	器種
新山崎-1	0.31	0.40	25.87	66.72	1.88	0.55	0.88	0.40	2.98	0.00	99.99	要	α	古墳前	43 D 1井戸	土師器
新山崎-2	0.19	0.32	24.16	59.32	1.31	0.51	0.94	0.96	12.05	0.24	100.00	器台	α	古墳前	45 D 1基盤中	土師器
新山崎-3	0.85	0.17	26.25	60.63	1.17	0.49	1.09	0.90	8.42	0.03	100.00	甑	α	古墳前	46 E 2土坑	土師器
新山崎-4	0.72	0.21	23.33	66.64	1.58	0.63	1.21	0.40	5.29	0.00	100.01	要	β	古墳前	5 F 1土器集中	土師器
新山崎-5	0.30	0.50	26.40	62.95	1.26	0.49	0.96	0.73	6.92	0.10	100.01	要	β	古墳前	50 G 1土坑	土師器
新山崎-6	0.88	0.42	27.79	61.81	1.16	0.76	0.85	0.44	5.91	0.00	100.02	壺	β	古墳前	49 E 2土坑	土師器
新山崎-7	0.28	0.19	25.47	63.13	1.62	0.70	1.20	0.62	6.79	0.00	100.00	要	α	古墳前	52 カクニニ	土師器
新山崎-8	0.84	0.00	24.61	67.37	1.28	0.44	0.99	0.36	4.98	0.03	100.00	壺	α	古墳前	53 D 1井戸	土師器
新山崎-9	0.39	0.33	25.55	56.47	1.61	0.54	1.19	0.97	12.91	0.04	100.00	壺	β	古墳前	54 A 3方形陶器	土師器
新山崎-10	1.32	1.45	25.97	60.53	1.54	1.23	1.09	0.68	6.19	0.00	100.00	壺	β	古墳前	55 A 2方形陶器	土師器
新山崎-11	0.30	0.41	23.71	67.26	1.52	0.54	1.00	0.64	4.43	0.08	99.99	複合壺	α	古墳前	56 カクニニ	土師器
新山崎-12	0.26	0.39	23.24	66.55	1.41	0.25	0.89	0.55	6.21	0.27	100.02	小型壺	β	古墳前	1 F 5 土坑	土師器
新山崎-13	0.32	0.16	24.77	65.11	1.92	0.41	1.08	0.38	5.85	0.01	100.01	小型壺	β	古墳前	2 F 5 土坑	土師器
新山崎-14	1.10	0.05	22.12	68.95	1.46	0.38	1.11	0.29	4.34	0.19	99.99	複合壺	α	古墳前	3 F 5 土坑	土師器
新山崎-15	0.78	0.00	26.32	65.87	0.75	0.53	0.75	0.48	4.36	0.15	99.99	要	β	古墳前	4 F 通槽外	土師器
新山崎-16	0.99	0.21	18.72	66.32	1.53	0.57	0.55	0.78	9.81	0.11	99.99	要	α	古墳前	6 F 3 土坑	土師器
新山崎-17	0.25	0.07	17.80	76.48	1.33	0.30	0.54	0.29	2.94	0.00	100.00	要	α	古墳前	7 F 5 土坑	土師器
新山崎-18	0.64	0.00	24.82	66.53	1.72	0.70	0.71	0.20	4.70	0.00	100.02	要	α	古墳前	9 F 5 土坑	土師器
新山崎-19	0.64	0.00	22.28	66.78	1.76	0.60	1.04	0.45	6.45	0.00	100.00	要	α	古墳前	10 F 5 土坑	土師器
新山崎-20	0.46	0.23	25.75	65.45	2.08	0.41	0.89	0.47	4.27	0.00	100.01	要	α	古墳前	11 F 1 土坑	土師器
新山崎-21	1.52	0.00	27.75	57.54	0.79	0.85	0.91	0.75	9.24	0.53	99.98	壺	β	古墳前	12 F 1 土坑	土師器
新山崎-22	0.28	0.20	22.17	69.88	1.68	0.44	0.85	0.13	4.37	0.00	100.00	要	α	古墳前	13 F 5 土坑	土師器
新山崎-23	0.86	0.05	28.18	62.51	1.24	0.48	1.05	0.45	7.00	0.18	100.00	要	α	古墳前	14 F 2 土器集中	土師器
新山崎-24	0.34	0.19	27.97	64.20	0.93	0.50	0.69	0.38	4.60	0.19	99.99	要	α	古墳前	15 F 1 土坑	土師器
新山崎-25	0.49	0.00	15.75	77.50	0.87	0.36	0.49	0.66	3.62	0.26	100.00	要	α	古墳前	17 F 3 土坑	土師器
新山崎-26	0.20	0.05	25.66	62.82	1.85	0.35	1.40	0.62	7.06	0.00	100.01	要	α	古墳前	18 F 通槽外	土師器
新山崎-27	0.37	0.00	22.02	69.36	1.84	0.48	0.80	0.47	4.56	0.11	100.01	要	β	古墳前	19 F 5 土坑	土師器
新山崎-28	0.07	0.16	31.30	59.24	2.07	1.90	1.38	0.48	3.08	0.31	99.99	小型壺	α	古墳前	22 F 5 土坑	土師器

第2表 化学分析表

試料番号	Ni/Zn	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	NiO	Total	器形	備考	時代	$\frac{Mg}{Mg+Fe}$	出土位置	器種
新山崎-29	1.19	0.00	20.62	70.68	0.88	0.42	0.68	0.48	4.88	0.16	99.99	鉢	$\alpha$	古墳前	23 F 道標外	土師器
新山崎-30	0.42	0.80	28.26	61.38	1.51	0.58	1.14	0.68	5.15	0.08	100.00	鉢	$\beta$	古墳前	24 F 1 土器集中	土師器
新山崎-31	0.92	0.00	19.29	65.11	2.13	0.78	1.18	0.97	9.56	0.06	100.00	鉢	$\alpha$	古墳前	25 F 3溝	土師器
新山崎-32	1.04	0.00	22.65	69.52	1.37	0.66	0.91	0.26	3.57	0.02	100.00	甕	$\alpha$	古墳前	8 F 道標外	土師器
新山崎-33	0.61	0.67	20.84	60.60	2.96	0.57	1.24	0.69	11.66	0.16	100.00	器台	$\alpha$	古墳前	29 F 3.1坑	土師器
新山崎-34	0.49	0.14	21.72	67.73	1.97	0.32	0.76	0.68	6.20	0.00	100.01	器台	$\alpha$	古墳前	30 F 5.1坑	土師器
新山崎-35	0.36	0.00	24.17	66.01	1.43	0.36	1.17	0.40	5.72	0.38	100.00	器台	$\alpha$	古墳前	31 F 5.1坑	土師器
新山崎-36	0.92	0.27	25.20	60.52	1.41	0.68	1.04	0.83	8.89	0.24	100.00	器台	$\alpha$	古墳前	32 F 5.1坑	土師器
新山崎-37	0.12	0.12	25.30	67.45	1.21	0.39	0.67	0.52	4.22	0.00	100.00	器台	$\alpha$	古墳前	33 F 5.1坑	土師器
新山崎-38	0.29	0.01	22.77	69.22	1.38	0.26	0.78	0.44	4.86	0.00	100.01	器台	$\alpha$	古墳前	34 F 5.1坑	土師器
新山崎-39	0.83	0.35	26.12	61.04	2.14	1.33	0.95	0.50	6.74	0.00	100.00	器台	$\alpha$	古墳前	35 F 5.1坑	土師器
新山崎-40	0.45	0.02	22.99	68.36	1.31	0.36	0.92	0.28	5.31	0.00	100.00	器台	$\alpha$	古墳前	36 F 5.1坑	土師器
新山崎-41	0.64	0.47	25.24	65.64	1.37	0.31	0.75	0.26	5.02	0.29	99.99	器台	$\alpha$	古墳前	37 F 5.1坑	土師器
新山崎-42	0.41	0.23	24.22	66.61	1.70	0.36	1.01	0.44	4.93	0.11	100.02	鉢	$\beta$	古墳前	40 F 5.1坑	土師器
新山崎-43	0.35	0.24	24.79	65.48	1.78	0.33	0.91	0.49	5.64	0.00	100.01	高杯	$\beta$	古墳前	41 F 5.1坑	土師器
新山崎-44	0.13	0.01	24.53	66.67	1.50	0.39	0.83	0.53	5.25	0.13	99.97	甕	$\alpha$	古墳前	42 F 5.1坑	土師器
新山崎-45	0.00	0.08	21.66	70.12	1.32	0.31	0.97	0.35	4.88	0.00	99.99	?	$\beta$	古墳前	101 D 1.5溝	土師器
新山崎-46	0.17	0.67	20.67	71.19	1.00	0.39	0.67	0.64	4.49	0.11	100.00	鉢	$\beta$	古墳前	102 F 5.1坑	土師器
新山崎-47	0.18	0.10	24.10	66.86	1.30	0.21	1.14	0.50	5.49	0.10	99.98	甕	$\beta$	古墳前	103 F 道標外	土師器
新山崎-48	0.76	1.27	22.64	59.20	1.96	1.42	1.14	0.78	10.47	0.27	100.01	?	$\beta$	古墳前	104 F 道標外	土師器
新山崎-49	0.50	0.00	20.75	72.39	1.20	0.47	0.76	0.46	3.49	0.00	100.02	甕?	$\beta$	古墳前	105 F 5.1坑	土師器

Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> (Wt %)

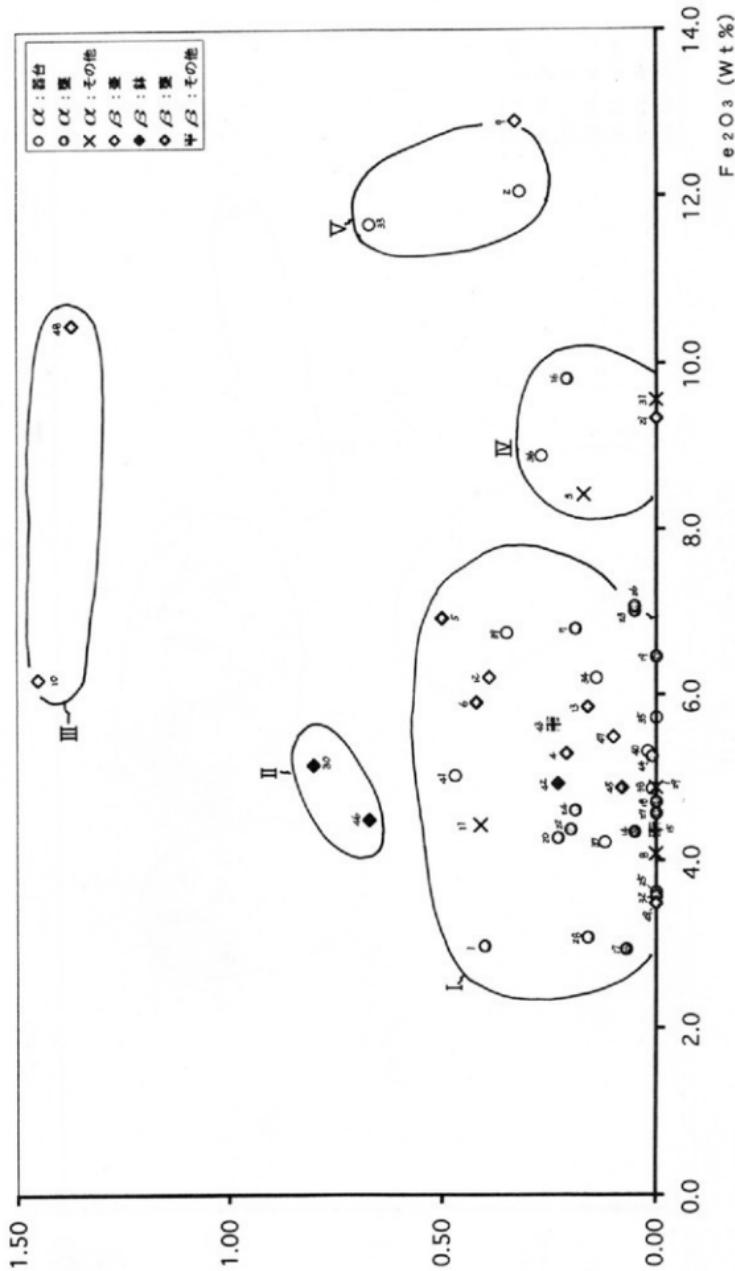
第6図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図



MgO (Wt %)

1.50

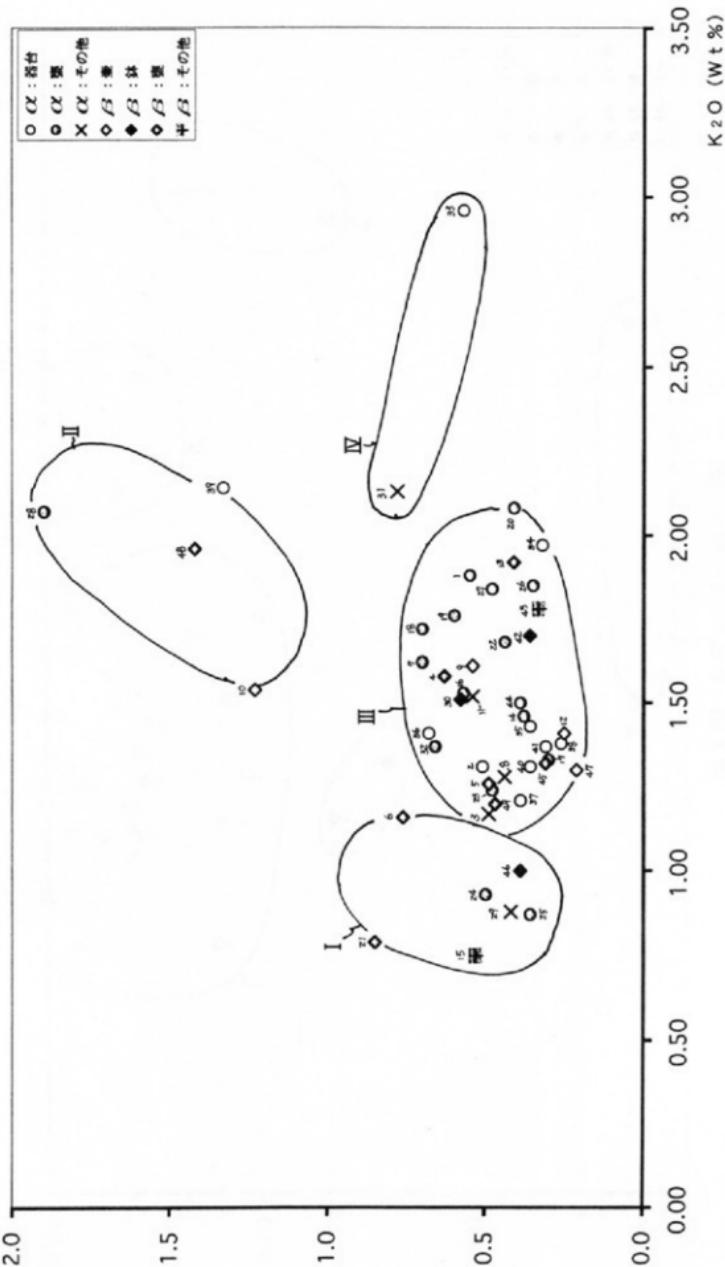
第7図  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ -MgO図



CaO (Wt %)

2.0

第8図 K<sub>2</sub>O-CaO図



第4表 土器分類表

試料 No.	タイプ 分類	備 考				土器 番号
① Qt-Pi異質						
新山崎-6	A	甕	α	古墳前	土師器	E 2 土坑 49
新山崎-15	H	複合壺	β	古墳前	土師器	F 遺構外 4
新山崎-23	E	甕	α	古墳前	土師器	F 2 土器集中 14
② MgO異質						
新山崎-10	A	壺	β	古墳前	土師器	A 2 方形周溝 55
新山崎-48	A	甕?	β	古墳前	土師器	F 遺構外 104
③ Fe2O3異質						
新山崎-3	A	甕	α	古墳前	土師器	E 2 土坑 46
新山崎-16	A	甕	α	古墳前	土師器	F 3 土坑 6
新山崎-21	H	甕	β	古墳前	土師器	F 1 土坑 12
新山崎-36	A	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 32
新山崎-2	H	器台	α	古墳前	土師器	D 土器集中 45
新山崎-9	F	壺	β	古墳前	土師器	A 3 方形周溝 54
新山崎-31	A	鉢	α	古墳前	土師器	F 3 溝 25
新山崎-33	A	器台	α	古墳前	土師器	F 3 土坑 29
④ K2O-CaO異質						
新山崎-24	G	甕	α	古墳前	土師器	F 1 土坑 15
新山崎-25	A	甕	α	古墳前	土師器	F 3 土坑 17
新山崎-28	E	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 22
新山崎-39	C	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 35
⑤ SiO2-Al2O3異質						
新山崎-30	D	鉢	β	古墳前	土師器	F 1 土器集中 24
新山崎-26	C	甕	α	古墳前	土師器	F 遺構外 18
新山崎-5	B	甕	β	古墳前	土師器	G 1 土坑 50
新山崎-7	B	甕	α	古墳前	土師器	カクニン 52
新山崎-17	C	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 7
⑥ αでQt-Pi異質						
新山崎-4	A	甕	β	古墳前	土師器	F 1 土器集中 5
新山崎-1	E	甕	α	古墳前	土師器	D 1 井戸 43
新山崎-29	A	鉢	α	古墳前	土師器	F 遺構外 23
新山崎-40	C	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 36
新山崎-41	B	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 37
⑦ α共通						
新山崎-43	C	高杯	β	古墳前	土師器	F 5 土坑 41
新山崎-12	D	壺	β	古墳前	土師器	F 5 土坑 1
新山崎-47	C	甕	β	古墳前	土師器	F 遺構外 103
新山崎-42	D	鉢	β	古墳前	土師器	F 5 土坑 40
新山崎-46	C	鉢	β	古墳前	土師器	F 5 土坑 102
新山崎-13	C	甕	β	古墳前	土師器	F 5 土坑 2
新山崎-45	H	甕	β	古墳前	土師器	D 1 5 溝 101
新山崎-49	E	甕?	β	古墳前	土師器	F 5 土坑 105
新山崎-34	E	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 30
新山崎-35	E	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 31
新山崎-37	E	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 33
新山崎-38	E	器台	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 34
新山崎-8	B	小型甕	α	古墳前	土師器	D 1 井戸 53
新山崎-11	B	甕?	α	古墳前	土師器	カクニン 56
新山崎-29	A	鉢	α	古墳前	土師器	F 遺構外 23
新山崎-14	E	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 3
新山崎-18	B	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 9
新山崎-19	C	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 10
新山崎-20	C	甕	α	古墳前	土師器	F 1 土坑 11
新山崎-22	E	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 13
新山崎-27	C	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 19
新山崎-32	E	甕	α	古墳前	土師器	F 遺構外 8
新山崎-44	C	甕	α	古墳前	土師器	F 5 土坑 42

### 註

今回の分析を実施するにあたり、株式会社第四紀地質研究所から、科学的な分析との比較対照とするために、分析対象とする土器を、外面観察によって（ $\alpha$ ）在地的様相が強いと考えられるもの、と（ $\beta$ ）外来的様相が強いと考えられるものとに分類してもらいたいという要請があった。このため、以上のような分類を暫定的に実施した上で土器の胎土分析に臨んだわけである。

その結果として、この分類は、土器の胎土分析結果とはやや異なるものであることが判明した。

しかし、今回の報告では、分析作業の過程で実施した項目であるため、掲載させていただくこととしたい。また、この分類は、第8部 遺物と遺構の検討 Ⅰ.出土土器の検討における出土土器の分類とは、無関係であることをおことわりしておきたい。

## 第8部 遺物と遺構の検討

## 目 次

I. 出土土器について	245
1. 繩文時代	245
2. 古墳時代	245
(1) 分類	245
(2) 土器の新旧関係	253
(3) 土器の様相	262
(4) 田道町遺跡出土土器との比較	263
3. 奈良・平安時代	264
(1) 土師器	264
(2) 須恵器	264
4. 土器の胎土分析について	265
(1) 分析内容の理解	265
(2) 分析結果の理解	265
(3) 分析結果からわかること	266
II. 遺構について	270
1. 各時代における遺構分布のあり方について	270
2. 方形周溝墓について	271
3. 古墳時代前期の井戸跡について	272
4. 土器集中遺構（土坑）について	273
5. 井戸跡について	275
6. その他の遺構について	275
III. まとめ	278

## I. 出土土器について

新山崎遺跡からは、縄文時代から近世までの土器が出土している。ここでは、特にまとまった出土が見られた、縄文時代～奈良・平安時代の土器について検討してみることとする。

### 1. 縄文時代

出土したのは I 地点のみであり、ビット 33 と第2号土坑からまとまった出土が見られた。

第2号土坑底面一括土器の口縁部破片の中に、小波状縁を有し、小突起と弧線、刻み目と沈線、単節斜縄文が施された浅鉢が見られる。石巻市およびその近隣においては、沼津貝塚、河南町宝ヶ峰貝塚、桃生町深山遺跡（桃生町史編纂委員会：1988）からの出土資料の中に類似の資料が認められ、大洞 C1 期のものであると考えられる。また、この他に、羽状縄文を持つ胴部～底部破片が出土しており、前述の土器片とは一括資料の関係にある。

### 2. 古墳時代

確認調査、A-1 地点の方形周溝墓からの出土をはじめとして、全域から出土しており、新山崎遺跡出土土器の大半を占める。器形のバリエーションも多く、遺構内からの一括資料もまとまっている。

ここでは、まず土器を分類した上で、遺構内からの一括資料を中心に検討を加えていくこととする。

#### (1) 分類

遺構内、遺構外出土を問わず、土器のバリエーションを把握し、その特徴ごとに分類した。

##### [器台]

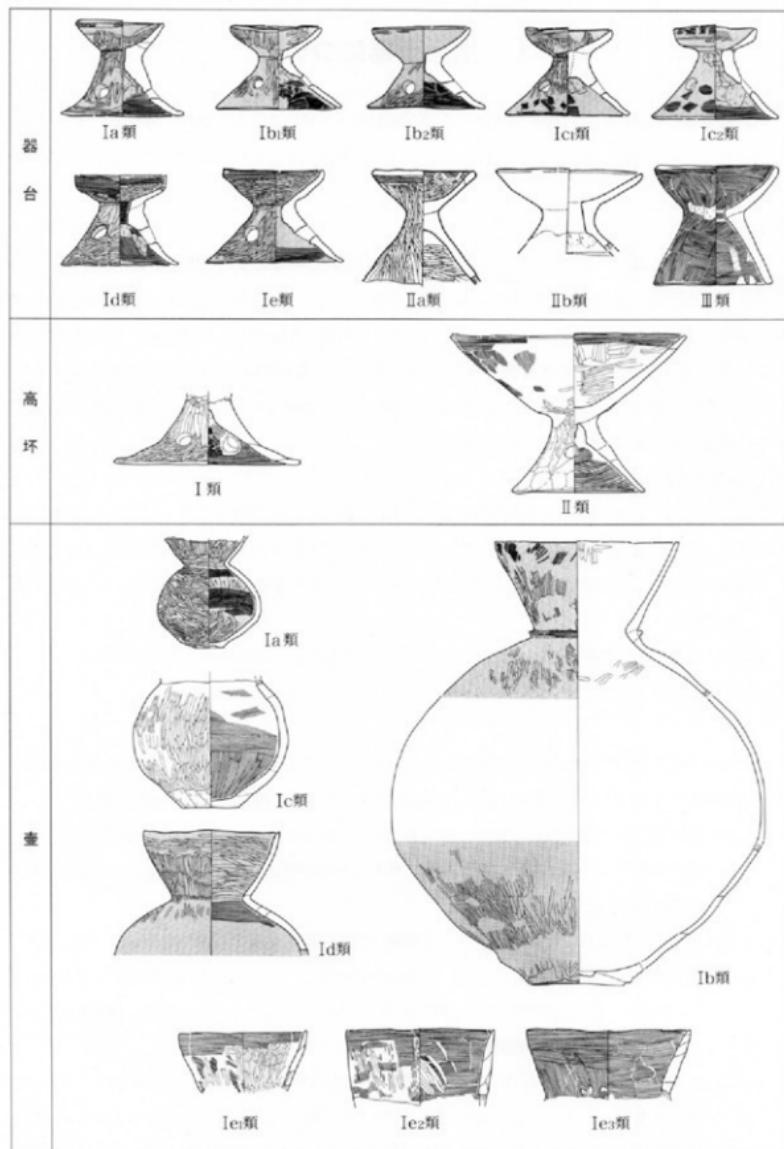
###### I 類

裾部よりも小さな器受部を持ち、裾部が大きく広がるものを見た。器受部と裾部の形状によつて、I a 類から I e 類まで分類した。これらの器台は全て貫通孔を持ち、円窓は 3 孔である。

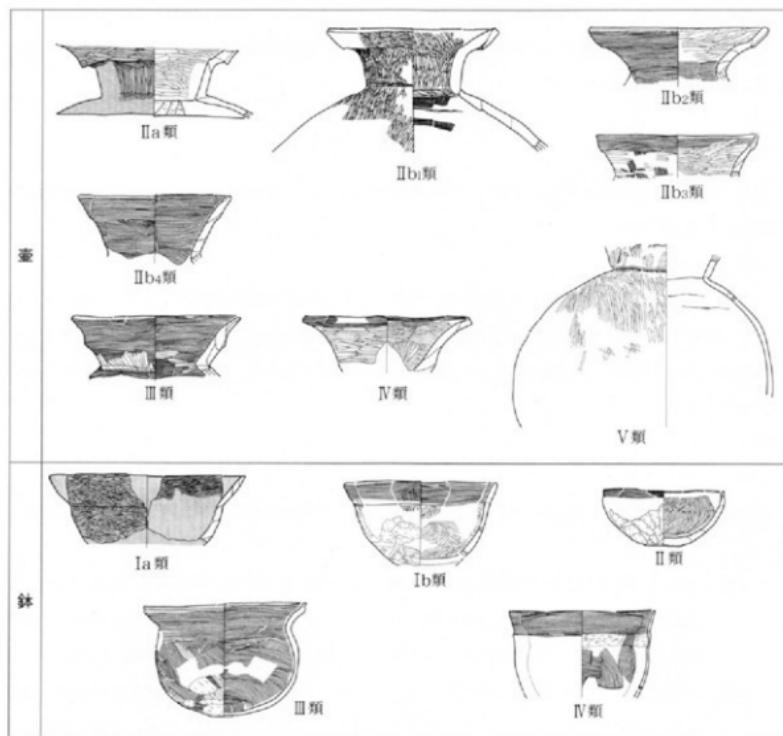
I a 類：裾部よりも小さな器受部を持ち、器受部はやや上向きに立ち上がり、全体的に縦長の形状を呈するものである。表面には丁寧なミガキと赤彩が施されており、F 地点の第5号土坑から出土している。

I b 類：器受部、裾部共に大きく広がり、全体的に横長の形状を呈するものである。表面には丁寧なミガキと赤彩が施されている。器受部がやや浅く、裾部が若干内湾気味になるもの（I b<sub>1</sub> 類）と、器受部がやや深く、裾部が外反気味になるもの（I b<sub>2</sub> 類）に分類した。両方とも F 地点の第5号土坑から出土している。

I c 類：口唇部が上方に向くものである。器受部がやや湾曲しながら立ち上がるもの（I c<sub>1</sub> 類）と屈曲しながら立ち上がるもの（I c<sub>2</sub> 類）に分類した。表面には丁寧なミガキと赤彩が施されている。これらも F 地点の第5号土坑から出土している。



第1図 出土土器の分類①



第2図 出土土器の分類②

I d類：口唇部が直立てて立ち上がり、口縁部外面に面を有するものである。表面には丁寧なミガキと赤彩が施されており、F地点の第5号土坑から出土している。

I e類：やや深い器受部を持ち、口唇部がわずかに内湾するものである。表面には丁寧なミガキと赤彩が施されており、F地点の第5号土坑から出土している。

#### II類

赤彩が認められず、やや粗雑なつくりのものを一括した。

II a類：貫通孔、円窓がなく、全体的にやや縱長の形状を呈するものである。内外面ともにミガキが施されているが、粗雑なつくりである。D地点の堅穴状遺構から出土している。

II b類：比較的浅く、緩やかに湾曲しながら立ち上がる器受部を有するもので、器受部に貫通孔が認められる。D地点の土器集中地点から出土している。

### III類

粗製器台である。内外面ともヘラナデによって調整され、器受部の貫通孔のみ認められる。F地点の第3号土坑から出土している。

#### 〔高坏〕

##### I類

大きく外側に開く脚部を有し、丁寧なミガキが施されているものである。円窓は3孔で、E地点の遺構外から出土している。

##### II類

いわゆる“元屋敷系”的高坏と考えられる。内外面ともに赤彩が認められるが、ミガキ等はそれほど丁寧ではなく、坏部から脚部にかけての屈曲もあまり明瞭ではない。また、脚部がやや外反しながら広がるため、比較的新しい段階のものと考えられる。円窓は3孔で、F地点の第5号土坑のみからの出土である。

#### 〔壺〕

##### I類

直口壺を一括した。これをさらに、体部下半や口縁部、頸部の形状によって I a類から I e類に分類した。

I a類：A地点の第2号方形周溝墓周溝から出土した小型の壺である。口唇部を欠損しているが、硬質で、外面には丁寧なミガキが施されている。底部は上げ底で、内面の体部のみに赤彩がなされている。新山崎遺跡においては、最も古い段階の資料であると考えられる。

I b類：A地点の第3号方形周溝墓周溝から出土した壺である。体部上半を欠損しているが、外面全面に赤彩とミガキが認められ、口縁部に繩文（LR）が施されている。また、頸部には刻みを有する断面が三角形の隆起が巡る。さらに底部には木葉痕が認められる。

I c類：口縁部を欠失しているが、体部下半から底部にかけて屈曲する形状を呈する。赤彩は施されていないが、外面には比較的丁寧なミガキが認められる。I a、I b類からやや下った段階の土器と考えられ、D地点の第1号井戸跡から出土している。

I d類：外面および口縁部内面が赤彩され、丁寧なミガキが施されているものである。口縁部は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、肩部がやや張るもので、F地点の第5号土坑から出土している。

I e類：直口壺の口縁部である。口唇部がやや屈曲するもの（I e 1類）、口縁部が直立して立ち上がるるもの（I e 2類）、口縁部が外側に開くもの（I e 3類）に分類した。I e 1類はD地点の第1号井戸跡から、I e 2類、I e 3類はE地点の遺構外（土器集中地点）から出土している。

## II類

有段、複合口縁壺を一括し、形状によって II a～II b に分類した。

II a 類：有段口縁の壺の頭部で、外面は丁寧なミガキが施され、赤彩されている。F 地点の遺構外から出土している。

II b 類：複合口縁壺を一括した。口縁部の形状によって分類し、明瞭な段を持つもの（II b<sub>1</sub> 類）（確認調査出土）、明瞭な段を持たず、口縁部が頭部から大きく広がりながら立ち上がるものの（II b<sub>2</sub> 類）（E 地点第 11 号溝跡出土）、口縁部が短く、直立気味に立ち上がるものの（II b<sub>3</sub> 類）（E 地点遺構外出土）、明瞭な段を持たず、口縁部がやや開きながら立ち上がるものの（II b<sub>4</sub> 類）（F 地点第 3 号溝跡、第 5 号土坑出土）がある。

## III類

口縁部に肥厚が認められ、外側に開きながら立ち上がるもので、F 地点の遺構外から出土している。

## IV類

口縁部が外側に開きながら立ち上がり、口唇部上端に面を有し、内側がわずかにつまみ出されているものである。内外面とも丁寧なミガキが施されており、F 地点の遺構外から出土している。

## V類

頭部から球形に近い体部を有するものである。全体の形状は判然としないが、外面にはミガキが認められる。F 地点の第 1 号土坑から出土している。

## [鉢]

### I類

体部が内湾し、口縁部が屈曲して外上方におよぶものを一括した。

I a 類：内外面とも丁寧なミガキが施され、赤彩されているもので、F 地点の第 5 号土坑から 2 個体出土している。

I b 類：平底で、口縁部にヨコナデ、体部外面はケズリ、内面にミガキが施されるもので、F 地点の第 1 号土器集中地点から出土している。

### II類

浅くて小型の粗製の鉢で、口唇部をわずかに外側に屈曲するようにつまみ出している。F 地点の第 3 号溝跡から出土している。

### III類

球形の体部とわずかに凹んだ底部を持ち、口唇部に沈線を有する異形の鉢である。調整はヘラナデが主であり、F 地点の第 5 号土坑から 1 点だけ出土している。

### IV類

全体の形状は判然としないが、薄手で、口縁部に段を有し、直立気味に立ち上がるものである。F 地点の遺構外から出土している。

## [Ⅲ類]

### I類

薄手で、口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がるものである。A地点の第3号方形周溝墓から出土しているほか、E地点の遺構外からも出土している。

### II類

短い口縁部と球形に近い胴部を有するもので、口唇部上端が外側に屈曲するもの（II a類）（F地点第3号土坑出土）、口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、口唇部上端に面を持つもの（II b類）（D地点第1号井戸跡出土）、口縁部が外反するもの（II C類）（F地点第2号土器集中地点、第1号土坑、遺構外、G地点第1号土坑出土）がある。

### III類

やや大きめの口縁部と、丸みのある胴部を有するものを一括した。III類には大きく分けて、口縁部がやや内湾し、口唇部上端に面を有し、外面に太く強いハケメが施されている大型のもの（III a類）（F地点第5号土坑、遺構外出土）と、口縁部が外反するもの（III b類）（F地点第3号土坑、第5号土坑、遺構外出土）がある。

### IV類

口縁部が緩やかに外反し、胴部の最大径が上半部から中頃にあるものを一括した。口縁部内面が肥厚し、胴部の丸みのピークが上半にあり、底部が突出するもの（IV a類）（F地点第1号土器集中地点出土）と、口縁部が先細りになって外反し、胴部の最大径が上半から中程にあるもの（IV b類）（F地点第5号土坑出土）がある。

### V類

口縁部が直立に近い形で緩やかに外側に開き、口唇部が細くなるもので、F地点の第1号土坑、第1号土器集中地点から出土している。

### VI類

胴部の丸みがそれほど明瞭ではなく、長胴に近い形で立ち上がるものである。F地点の第5号土坑から出土している。

### VII類

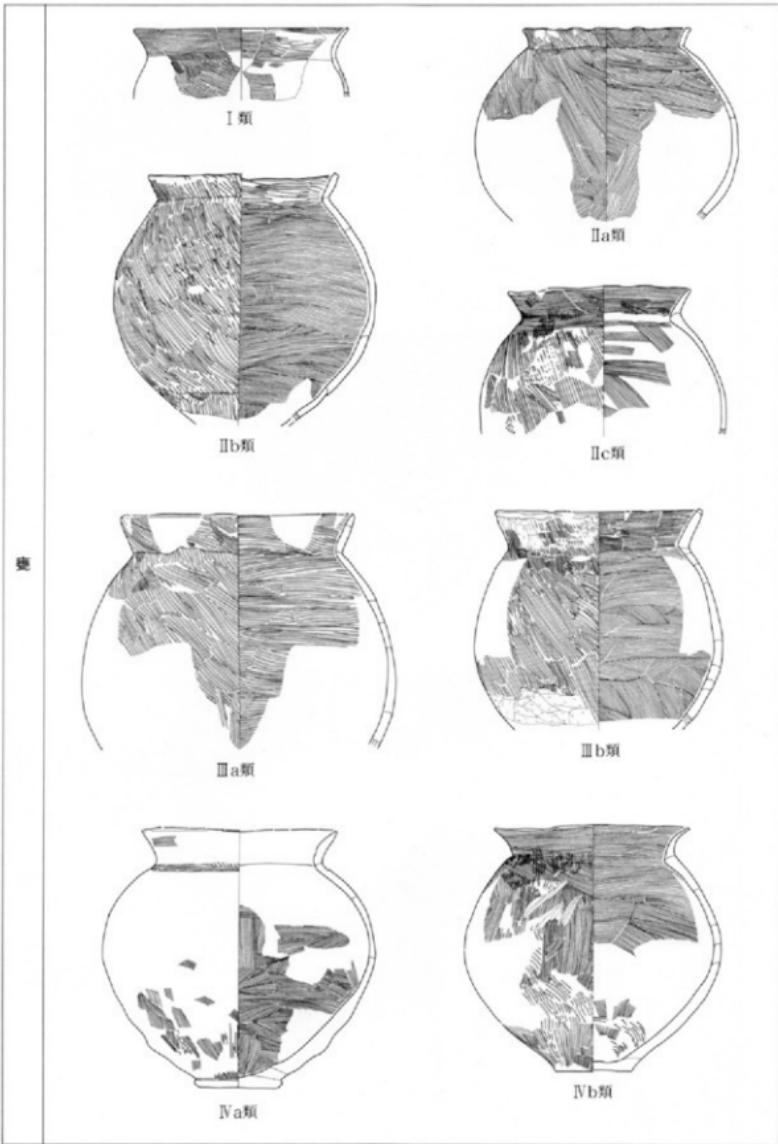
口縁部が直立して立ち上がるものである。G地点の第1号土坑、F地点の第5号土坑から出土している。G地点第1号土坑出土土器は底部が上げ底であり、共伴した壺（2個体）（II c類）と同一のタッチのハケメを有する。F地点第5号土坑出土土器は破片であるが、口唇部に刻み目を有する。

### VIII類

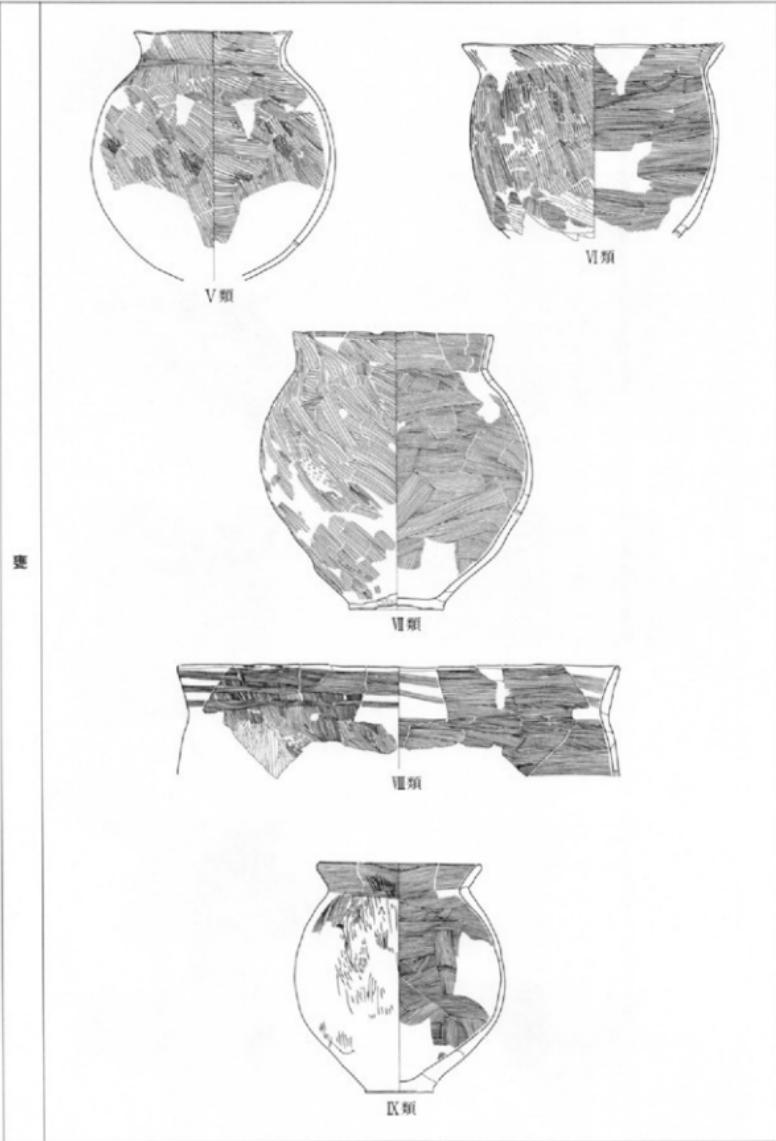
胴上半部から口縁部にかけて、ほぼ直立して立ち上がる大型の個体と考えられる。破片資料であるため、全体の形状は判然としない。F地点の第5号土坑から1個体分のみが出土している。

### IX類

口縁部が比較的短く外反し、やや縱長の胴部を有するものである。口縁部の調整は内外面ともにヨ



第3図 出土土器の分類③



第4図 出土土器の分類④

コナデが主であり、胴部外面には浅く、短く施されたハケメが部分的に見られるのみである。F地点の第5号土坑から1点のみが出土している。

#### 〔小型甕〕

##### I類

F地点の第5号土坑から出土したもので、薄手で、短く湾曲した胴部と外反から直立して立ち上がる比較的長い口縁部を有するものである。

##### II類

比較的短い口縁部を有し、太く明瞭なハケメが施されるもので、F地点の第5号土坑から出土している。

##### III類

緩やかに開く口縁部と丸みを帯びた胴部を有するものである。口縁部はハケメの後ヨコナデを施し、ハケメを若干残す。胴上半部はハケメ、下半部はヘラケズリが認められる。F地点の第5号土坑から出土している。

##### IV類

頸部から“く”の字状に外反して立ち上がる口縁部を持ち、やや長い胴部を持つものである。口縁部は内外面ともヨコナデが、胴部外面にはヘラケズリが施されており、F地点の第5号土坑から1点のみが出土している。

#### 〔甕〕

E地点の第2号土坑から1点のみ出土しており、体部から口縁部にかけて大きく直線的に開くものである。全体の調整は磨滅して判然としないが、ヘラナデによるものが主であると考えられる。

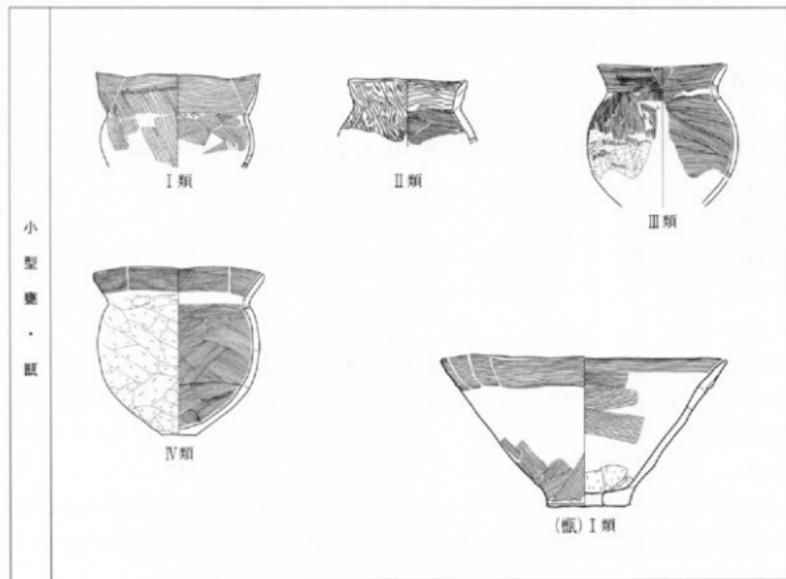
### (2) 土器の新旧関係

以上の分類をもとに、遺構内出土の一括資料を中心に土器の新旧関係を見て行くこととする(1)。

#### 〔方形周溝墓出土の土器〕(第6図)

壺I a類(1)、I b類(2)は、口径に比べて小さな頭部径を有し、大きく外側に開きながら立ち上がる口縁部を持つ。また、特にI a類は、体部下半が“く”的字形に屈曲する。I b類はI a類に比べて口縁部がやや立ち、上端に撻文を有する。このような土器は、県内資料においては管見に触れていない(2)。形状的には、塙釜式土器の中でも比較的古い段階に位置づけられるのではないかと考えられる。また、第3号方形周溝墓から壺に伴って出土している甕I類(3)は、破片資料であるが薄手の土器であり、古い様相が見受けられる。

新山崎遺跡内においては、これらの資料を最も古い段階に位置づけることとした(3)。



第5図 出土土器の分類⑤

〔D地点 第1号井戸跡出土の土器〕(第7図)

壺はI e 1類、I c類が出土している。I e 1類(5)は方形周溝墓出土のものに比べて口唇部の屈曲が顕著であり、ヨコナデが入る。また、壺I c類(7)は口縁部を欠損しているが、体部の最大径に比べて大きめの頸部径を有する。さらに、体部下半がやや内側に入り、底部に至る特徴は、第2号方形周溝墓出土の壺I a類に類似していると考えられる。全体的には、色麻古墳群第11号住居跡出土(古川: 1983)のものや伊古田遺跡第14号住居跡出土(渡辺: 1995)のものに類似していると思われ、方形周溝墓出土の壺に後続するものと考えられる。

一方、甕はII b類(8)が出土しており、市内周辺でのこのタイプのものは類例を見ない。県内で管見に触れたものでは、名取市野田山遺跡第10号住居跡出土(古川、須田、吾妻: 1992)のものが類似すると考えられる。以上のことから、D地点第1号井戸跡出土土器群は、方形周溝墓出土の土器よりも新しいものとしてとらえることができる(4)。

〔F地点 第5号土坑出土の土器〕(第8~9図)

第5号土坑からは、新山崎遺跡では最も多くの土器が出土しており、器種も豊富である。

器台については口縁部等の形態によって、4~5つの類型にまとめることができた。

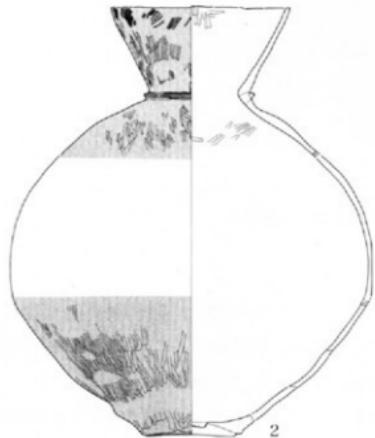
これらの器台に共通して見られる形態上の特徴として、器受部がどちらかというと深く、県内の古い段階の器台に見られる浅い器受部とは様相を異にしているということや、裾部の端部がわずかに外

A地点 第2号方形周溝墓出土土器



1

A地点 第3号方形周溝墓出土土器



2



3



4

第6図 遺構内出土の一括資料①

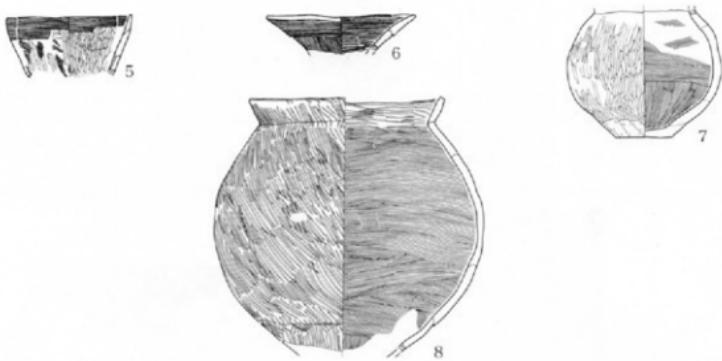
側に屈曲して広がるということが上げられる。また、I d 類 (15) は、器受部下面にミガキの前段階に施されたと考えられるハケメが認められるなどの特徴が見られる。よって、器台については、新しい段階のものと大まかにとらえることができる。

高坏 (17) は関東の比田井編年で I 段階の（新）に位置づけられるもの（比田井：1993）に類似しているが、脚部がやや広がり、調整も丁寧さを欠くため、II 段階にまで下がる可能性があり、新潟シンポ編年の 8・9 段階（日本考古学協会新潟大会実行委員会：1993）、東北辻編年の III-1 ないしは III-2 段階、丹羽編年の II A 段階（辻：1995）になる可能性が強い。

壺の I d 類 (18) は、目立った特徴が見られないため時期的な位置づけは不明である。II b 4 類 (19) は、丹羽編年の II B 段階や辻編年の III-3 段階に見られる複合口縁の壺であると解釈される。

鉢 I 類 (20、21) については口縁部破片資料であるため、明確な分析対象とは成しえない。第 5

D地点 第1号井戸跡出土土器



第7図 遺構内出土の一括資料②

号土坑をはじめとして、新山崎遺跡内で出土しているこのタイプの鉢は、この2個体のみである。また、III類（22）については、県内では類例を見ない。このような形態を持つ鉢は、関東でも管見に触れたものは見当たらない。恐らく異系統の土器と考えられるが、今は類例を待つこととしたい。

甕III類（23、24）は、比較的長い口縁部を有し、太く明瞭なハケメが施されている点で特徴的である。調整の特徴は、新山崎遺跡固有のものであると考えられるが、形態的には田道町遺跡（庄司、芳賀、岡：1995）の甕III類に相当すると考えられ、IIIa類（23、24）をやや古いものとしてとらえておきたい。また、IIIb類（25）の胴部下半に認められるヘラケズリは、共伴して出土している底部破片や、小形甕III類にも共通して見られ、時期的にIIIa類よりも新しいものと考えられる。

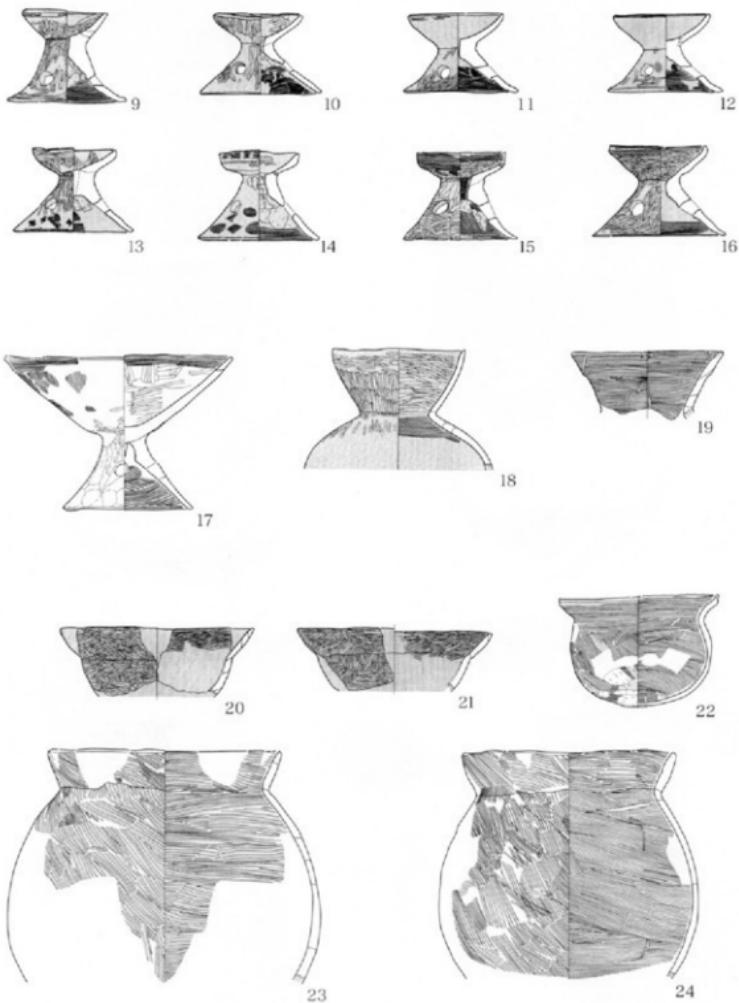
甕VI類（27）は、口縁部から胴部にかけての形から田道町遺跡の甕II類に類似すると考えられる。

甕IVb類（26）、IX類（28）は口縁部全面にヨコナデが施されている点や、胴部最大径が中頃にある点、胴下半部から底部に至る形状などから新しいものとしてとらえておきたい。

第5号土坑からは、口縁部に刻み目を有するものが出土している（31、32）。このような特徴を持つ個体は、近隣の遺跡では、河南町須江櫛塚遺跡第2号住居跡（高橋：1987）から出土している（5）。

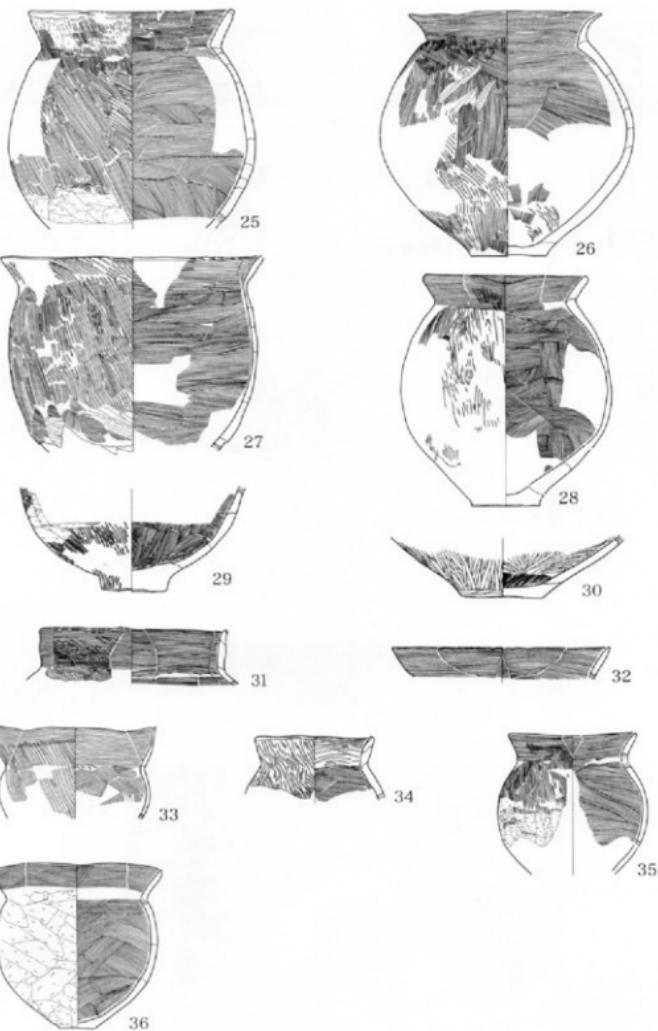
以上の土器は全て一括資料としてとらえているものであるが、形態的にはやや古い様相を持つものから新しい様相を持つものまで、若干の幅を有していると考えられる。これらの土器の中で、その特徴から時期的な判断の基準となるものは、高坏であると考えられ、丹羽編年のⅡA段階（丹羽：1985）の範疇に納まるものと見ている。

F地点 第5号土坑出土土器①



第8図 遺構内出土の一括資料③

F地点 第5号土坑出土土器②



第9図 遺構内出土の一括資料④

また、土器全体としてもおおむねその範囲に入るものと考えられる。また、壺や甌には、D地点の第1号井戸跡よりも新しい様相が見受けられる。

〔その他の遺構からの出土土器〕(第10・11・12・13図)

以上の一括資料の他に、E地点、F地点の遺構内から複数の図示可能な一括資料が出土している。

E地点の第2号土坑からは、壺の口縁部、体～底部、および甌が出土している。壺II b<sub>2</sub>類(37)は新金沼遺跡第11号住居跡でも類似品が出土しており、小形丸底鉢と共に伴っている。甌は丹羽編年で第III段階に位置づけられるものに類似している。

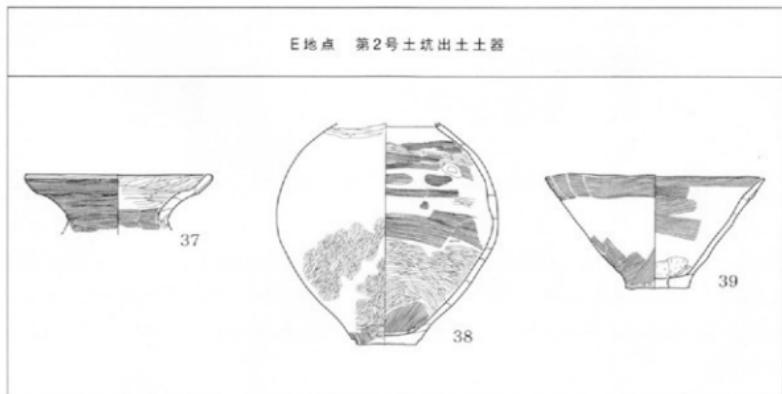
F地点の第1号土器集中地点出土の鉢(42)は、野田山遺跡第10号住居跡(古川、須田、吾妻：1992)から出土しているものに類似しているが、口縁部が開く点と、外面にケズリを多用する点で、時期的にやや下る可能性がある。また、IV a類の甌(41)などについても丹羽編年のII A段階に位置づけられるものである。さらに甌V類(40)は田道町遺跡の第1号土坑出土のものに類似していると考えられ、時期的には新山崎遺跡第5号土坑の範囲内に入るものと考えられる。

第2号土器集中地点出土の甌II c類(43)は田道町遺跡出土のI a類に類似すると考えられ、第3号住居跡などでも出土しており、丹羽編年のII A段階に位置づけられるものと見ている。

第3号溝跡出土の壺(44)は、第5号土坑でも出土しているII b<sub>4</sub>類である。

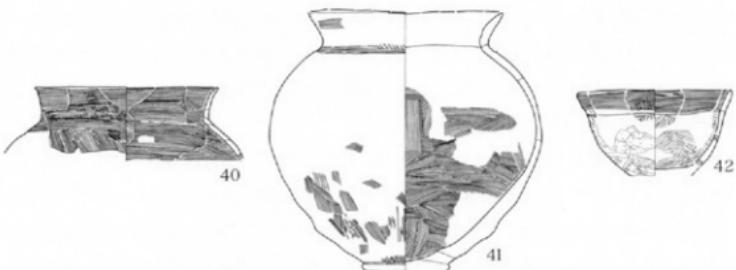
第1号土坑出土の壺IV類(46)は全体の形状が明確でないため不明。甌II c類(47)は第2号土器集中地点でも出土している。また、胴下半部にケズリが認められる点では、第5号土坑出土の甌III b類とも共通性が考えられる。甌V類(48)も第1号土器集中地点で出土しており、形態的には田道町遺跡第1号土坑出土のものに類似していると考えられる。

第3号土坑出土の甌II a類(51)は口縁部が短く胴部が球形を呈するため、時期的にはやや古手の

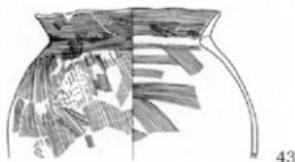


第10図 遺構内出土の一括資料⑤

## F地点 第1号土器集中地点出土土器



## F地点 第2号土器集中地点出土土器



## F地点 第3号溝跡出土土器



第11図 遺構内出土の一括資料⑥

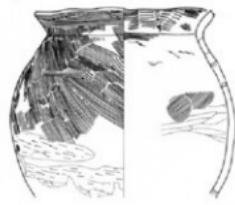
様相を呈すると考えている(6)。粗製器台III類(50)については新金沼遺跡でも出土しているが、塩釜式土器後半段階の編年については、幾つかの問題点も提示されており、今後の類例を待つこととしたい(7)。一方、甕III b類(52)も出土しており、時期的には第5号土坑出土土器に準じるものと考えている。

G地点の第1号土坑出土の甕VII類(53)は、直立した口縁部を有する点で、F地点第5号土坑出土の甕に類似する。このような甕は、田道町遺跡第11号住居跡出土の甕VIa類に類似し、共伴して

F地点 第1号土坑出土土器



46



47

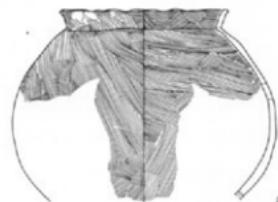


48



49

F地点 第3号土坑出土土器



51



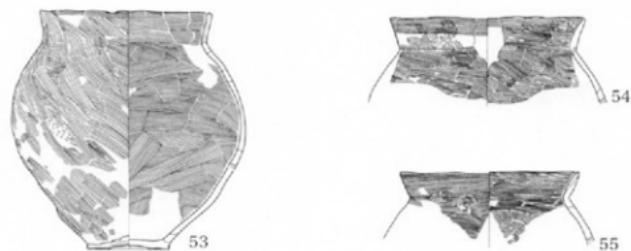
50



52

第12図 遺構内出土の一括資料⑦

G地点 第1号土坑出土土器



第13図 遺構内出土の一括資料⑧

出土している壺などから丹羽編年のII B段階に相当すると考えられる。

E地点、F地点、G地点から検出されている遺構から出土した以上の一括土器は、E地点の第2号土坑出土土器がやや下る可能性を含んでいるものの、おおむねF地点の第5号土坑出土土器の時期的範囲内におさまるものである。

以上の土器群は、古墳時代前期の塙釜式の範疇でとらえられるものであり、今までの分析により、各遺構から出土した土器群の形態上からの時間差が生じることが判明した。すなわち、A地点における第2号、第3号方形周溝墓出土土器を最も古い一群とし、D地点の第1号井戸跡出土土器をそれに後続するものと考え、E地点、F地点、G地点における各遺構出土の一括資料をさらにそれに後続するものととらえるものである。

一方、土器の系統的なつながりとしては、A地点の第2号、第3号方形周溝墓出土の壺に見られる東海系の土器の要素は、F地点の第5号土坑で出土している元屋敷系の高环や赤彩された壺にも見られ、D地点の第1号井戸跡で出土している深いハケメを持った壺もまた、F地点において出土しているため、時期的に差を持った同系統に近いものとして判断される。よって、遺構の性格を大きく異にする方形周溝墓とその他の遺構については、新山崎遺跡の同一の集団によるものであると考えられる。

### (3) 土器の様相

以上の土器を総体としてとらえた場合、認められた様相の特徴を挙げてみることにする。

まず、出土した個体数が最も多く、器種のバラエティーに富むF地点の第5号土坑出土土器の中に、小形丸底鉢が全く認められなかったことがあげられる。第5号土坑出土土器中からは、器台が完形のもので8個体、図示しえなかった破片資料も含めると、それを上回る数量が出土しているが、小形丸底鉢については、破片資料も出土していない。この事実は、第5号土坑のみならず、資料数は少ないながらも他の遺構にも言えることである<sup>(8)</sup>。これについては、①遺跡の背後に存在していた集団の持つ固有の性格に起因する場合、②時期的なものに起因する場合、③第5号土坑を含めた複数の土器を

廃棄した土坑の性格に起因する場合、などが考えられる。今のところは明確な結論づけはできないが、今までの土器の検討から、時期的な要素を背景とした、土坑の性格に起因するものであると考えておきたい。

第5号土坑出土の器台には一括資料でありながら、形態を異にする複数のバラエティーが認められる。これを時期的な差異ととらえた場合、既存の幅年では、複数の段階の幅を持つこととなり、不都合を生じる。一方、これらの器台には、明らかに同一のものを意図して製作されたと考えられる複数の個体が存在している可能性が強い(9)。

D地点第1号井戸跡やF地点の第5号土坑からは、太く、深く施されたハケメを有する土器が出土しており、当遺跡における壺の一形態が示す特徴ではないかと考えられる(10)。

#### (4) 田道町遺跡出土土器との比較

田道町遺跡は新山崎遺跡の南東約4.3kmの第II浜堤上に位置する遺跡である。新山崎遺跡からは田道町遺跡から出土した該期の土器に類似するものが複数個体存在しており、関連性が認められる(11)。ここでは、主な遺構出土の一括資料を取り上げ、若干の比較検討を行ってみることとする。

まず、田道町遺跡遺跡出土の器台については、第1号土坑と第2号土坑から出土している。第1号土坑からの出土は1点のみであるが、第2号土坑からは複数のものが出土している。円窓は3孔で裾部の端部が若干開く点に類似性が認められるが、器受部の形状については新山崎遺跡出土のものと異なるものと言える(12)。次に、高杯であるが、田道町遺跡では、脚部が上半部中実で、外側に開くものと、柱状中空のものが出土しており、新山崎遺跡第5号土坑出土の高杯とは形態的に差異が認められる(13)。

小形丸底鉢については、新山崎遺跡で出土していないため、比較材料とはなりえない。壺については、田道町遺跡では直口壺がほとんど出土しておらず、複合口縁壺が主となるが、新山崎遺跡出土資料との類似性が認められるものもある。田道町遺跡第5号土坑出土の壺II c類の口縁部は、新山崎遺跡出土のII b 3類に相当すると考えられる。台付壺は、新山崎遺跡でも出土している(14)が、破片資料のため、比較材料とはなりえない。

田道町遺跡の住居跡出土の壺は、総体的に見て、口縁部が外反し、ヨコナデが施されるものが多い。新山崎遺跡出土の壺の中には、直線的に開く短い口縁部を有し、内外面全面にハケメが認められるものが目立つ。このため、田道町遺跡の出土資料との間には時期的な差異が考えられる(15)。

以上のことから、新山崎遺跡の出土土器と田道町遺跡からの出土土器には、時期的に重なる部分があるが、新山崎遺跡出土の資料に若干古い様相が見られる。

### 3. 奈良・平安時代

#### (1) 土師器

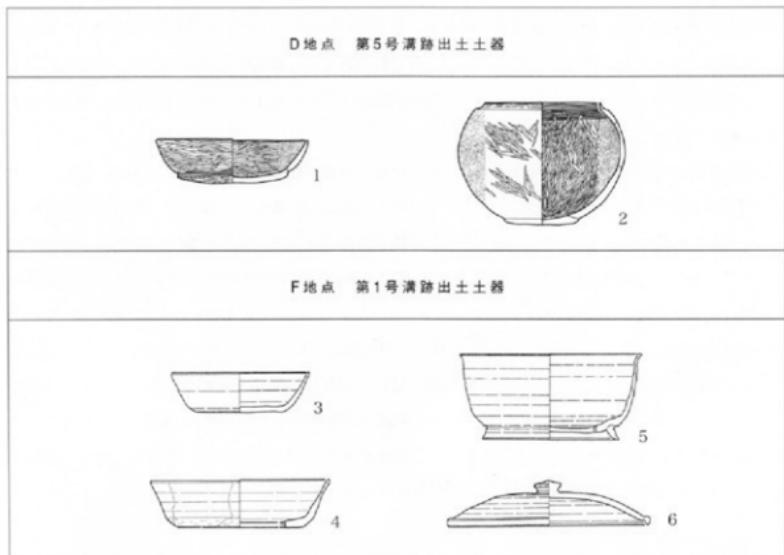
##### 〔D地点 第5号溝跡出土土器〕(第14図)

内面に黒色処理が施された壺(1)と、内外面黒色処理の鉢(2)がそれぞれ1点ずつ出土している。壺は大境山遺跡第33号住居跡出土の壺に類似しており、大境山遺跡第4土器群の範疇に入ると考えられ、国分寺下層式期(8世紀後半頃)のものであると考えられる。

#### (2) 須恵器

##### 〔F地点 第1号溝跡出土土器〕(第14図)

出土した資料は、壺2点(3、4)、高台付壺1点(5)と蓋1点(6)であるが、一括性は定かではない。壺(3)は、須江関ノ入遺跡第1号窯に類似資料が認められる<sup>16</sup>。また(4)は、田道町遺跡C地点第1号住居跡から出土している須恵器I類に相当し、8世紀前半の年代が与えられている。さらに高台付壺(5)は代官山遺跡第1号窯段階のものと考えられる<sup>17</sup>。蓋は代官山遺跡1号窯跡出土土器に類似する<sup>18</sup>。よって、これらの土器は8世紀後半段階のものとして、時間幅を持った資



第14図 遺構内出土の資料

料であるといえる。

高台付壙は、近隣においては同一の資料に触ることはできないが、代官山遺跡1号窯跡出土土器の段階に位置づけられるものではないかと考えられる。よって新山崎遺跡F地点第1号溝跡出土の土器は、8世紀第3四半紀のものであると考えられる。

新山崎遺跡に位置する須江丘陵上には、代官山遺跡や関ノ入遺跡をはじめとする須江窯跡群が立地しており、以上の事実はそれらの遺跡との関連付けを強くするものであると考えられる。また、表採資料であるが、F地点の西側の畠からまとめて採集された須恵器の中に、須江窯跡群内で製作されたと考えられるものが含まれており、これを裏付けるものと考えられる<sup>19)</sup>。

#### 4. 土器の胎土分析について

今回の調査では、古墳時代前期の土器に限って、土器の胎土分析を実施した。このような分析は石巻市では初めての試みであり、新たな資料を蓄積することができた。分析自体の内容については第7部における「新山崎遺跡出土土器の胎土分析」報文を参照していただくとして、ここでは、その分析結果をもとに、分析者である、株式会社第四紀地質研究所の井上巖氏から受けた指導による分析の理解と、分析結果から判明したことについて若干言及してみることとする。

##### (1) 分析内容の理解

まず、X線回折試験は土器胎土の中に含まれる鉱物の度合いを分析したものである。タイプ分類では土器胎土に含まれる造岩鉱物の組成のあり方や違いを見ている。Qt-Pt相関におけるQtは、土器の胎土中に含まれる鉱物（石英）の度合いであり、土器の焼成時の温度に影響される可能性を持っている。また、Ptは土器胎土中に含まれる砂粒（斜長石）の度合いであり、原料となる粘土や製作技法に影響される可能性がある。

化学分析は、土器胎土中に含有される酸化物の度合いを分析したものである<sup>20)</sup>。MgOはアルカリ度の指標となり、この量が高いものは黒っぽい胎土となり、低いものは白っぽくなる。またFe2O3の度合いが高いものは鉄分が多く含まれるため、酸化焰焼成後に赤くなる。K2OとCaOは、土が有している本来の構成要素であり、地域による土質の差に影響される。またAl2O3が多いと、胎土に泥っぽい感じが見られる。SiO2はケイ素であり、その逆である。井上氏によれば、これらの鉱物、酸化物はごく一般的に土器胎土中に含有されている可能性が高いものであり、これらの量的な違いは、目で見た感じや胎土の手触りなどにも現れて来るということである。

##### (2) 分析結果の理解

まず、新山崎遺跡出土土器の胎土に見られる鉱物組成によりA～Hの8つのタイプに分類された。次にQt-Pt相関ではI～IIIの異なるグループに分類された。このうち量的に最も多いグループがIIIグループであり、新山崎遺跡出土の古墳時代前期の土器のうち、在地的と考えられたものである。また、化学分析結果における、SiO2-Al2O3-Cの相関、Fe2O3-MgOの相関、K2O-CaOの相関も、それぞれの量的な度合いによって、グルーピングをしたものである。そして、それらをま

とめたものが第4表土器分類表である。

### (3) 分析結果からわかること

まず、“①Q t-P I が異質なもの”から“⑥在地でQ t-P I が異質なもの”までについては、今のところ検討対象から除外しておく。その理由としては、各項目における異質な土器があまりにも数量的に少ないとこと。また、非常に抽象的であるが、“異質”な要素が土器自体にどれくらい影響を与えるのか不明であり、それについての基準もないことなどである。これらの土器については、今後の試料の蓄積により、次第に状況が掴めて来ると考えられる。

分析結果の中で最も数が多く、共通項目も多かったのは、⑦の在地共通とされた一群である。これらの土器は、X線回折試験および化学分析試験双方で共通性が認められた一群であり、その共通性の度合いは、“より確からしい”と言える。

これらの特徴をあげると、まず、ほぼ全ての器種が揃っていることから、器種による胎土の選択性はなかったと言えるかもしれない。

次に、器種ごとに見てみる。器台は第5号土坑から出土した器台のI a類、I b類のうちの1個体、I d類、I e類が入るが、その他の4個体の器台については入っていない。高杯には、F地点の第5号土坑から出土した元屋敷系の高杯（II類）が入る。壺はやはり第5号土坑から出土した赤彩された壺I d類と確認調査で出土したII b類が入っている。また、D地点の第1号井戸跡から出土したI c類も含まれている。また、鉢の中でF地点第5号土坑から出土した異系統とされたIII類が入っているのが特徴的である。また、同じく第5号土坑出土の鉢I a類、F地点遺構外出土のIV類も含まれる。壺では、F地点の第5号土坑から出土した壺III a類、III b類、III b類、VI類、IX類が含まれる他、類別できなかったが、口唇部に刻み目を有する壺と考えられる破片も含まれている。さらに、第1号土器集中地点から出土したIII b類も含まれる。小形甌では、第5号土坑出土のIII類、IV類が入る。一方、このグループの中にはD地点の遺構外から出土した、円形浮文を持ち、燃糸文が施された土器片も含まれている。

新山崎遺跡からの出土土器は、F地点の第5号土坑からのものが多く、分析対象とした土器もそれに比例したが、第5号土坑から出土した土器全てがこのグループに入ったわけではない。特に器台についてはその傾向が顕著である。また、形態上、異なる系統のものと考えられた鉢が含まれるなど、一考を要する特徴も見られた。このグループの中にC地点の第1号井戸跡から出土したもののが含まれており、胎土分析上でのF地点との関連性が伺われる。

以上の共通性をどのように見るかは今後様々な検討の余地が残されていると考えられるが、少なくともこのグループについては、同じ粘土を使用し、同じ手法で製作された土器である可能性が強いということが言えそうである。

(1) 東北南部の古墳時代前期土器編年については、以下の枠組に概ね従うものとする。

漆町編年	5	6	7		8	9	10	11
辻(1994)	I-1	I-2	II-1	II-2	III-1	III-2	III-3	III-4
次山(1992)			1		2	3	4	5・6
丹羽(1985)			I		II A		II B	III

関東 (比田井) (1997)	I段階 (古)	I段階 (新)		II段階	III段階
東海 (赤塚) (1990)		題問II	題問II (4) ～III (1)	題問III (2～3)	題問III (4)

新山崎遺跡では、直口壺や高杯にいわゆる東海系土器の要素を持つものが認められるため、関東、東海の土器編年を参考にする必要が生じた。しかし、東北南部の古墳時代編年と関東、東海地方の編年を直接対比させることは、若干の問題点も指摘されている(青山: 1997、木村: 1999)ため、ここでは、両者を直接対比せずに、大体でとらえることとしたい。

- (2) 口縁部に断面三角形の突帯が巡る直口壺は、小牛田町山前遺跡第30号住居跡において出土しており、第3号方形周溝墓出土の直口壺との類似が考えられるが、山前遺跡出土のものが口縁部がわずかに外反するのにに対して、若干直立する点に相違が認められる。ここでは、第2号方形周溝墓出土土器とのつながりでとらえることとしたい。
- (3) 第2号方形周溝墓出土の小形壺については、東海系のいわゆる“ひさご壺”的系譜を引いていると考えられ、山前遺跡などからの出土が見られる。しかし、県内での出土はそれほど多くない。
- (4) 集落の一部と考えられる遺構(井戸跡)から出土した土器と、墓域を形成する要素(方形周溝墓)から出土した土器とを比較し、差異を求めるところについては問題も多いと考えられるがここでは、遺跡から出土した該期の土器の形態の違いから見いだされた“差”を提示したにすぎない。この差は、土器自体の時間差に結びつくと考えられるが、その時間差が、その土器が使用された遺構にまで及ぶかどうかはここでは言及することができない。
- (5) 茨城県などにおいては、房総系と称されているものに類似している。また、未発表であるが、現在整理中である新金沼遺跡でも、口縁部に深い刻みを有するものが出土している。石巻地域においては、かつて三宅宗謙氏がこのような土器に着目したことがあり(三宅: 1996)、今後の資料の蓄積を待つこととしたい。

- (6) 形態的にはD地点第1号井戸跡出土の甕に類似すると考えられるが、口唇部がわずかに外反する点や脛部にハケメを有しない点などから見て、それよりも下るのではないかと考えられる。
- (7) 追町佐沼城跡で出土している粗製器台に類似しているが、報文中では、従来の編年観の中で一定の時間幅をもって出土している点に問題が提起されている。石巻市内では、このタイプの器台は初出の遺物であり、今のところは本文中で述べた新金沼遺跡の出土例をもとに、丹羽編年のII A段階からII B段階に置いておくこととした。
- (8) 新山崎遺跡からは、該期の堅穴住居跡が検出されていない。このことは、十分考慮に入れるべき問題ととらえている。
- (9) 佐沼城跡（佐久間、小村田：1995）の報文中で論じられた壇釜式後半段階の編年の再考問題と、SD I 05の一括投棄された土器群中から見出された「2個一単位の土器」という可能性の提示である。新山崎遺跡出土の古墳時代前期の土器の中にも一定の時間幅は存在する。これらを土器の持つ形態的な特徴から大きく3つに分けた。それはおむね丹羽編年のII AからII B段階に位置づけられるものと見ている。また、土器には製作された時期と使用されていた時期、また廃棄された時期によって時間幅に差が生じるのは当然であり、新山崎遺跡においては、このような時間差を細部にわたって検討することについては、さらなる資料の蓄積を待つこととしたい。しかし、第5号土坑出土土器については、一括性がかなり高いものであり、この中で辻編年における3段階以上、丹羽編年における2段階以上の時間幅が生じることはやはり問題と言わざるを得ない。「2個一単位の土器」の存在については、佐沼城跡SD I 05出土土器に見られる器種の多様性は見られないが、特に第5号土坑出土の器台においては、この存在を肯定するものであると考える。
- (10) 野田山遺跡第10号住居跡出土の甕に類似していると考えられる。辻編年では、甕Wに分類され、同一系統と考えられる小形甕も存在する。そのうちの2個体は石巻市田道町遺跡出土のものである。
- (11) 田道町遺跡からの出土資料の多くは堅穴住居跡からの出土遺物である。新山崎遺跡では住居跡は検出されておらず、土坑から出土したものが主となる。しかし、田道町遺跡においても該期の井戸跡や土器がまとまって出土した土坑が住居跡に極めて近接した場所から検出されており、遺跡を構成する要素に類似性が認められる。このため、新山崎遺跡の土坑については、「集落の構成要因の一つ」ととらえ、一応、堅穴住居跡出土の土器と同レベルの検討材料としたい。
- (12) 辻編年では、田道町遺跡第2号土坑出土のものをIII-3段階に置く。新山崎遺跡第5号土坑出土の器台の中にも、形態上同時期のものが含まれていると考えられるが、判然としない。器台の形態差は、遺跡個々の特性に起因するところが大きいのではないかだろうか。
- (13) ここでは、この差を時期差と認識したい。新山崎遺跡でもI地点の遺構外から、脚部上半が中央で外側に開く高坪の脚部と考えられる破片が出土しているが、調整等は全く不明であり、遺構にも伴っていない。
- (14) A地点の第1号方形周溝墓周溝底面をはじめ、F地点、I地点などでも出土しているが、脚部の破片であり、図示するにはいたらなかった。
- (15) 新山崎遺跡出土の甕の中にも田道町遺跡出土のものに類似した資料が多分に存在する。また、田道町遺跡の住居跡内出土の土器と土坑（特に第1号土坑）出土の土器との間にも形態差が見られ、時期的な差異を示すものではないかと考えられる。土坑の性格については、一考を要するが、以上の差は、土器を投棄したものを見た場合、土器が使用されていた空間（堅穴住居跡）と使用されなくなった空間（土坑）との間に時間差が生じた結果ではないかと考えられる。このように見てもなおかつ新山崎遺跡の土坑内から出土した資料と田道町遺跡の土坑内から出土した資料との間に、大幅ではないにしても、差異が認められたため出した結論である。
- (16) 矢本町教育委員会 佐藤敏幸氏に御教示を受けた。
- (17) (16) と同じ。
- (18) (16) と同じ。

- (19) (16) と同じ。
- (20) 井上氏の指摘によれば、化学分析で抜った酸化物は土中の上層にあったものが次第に溶けだして下層に浸透して行くため、これらの含有率によって、浅い部分から得られた粘土を使用したものか、より深い部分から粘土を得ていたかを知る手掛かりとなるものであるらしい。

## II. 遺構について

### 1. 各時代における遺構分布のあり方について

縄文時代の遺構については、今のところ I 地点からしか検出されておらず、確認調査、本（事前）調査を通じても他に該期のものが発見されていないため、遺跡の北端部に限定されると考えられる。古墳時代前期の遺構については、まず、遺跡南端部（A-1 地点）における方形周溝墓群があげられる。この方形周溝墓は、第2号、第3号方形周溝墓の検出状況を見てもわかるように、調査区の南側から東側におよんでいるため、群としてさらに広がる可能性を持っている(1)。この方形周溝墓群は、調査区の北側にはおよんでいない。また、さらに北側の B 地点、C 地点においても、該期の遺構・遺物は全く発見されていないため、A-1 地点からこれらの地点までの間には、古墳時代前期の遺構の空白区域が生じる。よって、A-1 地点の方形周溝墓群は、独立した墓域を形成していた可能性を示唆するものである。

D 地点の西端部においては、当該期の井戸跡が検出されており、その東側約 1.7m の地点には竪穴状遺構が発見されている。これら 2 つの遺構は、直接集落に伴うものと考えられ、付近に住居に関する遺構が存在している可能性が考えられる。さらに東側約 1.4m から 3.0m の範囲には、第 10 号～12 号溝跡、第 15 号、16 号溝跡と土器集中地点があり、該期の遺構の集中が見られる。ここからさらに東側には、古墳時代前期の遺構は全く存在しなくなり、遺物も出土していないため、第 16 号溝跡、土器集中地点(2)が遺跡の最外郭ラインと規定できる。遺物については、E 地点の南側にもまとまって出土しており、F 地点における第 5 号土坑をはじめとする土器集積遺構群や E 地点の北端部における第 2 号土坑の存在などから、これらの地域全域におよんでいたことがわかる(3)。また、G 地点の東側においても塙釜式期の土坑が発見されている。一方、I 地点の南側トレンチ、H 地点においては全く発見されておらず、I 地点の北側において、まとまった遺物が出土している(4)。これらのことから、古墳時代前期の集落範囲は D 地点、E 地点、F 地点から G 地点、I 地点に囲まれた、標高 1.0m ～2.0m の範囲に限定することができる。

F 地点からは、古墳時代後期の可能性がある遺構が発見されており（第 3 号土器集中地点）、当該期の人間活動があったことを示唆するものである。

奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物はまとまった資料の発見がそれほど望めなかつたが、D 地点西側の第 5 号溝跡から国分寺下層式期の土器が出土している他、F 地点の東端部で検出された第 1 号溝跡からも 8 世紀後葉に位置づけられる須恵器が出土している(5)。

ところで、B 地点の第 1 号井戸跡は、埋土に多量の灰白色火山灰ブロックを混入しており、平安時代以前の可能性を示唆する。また、C 地点で検出された溝跡の中には、須恵器片が出土しているもの（第 7 号、第 8 号溝跡等）がある他、覆土に灰白色火山灰を混入しているものも存在するため、当該期に位置づけられる可能性が濃厚なものが多い。D 地点においては、明確なものが少なく、第 5 号

溝跡以外には見いだすことができなかった。E地点においては、北側トレンチの第10号溝跡と北端部の第11号溝跡において須恵器等が出土しているためその可能性がある。また、H地点で検出された第1号～第4号溝跡の覆土に灰白色火山灰のブロックが混入しているため、平安時代以前の遺構の可能性が高い。さらにI地点においては、遺物が出土している遺構が少なく、時期認定が困難なものが大勢を占めるが、包含層中から須恵器が出土しており、当該期の活動があった可能性が考えられる。

以上のことから、新山崎遺跡の奈良時代についてはC地点からD地点の西側、およびF地点の西側にかけての地域、平安時代に至ってはB地点からI地点の西側にかけての地域に人間の活動区域がおよんでいたことが言える。

中世以降の遺構について、出土遺物によって時期的に限定できるものは、D地点の東側において中世陶器が出土している第2号土坑と、A-1地点において近世の朱塗の杯が出土している第3号井戸跡である。この中で特にD地点の第2号土坑とその東側のピット群、さらにその東側に近接している第3～第4号土坑のあり方は、他の遺構とはやや離れた場所に位置しているため、何らかの関連づけが可能であると考えられる。しかし、今回の調査では、報文中で柱跡群とした多数のピットについて時期を特定することができなかった(6)。

以上の遺構立地は、第1部第II章で松本秀明氏が示した、新山崎遺跡およびその周辺の地形環境を裏付けるものである。また、時代を問わず、遺構は三ツ口南地域の最も標高が高い部分に集中する可能性が考えられる。

## 2. 方形周溝墓について

新山崎遺跡からは、3基の方形周溝墓(?)が検出されている。このうち、全体が検出されたものは第1号方形周溝墓で、周溝が全周する形態をとる。長軸14.5m、短軸12.2mを測り、県内の方形周溝墓としては中規模のものと言えるかもしれない。また、長軸と短軸との比は約0.8であり、南北に長い長方形である。これに比べて第2号方形周溝墓は、南北軸10.0mとやや小形である。

ところで、これら3基の方形周溝墓は、それぞれ1.0m以下の間隔を置いて、周溝の一辺を平行に近い形で隣接しているという共通性が見られる。また、第1号方形周溝墓の南北軸の方向は真北に對して若干東にふれて(N-11°-E)構築されており、他の2基の周溝墓もそれに準じたものとなっている。このようなことから、これらの周溝墓が、南北もしくは東西を意識して造営されていた可能性があると考えられるかもしれない。3基の方形周溝墓の新旧関係は判然としないが、平行し、近接しているため、密接な関連性が考えられる。

遺物は、全ての周溝墓の周溝内から出土している。数量的に少ないため、多くの検討をすることはできないが、第3号方形周溝墓を例にとってみた場合、周溝底面からわずかに浮いて出土している。このことは、この土器の周溝内への土器の流入が、周溝墓の構築と時間的に距離を置いてあったことを示すものと考えられる。また、第3号方形周溝墓周溝内出土の壺は、限られた部分にまとまって、破片に近い状態ではあるが部分的に形状をとどめている状況で出土しており、胴上半部が欠失してい

る。このようなことから、この土器が、もともと周溝内に置かれたものではなく、方台部などにあつたものが転落したものと見ることができる(8)。遺物は、第1号方形周溝墓は南西コーナー付近の西側周溝内から、第2号方形周溝墓は南西コーナー付近の南側周溝内から、第3号方形周溝墓は北西コーナー付近の西側周溝内から出土しており、コーナー付近からの出土という共通性が見られる。

各方形周溝墓からの出土遺物は、第1号方形周溝墓は台付甕の一部と考えられる破片。第2号方形周溝墓は内面のみに赤彩が認められる小形の直口壺(9)と器種不明の土器片。第3号方形周溝墓は口縁部に縄文が施され、赤彩された大型の直口壺と甕の破片である。これらの出土遺物は、それぞれ、壺（供獻的）(10)と甕（一般生活に使用されるもの）という意味において共通していると考えられる。

ところで、第2号方形周溝墓から出土した壺は形態的に見て、いわゆる東海系土器の特徴を持っている。また、第3号方形周溝墓から出土した壺に施された縄文も、関東的な様相を持っており(11)、これらの方形周溝墓を造営した集団の出自に関係する可能性がある。

以上のような、周溝墓それぞれに見られる特徴および共通性という部分を踏まえたうえで、これらの周溝墓が集落から隔絶して存在していることと群構成を成していることから、“集団墓”という意味合いが濃いと考えられる。また、東海系の系譜を引くものと考えられる土器は、F地点の高杯(12)などにも見られるため、新山崎遺跡内における“墓域”と“集落”が一定の距離を置いて存在していたことは明白である。

一方、これらの方形周溝墓を含めた新山崎遺跡の集落は、明らかに低地に営まれたと考えられる。遺跡のすぐ西側には、須江丘陵が広がっており、丘陵上に立地する須江糠塚遺跡や闇ノ入遺跡があり、竪穴住居跡が発見されていることから、集落が営まれていたと考えられる。ここには方形周溝墓は発見されておらず、その様相は不明と言わざるを得ないが、丘陵上に営まれた集落と低地上に営まれた集落では地形上の選択に相違がある可能性を示唆し得る。方形周溝墓と集落をめぐる立地については、いまのところ言及すべくもないが、このような近接した集落について、一定の墓域を形成する方形周溝墓がどのようにかかわってくるのか、今後検討されるべき問題であると言える(13)。

ところで、先の須江糠塚遺跡や、田道町遺跡からは、耕跡が認められる土製品が出土しており(14)、稻作の可能性が指摘されている（三宅：1999）。石巻地域においても、このような事実をもとにした集落を構成する集団は、方形周溝墓が、“農業（水田耕作）共同体を基盤とした集団墓”(15)という見方に沿うものではないかと考えられる。

### 3. 古墳時代前期の井戸跡について

D地点では、塩釜式期の井戸跡が発見されている。この構造は、掘り方を掘り、その底面にくり抜きの井戸枠を据え、周囲を若干埋め戻して井戸枠を固定した単純な構造のものである。枠内の底面から塩釜式期の土器のみが複数出土していることから、この井戸跡が該期のものであることはまず異論はないと考えられる。新山崎遺跡では、地表下1.0m程度で湧水が認められるため、井戸を構築するため

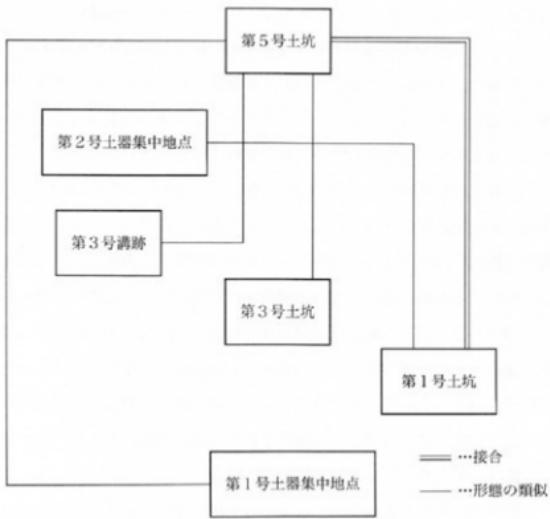
に地中を掘削することは容易であったと思われる。しかし、地山が砂地であるため、構築された井戸の埋没は非常に早く、定期的な手入れ（砂・土出し）、もしくは造り替えが必要であったと考えられる。同時期の井戸跡は、市内田道町遺跡A地点でも発見されており、やはり井戸枠はくり抜きのものを使用し、集落に近接していることからこれに伴うものであることが言える。該期の井戸跡については、他に類例を知らないが、宇野隆夫氏の分類（宇野：1982）によれば、B I類の丸太削抜き井戸に相当し、全国的に見た場合には弥生時代に出現し、古墳時代から古代にかけて盛行すると言われ、古墳時代の布留式の段階に畿内を中心に広まった可能性が指摘されている。宮城県内においては、井戸枠を伴う遺跡（地域）はあまり多くはなく、特に古墳時代から古代にかけてのものについては、その出土が限定されているため、概して井戸を構築する必要がなかったのではないかとの指摘がなされている<sup>16</sup>。この中でもさらに、古墳時代前期の井戸跡については、田道町遺跡と新山崎遺跡に限られている可能性が強い<sup>17</sup>。このような事実は、遺跡の立地環境に起因するものなのか、また、井戸（枠）を使用した集団に起因するものなのかは今のところ不明である。新山崎遺跡の井戸跡の場合における井戸枠の使用は、一般的に考えれば、その構築された環境（砂地）から井戸枠を使用する必要性があったことを第一義的に考えるべきではないかと思われる。

ところで、井戸枠内からまとめて出土している土器（片）であるが、完形になるものは全くなかった。このため、井戸の外で破損した（された）可能性が強い。これらの土器については、井戸の廃絶段階で投棄されたものか、あるいは井戸使用時に入り込んだものなのかということについてであるが、出土した土器の中で最も接合率が高く、出土位置もまとまっていた甕（胴下～底部欠損）が井戸枠の上面ギリギリの位置から出土したことから、この土器については井戸廃絶段階に投棄された可能性が強いことを指摘しておきたい。

#### 4. 土器集中遺構（土坑）について

土器集中遺構（土坑）は、D地点で1ヶ所、E地点で2ヶ所、F地点で6ヶ所、G地点で1ヶ所検出されている。時期的に見ると、そのほとんどが塙釜式期に集中しており、掘り込みを伴うもの、伴わないものなど様々な状況が見られる。その中でも特にF地点で検出されたものは、近接した場所に複数の遺構が比較的まとまって存在している。それらの中には、土器において類似したものが含まれているなど、関連性する可能性があるものも見られた。ここで、F地点における第1章で行った土器の分類上の相関関係について改めて見てみることにする。なお、第3号土器集中地点については、古墳時代後期のものである可能性があるため、ここでは除外する。

土器の形態上、類似が認められる土器が出土した遺構の相関関係は以下のとおりである。ただ、これらの土器にどれくらいの時期差があるのか、また、第5号土坑の遺物出土量、種類のバリエーションと他の遺物の量などには大きな開きがあるため、一元的に解釈することはできない。しかし、F地点におけるこれらの遺構には、土器の面で何らかの関連性があることは確かである。さらに、1点のみであるが、第1号土坑出土の甕の底部破片の中に、第5号土坑出土の破片と接合したものが見られ



第15図 F地点の土器集中遺構出土土器における相関関係

た。このため、第1号土坑と第5号土坑は直接に関連していた可能性が強い。

これらの遺構から出土した遺物は破片であり、完全な形に復元できたものがほとんどない点で共通性を持っている。また、それぞれの遺構から出土した遺物は一括性を持っていると考えている。このことから、遺物が投棄されたものである可能性が強い。

第5号土坑は、これらの遺構の中でも最も土器の数量、器種構成が多い。第5号土坑の遺物断面図（第5部 第30図～第33図）を見てみた場合、遺物が土層を越えて接合していることがわかる。しかし、第33、第34図における赤彩土器のあり方は、比較的まとまっている⑧。このまとまりの中には、第5号土坑から出土している全ての器台が含まれる他、高杯も含まれている。特に器台については、第1章2. の（3）で指摘した“対”になる可能性がある土器が含まれている。

土器集中遺構（土坑）は、田道町遺跡A地点の第1号、第2号、第5号、第17号土坑においても見られ、集落に近接して構築されている。また、出土遺物は甕が主体で器台や壺も含まれ、新山崎遺跡におけるあり方と類似した状況を呈している。

一方、近年の調査では、大和町の自然堤防上に立地する下草古城跡から報告されている（天野他：1996）が、ここでは、「土器集中地点の周辺には、遺構などの人間が活動した痕跡が認められないことや、——中略——これらの土器はこの場所で使われたものではなく、別な場所で使われた後、

この場所に廃棄されたもの——』という位置づけが行われている。

新山崎遺跡においても、F地点およびE地点から竪穴住居跡等は検出することができなかった。集落は、より標高が高い、E、F地点の西側に存在している可能性が考えられ、そのような場所で使用された遺物がこの場所に投棄されたものであろう<sup>19</sup>。また、消極的ではあるが、D地点における井戸跡や竪穴状遺構と土器集中地点との関係から、F地点におけるこれらの土器集中遺構が集落の最も外側に近い場所に位置している可能性が考えられる。

## 5. 井戸跡について

B地点において、曲物を数段に重ねた棒が出土した井戸跡（第1号井戸跡）は堆積土から平安時代以前の可能性があることはすでに指摘した。この井戸跡は宇野氏の分類（宇野：1982）によれば、BVII類の曲物積上げ井戸に相当し、古代から中世にかけて盛行し、特に中世の発見例が群を抜いている。管見に触れたもので、このような形態を持つ井戸跡は、やや古い事例であるが、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡から報告されている。この遺構からは曲物を三段に重ねたもので、それぞれの曲物において内側と外側の二つを合わせて二重にしているなど、新山崎遺跡B地点第1号井戸跡出土の井戸棒との類似が認められる。また、岩切鴻ノ巣遺跡の井戸址内の埋土2a層（灰白色粘土）とされているものは、灰白色火山灰の可能性があり、平安時代以前に位置づけられる可能性があるため、当遺跡の井戸跡と時期的に重複する可能性が想定される。

この他に新山崎遺跡において、井戸跡内に曲物が用いられているものには、A-1地点の第4号井戸跡があげられる。また、D地点の第2号土坑からも曲物の一部と考えられる木製品が出土しており、第2号土坑自体も井戸跡の可能性が高いと考えられるため、この範疇に押さえることとする。このうち、D地点の第2号土坑からは、中世陶器と考えられる壺の破片が出土している<sup>20</sup>。のことから、消極的にではあるが、これらの井戸跡が平安時代から中世にかけてのものであると言える。

一方、A-1地点の第2号井戸跡からは、陽物状の肅串が出土している。この意味として、『水が潤渉することのないよう祈ったもの』との意味合いを有したものであるとの指摘があり、祭祀用具であると考えられる。

新山崎遺跡からの井戸跡の検出数は比較的まとまっていると考えられ、古墳時代前期から近世までのものが発見されている<sup>21</sup>。また、それに伴う井戸棒も複数出土しており、遺跡立地や集団に反映されたものとして解釈される。

## 6. その他の遺構について

F地点の第1号溝跡と第2号溝跡は近距離に平行して走行しており、関連性が見られる。特に第2号溝跡は布掘状を呈しており、当遺跡においてはこの西側に集落が存在していたことが想定されるため、柵や堀等の区画施設であった可能性がある。時期は不明であるが、この他に布掘状を呈する溝跡としては、C地点の第9号溝跡があげられ、何らかの区画施設の可能性が考えられる。また、これと

は異なった様相を呈するものとして、C地点の第14号溝跡があり、溝内の東側側縁にピット列を有する。溝跡の東側での集落の存在は確認されておらず、その可能性も薄いため、上記の溝跡とは異なる機能を有していたものであろう。

## 註

- (1) 空中写真撮影によって撮影された写真を見ると、A-1地点の東側の水田内に、周溝と考えられる方形の痕跡が複数確認されている。
- (2) 土器集中地点については、出土した遺物のほとんどが土器片のみに限定されること、明確な掘り込みを伴っていないこと、土器以外に遺物がみられないことなどから、投棄された可能性が強いという解釈をとっておきたい。
- (3) F地点の東側では、確認調査の段階で塩釜式期の土器が出土しているため、該期の広がりは、当地点のさらに東側におよぶ可能性がある。
- (4) I地点における塩釜式期の遺物は遺構に伴っておらず、遺構も発見されていないため、詳細は不明であるが、該期の生活がこの地点までおよんでいた可能性は示唆できる。
- (5) E地点の南側トレンチとF地点の西側の畠地から、平安時代のものと考えられる須恵器の破片がまとまって採取された場所があり、これらの地点の西側には、さらに遺構・遺物がある可能性が強い。
- (6) 大きな要因として、遺物が全く出土していないことがある。
- (7) 新山崎遺跡におけるこれらの遺構を方形周溝墓として規定した理由としては、溝による隔絶性、集落との隔絶性、溝内における特殊遺物（赤彩、纈文施文等の特徴を持つ供獻土器）の存在などである。
- (8) この壺や、第2号方形周溝墓周溝内から出土した壺は、その特徴が明らかに特殊なものと考えられ、周溝墓の付近に、他にこのような遺物を出土する可能性がある遺構が存在しないことなどから、これらの周溝墓に伴うものであると解釈される。また、このような状況解釈は山岸（1996）によても論じられている。
- (9) ミニチュアと言っても良いかもしれない。
- (10) 底部穿孔がなされておらず、厳密な意味で“供獻”と言えるかどうかは不明である。ここでは壺の形態が特殊なものであることを重視しておきたい。
- (11) 細かく、浅く施された欄文は、関東地方の弥生から古墳時代前期にかけて見られるものに類似している。
- (12) 時期的な差異は別として、新金沼遺跡からも同系統と考えられる高杯が出土しており、少なとも塩釜式期のある時期に石巻地方に東海系土器の影響があったことが示唆できる。
- (13) 例えば、新金沼遺跡と新山崎遺跡との間の空間（水田）や、遺跡間のつながりについても言ふこととする。
- (14) 新山崎遺跡においても、初のプラントオーバールが発見されている。
- (15) ここでは、山岸（1996）の言う『方形周溝墓』墓制保有集団の裏にみられる「水稻耕」保有集団が構築した水田遺構と同様な計画的な造墓理念』などがこれにあたると考えられる。
- (16) 山王遺跡伏石地区の報文（考察）中において吉野武氏が触れている（佐藤他：1997）。それによれば、県内における側を持つ古代の井戸跡の発見例は多賀城市とその周辺以外では、仙台市郡山遺跡、名取市清水遺跡、石巻市田道町遺跡のみであるという指摘がなされており、『当時の一般集落では井戸は必要不可欠な施設ではなかったと思われる。』と結論づけている。
- (17) 田道町遺跡の井戸跡内からは、塩釜期のハケメが施された複合口縁壺や甕が出土している。

- (18) 第5号土坑の特に甕を中心として考えた場合、この土坑内の土器の一括性は強いと言わざる得ない。また、砂地で、湧水が認められるわずか50cm程度の堆積しかない、2つの土層内における土器のあり方がどこまで有効なのが不明である。しかし、この中において、上層付近に赤彩された土器（器台、高杯）がまとまって出土している状況は、やはり一つの“まとまり”としてとらえる必要性があるのかもしれない。現時点では第5号土坑内の遺物は、短期間のうちに投棄されたものとみることができるが、これら“まとまり”を有している土器については、その中でもさらに短期間に投棄されたものである可能性も考えられる。
- (19) 下草古城跡の土器集中地点から出土した土器の中には、ミニチュア土器や装飾器台など、祭祀に関係したものが含まれている。しかし、第5号土坑の中には、そのような遺物が含まれていない。一方、甕などの直接生活にかかわる遺物も含まれている点では共通点も見られるが、ここでは、遺物の内容から見た遺構の性格ではなく、遺構の廃棄のあり方から見た遺構の性格について言及することとした。
- (20) 破片であり、時期に関する詳細な検討はできなかつたが、平安時代まで遡る可能性もある。
- (21) 須江郡塚遺跡から灰白色火山灰が覆土下層に検出された素掘の井戸跡が1基発見されている。

### III. まとめ

1. 新山崎遺跡は須江丘陵の東側に東西に延びる浜堤上に形成された縄文時代晚期から近世にかけての人々の活動があった遺跡であることが判明した。
2. 遺跡周囲の古環境は地形やプラントオパールの分析などにより周囲を湿地に囲まれ、アシなどの湿地性の植物が生い茂る低湿地であり、イネのプラントオパールも発見されていることから、稻作が営まれていたと考えられる（古墳時代以降）。また、奈良・平安時代以降の井戸跡から、モモの種子の出土が目立つことから、そういういた果樹を栽培、生育されていたと考えられる。
3. 新山崎遺跡における縄文時代の人々の活動痕跡は、I 地点における土坑のみであり、活動の詳細は判然としない。松本秀明氏によれば、新山崎遺跡が立地する浜堤は、今から約5,000～4,500年前（縄文時代中期～後期）以前に形成されたとされている。このことから、今回発見された遺構を構築した縄文時代晚期の人々は、西側に須江丘陵、背後に広大な低湿地を望む、海浜からそれほど遠くない海浜砂堆において活動を営んでいたと考えられる。また、I 地点からは、土器の他にまとまってチップが発見されているため、採集・狩猟活動の痕跡と解釈することができる。
4. 新山崎遺跡における弥生時代の人々の活動痕跡は発見されておらず、縄文時代から近世にかけての時代における人間活動の空白期間である。
5. 古墳時代前期（4世紀）には、古墳文化が石巻地方に流入し、新山崎遺跡では集落が営まれ、農業共同体を基盤とした集団墓である方形周溝墓群が造立された。一方、土器に見られる東海系の要素は、次第に在地的なものへと変容を遂げ、田道町遺跡などに見られる塙釜式独自の様相へと変化して行ったと考えられる。
6. 古墳時代前期の方形周溝墓群は、集落から独立して墓域を形成しており、その配置から一定の計画性が想定される。また、出土した土器などから見ても、強い紐帶関係にある集団と解釈され、集団墓としての性格を背負するものと考えられる。
7. 古墳時代前期の集落に関する遺構としては、井戸跡が検出され、県内の井戸棒を有する井戸跡としては最古のものに位置づけられる。また、F 地点などにまとめて見られた土器集中遺構は何らかの目的に使用された土器を廃棄したものと考えられる。また、これらの遺構の他に、南北方向に走行している複数の溝跡が発見されているため、調査区域は集落の外縁部に近い場所であると考えられる。
8. 新山崎遺跡から出土した古墳時代の土器は、前期のものが大部分であり、わずかに後期のものが含まれるが、他の時期のものについては出土していないため、集落は一定期間営まれた後、廃絶されたと考えられる。しかし、古墳時代後期と考えられる土器が廃棄された遺構も発見されていることから、その時期の活動があった可能性がある。

9. 古墳時代の人々の生業としては、新山崎遺跡Ⅰ地点の古墳時代と考えられる土層からまとまつて発見された稻のプラントオパールや、近辺に位置する須江櫛塚遺跡、石巻市街に位置する田道町遺跡から出土した土製品に見られる耕の圧痕などから稻作を営んでいたことが想定される。
10. 粿良時代の土器、木製品、遺構（溝跡）が発見されていることから、近隣に居住域が存在していた可能性を示唆し得る。
11. 土器などの出土によって明確に平安時代と規定される遺構は検出されていないが、遺構の覆土下層中に観察された灰白色火山灰の存在から、井戸跡、溝跡、土坑等がその時代のものとして位置づけられ、複数のものが検出されている。このため、近隣に集落が存在していた可能性が強い。一方、遺跡内の畠地からまとまって採集された須恵器から、遺跡西側の丘陵上に位置する須江窯跡群との結び付きを持った集落が存在していた可能性がある。
12. この時期と考えられる溝跡は、C地点、D地点、E地点、H地点などにおいて南北に走行する傾向があり、集落内の区画や排水の機能、あるいは集落の外縁部に位置し、外界との隔絶などの機能が考えられる。また、確認調査の結果などから判断して、集落の外縁部付近に位置し、さらに東側に広がる湿地帯からの水の進入を防いでいたことが第一義的に想定される。
13. 新山崎遺跡における中世の人々については、明確な遺構・遺物が発見されなかつたが、B地点やD地点から検出された井戸跡や、それに準じると考えられる土坑などから、集落が存在していたと考えられ、A-1地点やD地点におけるビット（柱跡）群との土層の類似や近接（まとまり）関係により何らかの小規模な建物が点在していたと想定される。
14. A-1地点検出の第3号井戸跡から出土した漆塗りの杯には、「丸に三つ引き」の家紋が見られる。石巻においてこの家紋を持つ者は小林家、三浦家、黒沢家などである。また、同じ遺構から出土している下駄は差歎下駄であり江戸時代に盛行したものであるため、近世のものとして時期的に一致する。

#### 引用・参考文献

- 青山 博樹 1997 東北南部における古墳編年と土器編年の対応についての予察』『福島考古』38号
- 青山 博樹 1998 「土器①東北南部」『第3回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム 前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』
- 青山 博樹 1998 「東北における土器の移動についての諸問題」『庄内式土器研究 XVI—庄内式併行期の土器生産とその動き— 北関東を中心とした庄内式併行期の土器の移動』庄内式土器研究会
- 赤塚 次郎 1992 「東海系のトレース—3・4世紀の伊勢湾沿岸地方—」『古代文化』
- 阿部・赤沢 1983 「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集 瀬峰町教育委員会
- 阿部博志・須田良平 1997 「北上川下流域・三陸沿岸の旧石器時代遺跡の分布調査報告書」 東北歴史資料館
- 甘粕 健 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相—越後・会津・能登』『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書
- 天野 順陽 1994 「下草古城」『宮城県文化財調査報告書』第160集 宮城県教育委員会
- 天野 順陽 1996 「下草古城跡」『宮城県文化財調査報告書』第169集 宮城県教育委員会
- 石野博信ほか編 1991 「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」雄山閣
- 石巻古代文化研究会 1968 「矢本横穴古墳 第1次発掘調査概報」
- 石巻古代文化研究会 1969 「矢本横穴古墳 第2次発掘調査概報」
- 石巻市教育委員会 1993 「石巻地方の古墳時代～最近の発掘調査から～」『石巻市文化財だより』第22号
- 石巻市教育委員会 1997 「平成九年度 発掘調査報告」『石巻市文化財だより』第27号
- 石巻市教育委員会 1998 「日和山城跡発掘調査現地説明会資料」
- 伊藤和彦・大塚俊雄 1986 「堤台遺跡」『東葛上代文化の研究』 古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会編
- いわき市史編さん委員会 1986 「いわき市史・第1巻 原始・古代・中世」 財団法人いわき市教育文化事業団
- 岩見 和泰 1994 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第163集 宮城県教育委員会
- 岩見 和泰 1991 「伊治城跡一下草古城ほか」『宮城県文化財調査報告書』第146集
- 氏家 和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』
- 宇野 隆夫 1982 「10 井戸考」『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』
- 太田 昭夫 1980 「大橋遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書IV—」『宮城県文化財調査報告書』第71集 宮城県教育委員会
- 大友 透 1994 「鶴巻前遺跡—仙台東部道路関係遺跡調査報告書」『名取市文化財調査報告書』第33集 名取市教育委員会
- 小川 淳一 1992 「土手内」『仙台市文化財調査報告書』第165集 仙台市教育委員会
- 小沢 洋他 1996 「君津地方における弥生後期～古墳前期の土器編年」『君津都市文化財センター研究紀要VII—センター設立15周年記念号—』 財団法人君津都市文化財センター
- 小沢 洋他 1996 「南関東における弥生後期・古墳前期土器研究の動向」『君津都市文化財センター研究紀要VII—センター設立15周年記念号—』 財団法人君津都市文化財センター
- 小高 春雄 1995 「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『財団法人千葉県文化財センター20周年記念論集』 財団法人千葉県文化財センター
- 加藤 道男 1980 「東館遺跡—東北新幹線関係調査報告書—III—」『宮城県文化財調査報告書』第65集 宮城県教育委員会

加藤 道男	1989	「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集
木村 高	1999	「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係－続繩文土器との共伴事例から－」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第4号
木村 敏郎	1983	「越田台遺跡発掘調査報告（1）」『石巻市文化財だより』第12号 石巻市教育委員会
楠本 政助	1973	「第一編 先史」『矢本町史』第一巻 矢本町史編纂委員会
工藤 哲司ほか	1980	「今泉城跡－発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第24集 仙台市教育委員会
群馬県史編纂委員会	1990	『群馬県史』通史編1 原始古代1
小井川和夫	1991	「桃生町山田古墳群・矢本町矢本横穴群出土遺物」『東北歴史資料館研究紀要』第16・17巻 東北歴史資料館
木暮 亮	1995	「箕輪山－石巻市大瓜箕輪山における埋蔵文化財調査－」『石巻市文化財調査報告書』第6集 石巻教育委員会
後藤 秀一	1994	「山王遺跡八幡地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書I－」『宮城県文化財調査報告書』第162集 宮城県教育委員会 宮城県土木部
古墳時代土器研究会編	1997	「土器が語る一闇東古墳時代の黎明」
小村田達也・三好秀樹	1993	「北原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第159集 宮城県教育委員会
小森 紀男	1984	「古墳出現期における外来系土器の検討－栃木県内出土例を中心として－」『栃木県考古学会誌』第10集 栃木県考古学会
小山田正男	1985	「二本松遺跡一二本松遺跡 河原田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第112集 宮城県教育委員会
埼玉県	1982	「古墳時代」『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代・弥生・古墳』
佐久間光平	1995	「佐沼城跡－近世武家屋敷と古代の集落跡－」『佐沼町文化財調査報告書』第2集 佐沼町教育委員会
佐久間光平	1997	「舟場遺跡－舟場遺跡ほか－」『宮城県文化財調査報告書』第173集 宮城県教育委員会
佐藤 淳	1994	「昭和北遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第186集 仙台市教育委員会
佐藤 洋ほか	1987	「六反田遺跡III」『仙台市文化財調査報告書』第102集 仙台市教育委員会
佐藤 敏幸	1993	「須恵窯跡群 閔ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書』第7集 河南町教育委員会
佐藤 敏幸	1993	「須江窯跡群 代官山遺跡」『河南町文化財調査報告書』第6集 河南町教育委員会
佐藤 敏幸	1993	「須江窯跡群 閔ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書』第7集 河南町教育委員会
佐藤 敏幸	1996	「赤井遺跡1995－牡鹿柵・郡家推定地－」『矢本町文化財報告書』第4集 矢本町教育委員会
佐藤 敏幸	1996	「赤井遺跡1995－牡鹿柵・郡家推定地－ 県道石巻・鹿島台・大衡線改良工事に伴う発掘調査概報I」『矢本町文化財報告書』第5集 矢本町教育委員会
佐藤敏幸・蝦名博之	1997	「赤井遺跡1996－牡鹿柵・郡家推定地－」『矢本町文化財報告書』第6集 矢本町教育委員会
佐藤敏幸・蝦名博之	1997	「赤井遺跡－牡鹿柵・郡家推定地－ 県道石巻・鹿島台・大衡線改良工事に伴う発掘調査概報II」『矢本町文化財報告書』第7集 矢本町教育委員会
中野裕平・佐藤敏幸	1987	「須江鍾塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第4集 河南町教育委員会
佐藤 则之	1992	「伊治城跡一下草古城ほか」『宮城県文化財調査報告書』第146集 宮城県教育委員会

佐藤 恵幸 他	1996	「山王遺跡 III-仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第170集 宮城県教育委員会
佐藤則之・菊地逸夫 ・千葉長彦	1992	「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第5集 築館町教育委員会
佐藤則之・菅原弘樹	1993	「山王遺跡 I-仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第161集 宮城県教育委員会
佐藤則之・菅原弘樹	1996	「山王遺跡V」『宮城県文化財調査報告書』第174集 宮城県教育委員会
佐原 真	1985	「工具1.石斧」『弥生文化の研究5 道具と技術5』雄山閣
庄司惠一・芳賀英実 ・岡 道夫	1995	「田道町遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第7集 石巻教育委員会
白鳥良一・加藤道男	1974	「岩切鴻ノ巣遺跡 一東北新幹線関係調査報告書I」『宮城県文化財調査報告書』第35集 宮城県教育委員会
菅原 弘樹 他	1995	「山王遺跡II」『宮城県文化財調査報告書』第167集 宮城県教育委員会
菅原 弘樹 他	1996	「山王遺跡IV」『宮城県文化財調査報告書』第171集 宮城県教育委員会
鈴木 敏弘	1977	「原始墓制研究5号-方形周溝墓研究 その5研究史編-東日本-」原始墓制研究会
鈴木敏弘・丸山康晴 ・坂本俊俊	1992	「原始墓制研究1~4号 一方形周溝墓研究その1~4-文献目録・研究史編」 原始墓制研究会
鈴木 敏弘	1994	「和考研究 創刊号-特集 集落内祭祀の研究-」和考研究会
鈴木 敏弘	1996	「和考研究 IV-特集- 集落内祭祀の研究(2)」和考研究会
須田良平・吾妻俊典 仙台市教育委員会	1992	「野田山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第145集 宮城県教育委員会
	1996	「押口遺跡-中在家東遺跡他-」『仙台市文化財調査報告書』第213集 仙台市教育委員会
高橋 守克 他	1987	「須江櫟原遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集 河南町教育委員会
高橋 和	1985	「東北地方南部の古墳時代前期高杯に関する一視点-中央柱状部を持つ脚部形態について」『法政史論』 第13号
武田 幸司	1994	「四郎丸館跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第200集 仙台市教育委員会
田中 敏	1987	「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』第1号
次山 淳	1989	「東北地方における古墳時代全半期の土器研究と古墳」『第25回埋蔵文化財研究集会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 第1分冊 一般発表要旨- 一追加資料-埋蔵文化財研究会
次山 淳	1992	「塙釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』 埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
次山 淳	1992	「塙釜式土器の変遷と位置づけ」『究班』 埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
次山 淳	1993	「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40卷 第2号
辻 秀人	1993	「東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会 1993年度新潟大会資料
辻 秀人	1995	「東北南部における古墳出現期の土器編年 その1 会津盆地」『東北学院大学論集 歴史・地理学』 第26号
辻 秀人	1995	「東北南部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集 歴史・地理学』 第27号
土岐山 武	1980	「安久東遺跡-東北新幹線関係調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第72集 宮城県教育委員会

手塚 均	1980	「留沼遺跡—東北新幹線関係調査報告書—Ⅲ—」『宮城県文化財調査報告書』第65集 宮城県教育委員会
柄木県立なす 風土記の丘資料館	1993	「第1回企画展図録 前方後方墳の世界—前方後方墳の成立と展開—」 柄木県教育委員会
中村 光一	1985	「石巻城跡—奥州葛西氏館跡の調査—」『石巻市文化財調査報告書』第2集 石巻市教育委員会
中村 五郎	1995	「弥生土器・続縄文土器・古式土器」『福島考古』第3号 福島県立博物館
西瀬正男・佐藤敏幸	1996	「赤井遺跡—牡鹿柵・郡家推定地—」『矢本町文化財報告書』第3集 矢本町教育委員会
西川 修一	1994	「三浦半島におけるS字型の諸形態について」『庄内式土器研究』V 庄内式土器研究会
西川 修一	1994	「神奈川県西部(相模地域)の土器編年」『庄内式土器研究』VII 庄内式土器研究会
西川 修一	1995	「東・北関東と南関東—南関東圏の拡大—」『古代探叢IV—滝口宏先生追悼考古学論集—』早稲田大学出版部
西川 修一	1996	「再び関東のタタキ甌について—大村論文に接して—」『神奈川考古』第32号 —神奈川考古同人会20周年記念論集—
日本考古学協会編	1993	『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会 1993年度新潟大会資料
丹羽 茂	1983	「宮前遺跡—朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡—」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会
丹羽 茂	1985	「今熊野遺跡I—古代編—」『宮城県文化財調査報告書』第104集 宮城県教育委員会
阿部 恵・丹羽 茂 ・柳田俊雄	1981	「西野田遺跡—東北新幹線関係調査報告書—I—」『宮城県文化財調査報告書』第35集 宮城県教育委員会
丹羽 小野寺・阿部	1981	「清水遺跡—東北新幹線関係調査報告書—V—」『宮城県文化財調査報告書』第77集 宮城県教育委員会
芳賀 英実	1995	「田道町遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第7集 石巻市教育委員会
芳賀 英実	1996	「石巻市新金沼遺跡」『平成8年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県史跡整備市町村協議会
比田井克仁	1988	「外来土器の展開—古墳時代前期の東京を中心として—」『古代』第78・79合併号
比田井克仁	1988	「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会
比田井克仁	1997	「弥生時代後期における時間軸の検討—南武藏地域の検討を通して—」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
平間 亮輔	1997	「四郎丸館跡第2次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第218集 仙台市教育委員会
藤沢 敦	1992	「引田式再論」『歴史』79 東北史学会
藤沼 邦彦	1971	「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集 宮城県教育委員会
藤原 妃敏	1994	「企画展 会津大塚山古墳の時代 一激動の三・四世紀」福島県立博物館
古川 一明	1983	「色麻古墳群—宮城県宮城山古墳等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和57年度)」『宮城県文化財調査報告書』第95集 宮城県教育委員会
古川 一明	1991	「小松遺跡・赤井遺跡」『矢本町文化財調査報告書』第2集 矢本町教育委員会
古川・須田・吾妻	1992	「野田山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第145集 宮城県教育委員会
古川一明・白鳥良一	1991	「東北 土器と須恵器(土器の編年)」『古墳時代の研究』6 雄山閣

宮城県文化財保護課編	1976	「山前遺跡」小牛田町教育委員会
三宅 宗議	1999	「古代石巻の王たち」『石巻地方研究』第4号
三宅 宗議	1973	「第二編 古代」『矢本町史』第一巻 矢本町史編纂委員会
三宅 宗議	1988	「五松山洞窟遺跡－発掘調査報告－」『石巻市文化財調査報告書』第3集 石巻市教育委員会
三宅 宗議	1996	「古代編 第一章 支配者が現れる」『石巻の歴史』第一巻 通史編（上） 石巻市史編纂委員会
三宅宗議・進藤秋輝	1987	「赤井遺跡」『矢本町文化財調査報告書』第1集 矢本町教育委員会
村田 晃一	1993	「大泉遺跡一下草古城ほか」『宮城県文化財調査報告書』第154集 宮城県教育委員会
村田 晃一	1998	「山王遺跡町地区の調査一県道泉塩釜線関連調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』第175集 宮城県教育委員会 宮城県土木部
山岸 良二	1996	「第2節 方形周溝墓」『原始・古代の日本の墓制』同成社
山岸 良二編	1996	『関東の方形周溝墓』同成社
弥生土器を語る会 他	1997	「弥生土器シンポジウム 南関東の弥生土器」
遊佐 五郎	1980	「宇南遺跡一東北自動車道遺跡調査報告書一III」『宮城県文化財調査報告書』第69集宮城県教育委員会
龍ヶ崎市教育委員会	1991	「龍ヶ崎市の原始古代」『龍ヶ崎市史 別編I』 龍ヶ崎市史編さん委員会
渡辺 紀	1995	「伊古田遺跡一仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書III」『仙台市文化財調査報告書』第193集 仙台市教育委員会
渡辺弘美・主浜光朗	1984	「戸ノ内遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第70集 仙台市教育委員会

# 写 真 図 版



第1号方形周溝墓  
(A—1地点)



第2号方形周溝墓  
(A—1地点)



第3号方形周溝墓  
(A—1地点)





第3号方形周溝墓遺物出土状況  
(A-1地点)

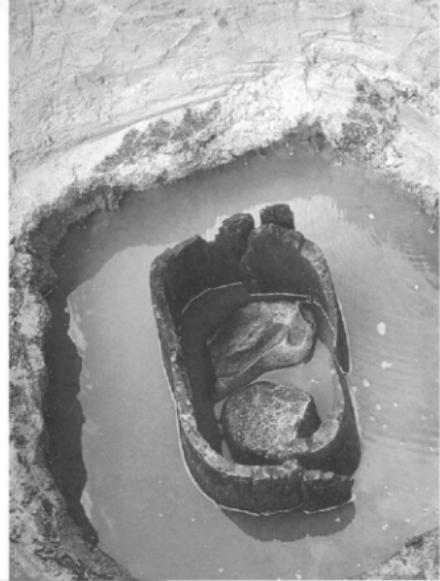


調査区全景  
(A-1地点)



第1号井戸跡・第2号井戸跡  
(A-1地点)

第1号井戸跡  
(A-1地点)

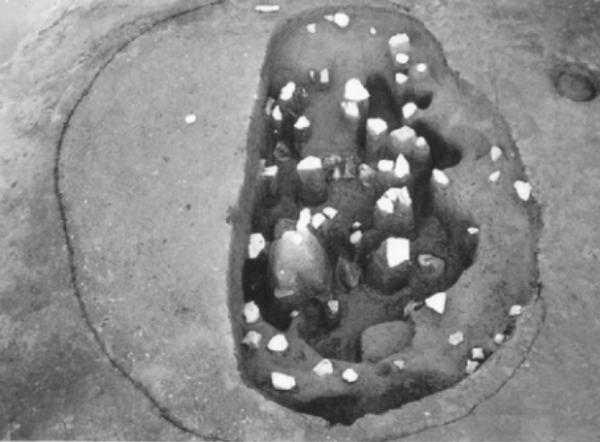


第2号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)



第2号井戸跡周辺ピット検出状況  
(A-1地点)





第3号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)



第3号井戸跡  
(A-1地点)



第3号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)

第3号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)



第3号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)

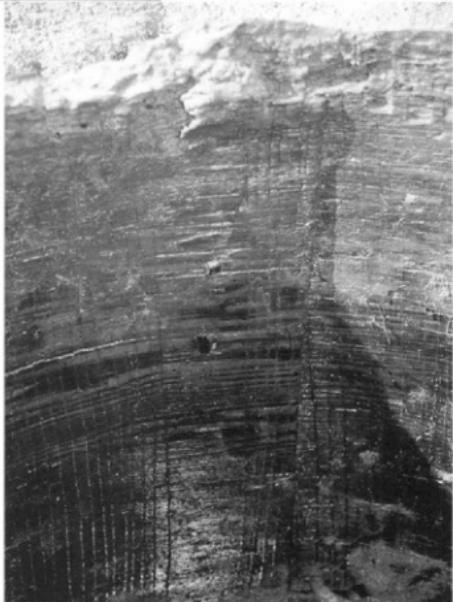


第3号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)

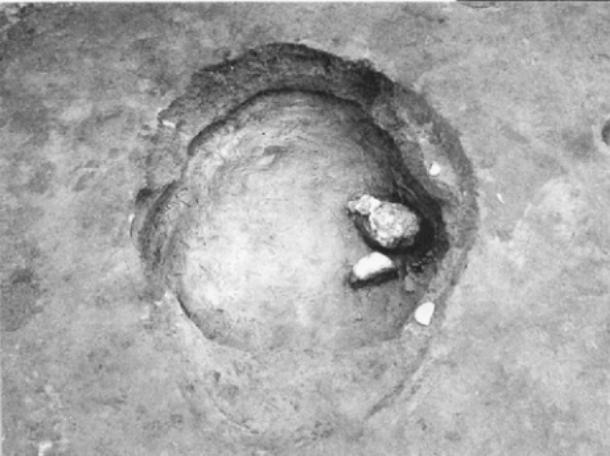




第4号井戸跡  
(A-1地点)



第4号井戸跡井戸枠内面  
(A-1地点)



第4号井戸跡遺物出土状況  
(A-1地点)

A-1地点北東側の状況  
(A-1地点)



A-1地点北東コーナー付近の状況  
(A-1地点)



第1号溝路  
(A-1地点)

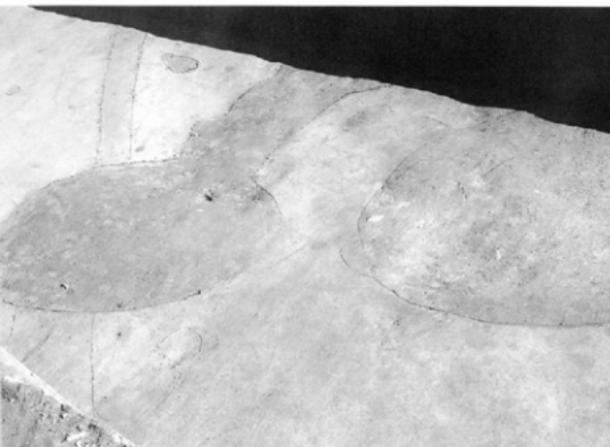




A-2地点東側トレンチ  
(A-2地点)



A-2地点東側トレンチ  
(A-2地点)



A-2地点西側トレンチ  
(A-2地点)

第1号土坑・第2号土坑  
(B地点)



第2号井戸跡井戸枠出土状況  
(B地点)



第2号井戸跡井戸枠出土状況  
(B地点)





第 6 号溝跡・第 1 号土坑・第 2 号土坑  
(C 地点)



第 3 号土坑  
(C 地点)



第 7 号溝跡・第 8 号溝跡  
(C 地点)



C地点全景



第14号溝路  
(C地点)



試掘トレンチ (C地点)



第1号井戸跡遺物出土状況  
(D地点)



第1号井戸跡遺物出土状況  
(D地点)



第1号井戸跡遺物出土状況  
(D地点)



竖穴状遗构遗物出土状况  
(D地点)



第5号溝跡遺物出土状况  
(D地点)



第5号溝跡遺物出土状况  
(D地点)



第11号溝跡・第12号溝跡  
(D地点)



第13号溝跡・第14号溝跡  
(D地点)



第14号溝跡遺物出土状況  
(D地点)

第15号溝跡・第16号溝跡  
(D地点)



土器集中地点  
(D地点)



土器集中地点遺物出土状況  
(D地点)





土器集中地点遺物出土状況  
(E地点)



第9号溝跡(E地点)・第4号溝跡(F地点)



第10号溝跡遺物出土状況  
(E地点)

第5号遺構  
(E地点)



第5号遺構遺物出土狀況  
(E地点)



第2号土坑遺物出土狀況  
(E地点)





第2号土坑  
(E地点)



第2号土坑遺物出土状況  
(E地点)



第2号土坑・第11号溝跡  
(E地点)





第1号溝跡・第1号土器集中地点  
(F地点)



第1号土器集中地点  
(F地点)



第1号溝跡・第1号土坑・第2号溝跡  
(F地点)



第2号溝跡  
(F地点)



第1号土坑遺物出土狀況  
(F地点)



第3号土坑遺物出土狀況  
(F地点)

第3号溝跡  
(F地点)



第2号土器集中地点遺物出土状況  
(F地点)



第1号遺構・第7号土坑  
第2号遺構・第6号溝跡  
第9号溝跡・第3号遺構  
(F地点)



第4号道構・第5号土坑・第4号溝跡  
(F地点)



第5号土坑遺物出土状況  
(F地点)



第5号土坑遺物出土状況  
(F地点)



調査区全景  
(G地点)



第1号土坑・ピット5遺物出土状況  
(G地点)



第1号溝跡遺物出土状況  
(G地点)

西側トレンチ全景  
(H地点)



南側トレンチ全景  
(I地点)



西側トレンチ西側  
(I地点)



確認調査で出土した土器



確認調査で出土した土器



確認調査で出土した土器



確認調査で出土した土器



第2号方形周溝基出土土器  
(A-1地点)



第3号方形周溝基出土土器  
(A-1地点)



第1号井戸跡出土土器  
(D地点)



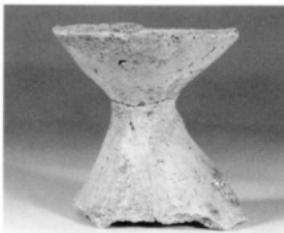
第1号井戸跡出土土器  
(D地点)



第1号井戸跡出土土器  
(D地点)



第1号井戸跡出土土器  
(D地点)



豊穴状遺構出土土器  
(D地点)



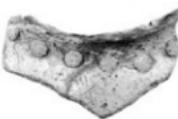
第5号溝跡出土土器  
(D地点)



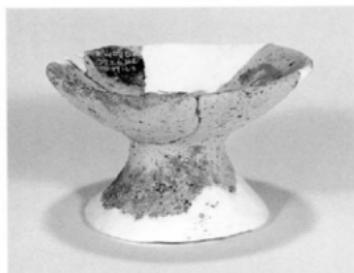
第5号溝跡出土土器  
(D地点)



第14号溝跡出土土器  
(D地点)



第15号溝跡出土土器  
(D地点)



土器集中地点出土土器  
(D地点)



遺構外出土土器  
(D地点)



土器集中地点出土土器  
(E地点)



土器集中地点出土土器  
(E地点)



土器集中地点出土土器  
(E地点)



遺構外出土土器  
(E地点)



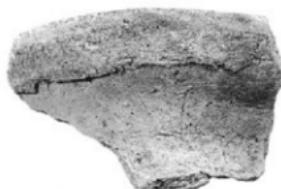
遺構外出土土器  
(E地点)



遺構外出土土器 (E地点)



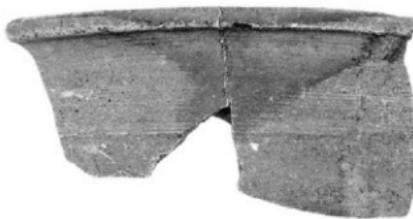
第2号土坑出土土器  
(E地点)



第2号土坑出土土器  
(E地点)



第2号土坑出土土器  
(E地点)



第11号溝跡出土土器  
(E地点)



第11号溝跡出土土器  
(E地点)



第1号溝跡出土土器  
(F地点)



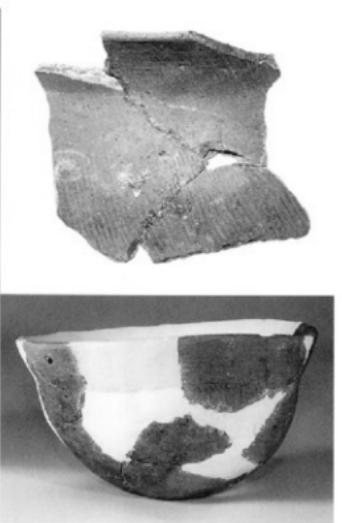
第1号溝跡出土土器  
(F地点)



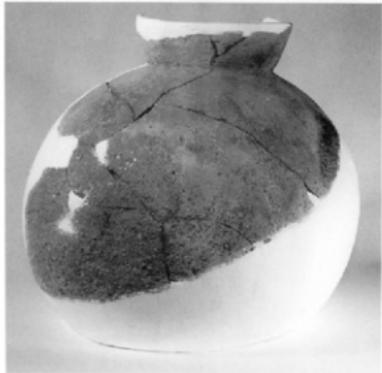
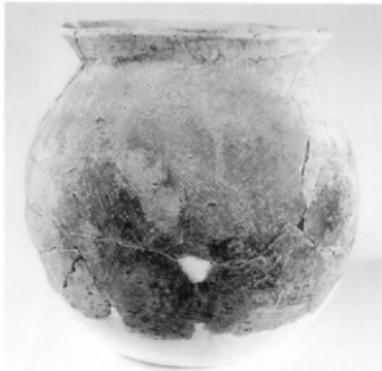
第1号溝跡出土土器  
(F地点)



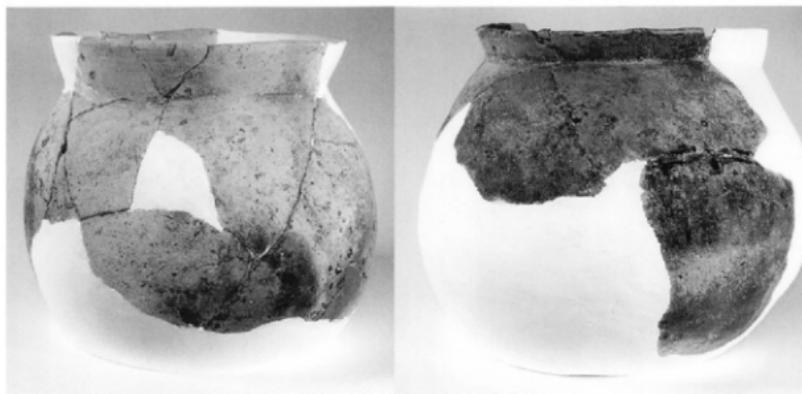
第1号溝跡出土土器  
(F地点)



第1号土器集中地点出土土器  
(F地点)



第1号土坑出土土器  
(F地点)



第3号土坑出土土器（F地点）



第3号土坑出土土器（F地点）



第2号土器集中地点出土土器（F地点）



第3号满坑出土土器（F地点）



← 第3号土器集中地点出土土器  
(F地点)



← 第4号溝跡出土土器  
(F地点)



第5号土坑出土土器  
(F地点)



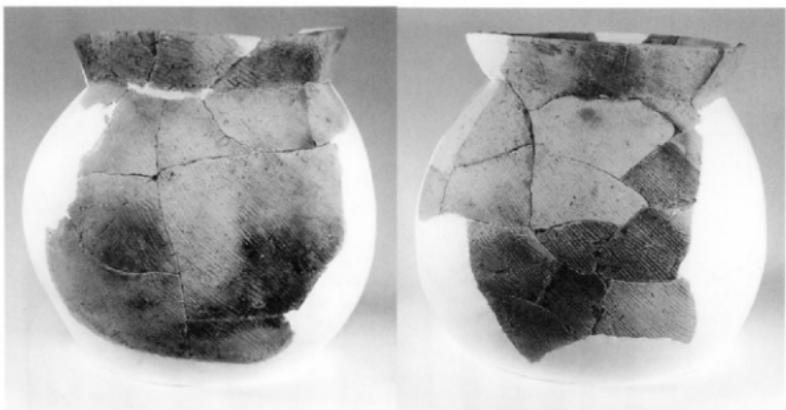
第5号土坑出土土器（F地点）



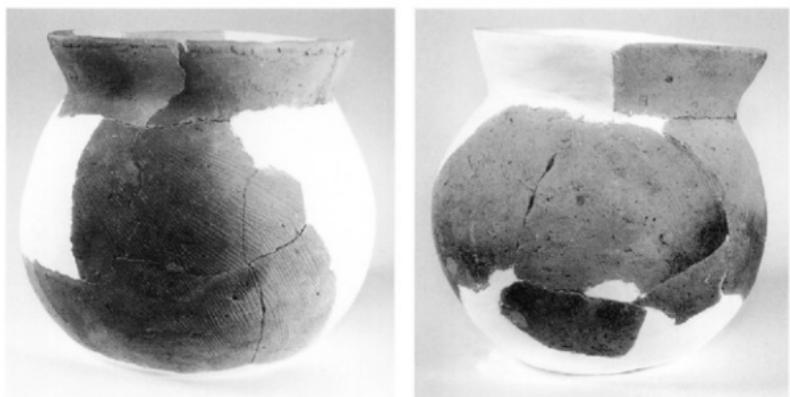
第5号土坑出土土器（F地点）



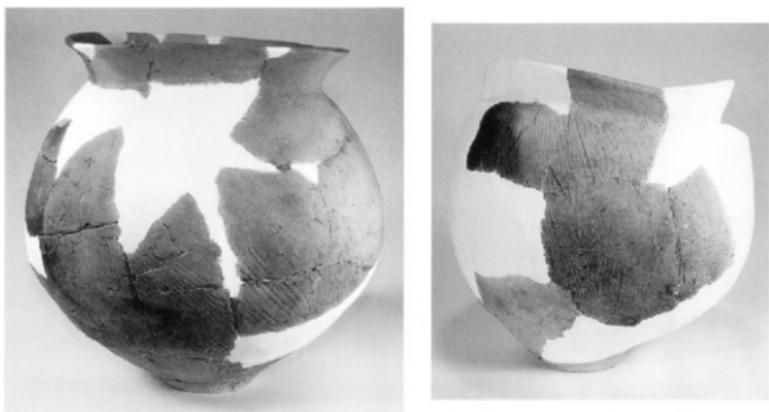
第5号土坑出土土器（F地点）



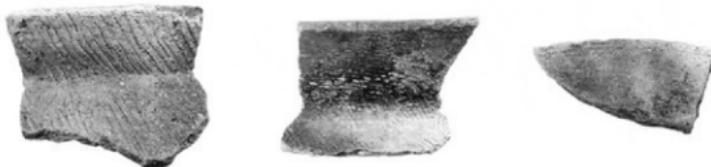
第5号土坑出土土器（F地点）



第5号土坑出土土器（F地点）



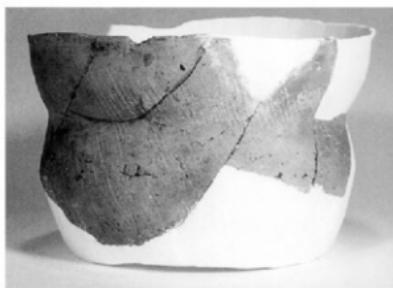
第5号土坑出土土器（F地点）



第5号土坑出土土器（F地点）



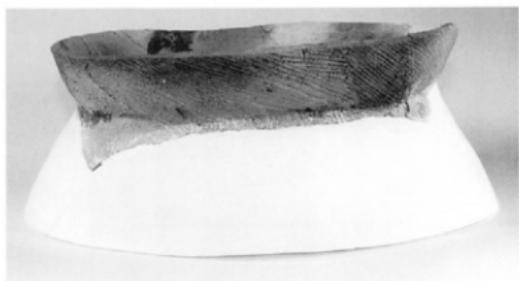
第5号土坑出土土器（F地点）



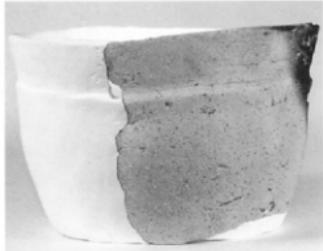
第5号土坑出土土器（F地点）



遺構外出土土器（F地点）



遺構外出土土器（F地点）



遺構外出土土器（F地点）



遺構外出土土器（F地点）



第1号土坑出土土器（G地点）



第1号土坑出土土器（G地点）



第1号土坑出土土器  
(G地点)

第2号土坑出土土器  
(I地点)



第4号井戸跡出土 石鉢  
(A-1地点)



遺構外出土 凹石  
(A-2地点)



第2号土坑出土 加工砾石  
(D地点)



第9号溝跡出土 砾石  
(E地点)



第1号土坑出土 砾石  
(F地点)



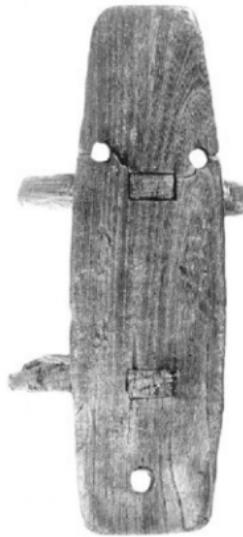
第11号溝跡出土 石簇  
(A-1地点)



第2号井戸跡出土矛串  
(A-1地点)



第4号井戸跡出土 杯  
(A-1地点)



第4号井戸跡出土 下牀  
(A-1地点)



第1号井戸跡出土 加工木片 (B地点)



第2号井戸跡出土 井戸枠 (B地点)

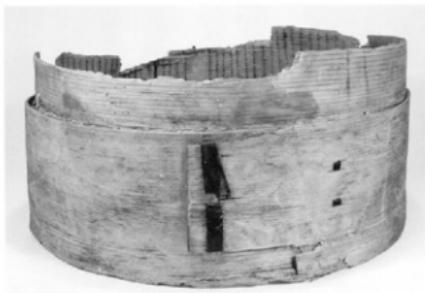
第2号井戸跡出土 火鉗臼 (B地点)



第2号井戸跡出土 井戸枠（上段）  
(B地点)



(中段)



(下段)

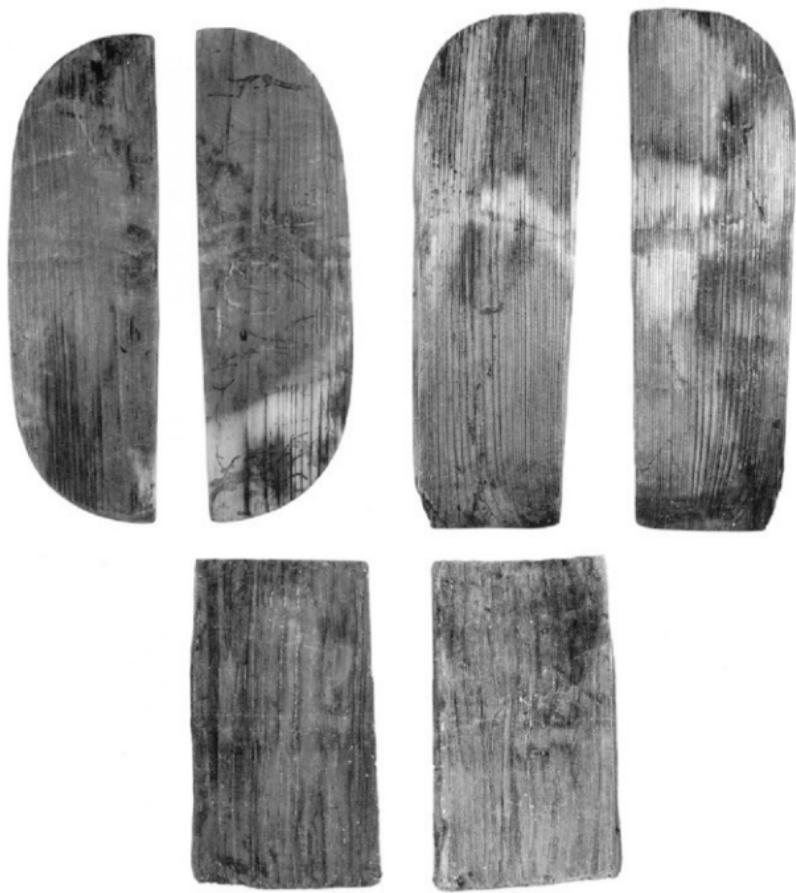
第2号井戸跡出土 井戸枠 (B地点)



第1号井戸跡出土井戸柾（D地点）



第5号溝跡出土 斧柄（D地点）



第14号溝跡出土 加工木片（D地点）



第14号溝跡出土 楔（D地点）



第2号土坑出土 加工木片 (D地点)



第2号土坑出土 加工木片 (D地点)



第2号土坑出土 曲物 (一部)  
(D地点)



第2号土坑出土 加工木片 (D地点)



第18号溝跡出土 加工木片  
(D地点)



第19号溝跡出土 加工木片 (D地点)



第10号溝跡出土 梢 (E地点)



道構外出土木製品 (D地点)

第9号溝跡出土木製品  
(E地点)

## 報告書抄録

フリガナ	シンヤマザキイセキ							
書名	新山崎遺跡							
副書名	蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	石巻市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編集者名	木暮亮							
著者名	木暮亮							
編集機関	石巻市教育委員会							
発行機関	石巻市教育委員会							
発行機関所在地	〒986-8501 宮城県石巻市日和が丘1丁目1番1号							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード	北緯 (°'")	東経 (°'")	標高 (m)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	備考
シヤマザキイセキ 新山崎遺跡	宮城県石巻市蛇田 アザシヤマザキ 字新山崎、 ミツクチミナミ ミツクチ ミツコロ南、ミツコロ	65 074	38 27 44	141 15 41	1.5	1996.7.8～ 1997.10.31	6,016	
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新山崎遺跡	集落跡 墓域	縄文(晩) 古墳(前) (後) 奈良 平安 中世 近世	(A-1地点) 方形周溝墓 井戸跡 掘建柱建物跡 溝跡 土坑 (B地点) 井戸跡 溝跡 土坑 (C地点) 溝跡 土坑 (D地点) 豊穴状遺構 井戸跡 溝跡 土坑 土器集中地點 (E地点) 溝跡 土坑 土器集中地點 (F地点) 溝跡 土坑 土器集中地點 (G地点) 溝跡 土坑 (H地点) 溝跡 柱跡 (I地点) 溝跡 土坑	(A-1地点) 土師器、須恵器、近世陶器、石跡、木製品(井戸) 柱、蓋車、下駄、杯) (A-2地点) 中世陶器、凹石 (B地點) 木製品(井戸枠、火鉢白加工木片) (C地點) 土師器、須恵器 (D地點) 土師器、須恵器、中世陶器、土製品、石器(石砾)、石製品、木製品(井戸枠、斧柄、挽物、加工木片) (E地點) 土師器、須恵器、近世陶器、石器(砥石)、木製品(挽物、加工木片) (F地點) 土師器、須恵器 (G地點) 土師器 (I地點) 繩文土器、土師器、須恵器、剥片	灰白色火山灰の同定 プラント・オパールの検出 種実同定 木製品の樹種同定 土師器の胎土分析	を実施		

石巻市文化財調査報告書第8集

## 新山崎遺跡

—蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書—

2000(平成12)年3月31日発行

編集 石巻市教育委員会

発行 石巻市教育委員会

〒986-8501 宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号

☎0225-95-1111(代)

印刷 株式会社 鈴木印刷所

〒986-0861 宮城県石巻市蛇田字新谷地前121

☎0225-22-4101(代)

---

2000◎

